
ホーム・ライブラリー

教 育

エレン・G・ホワイト著

福 音 社

EDUCATION

by

ELLEN G. WHITE

Fukuinsha
Yokohama, Japan

序

米国のコロンビア大学教育学部教授、フローレンス・ストラテマイヤー博士は、一九〇三年に書かれたこの本について、「その当時少なくとも、半世紀以上進んだ書物であった。その哲学の広さと深さは、驚嘆に値する」と述べ、人間性の深い洞察に基づいて、知徳体のバランスのとれた人間の完成をめざすエレン・G・ホワイトの考えは、非常にすぐれた教育理念であるといっています。

われわれの周囲には、毎日応接のいとまのないほどいろいろな難問が生じていますが、その多くは人間性の深いところにその原因を求めなければなら

ないものです。現代を生きぬき、生きがいある生活をきずきあげるためには、教育のあり方が根本的に問い直されなければなりません。本書はこのような時代の要求に答えるもので、人類社会を破滅より救うために教育はいかにあるべきかを明確に示しています。

この書物は、高松宮をはじめ、多くの人々の支持を得、文部省の発行する「文部時報」にもとりあげられて、高く評価されました。この書物が混乱した社会を救う教育について貴重な示唆となることを願ってやみません。

元日本三育学院院长

名誉法学博士

山形俊夫

目次

一 教育の基本原則

真の教育の根源とその目的	2
教育とは何か・教育の根源・真の「高等教育」・エデンの教育・人類に対する神の御目的・毀損と回復・愛	
は教育の基礎・神の啓示・自然界の啓示だけでは不完全・真理の標準・個性・最高の理想・予備校	
エデンの学校	10
学校の型・生徒・教室・教師・学科・教科書・他の学校・訓練の目的	
善悪の知識	14
忠誠心の試金石・悪だけは与えられなかった・不信の暗示・理性対信仰・外見と神のみ言葉・罪の結果・自然界にあらわれた結果・失われた王権・キリストによる回復・自然界にあらわされた福音	
教育と救済	20
神との交わり・最高の啓示・福音の力・キリストとの協力・ただ一つの基・教師の目標	

二 歴史に見られる模範的教育

イスラエルの教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

家庭学校・環境・荒野の教育・信仰のはげまし・シナイ山麓の環境・山のいただきもまた神のもの・神の存在の象徴・山上の型・幕屋における福音・人は神の宮・聖所の建設・実業学校・組織・衛生規則・食事・天来のみちびき・音楽と歌・神の訓練の目的・カナンにおける便宜・神の律法を教えること・実物教訓・年中行事・エルサレムへの旅・過越節・収穫祭・土地の所有権・教育についての特別な配慮・今日の問題の解決
神の所有権をみとめること

預言者の学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

異教より受ける危機・両親のおとんちやく・防壁としての学校・教師と生徒・実業教育・学科課程・結果・ダビデとソロモン・イスラエルの繁栄・偶像教徒との混交・背信・国家としての廃棄・神の計画は変わらない・「わたしたちに対する訓戒のために」

偉人の一生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

真の教育の結果・ヨセフ・繁栄の危機・ヨセフの少年時代・危機・奉仕のための訓練・ヨセフの偉大さの秘訣・ダニエル・バビロンにおいての危機・品性の試練・最もすぐれた生徒・無類の政治家・天の全権大使・高貴な一生の働き・世界最大の必要・自己の鍛練・エリシャ・小事に忠実・いちずな目的・信仰の試み・崇高な賜物・实际的訓練の成果・万人の教訓・モーセ・母の教え・エジプトの学校で・敗北の教訓・指導者としての訓練・神とともにただひとり・信仰による力・訓練の結果・パウロ・ヘブル人より出たヘブル人・迫害の指導者・十字架のキリストの異象・職人・説教者・伝道者・同情と洞察力・自主的な精神・年令を重ねて・奮闘の一生・奉仕の喜び・満足な選択・永久の偉大さ・キリストと共に・一生の報い

三 大教師イエス

神よりつかわされた教師・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72

天の最上で最大の賜物・偽りの教えの結果・にせもの・形式主義・物質主義・人権の無視・神についての誤った観念・とどめられぬ悪・新生の力・永遠の愛をもって・真の原則の実証・簡素・同情・「ご自身、試練をうけて苦しまれたからこそ」・教えと実践・人の心をとらえる能力・祝福のあいさつ・人の可能性を認める・能力の隠れたところに・キリストの教えの範囲・すべての時代のすべての人に・人生の真の評価・「神われらと共にいます」・わたしは初めてであり、終りであり」

キリストの教育法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

十二弟子の教育・家庭学校・一般人の中から・各種の品性の型・一致・キリストの密接な交際・ヨハネ・交際・品性の変化・ペテロ・回復を伴ったけん責・「わたしは……あなたのために祈った」・あなたが立ち直ったときには」・ただ一人にあらず・「ペテロに伝えなさい」・教訓を学ぶ・奇跡の中の奇跡・ユダ・反抗の要素・衝突でなくいやしである・変わらぬ愛・十一人の弟子たちへの戒め・世俗的な知恵の目標・キリストの訓練の結果・自信の欠乏・信仰による確信・最後の準備・世界を動かした働き・「わたしは……あなたがたと共にいる」

四 自然の教え

自然界の神・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104

自然界にゆきわたる生命・普遍的な法則・自然界の証言・子供の教師・自然を学ぶ機会・相反する勢力・自然の解説者・平安の思い

生命の教訓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108

キリストの実物教訓・聴衆のひとりびとりに適応するように・法則の調和・奉仕の法則・与えて得る・成長の法則・成長においての神の力・信仰をもって種をまく・収穫についての神の約束・成長の条件・実り・子供の教育における教訓・自然の発達・単純さ・収穫の奇跡・神の生命にあずかる者・自らまいたものを刈り取る・人生の収穫は品性である・まくことによってふえる・「働なしに与えよ」・死を通しての生命・よみがえりの象徴・実際的な自然研究・法則に従うこと・品性の発達

他の実物教訓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121

五 聖書の教育的価値

いやしの奉仕・暗示的な言葉・愛によつてのみ回復される・小さい事における完全さ・にじ・星・「一つも欠けることがない」・「わたしは……あなたを助け」・しゆるの木・河川・認められない勤労者・地の小さな生物・信頼の教訓・わし・雲の上に・他の実例・観察することをご供らに教えなさい・自然は聖書のかぎたえを学ぶ

知的及び靈的教養

聖書研究の努力・完全な全体・知性の訓練・靈性の発達・広範な文体と論題・中心のテーマ・無限の分野・生命を生じさせる真理・生命の維持・交際の可能性・見ず知らずの人間としてではなく

科学と聖書

自然と聖書の調和・地の進化・創造に関する聖書の記録・ノアの洪水による変化・人類の進化・自然における神の働き・普遍的な摂理・「だれが悟ることができるか」・個性をそなえている・遍在する全知全能の神
「あなたがたの父となり……」・自然の神秘・信仰によつて悟る・天来の教師

実業の原則と方法

実業人の心得・日常の格言・経済上の防壁・信頼の基礎・最大の資本・管理者・「思い煩うな」・什一・献金奉仕・「果たすべき責任がある」・損得・最も利益の多い投資・預金の保証・保証・成功の人生・栄光の冠
効果のない投機・むなししい利得・会計検査・沈黙させることのできない証言・最大の問題

聖書の伝記

忠実な描写・報い・ヤコブの経験・負けて勝つ・レビ人・災いは変じて祝福となった・間者の報告・征服の信念・心に宿る一つの罪・誘惑者のおとり・信仰のただ一つの失敗・エリヤの損失・鍛練・ダビデ・王座につくための訓練・ソロモン・繁栄の誇り・不満・晩年の復帰・神の証人・サタンの非難・ヨブの試練・逆境についての誤った考え・神はお見捨てになつたのだらうか・信仰による確信・ヨブの信ずる通りに・忠実な友・確固たる証人・苦難とともに・「バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった」・信仰によつて

詩と歌	181
-----	-----

聖書の詩・一番古い詩・雅歌・古代の預言・全能者の幻・聖歌・紅海のほとりで・歌によって開かれる・賛美をもって・あなたがたの戦いではない・勝利・牧羊者の歌・あなたの翼のかげに・夜の歌・望郷・救い主の歌・最後の危機に・シオンの山で声高く歌い・歌の力・教育の手段・天使の歌

聖書の奥義	200
-------	-----

「神を窮めることができるか」・信頼の根拠・神秘は神性の証拠・単純性と適応性・理解の限界・尽きざる宝経験によって試みられる・永遠の成長のしるし

歴史と預言	205
-------	-----

最古の年代記・歴史の原理・人類の分布・国家の繁栄・権力の根源・統治の目的・大バビロン・バビロンの圧制・報い・国家の興亡・ケルビムの異象・みちびきの手・神の御目的の中における立場・預言の成就・時のしるし・危機に臨んで・最後の光景・破壊に次ぐに破壊・ヤコブの患難の時・「われらの神は来て」・彼はわたしたちを救われる・平和の統治・預言の研究・現代の教訓・終わりは近い

聖書の教えと研究	220
----------	-----

聖書を学ぶ者・幼い者へのお話・実物教訓・家庭での研究・自らの感化と模範・アブラハムの実例・独自の研究・思想と表現の美しさ・研究の目的・徹底的に集中的に・不健全な書籍・誘惑からの防御・広範な研究・ダニエル書・黙示録・不断の研究・研究の成果・祝福の流れ

六 健康教育

生理学の研究	232
--------	-----

体育の重要性・原則の無視・失敗の原因・生理学の研究・神から与えられた自然の法則・精神が肉体に及ぼす影響・感謝と喜悅・正しい身体の習慣・姿勢・呼吸・発声の訓練・健康的な衣服・清潔・日光・通風・知識の実行・身体は神の住まい

飲食と節制	240
-------	-----

質素な生活・高い思考・不節制の予防・不節制の原因・刺激的な飲食物・防御策としての自己抑制・食事と知的発達・食物の栄養価・選択・とりあわせ・食事と睡眠の規律・親しみのひととき

レクリエーション	246
----------	-----

レクリエーションと娯楽・身体の不活動と子供・子供たちの戸外生活・身体の不活動と学生・頭脳に及ぼす影響・靈性に及ぼす影響・体操競技・スポーツの傾向・フットボールとボクシング・歡樂のパーティー・昔の質素な生活・戸外の仕事・教師の協力・人の助けとなるような奨励をすること・悪への防壁

労作教育	254
------	-----

労働は祝福・労働の尊さ・神と共なる働きごと・大切な訓練・怠惰こそ卑しい・日常の務めの知識・働く者の誉れ・最初の実業学校・労作教育の学校・商業の勉強・農業・実地に即した教育・失業者のために・知的職業にとつての訓練・医者への利益・牧師・宣教師・教師にとつて・自立・学生・正確と徹底・自主的な労働

七 品性の形成

教育と品性	266
-------	-----

品性は最高の目標・青年の前途・学校における危険・競争・異教徒の著者・小説・虚偽の科学・高等批評・世の中の危険・無政府主義・品性の基礎・神の戒め

教え方	272
-----	-----

暗記の訓練・識別力を失う・信仰と理性・個人的な発達・現代の必要・勤勉・單純・熱心・基本的なことの習得・言語・最大の必要・会話の習慣・ゴシップ・人食い人種・のろいの言葉・針小棒大・あてこすり・軽率な言葉・自己を忘れる精神・けんそんと威厳・歴史・神的な見地から・簿記・有用な訓練

礼儀	283
----	-----

準備

291

楚・最高の美

2 9 6

しるしとしての安息日・家庭的な日・安息日と自然・「大いなる報賞」

299

造る・祈るべき時・とうとい経験

3 1 0

一般の人々の中から働き人を・救い主の選択・教育の機会・われらの子供たちの嗣業

3 2 4

い標準・管理の才能・困難な問題・同情と洞察力・交際上の関係・えこひいき・責任・自分自身の進歩・わ

協力・・・・・・・・・・・・・・・・

しつけ・・・・・・・・・・・・・・・・338

み石・「見えぬもの」・愛に迫られて

来世の学校・・・・・・・・・・・・・・・・

の宝・奉仕・証人・「この奥義の栄光」・「満足する」

一 教育の基本原則

「わたしたちはみな、顔あいなしに、
主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光
から栄光へと…変えられていく」

「リント人への第二の手紙三ノ一八

真の教育の根源とその目的

「聖なる者を知ることとは悟りである」^一 「あなたは神と和らいで」^二

教育についてのわれわれの考え方は、あまりに範囲が狭く、またあまりに程度が低い。もっと高い目的がなければならない。真の教育は、ある勉学の課程を修めることよりももっと深い意味をもっている。それは、現世の生活のために準備すること以上のことを意味している。真の教育は、人間の知、徳、体に関係があり、また人間に可能な限りの生存期間の全体にわたって関係がある。それは知、徳、体の能力の円満な発達を意味している。真の教育は、この世における奉仕の喜びと、さらにまたきたるべき世界におけるいっそう広い奉仕の、より大なる喜びのために、生徒を準備させることである。

こうした教育の根源は、限らない存在であられる神にあることが、聖書の言葉に示されている。神の中に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」^三 「深慮と悟りも彼のものである」^四 とある。

世にはりっぱな教師が少なくない。彼らは、すぐれた知性をもち、深い学問をした人たちであり、またその言論によって人間の思想を刺激し、広い知識の分野を開いた人たちである。こうした人たちは、人類の指導者として、また恩人として、世の人々から尊敬されてきた。しかしここに、彼らよりもいっそうすぐれた

神がおられるのである。われわれは人類の歴史の最古までさかのぼって、世の教師たちの足跡をたどることができる。しかし、光なる神は、それよりもっと前におられたのである。太陽系の月や星が、太陽の光を反射して輝くように、世の偉大な思想家たちは、彼らが真実であるかぎり、義の太陽である神の光を反射しているのである。思想のかがやき、知性のひらめきの一つ一つは、すべて世の光である神から出ている。

今日、いわゆる「高等教育」なるものの性格と重要性が論じられている。真の「高等教育」とは、「知恵と力」^五を持ち、そのみ口より「知識と悟り」^六をお出しになる神から授けられるものである。

すべての真の知識と真の発達の源は、神を知ることの中にある。物質界でも精神界でも霊界でも、罪の弊害を除けば、そこに見られるすべてのものに、この知識が表わされている。どういう方面の研究に従事しようと、真理に到達しようとの純粋な目的をもっているかぎり、われわれは、万物の中に働き、また万物を通して働いておられる目に見えない大能の神に触れるようになるのである。人間の思いは、神のみこころに交わり有限な人間が無限の神と交わるようになるのである。こうした交わりが、人の知、徳、体におよぼす影響には、測り知れない価値がある。

この交わりの中に最高の教育が見いだされる。それは神ご自身の方法による教育である。神は、「あなたは神と和らいで、（原文・神を知れ）」^七と人類に仰せになっている。この言葉の中に表わされている方法が、人類の父祖アダム教育のために用いられた方法であった。アダムが罪を知らない人間として、栄光につつまれて、神聖なエデンに住んでいたとき、神は、彼をこのように教育されたのである。

教育という働きに包括されている内容を理解するには、人の性質と、人を創造された神の御目的とを考えてみなければならぬ。同時にまた悪の知識がはいってきたために生じた人間の状態の変化と、人類の教育についての大きい御目的を今もお成就されている神のご計画を考えてみる必要がある。

アダムが創造主のみ手によってつくられたとき、彼の肉体と知能と靈性は、神のみかたちをそなえていた。「神は自分のかたちに人を創造された」^八としるされている。神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はっきりと神のみかたちをあらわすこと、すなわちなおいっそう明らかに創造主の栄光を反映することであつた。人間のあらゆる才能は発達することが可能であつて、それらの才能の能力と活力はたえず増大することになっていた。そうした才能を働かせるために、広い機会が与えられ、研究のために輝かしい分野が開かれていた。目に見える宇宙の神秘、すなわち、「知識の全き者のくすしきみわざ」^九が人の研究を招いていた。創造主と顔をあわせて、心と心の交わりをすることが、アダムのとうとい特権であつた。もし彼が、神への忠誠心を変えなかつたなら、この特権は、永久に彼のものとなつたであらう。彼は、永遠にわたってたえず知識の新しい宝を手に入れ、幸福の新しい泉を見いだし、神の知恵と力と愛についていよいよ明らかな概念を持ちつづけたであらう。アダムが、創造された目的を十分に果たせば果たすほど、創造主の栄光は、ますますはっきり反映されたであらう。

しかし、不従順のために、この特権は失われた。罪のために、神のみかたちは傷つけられ、ほとんど消えてなくなるばかりとなつた。人の体力は弱くなり、知的な能力は低下し、靈的な眼はくもつた。人間は死な

第1章 教育の基本原理解

なければならぬ身となつた。しかし人類は、望みのない状態のままに捨ててはおかれなかつた。限らない愛とあわれみによつて、救いの計画がたてられ、生命の猶予があたえられたのである。人類を創造された神の御目的が実現されるように、人の中に創造主のみかたちを回復し、人を創造当初の完全な姿にもどし、知、徳、体の発達を促すこと、これが救済の働きとなるべきであつた。これが教育の目的であり、人生の大目的である。

創造と救済の基礎となつてゐる愛は、同時にまた眞の教育の基礎でもある。このことは神が人生の指針としておあたえになつた律法の中に明らかに示されている。第一の大きな戒めは、「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」である。力をつくし、思いをつくし、心をつくして、限らない全能の神を愛することは、あらゆる能力の最高の発達を意味する。それはまた人の知、徳、体に神のみかたちが回復されなければならぬことを意味している。

第二の戒めもまた第一の戒めと同じように「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」である。愛の律法は、心と魂と肉体を、神と人類同胞への奉仕にささげるように要求している。この奉仕によつて、われわれは、他人への祝福となり、同時にまた、われわれ自身の上にも、最も大きな祝福をもたらすのである。無我の精神は、すべての眞の発達の基礎である。無我の奉仕を通して、あらゆる才能が最大限に啓発されて、われわれはますます深く神のご性質にあずかる者となる。われわれは心に天国をうけ入れるので、天国にふさわしい者となるのである。

神はあらゆる真の知識の根源であられるので、すでに学んだ通り、教育の第一の目的は、われわれの心を神ご自身の啓示に向けることでなければならぬ。アダムとエバは、神との直接の交わりを通して知識を受け、神のみわざを通して、神について学んだ。すべての被造物は、最初完全であつたときには、神の思想の表現であつた。アダムとエバにとって、自然界は神の知恵に満ちていた。しかし人が罪を犯したために、神との直接の交わりによって学ぶことが許されなくなったばかりでなく、また神のみわざを通して学ぶことも大部分でなくなつてしまつた。地は、罪のために傷つけられ汚されたために、創造主の栄光をかすかにしか反映できない。しかし、神の実物教訓が地上から消し去られていないことは事実である。神の創造のみわざという大きな書巻の各ページには、今もなお神の筆跡がみとめられる。

自然は今もなお、その創造主を物語っている。しかし自然界の啓示は、部分的であり、不完全である。しかも墮落した状態にある人間の弱い能力と限られた視力では、自然を正しく解釈することはできない。われわれは、神が聖書の中に示されたご自身に関するいっそう深い啓示が必要である。

聖書は真理の完全な標準であつて、これに教育上最高の位置があたえられなければならない。名実ともに価値ある教育を身につけるには、聖書に啓示されている創造主である神と救い主であるキリストについての知識をうけ入れなければならない。

神のみかたちにかたどつてつくられた人間のひとりびとりに、創造主の能力に近い能力——個性、すなわち、思考し行動する能力がさずけられている。この能力が発達してはじめて、人は、責任を負う者となり、

事業の指導者となり、他人に感化を及ぼす者となる。この能力を発達させること、すなわち青年たちが、ただ単に他人の思想を反映する者とならないで、自ら思考する者となるように、彼らを訓練することが真の教育の働きである。人が書いたり、言ったりしたことばかりに、生徒の研究を閉じこめないで、彼らを真理の泉、すなわち自然と聖書の中に開かれていゝ広い研究の分野に導かなければならない。人間の本分と運命について、重大な事実を熟考するときに、彼らの心は強くそして大きくなる。学校は、弱々しい知識人ではなく、たくましい思考力と行動力をもった青年、境遇の奴隷とならないで、かえってこれを征服する青年、広い心とはっきりした考え方と強い信念をもった青年——そういう人間を、社会に送り出すことができる。

このような教育は、単なる知的な訓練以上のものをあたえ、また肉体的な訓練だけよりもまさったものをあたえるのである。それは品性を強くするので、真実や正直さが、欲望や世俗的な野心のために犠牲にされるということがない。それは罪惡に抵抗する心を強める。欲望に身をまかせてこれに滅ぼされることなく、あらゆる動機と願望を正義の大原則に一致させる。神のご品性の完全さを心に思い続けるとき、精神は新しくなり、魂は神のみかたちに再創造される。

これよりも高い教育が他にあり得るだろうか。これに匹敵するだけの価値のあるものが他にあり得るだろうか。

「精金もこれと換えることはできない

銀も量ってその価とすることはできない。

オフルの金をもつてしても、

その価を量ることはできない。

尊い縞めのうも、サファイヤも同様である。

こがねも、玻璃もこれに並ぶことができない。

また精金の器物もこれと換えることができない。

さんごも水晶も言うに足りない。

知恵を得るのは真珠を得るのにまさる。^二

神がその子らにお望みになる理想は、人間の考えのおよばないほど高いものである。神のようになること、すなわち神のみかたちに似ることが、到達しなければならぬゴールである。生徒の前には不断の進歩の道が開かれている。彼は成就しなければならぬ目的、到達しなければならぬ標準をもっている。そこには良いもの純粋なもの尊いもののいっさいが含まれている。彼は真の知識のあらゆる部門に、できるだけ早く、そしてできるだけ高く進歩する。しかし彼の努力は、天が地よりも高いように、単なる利己的物質的な利害よりもいっそう高い目的にむけられる。

神のみこころに協力して、青少年に神の知識を授け、彼らの品性を神のご品性に調和するように形づくる

者は、高くそしてとうとい働きをしているのである。神の理想に到達しようとの望みにめざめるとき、彼は、天のように高く、宇宙のように広い教育、現世においては完成されないで来世にまでつづく教育をさずけ、すぐれた生徒に、地上の予備校から天の上級学校に進む入学許可証を得させる教育をさずけるのである。

索引

一	箴言九ノ一〇	七	ヨブ記二二ノ二一
二	ヨブ記二三ノ二一	八	創世記一ノ二七
三	コロサイ人への手紙二ノ三	九	ヨブ記三七ノ一六
四	ヨブ記一一ノ一三	一〇	ルカによる福音書一〇ノ二七
五	ヨブ記一二ノ一三	一一	マタイによる福音書二二ノ三九
六	箴言二ノ六	一二	ヨブ記二八ノ一五―一八

エデンの学校

「知恵を求めて得る人……はさいわいである。」

天地が創造された時に定められた教育制度は、後世にいたるまで、人類の模範となるべきものであった。その原則を実地に示すものとして、人類の始祖の故郷であるエデンにモデル・スクールが設けられた。エデンの園が教室であり、自然が教科書であり、創造主ご自身が教師であり、人類家族の両親であるアダムとエバが生徒であった。

「神のみかたちと栄光」として創造されたアダムとエバは、そのとうとい身分にふさわしい才能をさずけられていた。優美で均整のとれた肢体、美しくととのった容貌、健康と喜びと希望にかがやく顔色、彼らのそうした外観は、創造主のみかたちに似ていた。このように似かよった点は、ただ肉体の面ばかりではなかった。知能と魂のあらゆる面に、創造主の栄光が反映していた。アダムとエバは、「御使いたちよりも低くつくられ、高い知的および霊的な賜物を授けられていた。それは、彼らが目に見える宇宙の神秘を認識するばかりでなく、また霊的な責任と義務を理解することができるよう与えられたのであった。」

「主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた。また主なる神は、

見て美しく、食べるに良いすべての木を土からはえさせ……られた」とある。罪の影のない美しい自然にかこまれたこのエデンの園で、人類の始祖アダムとエバは教育をうけることになった。

ご自分の子らに関心をおよせになる父なる神は、自ら彼らの教育を指導された。聖天使たちは、神の使者として、たびたび彼らを訪れては、神の教訓と勧告を伝えた。日の涼しいころ、アダムとエバが園の中を歩いていると、よく神のみ声がきこえてきた。こうして彼らは、永遠の神と顔をあわせて交わりを続けた。彼らに対する神の思いは、「災を与えようというのではなく、平安を与えよう」との思いであつた。神のみこのころの一つ一つは、彼らの最高の幸福ということにあつた。

神は、アダムとエバに、園守の役目をあたえ、「これを耕させ、これを守らせられ」た。宇宙の所有者である神はすべてのものを豊かにお与えになることができたが、彼らは何もしないでよいというわけではなかった。身体を強くし、心を大きくし、品性を向上させるために、神は、有益な仕事を恩恵として彼らにお命じになった。

目の前に生きた教課をくりひろげている自然という書は、尽きることのない教訓と喜びの泉となっていた。神のみ名は、森の木の葉に、山々の岩に、またたく星に、地に海に空に、書きしるされていた。エデンの住民はそれらの被造物——生物でも無生物でも、木の葉、草花、樹木から巨大な水棲動物や太陽の光線にうかぶ微生物にいたるまで、すべての被造物と語り、その一つ一つから生命の神秘を学んだ。天に現われる神の栄光、秩序正しい運行をつづける無数の世界、「雲のつりあい」^六、神秘的な光と音、昼と夜、——そうしたす

べてのものが、地上の最初の学校の生徒たちにとって研究の対象であった。

自然界の法則と営み、また霊界を支配する真理の大原則は、万物の創造主であり限りない存在であられる神によって、彼らの心に示された。彼らの知的また霊的な能力は、「神の栄光の知識」^七の中にあつて発達し、彼らは、自分たちの神聖な存在に、最高の歓喜をおぼえた。

創造主のみ手によってつくられたときには、エデンの園だけでなく、全地のいたるところが限りなく美しかった。美しい創造を傷つけるような罪の汚れや死の影はどこにもみられなかった。神の栄光は、「天をおおい、そのさんびは地に満」^八ち「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」^九とある。このように地は「いつくしみと、まこととの豊かなる神」^{一〇}の象徴としてふさわしく、神のみかたちにかたどってつくられた人間が学ぶのにふさわしかった。エデンの園は、全地をこのようにしたいという神のご希望のあらわれであった。人類家族の数が増えるにしたがって、エデンの園で神からあたえられたのとおなじような他の家庭や学校を設けるようにというのが神のみこころであった。

こうして全地は、時がたつにつれて、神のみ言葉とみわざを学ぶ家庭や学校で満たされ、生徒たちは、永遠にわたって、神の栄光を知る光を、ますます深く反映するのにふさわしい者となるはずであった。

索引

- | | | | |
|---|-------------|---|-----------|
| 一 | 箴言三ノ一三 | 三 | 創世記二ノ八、九 |
| 二 | ヘブル人への手紙二ノ七 | 四 | エミレヤ書二九ノ一 |

五 創世記二ノ一五
六 ヨブ記三七ノ一六
七 コリント人への第二の手紙四ノ六

八 ハバクク書三ノ三
九 ヨブ記三八ノ七
一〇 出エジプト記三四ノ六

善 悪 の 知 識

「神を知っているながら、神としてあがめず……その思いはおなしくなり。」

人類の始祖アダムとエバは、罪のない聖なる者につくられたが、絶対に悪いことができないようにはつくられなかった。神は、彼らをご自身の要求にそむく能力のない者におつくりになることもできたであろう。しかし、もしそうであつたなら、品性の向上はあり得ず、彼らの奉仕は自発的でなく、強制的なものとなつたであろう。そこで神は、彼らに、選択の能力すなわち服従するかあるいは服従を拒むか、そのどちらでもできる能力をお与えになつたのである。そして彼らは、神が彼らに与えようと望んでおられる祝福をもれなく受けるに先だつて、まずその愛と忠誠心を試みられなければならなかった。

エデンの園に、「善悪を知る木」^二があつた。「主なる神はその人に命じて言われた、『あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよらしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きつと死ぬであろう』」^二とある。神のみこころは、アダムとエバが悪を知らないようにといふことであつた。善の知識は惜しみなく彼らに与えられていたが、悪の知識すなわち罪とその結果である苦労、煩悶、失望、悲嘆、苦痛、死といったようなことは、愛のゆえに、彼らに知らされずにいた。

神は人の幸福を望まれるが、サタンは人の破滅を願う。エバが禁断の木についての神の戒めを無視して、大胆にもこの木に近づいたとき、彼女は、そこで敵に出会った。彼女が興味と好奇心を起こしたのに乗じて、サタンは、彼女に神の言葉を否定させ、神の知恵と恩恵について、不信の念を起こさせるように、巧みに働きかけた。エバが善悪を知る木について、「これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」と語ると、誘惑者サタンは、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」と答えた。

サタンは、善と悪のまじった知識は祝福となるものだとか、あるいは神がこの木の実をとることを禁じておられるのは、結局、大きな幸福を与えることをひかえておられるのだというようなことを、エバに思わせようと望んだ。サタンは、神がこの果実を食べることを禁じておられるのは、この果実が知恵と能力をあたえる不思議な性質をもっているからであって、神はこのようにして、彼らがいつそう高い進歩をとげ、もっと大きな幸福を見いだすことのないようにしておられるのであると力説した。彼は、自分も禁断の実を食べた結果、話ができるようになったのであるから、もしエバたちもこの果実を食べたら、もっと高い境地に達し、もっと広い知識の分野に入るであろうと声明した。

サタンは、自分が禁断の木の実を食べたために、非常な恩恵を受けたと主張しながら、一方には、神にそむいたために、天より追われた身であることをかくしていた。欺かれ、おだてられ、迷わされたエバが、そ

の欺瞞をみわけることができなかつたほど巧妙に、真理の仮面の下に偽りがかくされていた。彼女は、神が禁じているものをほしがり、神の知恵を疑い、知識のかぎである信仰を捨ててしまった。

エバは目をあげて、「食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われた」^四「その実を取って」^四食べた。果実は快い味をもっていた。果実を食べると、エバは生き生きとした力を感じ、自分の身が一段と高い境地に上って行くような気がした。神の戒めにそむいたエバは、夫を誘惑し、そこで、「彼も食べた」^四とある。

「あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となる」^五とサタンは言った。果たして彼らの目は開いたが、しかしそれは何という悲しい結果をもたらしたことであろう。神の戒めにそむいた彼らが得たものは、悪の知識と罪ののろいだけであつた。果実そのものには何の害毒もなかつた。また、ただ食欲に負けたことだけが罪というわけではなかつた。アダムとエバが神の戒めにそむく者となり、この世に悪の知識をもたらしたのは、彼らが神の恵みを疑い、神のみ言葉を信じないで、神の権威を否定したからであつた。それはまた、あらゆる種類の偽りや誤りに対して門を開いた。

神だけが全知であり真理であるにもかかわらず、アダムはその神のみ言葉に従わず、欺く者に聞き従つたために、いっさいのものを失ってしまった。善と悪がいりまじつたために、彼の心は混乱し、彼の知的能力と霊的能力はまひした。彼は、神が惜しみなくお与えになっている恵みの真価を認めることができなくなつた。

アダムとエバは、悪の知識を選んだ。もし彼らが、その失った地位を回復しようとすれば、それは、彼らが自ら招いた不利な事情の下に回復されなければならないかった。彼らはもうエデンに住むわけにはゆかなかった。彼らがこんど学ばなければならない教訓は、エデンの完全さの中にあつては学ぶことのできないものであつた。言い表わしようない悲嘆の中に、彼らは、美しい環境に別れを告げ、罪にのろわれた地上に住家をもとめて立ち去つた。

神はアダムに、「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取つて食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る。あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る」^六と宣告なさつたのであつた。

地は罪ののろいにそこなわれたというものの、自然はなお人類の教科書となるべきであつた。自然はもう恩恵だけを表わすことはできなくなつた。いたるところに悪が存在し、地も海も空気もそのけがれた手にふれて毒されている。かつては神のご品性、すなわち善の知識だけが書かれていたところに、今はそれと共にサタンの品性である悪の知識が書きしるされている。いまや善と悪の知識を表わしている自然から、人は、罪の結果に対する警告を絶えず受けなければならなかつた。

しほむ花に、散る木の葉に、アダムと妻は、衰えというもののきざしを初めてまのあたりに見た。すべての生物はやがて死ななければならないというきびしい事実が、彼らの心にはつきり迫つてきた。彼らの生命

をささえている空気にさえ、死の種がひそんでいた。

彼らはまた自分たちの失った支配権をたえず心に思い出した。人間よりも下級な被造物の中にあつて、アダムは王としての立場にあつた。彼が神に忠誠心を保っていた間は、自然界の万物は、彼の統治に従っていた。しかし彼が神の戒めにそむいたときに、この統治権は失われた。アダム自身によってこの世界にもたらされた反抗心は、動物界にまでひろがった。このようにして、人の生命だけでなく、獣の性質、森の木々、野の草、人の呼吸する空気までも、悪の知識について、悲しい教訓を告げるようになった。

しかし人は自ら選んだ罪の結果の中に捨てられたままでおかれなかった。サタンに対する宣告の中には、救済の暗示が含まれていた。神は、「わたしは恨みをあぐ、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」と宣言な^七さった。この宣言は、アダムとエバにも聞こえるように告げられ、それは、彼らへの約束となった。彼らは、自分たちが経験しなければならぬいばらやあざみのことや、労苦や悲哀のことや、土に帰らなければならないことなどを聞く前に、希望を与えずにはおかない約束の言葉をきかされた。サタンに屈服したために失われたすべてのものは、キリストによって再びとりもどされることができるようになった。

自然界もまたこの救済の暗示をわれわれにくりかえしている。自然界は、罪のために傷つけられてはいるものの、いぜんとしてそれは神の創造について語り、また救済について語っているのである。地は衰滅という明らかなしるしを通して、罪ののろいをあかししているが、しかもなお生命を与える能力を、豊かに美し

く表象している。木々はその葉をふるいおとしても、それはもっと新しい緑したたる衣をまとい、花はしほむが、やがてまた新しい美しさに姿を装ってあらわれる。神の創造力の一つ一つの現われには、われわれ人間が、「真の義と聖」^八の中に、再び新しく創造され得るとの確証が示されている。このように、自然界の事物と営みは、人類の大損失をわれわれの心にはつきり思い出させるが、一方にはまたわれわれに希望をもたらす使者となるのである。

悪のおよんでいるところにはどこにも父なる神がその子らに、悪の結果の中に罪の性質をみるように命じ、悪をすてるように戒め、恩恵をうけるようにと、招いておられるみ声がきこえる。

索引

- | | | | |
|---|--------------|---|--------------|
| 一 | ローマ人への手紙一ノ二一 | 五 | 創世記三ノ五 |
| 二 | 創世記二ノ九一七 | 六 | 創世記三ノ一七一 |
| 三 | 創世記三ノ三一五 | 七 | 創世記三ノ一五 |
| 四 | 創世記三ノ六 | 八 | エペソ人への手紙四ノ二四 |

教 育 と 救 済

「キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために」。

人類は罪を犯したために、神から追放されてしまった。救済の計画がなかったなら、神よりの永遠の別離と、常夜のはてしないやみが、人類の運命となったであろう。しかし、救い主の犠牲によって、再び神と交わることができるようになった。われわれは、自分だけでは、神のみ前に近づくことも、神のみ顔を仰ぎ見ることもできない。ただ救い主イエス・キリストの中にあつて、神を仰ぎ見ることも、また神と交わることもできるのである。「神の栄光の知識」^二は「イエス・キリストの顔」に表わされている。「神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ」^三られたのである。

「言は肉体となり、わたしのうちに宿った。…めぐみとまことに満ちていた」^四「この言に命があつた。そしてこの命は人の光であつた」^五とある。われわれの救済のために払われた代価であるキリストの生命と死は、生命の約束と保証、また知識の宝庫を再び開くかぎであるばかりでなく、それはエデンの聖者たちが思っていたよりも、もっと広くてもっと高い神のご品性の現われである。

キリストは天を人に開かれるが、一方また人の心は、キリストのおあたえになる生命によって、天にむか

って開かれる。罪は人を神から離れさせるばかりでなく、人の魂から神を知ろうとする願いと能力とを滅ぼしてしまう。こうした罪の働きをすべて無力にしようとするのがキリストの働きである。キリストは、罪によってまひした魂の能力や暗くなった心やゆがめられた意志を活気づけ回復する力を持っておられる。キリストは宇宙の宝庫をわれわれに開いてくださる。これらの宝をみとめ、活用する能力が、キリストから授けられるのである。

キリストは、「すべての人を照らすまことの光」^六である。人はみなキリストを通して生命を持っているが、同じようにどんな魂もキリストを通して幾らかの天の光が与えられる。どんな人の心にも、知的な能力ばかりでなく、また霊的な能力、すなわち正しいことをみわけける能力、良いことをしようとする欲求がある。しかし、こうした原則に対して、一つの相反する能力が戦っている。善悪を知る木の実を食べた結果は、すべての人間の経験にあらわれている。人の性質には、悪への傾向、すなわち自力だけでは抵抗し得ない一つの力が働いている。この力に抵抗し、魂の奥底に唯一の価値を感じている理想を達成するためには、ただ一つの力に助けを求めてすぎるよりほかに道はない。その力とはキリストである。この力と協力することが、人にとって最大の必要である。すべての教育の働きにおいて、この協力が最高の目標ではないだろうか。

真の教師は二流どころの働きに甘んじない。生徒たちを、到達し得る最高の標準よりも低いところに導くだけでは満足できない。彼は、生徒たちに技術的な知識だけをさずけて、彼らを賢明な会計士や優秀な技術者やりっぱな商人にしたてることだけでは満足しない。真実、服従、節操、正直、純潔の原則、すなわち社

会の安定と向上のために積極的な力となる原則を彼らの精神に吹きこむことが、真の教師たる者の大きな目的である。彼が生徒たちに何よりもいちばん学んでほしいと希望することは、無私の奉仕という人生の大きな教訓である。

魂がキリストを知り、キリストの知恵を指針として受け入れ、キリストの力を心と生活の力として受け入れるとき、これらの原則は、品性を形づくる上に、生きた力となる。この一致ができたとき、その生徒は、知恵の本源である神を発見したのである。そのときこそ彼が最も高貴な理想を自分自身の中に実現する能力をつかむのである。人生の最高の教育をうける機会はそのものである。そうして彼は、この世において身につけた訓練を通して、永遠にわたるコースへ入りつつあるのである。

教育の働きと救済の働きとは最高の意味においては一つである。なぜなら救済の場合と同じく、教育においても、「すでにええられている土台以外のものをすすめることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。」^七「神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ…彼によってご自分と和解させ」^八とあるからである。

事情は変わっても、真の教育はやはり創造主のご計画すなわちエデンの学校の計画に従っている。アダムとエバは、神と直接に交わって教えを受けたが、われわれは、キリストのみに「神の栄光の知識」を仰ぎ見るのである。

教育の大原則は不変である。「これらは世々かぎりなくたたく立ち」^九とある。なぜなら、それは神のご品

性の原則だからである。生徒たちにこれらの原則を理解させ、それが生活を律する力となるようなキリストとの関係にはいらせることが、教師の第一の務めであり、また不断の目標でなければならない。この心かげのある教師こそ、真にキリストの共労者、神とともに働く人である。

索引

- | | | | |
|---|------------------|---|------------------|
| 一 | コリント人への第二の手紙四ノ六 | 六 | ヨハネによる福音書一ノ九 |
| 二 | コリント人への第二の手紙四ノ六 | 七 | コリント人への第一の手紙三ノ一 |
| 三 | コリント人への第二の手紙五ノ一九 | 八 | コロサイ人への手紙一ノ一九、二〇 |
| 四 | ヨハネによる福音書一ノ四 | 九 | 詩篇一一ノ八 |
| 五 | ヨハネによる福音書一ノ四 | | |

二 歴史に見られる模範的教育

「これまでに書かれた事からは、すべてわたしたちの教えのために書かれたものであつて。」

ローマ人への手紙一五ノ四

イスラエルの教育

「主はただひとりで彼を導かれて」「主はこれを…いたわり、目のひとみのように守られた。」

エデンにおいて確立された教育の制度は、家族を中心とするものであった。アダムは「神の子」であつた。神の子らは、父なる神から教えをうけた。彼らの学校は、真の意味において、家庭学校であつた。

墮落後の人類の状態に適應するように神の定められた教育の計画においては、キリストが、天父の代表者すなわち神と人をつなぐ輪の役目をはたしておられる。キリストは人類の大教師である。彼はさらに男女を、ご自身の代表者として任命された。家庭は学校であり、両親は教師であつた。

父祖時代には、こういう家庭を中心とする教育が一般に行なわれていた。このように設けられた学校のために神は品性の発達に最もふさわしい環境をお与えになった。神の導きのもとにある人々は、天地が創造された時に神が定められた人生の計画をまだ実行していた。しかし神から離れ去った人々は、自分たちのために都市を建設し、そこに集中した。そして世人が誇りとしまた彼らの災いとなっている現代の都会の、あのはなやかさと享樂と罪惡の中におごり榮えた。しかし、神が定められた生活の原則を固く守っている人々は、野や山に住んで、土地を耕し家畜を養った。労働と研究と瞑想の時間をもった自由な独立した生活の中にあ

第2章 歴史に見られる模範的教育

って、彼らは神について学び、神のみわざと道を子どもたちに教えた。

これが、イスラエルの中に実行するようにと神が望まれた教育の方法であった。しかし、イスラエル人がエジプトから導き出されたとき、その中には、神と共に働く者として、イスラエルの子供の教育にあたる準備ができている者は少なかった。まず両親自身を教育し、訓練しなければならなかった。彼らは長年にわたる奴隷生活の犠牲者として、無知で、無教育で、しかも墮落していた。彼らはほとんど神を知らず、神への信仰心もなかった。彼らは、偽りの教えによって混乱させられ、長い間異教に接していたために、墮落していた。神は、彼らを高い道徳的な標準にまで高めようとお望みになった。そしてこの目的のために、神は彼らにご自分を知らせようとなさったのである。

荒野の放浪者イスラエル人に対する神の御態度を通して、すなわち彼らがあちらこちらにさまよい歩き、飢えとかわきと疲労にさらされ、異教の敵からうける危険のさなかにあったときに、彼らの救済に示された神の摂理の現われを通して、神は、彼らを安全に守るために絶えず働いている力を彼らに示し、彼らの信仰を強めようとなさった。こうして神は、まず彼らに神の愛と力に信頼することを教え、そのち、律法の戒めの中に品性の標準を示し、神の恩恵によって、その標準に到達させようとなされた。

イスラエル人は、シナイ山麓にとどまっている間に、とうとい教訓を教えられた。それは、カナンの嗣業を受けるための特別な訓練期間であった。シナイ山麓は、神の御目的の成就にはふさわしい環境であった。イスラエル人の天幕がはりめぐらされた平原に、おおいかぶさるようにそびえているシナイ山の頂上には、

彼らの旅路を導いた雲の柱がとどまっていた。それは、夜は火の柱となって、彼らに神の守りを保証した。彼らが幕をおろして眠りについている間に、天のパンは静かにその野営にくだった。どちらを向いても、巨大な峨々たる山々がそびえたち、その荘厳な威容は、永遠の存在と尊厳を物語っていた。「てんびんをもつてもろもろの山をはかり、はかりをもって、もろもろの丘をはか^三」られた神のみ前にあって、人は自分の無知と弱さを思わせられた。ここで神は、ご自分の栄光をあらわすことによって、その聖なるご品性と要求を示され、それと同時に、神の要求にそむくことがどんなに大きな罪であるかということを、イスラエル人の心にぎざみつけようとなさったのである。

しかし、人々はこの教訓を学ぶのに手間どった。イスラエル人は、エジプトにいたころ、形にあらわされた神しかも卑俗な性質を備えた偶像を礼拝する習慣がしみこんでいたので、目に見えない神の存在や品性を信ずることが困難であった。こうした彼らの弱点に同情された神は、彼らにご自身の存在についてしるしをお与えになった。神は、「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである^四」と仰せになった。

神のお住みになる場所として聖所を建てるにあたって、モーセは、すべてのものを天上にあるものの型に従って作るように命じられた。神はモーセを山に召して、天の事物をお見せになった。そうして、幕屋とこれに付属するすべてのものは、天の事物にならって形作られることになった。

そこで神は、ご自分の住居をつくらせようとお望みになったイスラエル人に、ご自分のかがやかしい理想

の品性を示された。このご品性の型は、神が、シナイ山で律法をおあたえになる際、モーセの前を通りすぎながら「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの豊かなる神」^五と宣言なさったときに、かれらに示された。

しかし、彼らは、自分自身では、この理想に達する能力を持っていなかった。シナイ山についての啓示は、彼らの心に、自分自身の足りなさや無力とを深く思わせただけであつた。幕屋で行なう犠牲の奉仕を通して、もう一つの教訓、すなわち罪の赦しと、救い主に従うことによって生命にいたる能力とについての教訓が、彼らに教えられなければならなかつた。

幕屋の壮麗な建物、ケルビムを織り込んだ幕を反映して、にじ色に輝く黄金の壁、常にたかれている香のために、へやじゅうにたちこめているかぐわしい香り、純白の衣をまとった祭司、そして、至聖所の深い神秘につつまれて、契約の箱の上方、頭を垂れて礼拝している天使の像の間に臨在する、聖なる神の栄光——こうした幕屋の象徴の目的は、キリストを通して成就されなければならなかつた。こうしたすべての象徴を通して、神は、人の魂についてどんな目的をもっておられるかということを彼らがさるるように望まれた。ずっと後に、使徒パウロによって示されたのも、これと同じ目的であつた。すなわちパウロは、聖霊に感じて、こう語っている。「あなたがたは神の宮であつて、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである」^六と。

幕屋の建設にあたって、イスラエル人に与えられた特権と光栄は大きかったが、同時にまたその責任も大きかった。最も高価な材料と、最高の美術的な技術を要する豪華な建物が、奴隷の境遇から出てきたばかりの彼らの手によって、この荒野に築かれることになった。それは途方もない大事業に思われた。しかし、建築の設計をお与えになった神は、建築者たちとの協力を約束してくださったのである。

「主はモーセに言われた。『見よ、わたしはユダの部族に属するホルの子なるウリの子ベザレルを名ざして召し、これに神の霊を満たして、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ、工夫を凝らして金、銀、青銅の細工をさせ、また宝石を切りはめ、木を彫刻するなど、諸種の工作をさせるであろう。見よ、わたしはまたダンの部族に属するアヒサマクの子アホリアブを彼と共ならせ、そしてすべて賢い者の心に知恵を授け、わたしがあなたに命じたものを、ことごとく彼らに造らせるであろう。』^七

キリストと天使たちを教師とするこの荒野の学校は、何という素晴らしい実業学校であったことだろう。幕屋の建築と設備には、全部の人々が協力しなかった。そこには頭脳の働きと手の働きがあった。非常に多種類の材料が必要とされ、全員は各自の心の命ずるところに従って寄付をするように勧告された。

こうして人々は、働きにおいても寄付においても、神と協力し、また互いに協力することを教えられた。彼らはまた霊的な建物、すなわち魂の中に神の宮を築くことにも協力しなければならなかった。

エジプトから旅に出た最初から、イスラエル人の訓練としつけのためにいろいろな教訓が与えられてきた。

すでにエジプトを去る前から一時的な組織ができていて、全員は組に分けられ、それぞれ組長が任命されていた。シナイ山麓でこの組織の配備が完成された。神のすべてのみわざの中に著しく表わされている秩序が、ヘブル人の制度の中に明らかに示された。神は権威と統治の中心であった。モーセは、神の代理者として、神のみ名によって律法を施行した。その下に七十人の長老、その下に祭司とつかさ、その下に「千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長」^ハがあつて、最後に、特別の任務を負わされた役人たちがいた。陣営は正しい順序に配置されていた。神の住まわれる幕屋を中心にして、その周囲を祭司とレビ人の天幕がとりかこみ、その外側に各支派がおのの旗をかかげて天幕を張った。

そこには徹底した衛生規則が励行された。それは健康上の必要からばかりでなく、人々の間に神のご臨在を仰ぐのに必要な条件として命令された。モーセは天来の権威をもって「あなたの神、主があなたを救い、敵をあなたにわたそうと、陣営の中を歩まれるからである。ゆえに陣営は聖なる所として保たなければならぬ」と民に告げた。^九

イスラエル人の教育は、生活のあらゆる習慣にまで及んでいた。彼らの福祉に関することはすべて神の懸念されるところとなり、神の律法の範囲に含まれていた。神は、食物をお与えになることでさえ、人々の最高の幸福を念願された。神が荒野で民をお養いになったマナは、体力、知力、道徳力を増進させる性質の食物であった。多くの者が食物の制限に反抗し、かつて「われわれはエジプトの地で、肉のなべのかたわらに座し、飽きるほどパンを食べていた時に」^{一〇}。と言って、そのころの生活にもどりたいたとあこがれたときでさえ

も、彼らのために神の選択が賢明であつたことが、反駁できないまでに証明された。荒野生活の困難にもかかわらず、彼らのどの部族にもだれひとりとして虚弱者はいなかった。

イスラエル人の旅の間中、神の律法を納めた箱が、その先頭に進むことになった。野営するときには、雲の柱が降下して、その場所を指示した。雲が幕屋の上にとどまっている間、彼らはその場所に野営し、雲が離れると、旅をつづけた。停止も出発も、厳肅な祈りによって示された。「契約の箱の進むときモーセは言つた、『主よ、立ちあがってください。あなたの敵は打ち散らされ……ますように。』……またそのとどまるとき、彼は言つた、『主よ、帰ってきてください、イスラエルのちよろずの人に』^{二二}と。

イスラエルの人々が荒野を旅しているとき、歌によつて多くのとうとい教訓が心にきざみこまれた。パロの軍勢の手中から救われたとき、イスラエルの全軍は勝利の歌をうたつた。その歡喜の調べは、さばくを越え、海を渡つてなりひびき、「主にむかつて歌え、彼は輝かしくも勝ちを得られた^{二三}」との賛美の歌声が山々にこだました。この歌は道中幾度もくりかえされ、流浪の旅人たちの心をはげまし、信仰を燃え立たせた。シナイ山で与えられた律法は、神の恵みの約束やイスラエル人救済のくすしき神のみわざの記録とともに、天来の導きによつて歌詞にあらわされ、楽器の音にあわせて歌われ、人々はこの賛美の歌声にあわせて歩調をとつた。

こつして彼らの思いは、道中の試練や困難から高められ、落ちつきのない不穩な精神が和らげられ静められ、真理の原則が記憶にきざみこまれ、信仰が強められた。彼らは、一致した行動をとることによつて秩序

と団結を学び、ますます神に近づき、また互いに密接におすびつけられた。

モーセは、四十年にわたる流浪の荒野の生活において、神がイスラエル人に対してとられた態度についてこう述べている。「あなたはまた人がその子を訓練するように、あなたの神、主もあなたを訓練されることを心にとめなければならない。…それはあなたを苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであつた。」^{一三}

「主はこれを荒野の地で見だし、獣のほえる荒れ地で会い、これを巡り囲んでいたわり、目のひとみのように守られた。わしがその巢のひなを呼び起し、その子の上に舞いかけり、その羽をひろげて彼らをのせ、そのつばさの上にこれを負うように、主はただひとりで彼を導かれて、ほかの神々はあずからなかつた。」^{一四}

「これは主がその聖なる約束と、そのしもべアブラハムを覚えられたからである。こうして主はその民を導いて喜びつつ出て行かせ、その選ばれた民を導いて歌いしつつ出て行かせられた。主はもろもろの国びとの地を彼らに与えられたので、彼らはもろもろの民の勤労の実を自分のものとした。これは彼らが主の定めを守り、そのおきてを行うためである。主をほめたたえよ。」^{一五}

神は、イスラエルの民が、神のみ名の栄えとなり、周囲の国民の祝福となるように、彼らにあらゆる便宜をはかり、あらゆる特権をお与えになった。もし彼らが、従順の道を歩むなら、「主は誉と良き名と栄えとをあなたに与えて、主の造られたすべての国民にまさるものとされる。」^{一六}「そうすれば地のすべての民は皆あなたに主の名をもって唱えられるのを見てあなたを恐れるであろう」と、神は約束されたのである。諸国の

民は、これらの律法をきいて、「この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である」^{一六}と言うであらう。

イスラエル人に委託された律法の中には、教育についてはつきりした指示があたえられていた。神はシナイ山上でモーセに、ご自分を「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神」^{一七}としてあらわされた。イスラエルの父母たちは、神の律法の中に表わされているこれらの原則を子供たちに教えなければならなかった。モーセは、神の指示をうけて、「きよう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も起きる時も、これについて語らなければならない」^{一八}とかれらに宣告した。

これらのことを無味乾燥な理論として教えてはならなかった。真理を他人に与えたいと思えば自らその原則を実行しなければならない。正直で高潔でそして無私の生活の中に、自ら神のご品性を反映するときに初めて他人を感化することができるのである。

真の教育は受け入れる準備のできていない頭に、また受け入れる力もない頭に、教えを強制することではない。知力がめざめさせられ、興味がよび起こされなければならない。このために、神の教授法が与えられている。人の頭脳をつくり、その法則を定められた神は、その法則に従って頭脳が発達するように考慮された。家庭において、また聖所において、自然と人工の事物を通して、労働に、祭典に、聖なる建造物に、記念の石に、あるいはまたかぞえきれないほどの規則、礼典、象徴を通して、神は、イスラエル人に教訓を

あたえて神の原則を例示し、そのくすしきみわざの記憶を保つようにされた。したがって、質問がなされる
ときに、これに応じて与えられる教えは、人々の心と頭に刻みこまれた。

選民の教育のために備えられた道には、神を中心とする生活が完全な生活であることが明らかに示されて
いる。神によって感じさせられた必要は、神が自ら与えてこれを満ち足らせ、神のお与えになるあらゆる
才能は、神が自らこれを発達させられる。

あらゆる美の創造者であり、また美しいものを愛される神は、神の子どもたちに、美を愛する心を満足さ
せる道を備えられた。神はまた彼らの社交上の必要のために、すなわち同情心を養い、生活を明るく楽し
くするのに大いに役立つところの親切で人助けとなる交際のために、方法を講じられた。

イスラエルの祭典は、教育の一手段として、重要な立場を占めていた。日常生活においては、家庭が学校
であり、また教会であって、両親は世俗のことにも宗教的な面にも教師であった。しかし一年に三回、社交
的な交際と礼拝のためある期間が定められていた。この集会は、初めはシロで、後にはエルサレムで催さ
れた。これには父親たちと男の子たちだけが参加すればいいことになっていたが、だれもこの祭りの機会を
おなしくすごしたくなかったので、できるだけ家族の者全部が出かけた。また他国人やレビ人や貧しい者た
ちも招かれて人々のもてなしを受けた。

簡素な父祖時代の服装をして、春の美しいけしきの中を、また真夏の濃い緑の中を、あるいはまたみのり
の秋の豊かな色づきの中をエルサレムをさしての旅は一つの楽しみであった。白髪の老人から幼い子供にい

たるまで、人々は、感謝のささげ物をたずさえて、聖なる住居にいます神に会うためにやってきた。旅の道すがらには、古いも、若きもいつでも愛してやまない物語りである昔の経験談が、イスラエルの子供たちに語り伝えられ、荒野の流浪生活に人々の心をはげました歌がうたわれた。神の律法が唱和されるとき、それは自然の美しい影響と人間同士の暖かい交際のとうとい感化と結びつけられて、多くの青年子女の記憶に永遠にぎざみこまれるのであった。

エルサレムで行なわれる過越節にゆかりのある儀式——すなわち夜陰の集会、腰をひきからげて足にくつをはき、手につえをもった人々のあわただしい食事、いけにえの小羊、酵いれぬパン、苦菜、厳肅な沈黙の中にきかざれる血染めの門標や、死をつかさどる天使や奴隸の地を去る大行軍の物語——それらのすべては人々の想像を刺激し、心に深い感銘を与えた。

聖所のふるまいすなわち収穫祭には、果樹園や畑の収穫の礼物や、木の枝で作られた仮小屋にすごす一週間の野営や、社交的な催しや、聖なる記念式典や、神の働き人として聖所に働いているレビ人および同じように神の子どもである他国人や貧しい人々に対する豊かなもてなしなどによって、すべての人々の心は、感謝の思いのうちに、「その恵みをもって年の冠とされ」^{一九}「あなたの道にはあぶらがしたたる」^{一九}ようにされた神におけられるのであった。

イスラエルの敬虔な人々は、毎年このようにしてまる一か月間をすごした。それは、生活のための苦勞や働きから離れて、真の意味における教育の目的のために、そのほとんど全部の時間がささげられる期間であ

った。

神は、イスラエルの民に嗣業を分配なさるにあたって、彼らに、また彼らを通して後世の人々に、土地の所有権について正しい原則を教えようと意図された。カナンの土地は、聖所に奉仕するレビ人だけを除いて、他の全部の民に分配された。一時その所有地を処分するようなことがあっても、子どもの相続権だけは譲り渡すことはできなかった。都合のつくときにはいつでも所有地を買いもどす自由が与えられていた。負債は七年めごとに免除され、五十年めのヨベルの年になると土地の所有権は全部もとの持ち主の手にもどった。こうして、どの家族も、その所有権を確保され、貧富の両極端が防止された。

神は、イスラエルの民に土地を分配することによって、エデンの住者と同じように、心身の発達に最も適した仕事をお与えになった。それは作物と家畜の世話であった。さらに教育上の配慮から、七年めごとに耕作をやめて、土地を休作状態にしておき、自然に生ずる産物は貧しい人々の手に任された。このように生活上の苦勞や働きのためにとかく忘れられがちないっそう広い研究や、社交や、礼拝や、慈善心を表わすことなどのために、機会が与えられた。

財産の分配に関する神の律法の原則が、今日の世界にも実行されていたら、社会の状態はどんなに変わったものとなっていることであろう。これらの原則が守られていたら、いつの時代にも、富める者が貧しい者を圧迫し、貧しい者が富める者を憎悪することから生ずる恐るべき悪が防止されるであろう。それはまた巨大な富の蓄積を妨げるとともに、これらの莫大な財産を築くために不当な賃銀で酷使される幾万の人々の無

知と墮落を防ぐのに役立つであろう。それは、いまや、世界を混乱と流血で満たそうとしている幾多の問題に、平和的な解決をもたらせるのに役立つであろう。

果樹園や田畑の収穫物であれ、家畜であれ、手や頭脳の仕事による収入であれ、あらゆる収入の十分の一を神に献納し、さらにまた第二の十分の一を貧民の救済やその他の慈善的な用途にあてることによって、人は万物が神の所有であるという真理と、人は神の祝福をとりつぐ機会を与えられているという事実を、たえず心に新たに感じさせられた。それは偏狭な利己心を殺し、広い高潔な品性を養うための一つの訓練であった。

神を知り、勉学にも労働にも神と交わり、神のご品性に似ることが、イスラエル人の教育、すなわち神から親に与えられ、その親から子供に与えられるところの教育の根本であり、手段であり、そして目的であった。

索引

一	申命記三二ノ一二、一〇	八	申命記一ノ一五
二	ルカによる福音書三ノ三八		民数記一ノ一六、一七参照
三	イザヤ書四〇ノ一二	九	申命記二三ノ一四
四	出エジプト記二五ノ八	一〇	出エジプト記一六ノ三
五	出エジプト記三四ノ六	一一	民数記一〇ノ三五、三六
六	コリント人への第一の手紙三ノ一六、一七	一二	出エジプト記一五ノ二一
七	出エジプト記三一ノ一六	一三	申命記八ノ五、二

一四 申命記三二ノ一〇―一二
一五 詩篇一〇五ノ四二―四五
一六 申命記二六ノ一九、二八ノ一〇、四ノ六

一七 出エジプト記三四ノ六
一八 申命記六ノ六、七
一九 詩篇六五ノ一一

預 言 者 の 学 校

「彼らはあなたの足もとに座して、教をうける」。

イスラエルの中で、教育について神のご計画が実行されているところではどこでも、その結果は創始者たる神をあかしした。しかし、大多数の家庭では、天から指示された教育も、またその教育を通しての品性の発達もみられなかった。神のご計画は部分的にそして不完全に実行されたにすぎなかった。イスラエル人は神の指導を信じていないで、これを無視したために誘惑にとりかこまれたが、これに抵抗する能力のある者はほとんどなかった。カナンの地に定住したとき、「彼らは主が命じられたもろもろの民を滅ぼさず、かえってもろもろの国民とまじってそのわざにならい、自分たちのわなとなった偶像に仕えた」とある。彼らの心は神の前に正しくなかった。「彼らの心は神にむかつて堅実でなく、神の契約に真実でなかった。しかし神はあわれみに富まれるので、彼らの不義をゆるして滅ぼさず、しばしばその怒りをおさえて、その憤りをことごとくふり起されなかった。また神は、彼らがただ肉であって、過ぎ去れば再び帰りこぬ風であることを思い出された」とある。イスラエルの父母たちは、神に対する義務をおろそかにし、子供らに対する義務にむとんちやくであった。家庭内の不信仰と、外部の偶像礼拝に影響されて、イスラエルの大部分の青少年たち

は、神が彼らのために計画された教育とは全然ちがった教育をつけ異教徒の道を学んだ。

この増大してゆく悪に対処するために、神は、教育の働きにおける親たちの助けとして、他の道を備えられた。古代から、預言者は天の任命をつけた教師として一般にみとめられていた。預言者とは、最高の意味においては、神から直接に靈感をうけて語り、神からうけた言葉を人々に伝える者である。しかし、神から直接に靈感をうけなくても、人々に神のみわざや道を教えるために神から召された人々もまた預言者と呼ばれた。こういう種類の教師たちを訓練するために、サムエルは、神の導きをつけて、預言者の学校を設けた。これらの学校は、当時広くひろがりつつあった墮落に対する防壁となり、青少年に知的また霊的な幸福をあたえ、国家の指導者としてあるいは助言者として、神をおそれる思いをもって行動する能力のある人物を社会に送り出すことによって、国家の繁栄を増進させようとするのがその目的であった。この目的のために、サムエルは、神をおそれる知的で勤勉な一団の青年たちをあつめた。これらの人々は、預言者の子とよばれた。彼らが神のみ言葉とみわざを学ぶとき、生命を与える神の力は、その頭脳と霊性の力を活気づけ、生徒たちは天来の知恵をうけた。教師たちは天来の真理に通じていたばかりでなく、自ら神との交わりを楽しみ、神の霊の特別の賜物を授けられていた。彼らは、学識においても信仰においても、人々の尊敬と信頼を受けていた。サムエルの時代には、こうした学校が二つあって、その一つは預言者の故郷と言われたラマに、もう一つはキリアテヤリムにあった。後になって、他にもこういう学校が設立された。

これらの学校の生徒たちは、土地を耕したり、工作をしたりして、自らの働きによって自活した。イスラ

エルでは、これは変わったことでも恥ずかしいことでもなかった。むしろ子供たちが有用な働きを知らないで育つのを黙認することは罪とみなされた。親が金持ちであろうと貧乏であろうと、どんな子供も何か仕事を教えられた。聖職につくために教育される人でさえも、その人が最も役立つ人間となるためには、實際生活の知識が必要とみなされた。大部分の教師たちもまた手の仕事によって自活した。

学校でも、家庭でも、授業の大部分は口頭でなされた。しかしまた青年たちはヘブル語の書物を読むことを学び、羊皮紙の巻き物になっている旧約聖書をひもどいて研究した。これらの学校の主要な学科目は、モーセに与えられた教えも含めた神の律法、聖史、聖樂、詩歌などであった。聖史の記録の中には、エホバ神のみ足跡がたどられた。聖所の奉仕における型によって示されているとうとい真理が理解され、それらのすべての制度の中心となっている本体——世の罪を取り除く神の小羊——が信仰によって把握された。生徒たちの胸中には献身の精神がつつかわれた。彼らは、祈りの義務を教えられると同時にまたどう祈るべきか、どのように創造主に近づくべきか、神への信仰をどのように働かせるべきか、神の霊の教えをどのように理解し、どのようにそれに従うべきかということを教えられた。潔められた知性によって、神の宝庫である聖書から、新しいものや古いものがとり出され、神の霊は預言と聖歌の中にあらわされた。

これらの学校は、「国を高く」^四すると言われている正義を奨励する上に、最も効果的な手段の一つとなった。これらの学校は、ダビデとソロモンの治世に光彩を放ったあの驚くべき繁栄の基礎を築く上に少なからぬ貢献をしたのであった。

預言者の学校で教えられた原則は、ダビデの品性と一生を形づくったのと同じ原則であった。神のみ言葉がダビデの教師であった。「わたしはあなたのさとしによって知恵を得ました。…わたしはあなたのさだめを終りまで、とこしえに守ろうと心を傾けます」と、ダビデは言っている。神が、ダビデを若い時に王位に召し、彼を「わたしの心になつた人」と宣言された理由はここにあった。^六

ソロモンの青年時代にも神の教授法の結果が現われている。若いころのソロモンは、ダビデの選択をわがものとした。この世のどんな財宝にもまして、彼は知恵と悟りの心を神に願い求めた。神は、ソロモンの求めたものをお与えになつたばかりでなく、彼の求めなかつたもの——富と栄えまでお与えになつた。ソロモンの理解力、広い知識、治世の栄華は世界の驚異となつた。

ダビデとソロモンの統治時代に、イスラエルは、繁栄の絶頂に達した。アブラハムに与えられ、モーセを通してくりかえされた神のみ約束——「もしわたしがあなたがたに命じるこのすべての命令を守って行い、あなたがたの神、主を愛し、そのすべての道に歩み、主につき従うならば、主はこの国々の民を皆、あなたがたの前から追い払われ、あなたがたはあなたがたよりも大きく、かつ強い国々を取るに至るであろう。あなたがたが足の裏で踏む所は皆、あなたがたのものとなり、あなたがたの領域は荒野からレバノンに及び、また大川ユフラテから西の海に及ぶであろう。だれもあなたがたに立ち向かうことのできる者はないであろう」とのみ約束は成就された。^七

しかしこの繁栄のかげに、危険がひそんでいた。後年にダビデが罪を犯したために、——それは心の底か

ら悔い改められ、またきびしく罰せられはしたものの——人々は神の戒めを大胆に犯すようになった。さらにソロモンの一生は、輝かしい約束の朝の後に背信の暗雲におおわれた。政治的な権力への欲望と自分を偉大にみせたいとの欲望から、彼は異教国民と同盟を結んだ。彼は、誠実心を犠牲にし、神の信任を裏切つてまで、タルシシの銀とオフルの金を手に入れた。偶像教徒と交わり、異教の女たちをめとつたために、彼の信仰は腐敗した。神がご自分の民の安全を計って設けられた防壁はこうして破壊され、ソロモンは、偽りの神々の礼拝に身をまかせた。オリブ山の頂上には、エホバ神の神殿に向かい合つて、異教の神々の礼拝のために巨大な偶像と祭壇が建てられた。エホバ神への忠誠心を投げすてたソロモンは、もはや自分で自分を制することができなくなった。彼の鋭い感受性は鈍くなった。初期の統治時代の良心的な思いやりの深い彼の精神は一変した。傲慢、野心、浪費、放縦は、冷酷、搾取という実を結んだ。公明正大な、情け深い、神をおそれる統治者は、暴君となり圧迫者となった。かつて神殿の奉獻式に、民の心が一つになってエホバ神にささげられるようにと民のために祈つた彼が、民の誘惑者となった。ソロモンは自分自身をはずかしめ、イスラエルをはずかしめ、そして神をはずかしめた。

イスラエルの国民は、彼らの誇りとしたソロモンの歩む道に従つた。ソロモンは、後になって悔い改めたが、もはや彼の悔い改めも、自らまいた悪の芽生えを防ぐことは不可能であつた。イスラエル人のために、神の定められた紀律と訓練は、彼らの生活をすべての点において他国民と異なつたものとするはずであつた。この特殊性は、特別な特権および祝福としてみなされるべきであつたにもかかわらず、彼らは快く受け入れ

なかった。最高の発達に欠くことのできない単純と自制と引き換えに、彼らは異教の民の虚飾と放縦とを求めた。「ほかの国々のように」^八なることを彼らは熱望した。神の定められた教育の計画は顧みられず、神の権威は否定された。

神の道が退けられて、人の道がこれに代わったとき、イスラエルの衰亡が始まった。こうしてイスラエルは衰え続け、ついには彼らが自らその習慣を選んで従っていた国々の餌食になってしまった。

イスラエル人は、国家としては、神が彼らに与えようとなさった恩恵をつけることができなかった。彼らは神の御目的を認識することも、その成就に協力することもしなかった。しかし個人でも民族でもこのように神から離れても、神を信頼する者に対する神の御目的は変わらない。「神がなさることは永遠にかわるところ」^九なのである。

進歩の程度や、人々の必要に応じて神の表わしたもう力には、各時代によって相違はあるが、神の働きはいつでも同じである。教師である神は変わりたまわない。神のご品性と計画は同じである。神は、「変化と回転の影とかいうものはない」^{一〇}。おかたである。

イスラエル人の経験は、われわれの教えのために記録されている。「これらの事が彼らに起こったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである」^{一一}とある。古代のイスラエル人と同じように、われわれにとってもまた教育の成功は、創造主のご計画を誠実に実行するかしないかによってきまるのである。われわれが神のみ言葉の原則を堅く守るときに、

イスラエルの民に与えられるはずであつた大いなる祝福がわれわれの上にもたらされるであらう。

索 引

一	申命記三三ノ三	七	申命記一ノ二二―二五
二	詩篇一〇六ノ三四―三六	八	サムエル記上八ノ五
三	詩篇七八ノ三七―三九	九	伝道の書三ノ一四
四	箴言一四ノ三四	一〇	ヤコブの手紙一ノ一七
五	詩篇一一九ノ一〇四、一一二	一一	コリント人への第一の手紙一〇ノ二
六	使徒行伝一三ノ二二		

偉人の一生

「正しい者の結ぶ実は命の木である。」

聖書にしろされている歴史の中には、真の教育の結果について、多くの実例が示されている。そこには、神の導きによって品性を陶冶した人々の多くのとうとい例が示されている。彼らは人類同胞の祝福となるような一生を送り、神の代表者として、世に立った人々である。そうした人々の中に、最も偉大な政治家であるヨセフとダニエル、最も賢明な立法官であるモーセ、最も忠実な改革者であるエリシャ、また「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」と人々がいったイエスを除けば、世界で最もすぐれた教師であるパウロといったような人物がある。

ヨセフとダニエルは、ちょうど子供からおとなになる年ごろに、家庭を離れて捕われの身として異教の国へつれて行かれた。ことにヨセフは、大きな運命の変化をともなった数々の試練に会ったのであった。彼は少年時代を父のひざもとに愛されて育ち、ポテパルの家にあつては奴隷となり、やがて主人の信任を得てその友となり、学問と観察と人々との接触によって教養を身につけた家宰となり、無実の罪をうけて并明の自由も赦免の望みもなく国家の罪人としてパロの牢獄につながれたが、非常な危機に際して国民の指導者とし

て召し出されたのであった。そうした中であって、彼に誠実な心を持ち続けさせたのは何であつたろうか。

高いところに立つ者はだれでも危険を免れることができない。ちょうどあらしが谷間の草花はそこなわずに、山頂の樹木を根こそぎ倒して通りすぎるように、激しい誘惑は社会の下層には目もくれずに成功と名譽の高い地位にある人々に向かつて攻撃を加える。しかしヨセフは、逆境と繁栄の両面の試練に耐えた。彼はパロの宮殿にあつても、獄中にあつたときと変わらない同じ誠実心を表わした。

ヨセフは、少年時代に、神を愛しおそれることを教えられた。シリヤの星空のもとに張られた天幕の中で、彼は父のヤコブから、ベテルの夜の異象、天と地の間にかけられたはしごやそれを上り降りしていた天使たちや天のみ座からご自身をヤコブに表わした神についての物語をきかされた。父がヤボクの河畔で格闘したあげく、心の中に宿っていた罪を絶ったときに勝利者となり、「神と共なる君」という称号をうけた物語もきかされた。

羊飼いの少年として、父の羊の群れの見張りをしていたヨセフの純朴な生活は、彼に体力と知力の発達をもたらしした。ヨセフは、自然を通して神と交わり、聖なる委託物として父から子へ伝えられたとうい真理を学んで、堅実な精神と確固たる原則を身につけた。

ヨセフが、人生の危機に面したとき、すなわち子供時代をすごしたカナンのわが家から、奴隷の運命が待ちうけているエジプトへの恐ろしい旅の途中に、肉親の住む天幕のかくれた山々を見納めたときに、かれは父ヤコブの神を心に覚えていた。少年時代の教訓を思い出し、真実な人間になって、どんなときにも天の王

の臣下としてふさわしい行動をとらなければならぬと決心したときに彼の魂は感動した。

他国人としてまた奴隷としてのつらい生活の中にあっても、見るもの聞くもののすべてが悪徳と偶像礼拝、——人の心をひきつけないではおかぬ富と文化と王室の盛観にかこまれた礼拝の誘惑のさなかにあっても、ヨセフは動揺しなかった。彼は、義務に服従するという教訓を学んでいた。最も低い境遇から最も高い身分にいたるまでどんな立場にも忠実であることによって、あらゆる能力が最高の奉仕のために訓練された。

ヨセフがパロの宮殿に召された当時のエジプトは、世界で最もすぐれた国家であった。文化に芸術に、学問に、エジプトは比類のない存在であった。最も困難な、そして危険な時期に、ヨセフはこの王国の政務をとり、しかも彼の施政は、王国と人民の信頼を勝ち得た。パロは彼を「その家のつかさとしてその所有をこ」とごとくつかさどらせ、その心のままに君たちを教えさせ、長老たちに知恵を授けさせた^三とある。

靈感の言葉はヨセフの一生の秘訣をわれわれの前に示している。ヤコブは、子供たちに与えた祝福の中で、最愛の子ヨセフについて、天来の力と美に満ちた言葉でこう語っている。

「ヨセフは実を結ぶ若木、

泉のほとりの実を結ぶ若木。

その枝は、かきねを越えるであろう。

射る者は彼を激しく攻め、

彼を射、彼をいたく悩ました。

しかし彼の弓はなお強く、

彼の腕は素早い。

これはヤコブの全能者の手により、

イスラエルの岩なる牧者の名により、

あなたを助ける父の神により、

また上なる天の祝福、

下に横たわる淵の祝福、

乳ぶさと胎の祝福をもつて、

あなたを恵まれる全能者による。

あなたの父の祝福は永遠の山の祝福にまさり、

永久の丘の賜物にまさる。

これらの祝福はヨセフのかしらに帰し、

その兄弟たちの君たる者の頭の頂に帰する」。^四

神への忠誠、目に見えない神への信仰が、ヨセフの錨であった。ここに彼の能力がかくされていた。

「かれの手の力は、ヤコブの神の大いなるみ手によって強くされた」。^五

バビロンでのダニエルとその同僚たちの青年時代は、エジプトでのヨセフの初期の生活にくらべてはるかに幸運であつたようにみえる。しかし、彼らもまたヨセフに劣らない激しい品性の試練をうけた。王族の血統をつけたこれらの青年たちは、比較的質素なユダヤの家庭から、最も繁華な都会へ、しかも時の最大の君主の宮廷へ移され、国王の特別の奉仕のために選出されて教育を受けることになった。腐敗した豪華な宮廷では彼らを取り囲んでいる誘惑は強かった。エホバ神の礼拝者たちがバビロンに捕囚の身となっていることやエホバの神殿の器具がバビロンの神々の寺院に納められていることや、イスラエルの王さえバビロン人の手中にとりことなっていることなど——こうした事実を数えあげて、勝利者たちは自分たちの宗教や風習が、ヘブル人のそれよりもすぐれているという証拠として誇った。こうした境遇のもとにあつて、イスラエル人が神の律法を離れて自ら招いた屈辱そのものを通して、神はご自身の至上権と聖なるご要求と服従の確かな結果についての証拠とを、バビロン人にお示しになった。しかも神は、その唯一の方法として、神への忠誠心を堅く持ち続けている人々を通してこの証拠を与えられたのである。

ダニエルとその同僚たちの新しい生活の第一歩に、決定的な試練がやってきた。彼らの食物を国王自身の食卓から与えるようにとの命令は、彼らの幸福を願う王の心づかいと愛情のあらわれであつた。しかし、国王の食物の一部分は偶像にささげられていたので、その食卓の食物は偶像礼拝の供え物であつた。王から賜

わる食物をとることによって、青年たちは、国王と共に偶像神をあがめているものとみなされるのであった。このような尊敬をささげることは、彼らのエホバ神への忠誠心が許さなかった。彼らは、知、徳、体の発達に悪影響を及ぼすぜいたくや道楽を、あえてしようとは思わなかった。

ダニエルと同僚たちは、神のみ言葉という原則によって忠実に教えこまれていた。彼らは、霊的なことのために物質的なものを犠牲にすべきことや、最高の善を求めなければならないことを学んでいた。彼らは今その報いを刈りとったのである。節制の習慣と、神の代表者としての責任感によって、彼らの知、徳、体の能力は最も高貴な発達をとげた。かれらの教育が終わって、王国の名誉ある地位を約束されている他の候補者たちと共に試験されたとき、「ダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤにならぶ者」^六はなかった。

バビロンの宮廷には、すぐれた才能をもった人々や生まれつき最も豊かな天分に恵まれている人々や、この世で得られる限りの最高の教養を身につけた人々などが、全地から代表者として集まっていた。こうした人々の中にあってさえ、ヘブルの捕囚者たちは比類のない存在であった。肉体的な力や美しさでも、知力でも、学識でも、彼らに匹敵する者はなかった。「王が彼らにさまざまな事を尋ねてみると、彼らは知恵と理解において、全国の博士、法術士にまさること十倍であった」^七とされるしている。

神に対するゆるがない忠誠心ときびしい克己心をもった青年ダニエルは、その高潔な気品と礼節のある服従によって彼の監督の任にあった異教の役人から「恩恵と愛」をがち得た。これと同じ特色が、かれの一生にみられる。かれはたちまちのうちにバビロン帝国の総督の地位にのぼった。代々の君主の治世や王国の

没落や敵の王国の建設などの中にあつて、かれの機知と礼儀と善良な性質は、主義に堅く立つて動かない心と結びついて非のうところがなく、敵でさえ、「彼が忠信な人であつて、その身に何のあやまちも、とも見いだされな^八」と言わずにはいられなかつたほどの知恵と政治的な手腕が発揮された。

ダニエルはゆるがない信頼をもつて、神によりすがつたので、預言の力の霊が彼の上にくだつた。彼は、人々の尊敬をうけて、宮廷の責任と国家の機密を任されたが、同時にまた、神の信任をうけて天の全権大使とされ、きたるべき時代の奥義を解くことを教えられた。異教の君主たちは、天の代表者ダニエルとの交わりを通して、ダニエルの神エホバを認めないわけにはいかなかった。ネブカデネザルは、「まことに、あなたがたの神は神々の神、王たちの主であつて、秘密をあらわされるかただ^九」と説明している。ダリヨスは、「全世界に住む諸民、諸族、諸言語の者^九」に布告して、「ダニエルの神^九は「生ける神であつて、とこしえに変わることなく、その国は滅びず……救を施し、助けをなし、天においても、地においても、しるしと奇跡とおこな^九」う神であるとおがめている。

ヨセフとダニエルは、知恵と公平を表わし、日々純潔で情け深い生活をおくり、民のため、しかも偶像教徒である民の利害のために、献身的な努力をささげることによつて、幼いころにしつけられた原則にそむかず、自分の代表している神に忠実であることを立証した。彼らは、エジプトでもバビロンでも、全国民から尊敬された。これらの異教国民やその他、このふたりに関係のあつたすべての国民は、ふたりの中に神の恩

恵といつくしみについての实例を、またキリストの愛についての实例をみたのであった。

この気高いヘブルの青年たちはなんという高貴な一生の働きをなし遂げたことであろう。彼らは、その育った家庭に別れをつげたとき、自分の崇高な運命を夢にも思わなかったであろう。神の導きに忠実にそして堅実に従った彼らを通して、神の御目的が成就されたのである。

神は、これらの人物を通して表わされた同じ偉大な真理を、今日の青年男女を通して表わそうと望んでおられるのである。ヨセフとダニエルの歴史は、神に献身し、全全全霊をもって神の御目的を成就しようと努力する人々に対して、神がどのようなことをなさるかということの生きた例である。

世界で最も欠乏しているものは人物である。それは、売買されない人、魂の奥底から真実で、正直な人、罪を罪とよぶのに恐れない人、磁石の針が南北を指示して変わらないように、良心が義務に忠実な人、天が落ちかかろうとも正しいことのために立つ人、——そういう人である。

しかし、こういう品性は偶然にでき上がるものではない。それはまた神の特別な恩恵や天分によるものでもない。高潔な品性は自己修練の結果である。それは肉欲を精神に従わせること、すなわち、神と人とに対する愛の奉仕のために自我を克服することによって達せられるのである。

青年たちは、自分の天分は自分自身のものではないという事実を心に刻みこまなければならない。能力も時間も知性も、借りた宝にすぎない。それは神のものであって、どの青年もこれを最高の目的に用いる決意がなければならない。青年は、実を結ぶようにと神に期待されている木の枝、資本を増殖すべき家宰、世の

暗きを照らす光である。どの青年も、どの子供も、神の栄えと人類の向上のために、それぞれしなければならぬ働きをもっている。

預言者エリシヤは、その幼年時代を静かななかの生活の中で、神と自然に教えられ、有用な働きをしまれて育った。彼の父の家族は、当時ほとんど全国的な背教の中にあつて、バアルにひびを屈しなかつた一部の人々の仲間であつた。その家庭は神をあがめ義務を忠実に果たすことを日常生活の法則としている家庭であつた。

富裕な農夫のおすこエリシヤは、最も手近なところから働きをはじめた。人々の指導者となる素質をもつていた彼は、まず日常の平凡な義務について訓練をうけた。人を賢明に導くためには、自ら人に従うことを学ばなければならなかつた。小さなことに忠実であることによって、彼はいつそ重い責任をになうのにふさわしい者となつた。

エリシヤは、柔和でやさしい精神を持っている半面にまた精力と強固な意志を持っていた。彼は、神を愛しおそれる念を胸にいだいていた。そして毎日平凡な仕事をくりかえしているうちに、確固たる目的とこの品性を身につけ、神の恩恵と知識の中に成長した。彼は、家事に父と協力している間に神と協力することを学んだ。

エリシヤが預言者として召されたのは、彼が父の下男たちといっしよに畑を耕していたときであつた。神

の導きを受けて後継者をさがしていたエリヤが、この若者の肩に外套をなげかけたとき、エリシヤは召命を認めてこれに従った。彼は、「立つて行ってエリヤに従い、彼に仕えた」と記録されている。最初エリシヤに命じられた働きはたいしたものではなかった。相変わらず平凡な義務が彼の訓練の本質であつた。彼は、主人エリヤの手に水を注ぐ者であつたと言われている。エリシヤは、預言者エリヤの身边に付き添う従者として、小さなことに忠誠をつづけた。同時にまた日々に強まる目的をもって、神から命じられた任務に献身した。

エリシヤが初めて召されたとき、彼の決心が試みられた。彼がエリヤについて行こうとすると、家に帰れと預言者から命じられた。彼は、価をかぞえてみなければならなかった。すなわち召命をうけ入れるか、拒むかを自分できめなければならなかった。しかし、エリシヤは、その機会がどんな価値をもっているかを理解した。彼は、世俗的な利益のために、神の使者となる機会をのがしたり、神のしもべエリヤと交わる特権を犠牲にしたりしようとは思わなかった。

時がたつて、エリヤが天に上げられる準備ができるとともに、エリシヤはその後継者となる準備ができた。そこで再びエリシヤの信仰と決心が試みられた。エリシヤは、エリヤの巡回伝道についてまわり、まもなくエリヤの身に変化が起ることを知っていたが、その行くさきざきで、エリヤからひきかえすように勧められた。エリヤはエリシヤに「どうぞ、ここにとどまってください。主はわたしをベテルにつかわされるのですから」と言った。しかし、少年時代から鋤で働いていたエリシヤは、途中で失望したり、投げ出したりし

てはならないことを学んでいた。いま他の方面の任務において鋤に手をつけた彼は、その目的から目をそらそうとしなかった。引き返すように勧められるたびに彼の答えは、「主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」^二であつた。

「ふたりは進んで行った。∴彼らふたりは、ヨルダンのほとりに立つたが、エリヤは外套を取り、それを巻いて水を打つと、水が左右に分れたので、ふたりはかわいた土の上を渡ることができた。彼らが渡つたとき、エリヤはエリシャに言った、『わたしが取られて、あなたを離れる前に、あなたをしてほしい事を求めなさい。』エリシャは言った、『どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください。』エリヤは言った、『あなたはむしろかしい事を求める。あなたがもし、わたしが取られて、あなたを離れるのを見るならば、そのようになるであらう。しかし見ないならば、そのようにはならない。』彼らが進みながら語っていた時、火の車と火の馬があらわれて、ふたりを隔てた。そしてエリヤはつおじ風に乗って天にのぼつた。エリシャはこれを見て『わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ』と叫んだが、再び彼を見なかった。そこでエリシャは自分の着物をつかんで、それを二つに裂き、またエリヤの身から落ちた外套を取り上げ、帰ってきてヨルダンの岸に立った。そしてエリヤの身から落ちたその外套を取って水を打ち、『エリヤの神、主はどこにおられますか』と言い、彼が水を打つと、水は左右に分れたので、エリシャは渡つた。エリコにいる預言者のともがらは彼の近づいて来るのを見て、『エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている』^三と言つた。そして彼らは来て彼を迎え、その前に地に伏して」^三としるされている。

この時からエリシャはエリヤの地位に立った。小さなことに忠実であつた彼は、大きなことにもまた忠実であることを示した。

力の人エリヤは、巨大な悪を倒すために、神から用いられた器であつた。アハブや異教徒イゼベルの支持によつて国民を悪の道に誘つていた偶像礼拝は打倒され、バアルの預言者たちは殺された。イスラエルの全国民は深く感動させられ、多くの者が神の礼拝にかえりつつあつた。エリヤの後継者として、注意深く忍耐強くイスラエルを安全な道に導くことのできる人物が必要であつた。この働きのために、エリシャは、若い時から神の導きのもとに訓練をうけ、準備されていた。

これはすべての人が学ばなくてはならない教訓である。神が人を訓練なさる目的がどこにあるかはだれにもわからない。しかし、小さなことに忠実であることは、より大きな責任をになうのにふさわしい証拠であるといふことはだれにもわかる。人生の行為の一つ一つは、品性の現われである。小さな事ならに、「恥じるところのない錬達した働き人」であることを自ら示す者だけが、神よりいっそう大きな信任を受ける栄誉が与えられるのである。

モーセが家庭の暖かい保護から離れたのは、ヨセフやダニエルよりも年少の時であつた。しかしこのときすでに、ヨセフやダニエルの一生を形づくつたのと同じ力によつて、彼の一生は形づくられていた。モーセがヘブルの肉親と共に暮らしたのはわずかに十二年にすぎなかったが、この年月の間に、彼の偉大さの基礎

が築かれたのであった。しかもそれは、世に名も知れない者の手によって築かれたのであった。

ヨケベデは奴隷の女であった。彼女の身分は卑しく、その重荷は大きかった。しかし世はヨケベデを通して与えられたほどの大きな祝福を、ナザレのマリヤを除いては、他のどんな女からも受けたことはない。彼女は、子供がまもなく自分の手を離れて、神を知らない人々の手で育てられなければならないことを知って、ますます熱心に、その子の魂を天に結びつけようと努力した。彼女は幼いモーセの心に、神に対する愛と忠誠心を植えつけようとした。そして、この働きは、忠実になし遂げられた。モーセは、後年どんな影響を受けても、母親が一生の重荷として自分に教えさとしてくれた真理の原則から離れることがなかった。

ヨケベデのおすこモーセは、ゴセンの貧しい家庭から、パロの宮殿にひきとられ、エジプト王女のいとし子として迎えられた。モーセは、エジプトの学校で、最高の文武の教育を受けた。モーセのりっぱな容貌や体格から受ける容姿の大きな魅力、教養をつんだ知性と貴公子然たる態度、武官としての盛名——そうしたことのために彼はエジプト国民の誇りとなった。エジプト王は、祭司職の一員でもあったので、モーセは、異教の神の礼拝にあずかることを拒んではいたが、エジプトの宗教の奥義のいっさいを伝授された。その当時はまだ、エジプトは、国々の中で、最も勢力があり、また最も高い文明を保っていたので、モーセは、その未来の君主として、この世で与えられるかぎり最高の栄誉を継ぐ者であった。しかし彼の選択は、それよりももっと貴重な選択であった。モーセは、神の栄えと、踏みつけられているイスラエル人の救済のために、エジプトの栄誉を犠牲にした。そのとき、神は、特別な意味において、モーセの教育を引き受けられたので

あつた。

モーセは、一生の働きに対する準備がまだできていなかった。彼は、神の力に信頼することについて、教訓を学ばなければならなかった。彼は神の御目的を誤解していた。彼は、武力によるイスラエル人の救済を念願していた。彼は、このためにいっさいをかけて失敗した。敗北と失意の中に、彼は異郷に難をのがれて亡命した。

ミデアンの荒野にモーセは牧羊者として四十年の年月をすごした。表面は一生の任務から永遠に切り離されたかのように見えながら、実は、その任務の達成のために訓練を受けていたのであった。無知で訓練のない群衆を統治する知恵は、自己を支配することによって得られなければならない。羊やおなしの子羊を世話することによって、彼は、イスラエルの忠実な忍耐強い牧者となるのに必要な経験を得なければならない。神の代表者となるためには、自ら神について知らなければならない。かつた。

エジプトでモーセをとりまいていた感化、養母の愛情、王の孫としての彼の立場、さまざまな形をとって誘惑するぜいたくと享楽、洗練され魅惑的で神秘的な偽りの宗教——そうしたものがモーセの心と品性に、深い影響を与えていた。荒野のきびしい質実さの中にあつて、こうした影響はすっかり消えうせた。

莊嚴な威容を誇る山々にかこまれた人跡まれな場所にあつて、モーセはただひとり神と交わつた。いたるところに神のみ名がしるされていた。モーセは、神の目前に立ち神の力におあわれているような気がした。ここで彼の自己満足の念はあとかたもなく消えうせた。限らない存在であられる神の目前にあつて、彼は、

自分がいかに無力で、いかに無能で、いかに目先のことしかわからない人間であるかを悟った。

ここでモーセが身につけたものは、彼のほねおりと苦勞に満ちた一生の年月を通じて変わらなかった。それは実に神のご臨在についての自覺であつた。彼は、将来、キリストが肉体をとって現われることを予見したばかりでなく、キリストがイスラエルの軍勢の旅に初めから終わりまで付き添つておられるのを見た。人に誤解され、誤つた評判をたてられたときにも、非難と悪口を忍び、危険と死に直面しなければならなかつたときにも、彼は、「見えないかたを見ているようにして」耐え忍ぶことができた。^{一四}

モーセは、神について考えたばかりでなく、神を見たのであつた。彼は目の前に絶えず、神の幻を見続けた。彼は、神のみ顔を見失つたことはなかつた。

モーセにとって信仰は、推測ではなくて事實であつた。彼は、神が特に自分の一生を支配しておられることを信じ、すべてのこまかい点にも神をみとめた。あらゆる誘惑に立ちおかつ力を求めるために、彼は神によりすがつた。

モーセは、自分に負わされている重大な働きに最高の成功を収めたいと願つて、神の力にいつさいの信頼をおいた。彼は、助けの必要を感じてこれを求め、信仰によつてこれをつかみ、ささへの力を確信して前進した。

荒野における四十年間の訓練からモーセが得た経験はこうしたものであつた。無限の知恵なる神は、その期間が長すぎるとか、あるいはその代価が大きすぎるなどとは思われなかつた。

彼の訓練の結果と、そこで教えられた教訓の成果は、イスラエルの歴史と結びついているばかりでなく、それはまた当時から今日にいたるまで、世界の進歩に貢献しているすべてのことに結びついている。モーセの偉大さについて最高の証言、すなわち靈感によって、彼の一生の上に下された宣告は、「イスラエルには、こののちモーセのような預言者は起らなかった。モーセは主が顔を合わせて知られた者」^{一五}であつた。

福音の働きにおいて、イエスに従ったガリラヤの弟子たちの信仰と経験に、エルサレムの一学者のたくましい精力と知的な能力が結合された。タルソのサウロはローマの一市民として異邦の都市に生まれ、血統によるばかりでなく長年の訓練と愛国的な献身と宗教的な信念とにおいてユダヤ人であり、エルサレムにおいて最もすぐれた学者の門下で教育を受け、父祖伝来の律法と慣習について教えられていた。彼は、ユダヤ国民としての誇りと偏見を最大限に持っていた。彼は、若いうちにサンヒドリンのほまれ高い議員となり、古来の伝統的な宗教の熱心な擁護者として、前途を期待されていた。

ユダヤの神学校では、神のみ言葉よりも、人間的な思索が重んじられ、学者たちの解釈や慣習によって、神のみ言葉から力が奪われていた。自大主義、権勢欲、猜疑的な排他心、頑迷であうへいな自負心——こうしたものが当時の教師たちを支配していた主義と動機であつた。

ラビたちは、他国民に対してばかりでなく、自国の民衆の前に、自分たちの優越性を誇っていた。彼らは、ローマの圧制者たちに激しい憎悪を持ち、武力に訴えて、国家の主権を回復する決意をいだいていた。彼ら

は、自分たちの野心的な陰謀とはおよそ正反対な平和の使命を叫ぶイエスの弟子たちを憎みそして殺した。パウロは中でも最も残忍で冷酷な迫害者のひとりであった。

モーセはエジプトの軍官学校で、武力の法則を教えられて、これが彼の品性に根強い影響を与えたために、彼がイスラエルを愛の法則で指導するのにふさわしい者となるには、神と自然との静かな交わりの中に四十年の長い年月を必要とした。これと同じ教訓をパウロも学ばなければならなかった。

ダマスコ門外でパウロの見た十字架のイエスの異象は彼の全生活を一変させた。迫害者が弟子となり、教師が生徒となった。ダマスコで孤独の中に送った暗黒の幾日間は、彼の幾年もの経験に匹敵した。彼はキリストを教師として、記憶にたくわえられていた旧約聖書を学んだ。彼にとってもまた静寂な自然界が学校となった。彼は、アラビアのさばくに行つて、そこで聖書を学び、神について学んだ。彼は、それまでの自分の人生を支配していた偏見と慣習を頭からとり去つて、真理の根源である神から教えをうけた。

彼の後半生は、自己犠牲と愛の奉仕というただ一つの原則によつて貫かれている。「わたしには、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任がある。」^{一六}「キリストの愛がわたしたちに強く迫っている」^{一七}と彼は言っている。

人間として最も偉大な教師パウロは、どんな低い任務もどんなに高い任務も同じように受け入れた。彼は頭脳の働きと同じように手の働きの必要もみとめ、手仕事をして自分の生計をたてた。彼は、文明の大都市の中で、福音を宣伝するかたわら、天幕製造の業に従事した。エペソの長老たちと別れる際に、彼は、「わ

たしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも働いてきたのだ^{一八}」
という。

パウロは、高い教養をそなえていたが、同時に彼の一生には、それよりもすぐれた知恵の能力が表わされている。最も深い意義をもった原則、当時の最も偉大な知者たちの知らなかった原則がパウロの教えの中に示され、彼の生活に例示されている。彼は、あらゆる知恵の中の最大の知恵をもっていた。それは、人の心を機敏に見抜いて、これと意思を同じくし、人々と接触してその善良な性質をよびおこし、彼らを奮起させていっそう高い生活へ進ませる知恵であった。

異教のルステラ人に、すべての恩恵の根源であり、自然界にあらわれている神、すなわち、「天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満た^{一九}」される神をさし示したパウロの言葉に耳を傾けたい。

ピリピの牢獄で、肉体は苦痛に責めさいなまれているにもかかわらず、パウロの歌う賛美の歌声は、真夜中の静寂を破ってきこえた。地震で牢獄のとびらが開かれた後にも、「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここに^{二〇}いる」と言つて、異教徒の獄吏をはげます彼の声がきこえて来た。囚人たちはみなひとりの同獄者パウロが居合わせたために、ひきとめられてもとの場所にいた。こうして、パウロをささえている真実な信仰を悟った獄吏は、救いの道を問うて家族全員とともに、迫害の中にあるキリストの弟子たちの一団に加わったのであった。

アテネのアレオパゴスの会議に、科学には科学を、論理には論理を、哲学には哲学をもって対したパウロを見よ。彼は天来の愛より生ずる機知をもって、人々が知らずに拝んでいるいわゆる「知られない神」^二は、エホバ神であることをさし示し、ギリシア詩人の言葉を引用して、エホバは父なる神であり、彼らはその子であることを説いている。階級観念がやかましくて、人の人たる権利は全然みとめられなかった当時、「ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ」^三と言明して、人類の兄弟愛についての大真理を示した彼の言葉に耳を傾けたい。さらに彼は、人類に対する神の摂理の中には、恩恵といつくしみのみどころが、黄金の糸のように、つらぬかれていることを示している。神は、「それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない」^三と、彼は説いている。

フェストの法廷で、福音の真理をみとめたアグリッパ王が「おまえは少し説いただけで、わたしをクリスチャンにしようとしている」^三と叫んだときのパウロの言葉を聞かれよ。彼は、わが身をつないでいる鎖を指さし、ていねいな態度でこう答えている、「わたしは神に祈るのは、ただあなただけでなく、きょう、わたしの言葉を聞いた人もみな、わたしのようになって下さることです。このような鎖は別ですが」^三と。

このようにして、パウロは、「幾たびも旅をし、川の難、盗賊の難、同国民の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、しば

しば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともあった^{二四}と自ら言っているような一生を送ったのであった。

彼はまたこう言っている、「はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉をかけている」^{二四}。「悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている」^{二六}と。

彼は、奉仕の中に喜びを見いだした。そうして辛苦の人生の終わりに、彼は、一生の戦いと勝利をふりかえって、「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき」^{二七}とすることができたのであった。

これらの歴史は重要な価値をもっている。ことにそれは、だれよりも若い人たちにとって深い意義をもっている。一生を神に奉仕して、重荷を負う者となるために、モーセは未来の王位を拒絶し、パウロは祖国で富と名誉をうけられるその有利な立場を放棄した。多くの人々にはこれらの人物の一生は自己放棄と犠牲の一生にみえるであろう。だがはたしてそうであつたろうか。モーセは、キリストのけん責を、エジプトの財宝よりも大きな富とみなした。彼にとっては、事実その通りだったのである。パウロはこう言っている、「しかし、わたしにとって益であつたこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損とと思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失つたが、それらのものを、ふん土のように思っている」^{二八}と。彼は自分の選択に満足していた。

モーセは、パロの宮殿と君主の地位を提供された。しかし、そのはなやかな宮廷の中には、人々に神を忘れさせる罪の享樂があつた。モーセは、それよりもむしろ、「永続的な宝と正義」^{二九}をえらんだ。彼は、エジプトの偉大さに身をしばらくられるよりは神の御目的に自分の一生を結びつけることを選んだ。彼は、エジプトの法律を定める代わりに、神の導きをつけて、世界のために律法を制定した。彼は、家庭にとつても社会にとつても防壁となる原則、また諸国民の繁榮の礎石となる原則を人類に与えるために神の器となつた。それは人類の政治における最上のもののいっさいの基礎として、世界の最もすぐれた人々から今日も認められている原則である。

エジプトの偉大さは滅び、その権力と文明は過ぎ去つた。しかし、モーセの業績は決して滅びることなく、彼が自らの生活に実行した正義の大原則は永遠に不滅である。

モーセの辛苦と苦勞の一生は、「万人にぬきんで」^{三〇}て「はなはだ美し」^{三一}いキリストのご臨在によつて照り輝いた。荒野のさすらいにも、変貌の山の上でも、天上の宮廷にあつても、彼は常にキリストと共にあつた。彼の一生は、地上にあつては、自分にとつても他人にとつても祝福となり、天上にあつては榮譽を与えられる一生であつた。

パウロもまた多くの働きにおいて主のご臨在というささえの力によつてささえられた。彼はこう言っている、「わたしを強くして下さるかたによつて、何事でもすることができ」^{三二}だれがキリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦惱か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。…しかし、わたした

ちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある。わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである」^{三三}と。

しかし、パウロは、自分の働きの報いとして、将来の喜びを待ち望んだ。それはキリストが十字架に耐え、屈辱をもともされなかったのと同じ喜び、すなわち自分の働किが実を結ぶのを見るという喜びであった。パウロは、テサロニケの信者にあてて、こう書いている。「わたしたちの主イエスの来臨にあたつて、わたしたちの望みと喜びと誇の冠となるべき者は、あなたがたを外にして、だれがあるだろうか。あなたがたこそ、実にわたしたちのほまれであり、喜びである」^{三三}と。

パウロの一生の働किが、世界にどんな成果を与えたかを、だれが測り知ることができるだろうか。苦しみと和らげ、悲しみを慰め、悪を押え、生活を我欲と肉欲から高めて、これを永遠の生命の希望によって輝かしいものにするなどそうしたすべての恩恵の感化は、神の子の祝福をたずさえて、アジアからヨーロッパの海岸まで、人知れぬ旅をつづけて働いたパウロとその共労者たちに、どれだけ負うところが大きいであろう。このように、祝福の感化を人々に及ぼすために神の器となることは、どんなにか価値のある人生であろう。そしてまた、このような人生の働きの成果を永遠のみ国において目にみることが、どんなにか価値のあることであろう。

索

引

一	箴言一一ノ三〇	一八	使徒行伝二〇ノ三四
二	ヨハネによる福音書七ノ四六	一九	使徒行伝一四ノ一七
三	詩篇一〇五ノ二一、二二	二〇	使徒行伝一六ノ八
四	創世記四九ノ二二―二六	二一	使徒行伝一七ノ二三、二六
五	創世記四九ノ二五・英語欽定訳	二二	使徒行伝一七ノ二六、二七
六	ダニエル書一ノ一九	二三	使徒行伝二六ノ二八、二九
七	ダニエル書一ノ二〇	二四	コリント人への第二の手紙一一ノ二六、二七
八	ダニエル書六ノ四	二五	コリント人への第一の手紙四ノ一二、一三
九	ダニエル書二ノ四七 六ノ二五―二七	二六	コリント人への第二の手紙六ノ一〇
一〇	列王紀上一九ノ二一	二七	テモテへの第二の手紙四ノ七
一一	列王紀下二ノ二	二八	ピリピ人への手紙三ノ七、八
一二	列王紀下二ノ六一―一五	二九	箴言八ノ一八・英語欽定訳
一三	テモテへの手紙一ノ一五	三〇	雅歌五ノ一〇、一六
一四	ヘブル人への手紙一ノ二七	三一	ピリピ人への手紙四ノ一三
一五	申命紀三四ノ一〇	三二	ローマ人への手紙八ノ三五―三九
一六	ローマへの手紙一ノ一四	三三	テサロニケ人への第一の手紙二ノ一九、二〇
一七	コリント人への第二の手紙五ノ一四		

三 大教師イエス

「この人の語るように語った者は、これ
までにありませんでした」

ヨハネによる福音書七ノ四六

神よりつかわれた教師

「イエスを仰ぎ見つつ。」

「その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』となえられる。」

神は教師イエスを天から送ることによって、天の最上にして最大の賜物をおあたえになった。至高である神との評議の座につらなり、永遠の神の至聖所に住んでおられるキリストが、人となって神の知識を人類にあらわすおかたとしてえられたのである。

墮落した世界を照らす天来の光は、どれもみなキリストを通して与えられたものであった。各時代にわたって、神のみ言葉を人類に宣告した人々を通して語られたのはキリストであった。この世で最も偉大な、また最も高貴な魂を持った人々にみられるあらゆる美德は、キリストの反映である。ヨセフの純潔と慈善、モーセの信仰と柔和と寛容、エリシャの堅い信仰、ダニエルの気高い誠実心と堅固な志、パウロの熱心と自己犠牲、これらの人々をはじめとして、その他この地上に生存したすべての人々の中に表わされている知的また霊的な能力——それはすべてキリストの栄光の輝きから出るかすかなひらめきにすぎなかった。完全な理想は、キリストの中に見いだされる。

われわれの到達しなければならぬ唯一の眞の標準としてこの理想を示し、人はどういう者になり得るか、またキリストを受け入れる者は、人性に神性が宿ることによって、どういふものになるかということを示すために、キリストはこの世においてになった。人が神の子としてふさわしい者となるためには、どんなに訓練されなければならないか、また地上においてはどのように原則を實行し、天の生活を送らなければならないかということを示すために、キリストはおいでになった。

神の最大の賜物は人類の最大の必要に応ずるために与えられた。光であるキリストは世の暗黒が最も深い時においてになった。偽りの教えを通して人々の心は長い間神から離れていた。世に広く行きわたっている教育制度においては、人間の哲学が、神の啓示にとって代わっていた。人々は天から与えられた真理の標準を受け入れないで、人間の考え出した標準を受け入れていた。人々は、生命の光であるキリストから離れて、自ら燃やした炎のひらめきの中を歩いていた。

人は神から離れて人間の能力だけをたよるようになったので、彼らの力は弱々しいものに過ぎなくなった。彼らは自分のたてた標準にすら到達することができなかった。眞の美徳の足りないところは、見せかけや口さきで補われ、にせ物が本物にとって代わった。

真理の本源を人々にさし示す教師はときどき出現した。そして、正しい原則を宣言し、生活を通してその原則の力を立証もした。しかしそうした努力も、いつまでも続く感銘を残すことはできなかった。罪惡の流れは一時せき止められたが、下へ流れる勢いをとどめることは不可能であった。改革者たちは暗やみに輝く

光となったが、やみを駆逐することはできなかった。世の人々は、「光よりもやみの方を愛し」たのである。キリストがこの世においでになったときは、人間性がまさにそのどん底に達しようとする一歩手前であった。社会の基礎は侵されていた。生活は虚偽と虚飾に満ちていた。ユダヤ人は神のみ言葉の力を失い、世人に心をまひさせ魂を死なせる伝説と空論をあてていた。「霊とまこと」による神の礼拝は、人間の考え出した、はてしない儀式のくりかえしの中に人間を崇拜することにとりかえられた。世界中のすべての宗教制度は、人の心と魂をとらえる力を失いつつあった。人々は伝説と虚偽に愛想をつかし、思考を紛らすために不信仰と物質主義に走った。彼らは永遠ということを考えに入れないで、ただ現在のためだけに生きた。

人々が神を認めなくなったときに、彼らは人類への関心も失った。眞実、名誉、誠実、信頼、同情心はこの世から影を潜めつつあった。飽くことを知らない貪欲心と残酷な野心は、世界中に不信を生じさせた。責任観念や、強い者は弱い者を助けなければならないという義務や、人間の尊厳や権利についての観念は、夢物語か作り話のように捨てられた。一般の民衆は、牛馬のように酷使され、野心実現のための道具か、踏み石のようにみなされていた。富と権力、安逸と放縦が、最高の幸福として求められた。体力の低下、知能のまひ、靈性の死が、時代の特徴であった。

人々は悪い情熱や意図によって、心の中から神を追いだし、ついには神を忘れはて、ますます大胆に悪いことをするようになった。人は罪を愛する心から、神のご性質を人間なみに解釈し、この考え方はますます罪の力を強めた。人々は好きかってなことをし、神も自分たちと同じようなおかたであると考えようにな

った。すなわち、神は、自己称揚の意図をもち、ご自身の楽しみを満足させるためにいろいろな要求を出し、ご自身の利己的な目的に役立つ人間は登用して、これにじやまになる人間はふりすてるといったようなおかたであるというのである。下層階級の人々は、神は彼らの圧制者たちと少しもかわらず、ただ違っているのは、神が圧制者たちよりも強力であるというふうにしと考えていなかった。あらゆる宗教の形態はこういう観念から出発していた。それは、いずれも、強制と搾取の制度であつた。礼拝者たちは、自分の目的に神の恩恵を確保するために、ささげ物と儀式をもって神のごきげんをとることに努めた。人々の心や良心に何の力もおよぼすことのできないこういう宗教は、ただ形式の連続にすぎなかった。人々は、こういう宗教に飽き、そこに何か利益でも得られない限り、こんな宗教から解放されたいと願つた。こうして、悪事は、とどめるものもないままに、ますます盛んになり、一方、良い事に対する判断と欲求はだんだん薄れてしまった。人々は、神のみかたちを失い、自分を支配している悪魔的な力に心を奪われた。全世界は腐敗の汚物だめになりつつあつた。

このように不和と墮落の成分をもったかたまりの中に、新しいパンだねが投じられるというただ一つの希望が人類にあつた。そこには、人類に新しい生命力がもたらされ、神の知識が世に回復されるはずであつた。キリストは、この知識を回復するためにおいでになった。彼は、神を知っていると公言している人々が、神を誤り伝えているその偽りの教えをとりのぞくためにおいでになった。彼は、神の律法の性格を明らかにし、ご自身の品性の中に聖潔の美しさを表わすためにおいでになった。

キリストは、蓄積された永遠の愛をもって、この世においてになった。彼は、神の律法につけ加えられて、これを煩わしいものにしていたこまかい規則を片づけて、神の律法は愛の律法であり、神の恩恵の表現であることを示された。彼はこの律法の原則に従うことの中に、人類の幸福があり、同時にそれは人類社会の基礎となり骨組みとなって、安定をもたらすものであることを示されたのである。

神の律法は、専横な要求をするどころか、かえってそれは、人類を守るための囲いとして、また楯として与えられているのである。律法の原則をうけ入れる者はだれでも悪から守られる。神に対する忠誠心の中には、人に対する忠誠心が含まれている。このように律法はひとりびとりの人間の権利と個性を擁護する。それは、上位の者の圧迫と下位の者の不服従を防ぐ。律法は、現世のためにも来世のためにも人の幸福を保証する。律法は、これに従う者にとって永遠の生命の保証である。なぜならそれは永遠に保つ原則の表現であるからである。

キリストは、神から与えられた原則が人間の改心にどれほどの力をもっているかを表わすことによって、その価値を実際に示すためになった。彼は、これらの原則を、どのように展開し、どのように適用したらよいかを教えるためになったのである。

キリストの時代の人々にとっては、すべてのものの価値は、外観で決定されていた。宗教の内面的な力が衰えるにしたがって、外面的な虚飾が盛んになった。当時の教育者たちは表面だけをりっぱに飾ることによって人々の尊敬を得ようとした。イエスの一生は、すべてこれらのものと著しい対照を示していた。イエス

の一生は、人々が人生の一大事とみなしているところのことが、どんなに無価値なものであるかを実地に示した。キリストは最も粗末な場所に生まれ、いなかの家庭で、いなかの生活をおくり、職人として働き、人目にたたない生活を送り、世間の名もない勤労者たちと同じ身分になって、しかもそういう事情と環境の中で、神から定められた教育の計画に従われた。小さなことを過大視し、大事なことは軽視していた当時の学校をイエスは望まなかった。イエスの教育は、神のお定めになった源泉から直接に得られた。それは有用な働きと、自然と聖書の勉強と、人生の経験、——すなわち自ら手をさし出し、目を開き、心にさとるすべての者にとって教えに満ちている神の教科書から直接に得られたのであった。

「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった^四」とある。

こうしてキリストは、準備をととのえて任務につかれた。彼は、人々と接触しているあいだ刻々に祝福の感化をあたえ、人の心を変えて新しくする力を及ぼされた。それは、いまだかつて世人の見たことのない経験であった。

人の心を変えて新たにしようと求める者は、まず自ら人間について知らなければならない。人の心は、感情と信仰と愛を通してのみ、動かされ高められるのである。この点において、キリストは大教育者としての資格を備えておられた。地上のあらゆる人間の中で、キリストほど、人の魂を完全に知りつくしていたお方は他になかった。

「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、

すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」^五とある。祭司は教師であったから、大祭司とはすなわち大教育者のことである。

「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」^六ともある。

人類にふりかかるありとあらゆる不幸と誘惑を経験されたのはキリストだけである。この世に生まれた者で、キリストほど激しく誘惑に攻められ、世の罪と苦悩という重荷を負われたおかたは他にない。彼のように広いやさしい同情をもったおかたは他にない。人間としてあらゆる経験をおもちになったキリストは、重荷を負い、試みられ、戦っているひとりびとりを思いやるばかりでなく、これと意思を同じにすることがおできになった。

イエスは、ご自分が人に教えた通りに自ら生活された。彼は、弟子たちにこう仰せになった。「わたしがあなたがたにしたとおり、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。」「わたしがわたしの父のいしめを守ったので」^七このように、キリストのみ言葉は、その生活の中に完全な実例と裏づけをもっていた。もっと重要なことは、イエスの教えはイエスの人格であったということである。イエスのみ言葉は、イエスご自身の人生の経験の表現であつたばかりでなく、イエスご自身の品性の表現であつた。イエスは真理を教えられたばかりでなく、イエスご自身が真理そのものであつた。イエスの教えに力をあたえたものはこれであつた。

キリストは、忠実なけん責者であられた。イエスほど、悪を憎み、彼ほど恐れることなく罪を責めたお方はなかった。すべての不誠実で卑劣なことにとってキリストの存在は、一つのけん責であった。キリストの純潔さに照らされるとき、人は自分がいかに汚れ、おのが人生の目的がいかに卑劣で虚偽なものであるかを認めた。それでもなおキリストは、彼らをひきつけられた。人類を創造されたキリストは、人間の価値を理解することがおできになった。キリストは、ご自分が、祝福し、救おうとしていた人々の敵である悪を責められた。キリストは、たとえどんなに墮落していても、ひとりびとりの人間の中に、神と交わる特権を回復されるべき神の子の姿を認められた。

「神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。」^ハキリストは、苦難と墮落の中にある人類をごらんになって、絶望と滅亡しかみえないところに、なお希望の余地を見いだされた。求める心のあるところに、キリストは向上の可能性を認められた。試みられ、敗北し、感情すら失って、まさに滅びようとしている魂に、キリストは、けん責でなく祝福をもつて接しられた。山上の垂訓の祝福こそは、全人類家族に対するキリストのあいさつであった。キリストは山上の説教を聞きに集まった大群集を見わたして、その間、ご自分が天にいないことを忘れられたかのようであった。そして、彼は光の世の親しいあいさつを用いられた。イエスのくちびるからは、あたかも長い間とじこめられていた泉から水がふき出すように、祝福の言葉がほとばしり出た。

世間にもてはやされている野心的な自己満足の連中には目もくれないで、キリストは、どんなに貧しい者

でも、キリストの光と愛を受けたいと望む者が一番幸福な人間であると宣言なされた。心の貧しい者、悲しむ者、責められる者にむかつて、キリストは、両腕をのばして、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」^九と仰せられた。

ひとりびとりの人間の中に、キリストは無限の可能性をみとめられた。キリストは人類を、ご自分の恩恵によって「われらの主なる神のうるわしさ」^{一〇}に、生まれ変わらせ得る者としてごらんになった。希望をもつて人々をごらんになったキリストは、その希望を人々の心に吹きこまれた。信頼をもつて人々にお接しになったキリストは、人々の心に信頼を吹き込まれた。キリストは、人としての真の理想を自らのうちに表わし、その理想に到達し得るとの希望と信仰を、人々の心にめざめさせられた。キリストの前にあつては、人々からさげすまれ、墮落した魂も自分がやはり人間であることをみとめ、彼らは、キリストの御目にとまる価値のある者でありたいと熱望した。神聖な事がらに対しては、全然無感覚になつてしまつてゐるような心の中にも、新しい感動が芽ばえた。絶望に陥つてゐる多くの人々の目の前には新しい生活の可能性が開かれた。

キリストは、愛と献身のきずなで、人々をご自分の心に結びつけられた。彼はまた、この同じきずなで人類同志を互いに結びつけられた。キリストにとつて、愛は生命であり、生命は奉仕であつた。「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」^{一一}と、イエスは仰せになった。

キリストが、人類のために犠牲になられたのは、十字架の上においてではなかつた。キリストが、「よい働きをしながら……巡回され」^{一二}たとき、日々の経験は、ご自分の生命の発露であつた。こうした生命をさ

さえる道はただ一つしかなかった。イエスは神によりたのみ、神と交わって生きられた。人々が時あり、「いと高き者のもとにある隠れ場……全能者の陰に」^三立ち寄り、しばらくそこに宿るならば、その結果はとうとい行為となつてあらわれるのであるが、まもなく人々の信仰は衰え、神との交わりが妨げられ、一生の働きは挫折する。しかしキリストの一生は、神との絶えざる交わりにささえられた変わることはない信賴の一生であつた。天と地に対するキリストの奉仕は、失敗することも、ぐらつくこともなかった。

キリストはひとりの人間として、神のみ座の前に祈りつづけ、ついにはその人間性に天来の能力が通じ、人性と神性とが結合された。彼は、神より生命を受け、生命を人々にお与えになつた。

「この人の語るように語つた者は、これまでにありませんでした」^四とされている。もしキリストが、物質的な面や知識的な面ばかりを、あるいは理論的また思索的な事からだけを教えたとしても、この言葉通りであつたであらう。キリストは、解決するのに幾世紀もの研究とほねおりを必要とするような神秘的な事からを解明することもできたであらう。キリストは、科学の領域において、世の終わりまで、人々に思考の材料と発明の刺激を与えるようなことを示唆することもできたであらう。しかし、彼はそうされなかった。彼は、好奇心を満足させたり、利己的な野心をそそるようなことは一言も仰せにならなかった。彼は、抽象的な理論でなく、品性の発達に欠くことのできないもの、神を知る能力を大きくするもの、善をなす能力を増すもの、そういった方面のことを取り扱われた。彼は、日常生活の行為に關係のある真理や、人を永遠の事物にむすびつける真理についてお語りになつた。

キリストは、神や神のみ言葉や、みわざに関する人間の学説を研究するようにしおけないで、神のみわざの中に神のみ言葉の中にそして神の摂理の中にあらわされている神に目をそそぐようにお教えになった。彼は、人々の心を、無限な神の心に触れさせた。

「その言葉に権威があつたので、彼らはその教に驚いた」と^{一五}しるされている。これほどの権威をもって語り、人々の思考をめざめさせ、奮発心を起こさせ、知、徳、体のあらゆる能力をよび起こした人はいまだかつてなかった。

キリストの教えは、その同情心と同じように世に行きわたった。どんな生活環境も、どんな人生経験の危機も、キリストの教えの中に道が示され、その原則の中に教訓があたえられている。大教師イエスのみ言葉は、キリストとともに働く者にとって、世の終わりまで、一つの指針となるであろう。

キリストにとっては、現在も未来も、遠いものも近いものも同じであつた。キリストはすべての人の必要を念頭に置かれていた。彼の心眼には、人間の努力と業績、試練と戦い、混迷と危険の、あらゆる光景が展開されていた。彼は、どんな心も、どんな家庭も、どんな喜びも楽しみも願ひも、すべてご存じであつた。

キリストは、すべての人のためにお語りになったばかりでなく、すべての人に向かって話しかけられた。人生の輝かしい朝を迎えたばかりの幼児たちに、熱心でそして何かしないではいられない心をもった若い人たちに、人生の真盛りにあつて、責任と苦勞の重荷を負っている年配の人たちに、疲れ弱っている老人たちに、キリストのみ言葉はすべての人に向かって語られた。それはすべての人に、国と時代を問わず、人類の

ひとりびとりに向かって語られた言葉であった。

キリストの教えの中には、現世の事物と永遠の事物、すなわち目に見える事物と目に見えない事物との関係や、日常生活の間に過ぎ去るできごとと、来世の生活の厳粛な問題が含まれていた。

キリストは、この世の事からその正しい位置、すなわち永遠の利害関係をもっている事からの次に置かれた。しかし、彼はこの世の事からの重要さを軽んじられたのではない。彼は、天と地は共につながりをもっていて、人は、神の真理を知れば知るほど、ますます忠実に日常生活の義務を果たすようになるということとを教えられた。

キリストにとっては、目的のないものは何もなくあった。子供の遊び、おとなのほねおり、人生のよろこびと心配と苦勞——すべては一つの目的に対する手段であった。その目的とは、人間を高めるために、神を啓示することであった。

キリストのくちびるを通して語られる神のみ言葉は、新しい力と新しい意味をもって、人々の心にふかくくいこんだ。キリストの教えによって、創造のわざは、新しい光に照らされた。自然界の面には、罪のために失われていた光の輝きが、もう一度宿った。人生のあらゆる現実と経験を通して、神の教訓があたえられ、神と交わる可能性が示された。神は、もう一度この世に住まわれた。人の心は、神のご臨在を意識し、この世は神の愛につつまれた。天は人のもとにくだった。人々の心は、永遠についての知識を人類に示された神を、キリストの中にみとめた。彼こそは、「インマヌエル、神われらと共にいます」おかたであった。

すべての真の教育事業の中心は、神からつかわされた大教師イエスの中にある。千八百年前にイエスが自ら築きあげられた働きについてと同様に、今日の教育の働きについて、救い主はこう仰せになっている。「わたしは初めてであり、終りであり、また、いきている者である。」^{一六}「わたしは、アルパでありオメガである」と。

このような大教師イエスと、天来の教育の機会を前にしながら、イエスから離れた教育を求めることは——すなわち、知恵である神を離れて賢くなろうとしたり、真理を拒みながら真実であろうとしたり、光の源であるおかたからはなれて、照明をもとめたり、生命である神をはなれて生存しようとしたり、生ける水の泉であるおかたからはなれて、水のたまらないこわれたおけを作ろうとしてみたり——すべてこうしたことは、愚かというよりもっと悪いことである。

見よ、彼は、今もなお招いておいでになる。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう。」「わたしと与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」^{一七}と。

索引

- | | | | |
|---|---------------|----|----------------------|
| 一 | ヘブル人への手紙二ノ二 | 六 | ヘブル人への手紙二ノ一八 |
| 二 | イザヤ書九ノ六 | 七 | ヨハネによる福音書一三ノ一五 一五ノ一〇 |
| 三 | ヨハネによる福音書三ノ一九 | 八 | ヨハネによる福音書三ノ一七 |
| 四 | ルカによる福音書二ノ四〇 | 九 | マタイによる福音書一ノ二八 |
| 五 | ヘブル人への手紙四ノ一五 | 一〇 | 詩篇九〇ノ一七・英語欽定訳 |

一 マタイによる福音書一〇ノ八
 一二 使徒行伝一〇ノ三八
 一三 詩篇九一ノ一
 一四 ヨハネによる福音書七ノ四六

一五 ルカによる福音書四ノ三二
 一六 黙示録一ノ一七、一八 二一ノ六
 一七 ヨハネによる福音書七ノ三七、三八
 四ノ一四

キリストの教育法

「世から選んでわたしに賜わった人々に、み名をあらわしました。」

教育者としてのキリストの方法について最も完全な実例は、最初の十二人の弟子たちの教育の中にみられる。この人たちには、重い責任が負わされることになっていた。彼らは、キリストの霊を吹き込まれる者として、またキリストが地上の働きを残さなければならなくなったときに、これを継続してゆくために必要な準備を受け得る者として、キリストから選ばれたのだった。キリストは何にもまして、ご自分と直接に交わらせるという有利な立場を彼らにお与えになった。この個人的な交わりを通して、キリストは、これらの選ばれた共労者たちに、ご自身を印象づけられた。キリストに愛された弟子ヨハネは、「このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし」^二と言っている。

こういう交わり、すなわち、心と心、思いと思い、人と神とのこうした交わりを通してのみ、生命を与える力が伝えられるのである。この生命をあたえる力をさずけることが、真の教育の仕事でなければならない。生命は生命によってのみ生まれるのである。

救い主は、弟子たちを教育するのに、天地が創造された時に確立された教育制度に従われたのであった。

イエスの家族は、最初にえられた十二人の弟子たちと、なおその他、彼らの必要に奉仕するために時々彼らとの関係を持っていた少数の人々から成り立っていた。彼らは、家にいるときにも、食事のときにも、私室でも、畑でも、いつもキリストといっしょであった。彼らは、キリストに同伴して旅をし、試練と艱難を分かちあい、できるだけの能力でキリストの働きにたずさわった。

キリストは、ある時は山腹にすわって、ある時は湖畔で、ある時は漁師の舟の中から、ある時は道を歩きながら、弟子たちに教えられた。キリストが群集に話をされるときには、弟子たちは内側に円陣をつくった。彼らは、イエスの教えを一言もききのがすまいとして、イエスのまわりにおし合った。彼らは、あらゆる国のあらゆる時代の人々に教えなければならない真理を悟ろうとして、注意深く熱心に耳を傾けた。

イエスの最初の生徒は、一般の人々の間から選ばれた。彼らは、貧しい無学なガリラヤの漁師であった。彼らはラビの学問や習慣についての教育は受けていなかったが、艱難辛苦というきびしい訓練によって鍛えられていた。彼らは、生まれつきの才能と、すなおな精神を持っていて、救い主の働きのために教えこまれ、育てあげられる人たちであった。世の中には、自分のかくれた能力を自覚しないで、平凡な職業のうちに日々の仕事をこつこつと続けている勤労者が多い。彼らの中には、そのかくれた能力がよびさまされて、行動にあらわれるとき、世の偉大な指導者となり得る人もいるのである。救い主が、共労者として召されたのは、こういう種類の人たちであった。しかも、彼らは、世の知るかぎり最も偉大な教育者によって、三年間教育されるという特権に恵まれたのであった。

これらの最初の弟子たちには、著しい差異がみられた。彼らは、世人の教師となるはずであった。彼らは多方面に異なった性格の型を表わしていた。弟子たちの中には、それまで税吏として社会的に活動し、ローマへの屈従の生活をしていた中から召し出されたレビ人マタイ、ローマ帝国の権威に抗して屈しない熱心党のシモン、情に激しやすく自負心が強く、しかも暖かい心をもったペテロ、その兄弟アンデレ、教養と才能をもちながら、半面には卑劣な心の持ち主であったイスカリオテのユダ、忠実で熱心でありながら、信ずる心のおそいピリポとトマス、同信の兄弟たちの中ではあまり目立った存在ではなかったが、その欠点も美德もはつきりしていた力の人アルパヨの子ヤコブとタダイ、子供のような純真さと信頼心をもったナタナエル、大きな望みと愛情の心をもったゼバダイの子たち、といったような人々がいた。

これらの弟子たちは、生まれつきの性格や、訓練や生活の習慣がそれぞれ非常に異なっていたので、その召された働きを首尾よく進展させるためには、感情においても思想においても行動においても、互いに一致しなければならなかった。この一致を確保することが、キリストの御目的であった。この目的のために、キリストは、彼らをご自分に一致させようと努められた。キリストの働きの重荷は、父なる神に祈られたみ言葉の中によく表現されている。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにあられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。…また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります。」^三

十二人の弟子たちの中で、四人の者が、それぞれ独自の立場で、主要な役割を演ずることになった。すべ

てのことを予知なさるキリストは、これに備えて、弟子たちを教育された。剣にかかって早急な死をとげなければならぬ運命が待っていたヤコブ、兄弟たちの中で最も長い間主に従って働き、迫害を受けたヨハネ、長年の障害を打破して、異教の世界にキリストの教えを説く先駆者となったペテロ、同信の兄弟たちよりもりっぱな奉仕が可能でありながら、自分でも思いがけない方向へ発展していった意図を心の中に隠していたユダ——この四人は、キリストの特別な関心の的であり、キリストから何回となく注意深い教えを受けた人たちであつた。

ペテロとヤコブとヨハネは、あらゆる機会をとらえては、できるだけ主イエスのみそば近くにしようとしたが、彼らのこの願いはゆるされた。十二人の弟子たちの中で、この三人はキリストとの関係が最も密接であつた。ヨハネは、だれよりも自分が最もキリストと親密であればそれで満足であつたが、彼はこの親密さを自分のものとすることができた。ヨルダン川のほとりで、初めてキリストの教えをうけたとき、アンデレは、イエスのみ言葉をきくとすぐ兄弟を呼びに走つたが、ヨハネは、黙つてすわりこんだままキリストの不思議な話題を夢中になつて考え続けていた。ヨハネは、救い主に従つて、いつも熱心に、余念なく、そのみ言葉にきき入つた。しかし、ヨハネでも決して品性に欠点がなかったわけではない。彼は、決して柔和で夢の多い熱心家ではなかつた。ヨハネとその兄弟ヤコブは「雷の子」^四とよばれた。ヨハネは、自負心が強く、野心的で、闘争的であつた。しかし天来の教師イエスは、ヨハネの奥底に、熱烈で、純真な、愛の心があるのをみとめられた。イエスは、ヨハネの利己主義を責め、野心をくじき、信仰をためされた。そのかわりキ

リストは、彼の魂があがれ求めていたところのもの、すなわち、聖潔の美しさと、人の心を変化させるキリストの御愛を、彼のうちに表わされた。キリストは父なる神に、「わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜わった人々に、み名をあらわしました」^五と仰せになった。

ヨハネは、愛や同情や交友にあこがれる性質を持っていた。彼は、イエスのそば近くにおし進み、そのかたわらにすわり、イエスの胸にもたれかかった。花が太陽と露をもとめるように、彼は天来の光と生命を吸いこんだ。愛と崇敬の念をもって救い主を仰ぎ見ているうちに、キリストのみかたちに似ることとキリストと親しく交わることとが、彼の唯一の願いとなり、彼の品性には主イエスのご品性が反映した。彼はこう言っている。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする。」^六

弟子たちの経歴の中で、ペテロの経歴ほど、キリストの教育法をよく例示しているものはない。大胆で、けんか好きで、自信が強く、敏感で、行動的で、ふくしゅうも早いと同時に人を許すことにも寛大であると

いったようなペテロは、しばしば過失をくりかえし、その度にけん責を受けた。しかしまたキリストに対する彼の真心からの忠誠と献身は、同じようにはつきりと認められ、そして賞賛された。救い主は正しい愛をもって、忍耐強くこのせつかちな弟子を取り扱い、彼の自信をとり除き、けんそんと従順と信頼を教えようと努力された。

しかし、彼が学んだのはこうした教訓の一部分にすぎなかった。自信の念は根絶できなかった。心に深く重荷を感じながら、イエスは、幾度となく弟子たちの目をひらいて、ご自分の試練と苦難を見せようとつとめられた。しかし、彼らの目は、開かれなかった。それを知ることが進まなかった。そこで彼らは見ようとしなかった。わが身かわいさにキリストの苦難に共にあずかることをちゅうちょしたペテロは、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございません^七」^七といさめた。彼の言葉は十二人の弟子たちの思いと感情を代表していた。

こうして彼らは、危機が身近に迫りつつあったとき、キリストが十字架につかれるなどとは夢にも思わず、ひたすら王国の栄位が自分に与えられるのを期待して、自負心と競争心の中に日をすごしていた。

ペテロの経験は弟子たちの全部にとって教訓となった。自己にたよる者にとっては、試練は敗北である。キリストは、放棄されていない罪の引き起こす結果を阻止なさることはできないのである。しかし、ペテロが危うく波にさらわれそうになったときにキリストの救いのみ手がさしのべられたように、キリストの愛は、深い海にのまれかけている魂を救うために注がれる。幾度となく破滅のふちに臨んだペテロは、ごうまんな

言葉を出すたびに、いよいよ破滅のきわまで近づいて行つた。「あなたは……わたしを知らないと言うだろう」^ハとの警告が幾度もくりかえされた。ペテロの悲しい、主を愛する心は「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」^九という誓いの言葉となつた。人の心をお読みになるイエスが、ペテロに仰せになつた言葉は、そのときは真価がわからなかったが、まもなく急速に襲いかかつてきた暗黒の中にあつて希望の光を放つた。「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願つて許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈つた。それであなたが立ち直つたときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」^{一〇}。

カヤパの邸宅の庭で、主を拒否したペテロが、救い主の愛とあわれみと悲しみに満ちたまなざしに、愛と忠誠心を目ざめさせられ、キリストの涙を流して祈られた園に走って行つて、キリストの苦悶の血のしたたりにぬれた土に後悔の涙を注いだとき、——「わたしは……あなたのために祈つた。それで、あなたが立ち直つたときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」^{一〇}との救い主のみ言葉は、ペテロの魂をささえた。キリストは、ペテロの罪を、前もつてご存じであつたが、彼を絶望のうちに、うち捨てておかれなかつたのである。ペテロにそそがれたイエスのまなざしに、あわれみではなくてけん責があつたとしたら、そしてまたイエスがペテロの罪を前もつて告げられたとき、希望の言葉を告げておかれなかつたなら、ペテロはどんなに暗い気持ちに襲われたことであろう。後悔に苦しめられる魂の絶望は、どんなに致命的であつたろう。苦悩と自己嫌惡に陥り、ユダと同じ道に踏みこみそうになつたペテロの足をひきとめることができたのは何であつ

たろうか。

キリストは、ペテロを苦悶に会わせないようににはできなかったが、しかし、ペテロをひとり苦しみの中に捨てては置かれなかった。キリストの愛は、人を失望させることも見捨てることもない愛である。

人は自ら罪の身であるにもかかわらず、他人の試練や過失に対しては、不親切な態度をとりがちである。われわれは、人の心を読むことも、他人の心の戦いや苦しみを知ることできない。愛のけん責、傷つけてもいやす打撃、希望を語る警告というものを、われわれは学ばなければならない。

カヤパの邸宅で、イエスにつきそっていたのも、イエスの十字架のそばに立っていたのも、また十二人の弟子の中で、いちばんさきにイエスの墓に駆けつけたのも、みなヨハネであった。しかし、キリストがよみがえられて最初に弟子たちに仰せになったみ言葉の中に名前をあげられているのは、このヨハネではなくて、ペテロであった。天使は、『弟子たちとペテロとの所へ行つて、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであらう』^{二一}と告げた。

キリストが、最後にガリラヤの海で弟子たちに現われたとき、ペテロは、「わたしを愛するか」^{二二}との質問を三度うけて試みられたのち、元通りに十二弟子のひとりとなり、なすべき働きが命じられた。それは、主の羊を牧することであった。最後の個人的なご命令として、イエスは、「わたしに従ってきなさい」^{二三}とペテロに命じられた。

いま、ペテロは、そのみ言葉の真意を知ることができた。キリストが、弟子たちのまん中に、幼子を置い

て、みなこの幼子のようにならなければならないと仰せになったそのときの教訓を、彼はいまこそいっそうよく理解することができた。自分自身の弱さと、キリストの力をいっそう深く悟ったペテロは、キリストによりすがり、キリストに従う用意ができた。キリストの力によって、彼は主に従うことができたのであった。こうしてかつては十字架の認識が足りなかったペテロが、労苦と犠牲の経験の終わりに至って、福音のために生命をささげることを喜びとみなし、かつては主を拒んだ自分が、主と同じ死に方をするを、身に余る大いなる光栄と思うようになった。

ペテロの生まれ変わった一生は、神の愛の奇跡であつた。それは、大教師イエスの足跡に従おうとするすべての人にとって、一生の教訓である。

イエスは弟子たちをしかり、戒め、注意をお与えになった。それでもペテロやヨハネや彼らの兄弟たちは、イエスから離れなかった。彼らは、どんなにしかられても、イエスと共にいることを選んだ。イエスもまた、弟子たちが過失を犯したからといって彼らを見捨てるようなことをなさらなかった。イエスは、人々を、すべての欠点や弱さを持ったまま受け入れ、彼らが、喜んでキリストのしつけと教えを受けるなら、ご自分の奉仕のために彼らを教育されるのである。

しかしここに、イエスから一言も直接にしかられなかった弟子がひとりあつた。

ユダによって弟子たちの間に反抗的な要素がもちこまれた。ユダはイエスとの交渉をもつようになって

から、イエスのご品性と生活に心をひかれていた。彼は、生まれ変わった者になりたいと心から願い、またイエスとのつながりを通して、そうした経験をもちたいと望んでいた。しかしこの願いは、彼の心の全部を占領するまでには至らなかった。彼の心を支配していたものは、キリストがこの世の王国を建設されたとき、その恩恵にあずかろうという利己的な希望であつた。ユダは、キリストの愛という天来の力をみとめながら、しかもその主権に屈服しなかつた。彼は心の中に自分の判断と意見を、また人を批評し、非難する傾向を持ち続けた。

彼には到底理解できないようなキリストの動機や行動は、彼の疑惑と反抗の念をかきたてた。そして、彼の疑惑や野心は、知らず知らずのうちに他の弟子たちに伝染していった。弟子たちが権力争いをしたり、キリストの方法に不満を持ったりするようになった原因の大部分は、ユダにあつた。

イエスは、反対は心をかたくなにするばかりであることをご存じであつたので、ユダと直接に衝突することを避けられた。キリストはご自身の犠牲的な愛との接触を通して、ユダの狭量で利己的な生活を直そうと努められた。キリストは、ご自分の教えの中にユダの自己中心的な野心を根底からくつがえすような原則をお示しになった。教訓は幾度くりかえされた。そしてユダは、そこに自分の性格が描かれ、自分の罪が指摘されていることを幾度も認めた。しかし彼は屈服しようとしなかつた。恵みの訴えを拒みつづけるとき、ついには悪の衝動が勢力をふるうようになる。言外にふくめられたけん責を怒り、野心的な夢に破れて自暴自棄になったユダは、自分の魂を貪欲という悪魔に売り渡し、主を裏切る決心をした。キリストと共にある

喜びや永遠の希望という光にそびいて、彼は過越節のへやから、希望のない外の暗がりへ、悪の働きをなすために出て行った。

「イエスは、初めから、だれが信じないか、また、だれが彼を裏切るかを知っておられたのである」^{二三}とある。すべてを知りながら、しかもなおイエスは、恵みの訴えや愛の賜物を惜しまなかったのである。

ユダの危険を知らなかったイエスは、彼をご自分のそばに近づけ、ご自分が選びそして信頼している弟子たちの仲間にお入れになった。来る日も来る日も、ご自分の心に重荷が重くのしかかっているときに、キリストは、この強情で疑い深く何事かたくらんでいる男と朝から晩まで顔をつきあわせていなければならぬ苦痛を忍ばれた。たえまないひそかな陰険な反抗心を弟子たちの間からなくすために、キリストは証拠を示してほねおられた。すべてこうしたことは、危険に瀕した魂を救い得る力として欠くことのできないものである。

「愛は大水も消すことができない、洪水もおぼれさせることができない。…愛は死のように強^四い。

ユダに関するかぎり、キリストの愛の働きは、益するところがなかった。しかし、他の弟子たちにとっては無益ではなかった。彼らにとって、それは一生の影響力を持った教訓であった。その愛と忍耐の模範は、彼らが試練と過失の中にある人々に対したときに取るべき態度をいつも教えていた。それはまた他の教訓も含んでいた。十二弟子が任命されるときに、弟子たちは、ユダがその中のひとりに加えられるように熱望し

た。そうして、彼らはユダの加入を使徒たちの団体にとって非常に有望なできごととして考えていた。ユダは彼らよりも世間との交際が広く、人との応対がじょうずで、目さきがきいて、実行力に富んだ男であった。彼は自分自身の資格というものを高く評価していたので、他の弟子たちも彼に対して同じ尊敬の念をいだいていた。しかし、ユダがキリストの働きの中にとり入れようと望んだ方法は、世俗的な原則を根底とし、世俗的な政策に支配されていた。彼らは世の中にみとめられて名誉を得ること、すなわちこの世の王国を手に入れることを期待していた。ユダの人生におけるこうした欲望のあらわれは、弟子たちが、ユダの自大主義と、キリストのけんそん和自己犠牲の主義すなわち霊的王国の原則とは、両立しないものであることを理解する上に役立った。彼らは、ユダの運命の中に、自己中心の生活がたどりつく結末をみたのであった。

これらの弟子たちのためにキリストの使命は、ついその目的を達した。少しずつではあったが、キリストの模範と自己犠牲の教訓は、弟子たちの品性を形づくった。キリストの死は、世の中の偉い者になりたいという彼らの希望をうちくだいてしまった。ペテロのつまずきや、ユダの背信や、苦悩と危機の中にキリストをふりすてた彼らの失敗などは、彼らの自己満足の思いを払い去った。彼らは、自分自身の弱さというものを知った。彼らは自分たちにまかされた働きの偉大さを幾分かみとめ、一步一步に主のみちびきの必要を感じた。

彼らは、キリストがこれからはもう自分たちの間においてにならないことを知って、神からつかわれたおかたとともに歩み、ともに語ることをゆるされていた機会が、どんなに貴重なものであったかを、かつて

なかったほど痛切に感じた。キリストの教訓の中には、それが語られた当座は、その真意を理解することができないものが多かった。しかしいま、弟子たちは、それらの教訓を思い出し、もう一度み言葉をききたいと熱望した。いまこそ、キリストの御約束は言いしれない喜びとともに、彼らの心中によりみがえって来るのであった。――

「わたしが行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが行っていかなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。」「わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。」「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」「^{一五}父がお持ちになっているものはみな、わたしのものである。」「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。……御霊は……わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである。」「^{一六}

弟子たちは、キリストが、オリブ山上で自分たちの間から天に上られるのを見た。天がキリストをうけ入れたとき、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」というキリストの別れのみ約束がきこえてきた。^{一七}

彼らはキリストが、いまなお自分たちの上に、み心を注いでおられることを知った。彼らは、神のみ座のかたわらには、自分たちの代表者であり仲保者であるキリストがおいでになることを知った。彼らは「あ

なたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう」^{一八}とのキリストの御約束にすぎり、イエスのみ名によって、祈願をささげた。

「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」^{一九}との大いなる証拠をもって、彼らは、いよいよ高く信仰の手をのばした。

天の宮廷に上げられたキリストは、約束をかたく守って、地上の信者たちに、ご自身の満ち足れる徳をわけ与えられた。弟子たちの上に聖霊がそそがれたことによって、キリストが神の右にみ座を占められたことが確認された。

キリストの働きによってこれらの弟子たちは聖霊の必要を感じさせられていた。彼らは、聖霊の教えのもとに、最後の準備を終わって、一生の働きを開始した。もはや彼らは無知でも無教養でもなかった。もはや彼らは互いにばらばらな個人の集合体でもなければ、調和しないで矛盾する要素のよせ集めでもなかった。

彼らの希望はもはや世俗的な偉大さの上にはなかった。彼らは、「心を合わせ、一つ思いになつ」^{二〇}た。キリストは、彼らの思いを満たされた。彼らの目ざすところは、キリストの王国の発展にあった。その思いと品

性において、彼らは主イエスに似た者となり、人々は、彼らが「イエスと共にいた者であることを認」^{二一}めた。

そのとき、キリストの栄光はかつて人間が見たことがないまでに表わされた。これまで、キリストのみ名をのしり、キリストの能力をあざけていた多くの人々が、十字架のキリストの弟子となることを告白した。キリストがお選びになった身分のいやしい人々の働きは、神の霊の協力を通して、世界をゆり動かした。

一世紀の間に福音は天下のすべての国々に伝えられた。

キリストは、ご自分の代わりに教師として、最初の共労者たちに送られたのと同じ霊を、今日もなお、キリストの共労者たちの教師として任命しておられるのである。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」とキリストは約束しておられる。

今日、教育の働きにこの同じ指導者である霊が臨在するならば、昔と同じ結果が生まれるであろう。これこそ、真の教育が到達すべき目標であり、これこそ神が成就しようと意図されている働きである。

索引

一	ヨハネによる福音書一七ノ六	一〇	ルカによる福音書二二ノ三一、三二
二	ヨハネの第一の手紙一ノ二	一一	マルコによる福音書一六ノ七
三	ヨハネによる福音書一七ノ二一―二三	一二	ヨハネによる福音書二一ノ一七、二二
四	マルコによる福音書三ノ一七	一三	ヨハネによる福音書六ノ六四
五	ヨハネによる福音書一七ノ六	一四	雅歌八ノ七、六
六	ヨハネの第一の手紙三ノ一―三	一五	ヨハネによる福音書一六ノ七、一五ノ一五
七	マタイによる福音書一六ノ二二	一六	ヨハネによる福音書一六ノ一五、一三、一四
八	ルカによる福音書二二ノ三四	一七	マタイによる福音書二八ノ二〇
九	ルカによる福音書二二ノ三三		

一八 ヨハネによる福音書一六ノ二三
一九 ローマ人への手紙八ノ三四
二〇 ピリピ人への手紙二ノ二

二一 使徒行伝四ノ一三
二二 マタイによる福音書二八ノ二〇

四 自然の教え

「あなたは知っているか……知識の全き者のくすしきみわざを」

ヨブ記三七ノ一六

自然界の神

「その栄光は天をおおい」「地はあなたの造られたもので満ちている」。

すべての被造物には神の印がみられる。自然は神についてあかししている。感じやすい心をもった人ならだれでも、宇宙の驚異と神秘をまのあたりに見るとき、無限の力の働きを認めないではいられない。地が豊かな産物を生じ、年々に太陽の周囲を運行しつづけるのは、地球の固有のエネルギーによるのではない。惑星は人の目に見えない手に導かれて天の軌道をめぐる。神秘的な生命は自然のあらゆるものにゆきわたっている。それは、無限大の空間に無数の世界を保ち、夏のさわやかな風に浮かぶ小さな昆虫を生かし、飛びかうつばめを羽ばたかせ、鳴くからすのひなにえさをあたえ、つぼみを花とひらかせ、花に実をむすばせる生命である。

自然をささえている同じ能力が人の中にも働いている。星や微生物をみちびくのと同じ大いなる法則が人の生命を支配している。体内の生命の流れを調節する心臓の働きを支配する法則は、魂の裁判権をお持ちになる偉大な英知の神の法則である。いっさいの生命は神から出ている。生命の真の活動範囲は、神との調和の中にのみ見いだされる。神によって造られたすべてのものにとって、条件は同一である。すなわち生命は

神の生命をうけることによって維持され、創造主のみこころとの調和の中に生命の営みがなされるのである。知的に靈的に、あるいは肉体的に神の法則を犯すことは、自分自身を宇宙の調和の外におくことであり、不和と無秩序と破滅をもたらすことである。

自然の教えをこのように解釈することを学ぶ者には、あらゆる自然が光を放ち、世界は教科書、人生は学校となる。人と自然と神との調和、宇宙を支配している法則、罪の結果、——こういうことは必ず人の心に印象を与え、品性を形造らないではおかぬ。

子供らはこうした教訓を学ばなければならない。まだ本を読むことも教室の勉強もできない幼い子供たちにとって、自然は尽きることのない教えと喜びの泉である。悪との接触によってかたくなになった心を持っていない子供たちは、あらゆる被造物の中に遍在する神をたちまち見つける。世の騒音に耳をふさがれていない子供たちは、自然界の言葉を通して語られる神のみ声をききわけける。無言のうちに永遠な靈的事物を心に思い出させるものがたえず必要なおとなたちにとっても、自然の教えは、やはり歓喜と教訓の泉である。エデンの父祖たちが自然の書物から学び、モーセがアラビヤの平原と山々に神の筆跡をみとめ、イエスがナザレの丘に少年時代をすごされたように、今日の子供たちも、神について学ぶことができる。目に見えないものは、目に見えるものによって明らかにされている。そびえ立つ森の木から岩についているこけにいたるまで、あるいはまた果てしない大洋から、波うちぎわのごく小さな貝がらにいたるまで、地上のあらゆるものの上に、神のみかたちと上書きをみることができる。

できるだけ、子どもたちを、幼い時から、自然というこのすばらしい教科書が目の前に開かれているところに置かなければならない。子供たちは、大芸術家である神によって天という移り変わるカンバスに描かれたすばらしい景色をながめ、地と海の驚異について知り、季節の変化に示される神秘をみまもる。こうして神のすべてのみわざを通して、創造主について学ぶべきである。

真の教育の基礎を、これほど堅固にそして確実に築くことは、他の方法ではできない。しかしたとえ子供でも、自然と接触するときに、そこに当惑の原因を見いだすであろう。彼は、そこに相反する勢力が働いていることをみとめないではいられない。この点において自然は解説者を必要とする。自然界にまであらわされている悪の姿をみてわれわれはみな同じように、「それは敵のしわざだ^三」という不幸な教訓を学ぶのである。カルバリーに輝く光によってのみ、自然の教えは、正しく読まれる。ベツレヘムと十字架の物語を通して悪を征服することがどんなにたいせつであるか、またわれわれに与えられるあらゆる祝福は贖罪の賜物であるということを明らかにしなければならぬ。

いばらやあざみや毒麦の中には、害し傷つける悪の力が表わされている。歌う小鳥に、咲く花に、雨に、日光に、夏の微風に、やさしい露に、森のかしの木からその根元に咲くすみれにいたるまで、自然界の幾万ともしれない事物の中には、愛のいやしがみられる。こうして自然は今もなお神の恩恵を告げている。

「主は言われる、わたしがあなたがたに対していだいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとする

ものである」^四とある。これこそ、十字架の光によって、自然のあらゆる面に読まれる言葉である。天は神の栄光を告げ、地は神の富に満ちている。

索引

- 一 ハバクク書三ノ三
- 二 詩篇一〇四ノ二四
- 三 マタイによる福音書一三ノ二八
- 四 エレミヤ書二九ノ一

生命の教訓

「地の草や木に問うてみよ、彼らはあなたに教える。」

大教師イエスは、聴衆を自然の事物に接触させて、あらゆる被造物の中に語られている声をきかせ、そうして彼らがやさしい感情とすなおな心をもったときに、目の前にながめている自然の風物から霊的な教えを解釈させられた。キリストが、真理についての教訓を教えるのに好んで用いられたたとえ話は、キリストのみ心がいかに自然の影響に向かって開かれていたか、またキリストがいかに日常生活の環境から霊的な教えを集めることを楽しんでおられたかということを物語っている。

空の小鳥、野のゆり、種と種をまく人、牧羊者と羊、——こうしたものを用いて、キリストは不滅の真理を説明された。彼はまた日々の生活に起こるできごと、すなわち、聴衆が見聞きしている実際の経験——パンだね、かくれた宝、真珠、魚とりの網、失われた銀貨、放蕩むすこ、岩の上と砂の上にたてられた家などといったようなものから例話をひかれた。キリストの教訓の中には、ひとりびとりの心に興味を起こさせ、ひとりびとりの感情に訴える何ものがあった。このようにして、日々の仕事は、高い理想の失われた単なるほねおりのくりかえしとならないで、たえず目に見えない霊的なものを心に思い出すことによって、明る

くそして向上したものとなった。

われわれもこのように教えなくてはならない。自然の中に神の愛と知恵のあらわれを見、鳥や花や木にむすびつけて神を思い、目に見えるすべてのものが、目に見えないものの解説者となり、日々の生活のできごとを通して神の教えを知ることを、子供たちに教えなければならない。

このようにして、あらゆる被造物とあらゆる生活経験から教訓を学ぶとき、自然の事物と生活のできごとを支配している同じ法則によって、われわれもまた支配されなければならないということ、しかもそれらの法則は、われわれの幸福のために与えられているのであって、この法則に従うときにのみ、われわれは眞の幸福と成功を見いだすことができるということを示さなければならない。

天と地のいっさいのものは、生命の大法則は奉仕の法則であることを告げている。限りなき父なる神は、すべての生物の生命に奉仕されている。キリストは、「仕うる者」^二として、この世においでになった。天使たちは、「すべて仕える霊であつて、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたもの」^三である。この同じ奉仕の法則が、自然界の万物に書きしるされている。空の小鳥、野の獣、森の木々、葉、草、花、空の太陽、きらめく星、——すべてがそれぞれに奉仕している。大洋も湖も、川も泉も、みな与えるために受けるのである。

自然の事物の一つ一つが、このように、宇宙の生命に奉仕するとき、それはまた自分自身の生命を確保す

る。「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう」という言葉は、聖書のページにしろされているのと同じように明らかに自然界にもしるされた教訓である。丘や平野が、水路を開いて、山川の流れを海にそそがせるとき、それらの与えるものは、百倍になってかえって来る。歌をつたいながら流れる川は、美しい緑と豊かな実りの贈り物を残して行く。夏の太陽の下に褐色の地はだをひき出した山野に緑の帯が川筋を示し、美しい木や花やつぼみの一つ一つは、神の恩恵を世に伝える者にあたえられる報酬をあかししている。

成長の過程の変化の中には、ほとんど数えつくすことのできないほど多くの教訓が含まれているが、その中の最もとうとい幾つかの教訓が、種の生長についての救い主のたとえ話の中に含まれている。それは年をとった者にも若い者にも教訓をあたえている。

「神の国は、ある人が地に種をまくようなものである。夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。」^五

種そのものの中には、発芽の力、すなわち神ご自身が植えつけられた法則がそなわっている。しかし、もしそのままに放っておけば、種は、芽を出す力を持たない。穀物の生長を促す上に人のしなければならぬところがあるが、しかしある限界を越えては人間は何一つすることはできない。そこは、ご自身の全能の力をもって、種まきと収穫にくすしいつながりを持たれる神にたよらなければならない。

種の中には生命があり、土の中には能力がある。しかし、そこに無限の能力が夜も昼も働くのでなければ、種は収穫物を生ずることができない。かわいた畑が雨によって生氣づけられ、太陽によって熱をあたらえられ、また地中の種に電気が通じなくてはならない。創造主によって植えつけられた生命は創造主によってのみ呼び起こされる。種が生長し、植物が発育するのは、すべて神の力によるのである。

「種は神の言である。」^六「地が芽をいだし、園がまいたものを生やすように、主なる神は義と誉とを、もろもろの国の前に、生やされる。」^七自然界と同じように、霊的な種まきにおいても、生命をつくり出すことのできる能力はただ神にだけある。

種まきの働きは、一種の信仰の働きである。種をまく人は、その種が発芽し生長する神秘的な力を理解することはできないが、しかし神の働きによって作物が繁茂することを確信している。彼は、それが豊かな収穫として幾倍にもなって集められることを期待して種をまくのである。このように、親や教師は、いままいている種に収穫を期待して働かなければならない。

よい種でも、一時は、心の中に根をおろした様子もなく、人目につかないままになっているかもしれない。しかし、しばらくたって神の霊が魂に息をふきかけられるとき、隠れていた種は芽を出し、ついには実を結ぶのである。われわれの人生の働きにおいて栄えるのは、これかあれかわからない。それは、われわれ人間のきめるべき問題ではない。「朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない」^八である。神の大いなる契約には「地のある限り、種まきの時も、刈入れの時も、…やむことはないであろう」^九と宣言されている。

この約束を信頼して、農夫は土地を耕し、種をまくのである。われわれも、同じような信頼をもって霊的な種まきに努力し、神の御約束により頼まなければならない。「このように、わが口から出る言葉も、おなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事を果す。」^{一〇}「種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう。」^{一一}

種の発芽は、霊的な生命の始まりをあらわし、植物の生長は、品性の向上にたとえられる。生命のあるところには必ず生長がある。植物は、生長するか、それとも死ぬかのどちらかである。植物の生長と同様に、品性の成長も無言のうちに人目につかず、しかも絶えまなくつつけられる。われわれの生命は、成長の一段階ごとに完全であることができる。しかしわれわれに対する神の御目的が成就されてもなおそこには絶えまない成長がある。

植物は、神が、その生命をささえるために備えられたものを受けることによって生長する。そのように霊的な成長は、神の力と協力することによって達せられる。植物が土に根をおろすように、われわれは、キリストに根をおろさなければならない。植物が、日光や露や雨をうけるように、われわれは、聖霊をうけなければならぬ。われわれがいつも心にキリストを思いつつけているならば、聖霊は「雨のように先の雨と後の雨の地にのぞむように」^{一二}われわれに臨まれるのである。キリストは、義の太陽として、「翼には、いやす力を備え」^{一三}てわれらの上に上られるのである。われわれは、「ゆりのように花咲き」「園のように栄え、ぶどうの木のように花咲き」^{一四}とある。

麦が育つには、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」^{二五}とある。農夫が、種をまき作物を育てる目的は、穀物を生産するためで、それは飢えた者のパンとなり、つぎの収穫のための種となる。同じように、天来の農夫であるイエスも収穫を期待なさるのである。キリストはご自分に従う者の心と生活の中に、ご自身を再生させようとしておられる。それは、彼らを通して他の人々の心と生活の中にキリストが再生されるためである。

植物が、種から徐々に発育してゆくことは、子供の教育にとって実物教訓となる。「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」^{二五}とある。このたとえをお語りになったキリストは、小さな種をつくり、これに生命力をあたえ、その生長を支配する法則を定められた。キリストはこのたとえの中に教えられている真理をご自身の生活に実現された。天の大君、栄光の王なるキリストは、ベツレヘムに生まれ、しばらくの間は、母親に世話される無力な赤ん坊のひとりとなられた。イエスは、子供のころは子供のように話し、また行動され、また両親を敬い、両親の希望を実行して彼らを助けられた。しかし知性が目ざめてからは、恩恵と真理の知識の中に成長をつづけられた。

親や教師は、少年少女たちが人生の各段階において、庭の植物が自然に花を開いて、その時期にふさわしい美しさをあらわすように、彼らの傾向を指導するように心がけるべきである。

子供たちは、子供らしい単純さの中に教育されなければならない。人の役に立つ小さな義務をつくすこと

や、その年ごろにふさわしい楽しみや経験を持つことに満足するように、彼らを教育しなければならない。子供時代は、たとえの中の芽に相当するが、芽にはそれ自体の特有の美しさがある。子供たちに年齢に不似合いな成熟をしいることなく、できるだけいつまでも幼いころの清らかさと美しさを持ちつづけさせなければならぬ。子供の生活が、静かな単純なものであればあるほど、すなわち、不自然な刺激から離れて自然との調和の中にあればあるほど、その知力、体力、また霊的な力は順調に発達する。

キリストが五千人を養われた奇跡の中には、収穫を生産させる神の力の働きが表わされている。イエスは自然界のべールをとり去って、われわれの幸福のためにたえず働いている創造力を明らかにされている。パンを幾倍にもふやされたキリストは、地にまかれた種の繁殖に毎日奇跡を働いておられるのである。キリストが、この世の田畑の収穫から幾千万の人間をいつも養っておいてになるのは一つの奇跡である。人間は、穀物を生産しパンを作るためにキリストとの協力を求められている。そのために人間は、神の力を見おとししてしまうのである。神の力の働きは、自然の原因や人間の力に帰せられ、天来の賜物は利己的な用途に悪用されて、祝福となるよりは災いとなる場合が多い。神はこうしたすべてのことを変えようとしておられるのである。神は、われわれのにぶい感覚が呼びさまされて神のあわれみ深い恩恵をみとめ、神の賜物が、そのみこころの通りにわれわれの祝福となるように望んでおられるのである。

種に生命をあたえるのは神のみ言葉で、そこに神の生命がわけあたえられるのである。われわれは穀物を

食べることによって、その生命にあずかる者となる。神はわれわれがこのことを認めるように望んでおられるのである。神は、われわれが、日ごとのかてを受けることにさえも、そこに神の力が働いていることをみとめ、ますます神と親密な交わりにはいるように望んでおられる。

自然界における神の法則によって、原因に結果が伴うことは不変の真理である。収穫は、種まきをあかしする。そこにみせかけは通用しない。人は世間を欺いて、自分では手をくだしたことのない奉仕について賞賛と報酬をうけることができるかもしれない。しかし、自然界にはあざむきというものはあり得ない。不忠実な農夫に対しては収穫がその罪を宣告する。このことはまた最高の意味において、霊的な世界においても真理である。悪が成功しているのは、みせかけだけであって、実際にはそうではないのである。学校をずる休みする子供、学業をなまける少年、主人の利益のために働こうとしない雇い人、どんな商業や職務にあると、自分の最高の責任に対して不誠実な者、——こうした人たちは、その悪事が人目につかない間は、自分はずまくやっているとぬぼれるかもしれない。しかしそうではない。彼は自分自身を欺いているのである。人生の収穫は品性である。そして現世と来世における運命は実にこの品性によって決定されるのである。収穫は、まかれた種の繁殖である。それぞれの種は、「その類にしたがって」実をむすぶ。われわれの中に宿っている品性の特徴もその通りである。利己心、おのれを愛する心、自負心、放縦は、繁殖を続けているうちに、ついには、不幸と破滅を招くのである。「自分の肉にまぐ者は、肉から滅びを刈り取り、霊にま

く者は、霊から永遠のいのちを刈り取るであろう。^{一六}「愛と同情と親切は、祝福という実を結び、それは滅びることのない収穫となる。

収穫において種は幾倍にもふえる。一粒の麦でも、幾度もまいているうちには、ふえつづけてついには全地を黄金の穂波でおおうであろう。ただひとりの一生、たった一つの行為でさえも、その影響はこれと同じようにひろがるのである。

キリストに油をそぐために割られたあの石膏のつぼの思い出は、幾世紀もの長い間どんなにか愛の行為を促したことであろう。名もない貧しいひとりのやもめの「レプタニツ……それは一コドラントに当る」^{一七}献金によって、どんなにかぞえきれないほどの献金が救い主の働きにささげられたことであろう。

種まきの教訓は、惜しみなく与えることについて教えている。「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる」^{一八}とある。

「すべての水のほとりに種をま……くあなたがたは、さいわいである」^{一九}と、神は仰せられる。すべての水のほとりに種をまくとは、助けの必要なところには、どこにでも与えることである。そのために乏しくなることはない。「豊かにまく者は、豊かに刈り取る」のである。農夫は、種をまきちらすことによって、その種を幾倍にもふやす。そのように、与えることによって、恩恵は増すのである。与えつづけてもいいように、神の御約束には十分な物が保証されている。

そこには、もっと深い意味がある。われわれが人にこの世の恩恵を分け与えるとき、それを受ける人は、

感謝の気持ちから、心を開いて霊的な真理を受け入れるようになる。こうしてそこには永遠の生命という収穫がもたらされる。

地にまかれた種のたとえによって、救い主は、われわれのために払われたご自分の犠牲を表わされた。イススは、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」と仰せになった。種であるキリストの犠牲があつてはじめて、神の国に、実が結ばれるのである。植物界のこの法則に従うならば、生命はキリストの死の結果である。

したがって、キリストと共に働く者として実を結ぶ者はみなおのれを愛する心や利己心を滅ぼさなければならぬ。われわれの生命を世の必要という畑にまかなければならぬ。実際、自己犠牲の法則は、自己保存の法則である。農夫は、穀物をまくことによって、その穀物を保存する。同様に、保存される生命は、神と人類への奉仕のために、無条件にささげられる生命である。

種は死んで、新しい生命に芽ばえる。このことの中に、よみがえりの教訓が教えられている。墓の中に横たえられて朽ちる人間の肉体について、神は、「朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり」と仰せになつてゐる。^二親と教師が、こうした教訓を教えるには、実際の面から教えなければならない。子供たちに、自分で土

を耕させ、種をまかせるがよい。子供たちが働いているときに、心という畑やそこにまかれる善悪の種や、植物の種をまくために畑を準備しなければならないように、真理の種のために心を準備しなければならないことなどについて、親や教師は説明することができる。種を地にまくときには、キリストの死についての教訓を教え、芽が出てくるときには、よみがえりについて真理を教えることができる。植物が生長するにつれて、自然の種まきと霊的種まきの一致がつづいてみられる。

少年少女たちもこれと同じように教育されなければならない。土を耕すことから、たえず教訓が学ばれる。種のまかれていない土地からすくにも収穫があるような期待をもつ人はだれもない。土地を準備し、種をまき、作物を育てるには、勤勉な忍耐強い努力が必要である。霊的な種まきもその通りである、心の畑は耕されなければならない。土は、悔い改めによって、くだかれなければならない。よい作物を妨げる悪の成長は根絶されなければならない。一度いばらの生い茂った土地は、勤勉な働きによって回復されなければならないように、キリストのみ名と力によって、熱心に努力するときのみ、心の中の悪の傾向にうち勝つことができる。

心ある働き人は土を耕してみても思いがけない宝が目の前にあらわれるのに気がつく。農業や園芸においては、そこに含まれている法則に注意を払うことなしには、だれも成功することはできない。それぞれの種類の植物について、その特殊な必要を研究しなければならない。種類の相違によって、それぞれ異なった土壌

と栽培が必要であり、おののを支配している法則にしたがうことが成功の条件である。

移植に必要な注意、すなわち毛根を密着させたり置きちがえたりしないことや、苗の保護、剪定や灌水、夜は霜を昼は太陽を防ぎ、雑草、病気、害虫を防ぎ、整枝、配列に気をつけるなど、すべてこうしたことは品性の発達についてたいせつな教訓を教えるばかりでなく、また働きそのものが発達の手段でもある。注意深さ、忍耐力、こまかいことに対する注意、法則に従う観念などを養う上にこのような働きは非常にたいせつな訓練となる。生命の神秘や美しい自然との絶えまない接触は、神の創造されたこれらの美しいものに奉仕することによって生ずる心のやさしさとともに、心をいきいきとさせ、品性を洗練して高める上に役立つ。そして、そこに教えられる教訓によって、働き人は、人の心をいっそうじょうずに取り扱うことができるようになる。

索引

一	ヨブ記一・二ノ八	九	創世記八ノ二二
二	ルカによる福音書二二ノ二七・文語訳	一〇	イザヤ書五五ノ一
三	ヘブル人への手紙一ノ一四	一一	詩篇一二六ノ六
四	ルカによる福音書六ノ三八	一二	ホセア書六ノ三・英訳
五	マルコによる福音書四ノ二六・二八	一三	マラキ書四ノ二
六	ルカによる福音書八ノ一	一四	ホセア書一四ノ五、七
七	イザヤ書六一ノ一	一五	マルコによる福音書四ノ二八
八	伝道の書一一ノ六	一六	ガラテヤ人への手紙六ノ八

一七 マルコによる福音書一二ノ四二
 一八 コリント人への第二の手紙九ノ六
 一九 イザヤ書三二ノ二〇

二〇 ヨハネによる福音書一二ノ二四
 二一 コリント人への第一の手紙一五ノ四二、四三

他 の 実 物 教 訓

「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ。」

神のいやしの力は、自然のあらゆるものにかよっている。木がきられたり、人が負傷したり骨折したりすると、自然はすぐにその傷害を回復しはじめる。いやしの働きは、その必要が起る前から用意されていて、ある部分が傷つくと同時に、一切のエネルギーは回復の働きのためにそそがれる。霊的な世界においても同じである。罪のために、必要が生ずる前から、神はすでに救済策を用意してくださったのである。誘惑に負ける魂は敵によって傷つけられ、そこなわれる。しかし罪のあるところには救い主があらわれるのである。キリストの働きは、「囚人が解放され、…打ちひしがれている者に自由を得させ」ることであつた。

この働きにわれわれは協力しなければならぬ。「もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、…その人を正しなさい」である。ここに、「正す」(restore)と訳されている言葉の原語は、脱臼した骨をもとにもどすという意味をもっている。これは意味深い言葉である。過失や罪に陥る者は、自分の周囲のいっさいのものに対する関係から放り出されるのである。彼は、自分の過失をみとめ、後悔の念に満たされるかもしれないが、自分で自分を救うことはできない。彼は敗北し、助けてくれる者もなく、混乱し、途

方に暮れる。彼は、回復され、いやされ、もう一度立ち上がらなければならない。「霊の人であるあなたがたは、……その人を正しなさい」^三とある。

これをいやすことができるのは、キリストの心から出る愛のみである。木に樹液が流れ、体内に血液が流れているように、この愛の流れている人だけが、傷ついた魂を回復することができる。

愛の働きは天来のものであるからふしぎな能力をもっている。「憤りをとどめ」^四る柔和な答え、「寛容で慈悲あ」る愛、^五「多くの罪をおお」う愛——^六こうしたことについて、教訓を学ぶとき、われわれの人生には、いかに大きないやしの力が賜物としてあたえられることであろう。そのとき、人生はいかに変化し、地上には、いかに天国のふんいきが感じられるようになることであろう。

このようなとうとい教えは、小さい子供たちにも理解されるようにわかりやすく教えられる。子供の心はすなおで、すぐに感化される。年とったわれわれが「幼な子のように」^七なり、救い主の単純さと柔和と優しい愛について学ぶとき、小さい子供たちの心にふれ、愛によるいやしの奉仕を彼らに教えることは、そんなにむずかしいことではないということを知るであろう。

神の最も大いなるみわざの中にも、最も小さなみわざの中にも同じように完全さがある。すべての世界を宇宙の空間にささえている神のみ手は、野の花を装うみ手である。路傍のありふれた小さな花を顕微鏡で調べてみると、そのあらゆる部分にわたって精巧な美しさと完全さがみられる。そのように、どんなに卑しい

人にも、真の美德が見いだされるかもしれないし、またどんなに平凡な仕事でも、それを愛して忠実になすときに、神の御目にはりっぱにみえるのである。小さな事に良心的な注意を払うことによって、われわれは神と共に働く者となり、すべてをござんになり、またご存じである神によって賞賛の言葉が与えられる。空に光のアーチをわたしているにじは、「神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約」のしるしである。天上の神のみくらをとりまいているにじも、神の子らに対する平和の契約のしるしである。

雲の中ににじが、日光と夕立の結合によって生じるように、神のみくらの上のにじは、神の恩恵と正義の結合を象徴している。悔い改めた罪人におかつて、神は、あなたは生きなさい、「わたしはすでにあがないしるを得た」と仰せになっている。

「『このことはわたしにはノアの時のようだ。わたしはノアの洪水を、再び地にあふれさせないと誓ったが、そのように、わたしは再びあなたを怒らない、再びあなたを責めないと誓った。山は移り、丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがない』とあなたをあわれまれる主は言われる。」。

星もまたひとりびとりの人間にはげましの言葉をささやいている。心が疲れはてたり、試練が重苦しくのしかかったり、障害にうち勝つことができないように思えたり、人生の目的を遂げることができないように

みえたり、人生の美しい希望が、みかけ倒しに思われたりなど、だれでも経験するこのような時に、神は、星に教訓を学べと仰せになっている。何ものにもわずらわされることなく一定のコースをたどる星から、われわれは、勇氣とゆるぎない心とを学ぶことができる。

「目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ。主は数をしらべて万軍をひきだし、おのをその名で呼ばれる。その勢いの大きいなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない。ヤコブよ、何ゆえあなたは、『わが道は主に隠れている』と言うか。イスラエルよ、何ゆえあなたは、『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか。あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果の創造者であつて、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵はかりがたい。弱つた者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。」

「恐れてはならない。わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもつて、あなたをささえる。」

「あなたの神、主なるわたしはあなたの右の手をとつてあなたに言う、『恐れてはならない、わたしはあなたを助ける。』」

焼けつくような太陽とすさまじい砂じんにさらされながら、**しゅろ**の木は、さばくのまん中に青々と葉をしげらせ実をむすんで立っている。その根は生ける泉に養われている。その緑の頂上は、人影のない焼けつ

くさばくのはるかかなたから見える。いまにも死にそうな旅人は、その涼しい木陰と生命の水をもとめて、疲れた足をはやめる。

さばくの木は、神がその子らにこの世にあつてかくあれと望まれる人生の象徴である。彼らは罪というさばくにあつて、不安に満たされ、いまにも滅びようとしている疲れはてた魂を、生ける水に導かなければならない。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」と招かれる神を、人類同胞にさし示さなければならぬ。

諸国の交通と旅行に貢献する広くて深い川は、世界的な恩恵として尊重される。しかし、この大河川を作るのに役立っている小さな川についてはどうであろうか。それらの小川がなければ、大河も消えてなくなるであろう。大河の存在は、それらの小川に依存しているのである。同じように、何か大きな事業の指導的な地位にある人は、その成功が当然、彼ひとりに帰するものであるかのように尊敬される。しかし、その成功には、世人に名も知られない働きびとたちの忠実な協力が必要であつたのである。

世の勤労者の大部分は、その仕事を賞賛されることも、認められることもない境遇にある。たいていの人はこのような境遇に不満をいだき、一生が浪費されてしまったように思う。しかし、森や野を横切つて静かに流れ、健康と豊かな実りと美しさをあたえる小川は、大きな川と少しも変わらないほど、その道中に役立っている。そして大河の生命に寄与することによって、自力だけではなしとげることのできないことを小川

は果たしているのである。

これは多くの人にとって必要な教訓である。人はあまりにも才能を盲信し、地位にあこがれる。指導者として認められるのでなければ何もしようとしない人、賞賛を受けなければ働くことに興味のない人があまりに多い。与えられている才能や機会を忠実に最高度に用いなければならないことや、天の神がわれわれに定めになった境遇に満足することを学ばなければならない。

「しかし獣に問うてみよ、それはあなたに教える。空の鳥に問うてみよ、それはあなたに告げる。…海の魚もまたあなたに示す。」^{二三}

「ありのところへ行き、そのすることを見て、知恵を得よ。」^{一四}

「空の鳥を見るがよい。」^{一五}「からすのことを考えて見よ。」^{一六}

神がおつくりになったこれらの生物について、単に子供たちに話をしてやるだけでは十分ではない。動物そのものが子供たちの教師とならなければならない。ありは、忍耐強い勤労や、根気よく障害を征服することや、将来のために準備することなどについて教訓を教えている。小鳥は、信頼についてやさしい教訓を教える教師である。天の父なる神は、小鳥に必要なものを備えられるが、しかし小鳥たちは自分で食物をあつめ、巣をつくり、ひなを育てなければならない。彼らは、たえず敵に襲われる危険にさらされている。それでもなお彼らは喜々として働きに出かけ、その歌声はよろこびにあふれている。

詩篇記者は、神が森の動物たちを守っておられるありさまを美しく描いている。

「高き山はやぎのすまい、岩は岩だぬきの隠れる所である。」^{一七}

「あなたは泉を谷にわき出させ、それを山々の間に流れさせ、…空の鳥もそのほとりに住み、こずえの間にさえずり歌つ。」^{一八}

森や丘の動物たちはみな神の大家族の一員である。

「あなたはみ手を開いて、すべての生けるものの願いを飽かせられます」^{一九}とある。

アルプスのわしも、時にはあらしのために、山の狭い谷間にたたきおとされることがある。あらしの雲にとじこめられたこの森の王者は、黒雲のかたまりのために、彼女の住み家である太陽の輝くがけの頂上からさえぎられてしまう。逃げだそうとどんなに努力しても徒労であるかのようにみえる。彼女は、あちらこちらに突進し、その強い翼を空中にはばたかせ、叫び声を山々にこだまさせる。しかしついに、勝利の叫びとともに彼女は上のほうへ突進し、雲をつき抜けてふたたび明るい太陽の輝くところへ出て、暗黒とあらしをはるか下のほうに見おろす。われわれも困難や失望や暗黒にとりかこまれることがある。虚偽や不幸や不正がわれわれをとじこめる。そこには払いのけることのできない雲がある。境遇と戦ってもむなしくみえる。逃げだす道は一つ、しかもただ一つだけしかない。霧やもやが地上をおおっているが、雲の上には神の光が輝いている。信仰の翼にのって、太陽の光のような神のみに出ることができるのである。

このように学び得る教訓はたくさんある。平地や山腹にひとりぼっちでそびえ立ち、根を地中の深くに張ってそのたくましい力によってあらしをもともしない木からは、自己の力にたよっている姿を学ぶことができる。若木のときにまがったまま、地上のどんな力によっても、失われた均整をとりもどすことのできない、ひねくれた形の悪い木の幹からは、幼年時代にうける感化力について学ぶことができる。雑草やごみにとりかこまれた泥沼の面に咲くすいれんは、みぞのある茎を底のきれいな砂の中につっこんで、そこから生命を吸いあげ、そのかぐわしい花をけがれない純潔な姿で光におかってもちあげる。

このように少年少女たちは、教師や教科書からいろいろな事について知識を得ると同時に、また自身で教訓をひきだし、真理をみわけることがを学ばなければならない。彼らが畑の仕事をしているときには、作物の世話からどんな教訓を学ぶかをたずねてみるがよい。彼らが美しい風景をながめているときには、神はなぜあんなに美しい変化のある色彩で森や野を装われたのか、なぜ全部うす暗い灰色に塗られなかったのかを尋ねてみるがよい。彼らが花を摘んでいるときには、神はなぜエデンの園からさまよい出たこれらの美しい花を、われらのためにお残しになったかを考えさせてみるがよい。自然界のいたるところに、われわれに対する神のみこころが現わされ、われわれの必要と幸福のためにすべてのものが驚くばかりにふさわしく造られていることに、彼らの目をおけるがよい。

自然の中に父なる神のみわざをみとめる者や、地の富と美しさの中に神の筆跡を読む者だけが、自然の事

物から最も深い教訓を学び、その最高の奉仕をうける。山や谷、海や川を、神の意志の表現また創造主の啓示としてみる者だけが、その意義をほんとうに理解することができるのである。

聖書記者たちは、自然から多くの実例を引用している。自然界の事物を観察することによって、聖霊の導きのもとに、み言葉の教訓をいっそう深く理解することができる。このようにして、自然は、み言葉の宝庫のかぎとなるのである。

聖書の教えを例示している事物を自然の中からさがし出したり、また自然界から引用されているたとえを聖書の中にしらべたりすることを、子供たちに奨励しなければならない。彼らはまた自然と聖書の両方から、キリストを表わしているもの、またキリストが真理を説明するために用いられたものを、一つ一つさぐり出さなければならない。こうして彼らは木につるくさに、ゆりの花にばらの花に、太陽に星に、キリストを見ることを学ぶようになるであらう。彼らはまた、小鳥の歌に、木のささやきに、雷のとどろきに、海の波の調べに、キリストのみ声をきくことを学ぶであらう。そのとき自然の事物の一つひとつが、彼らにキリストのとうとい教訓をくりかえすのである。

このようにキリストを親しく知る者にとって、この地上はもはや寂しい荒れはてた場所ではなくなる。それは父なる神の家となり、そこにはかつて人々の中に住まわれたキリストがご臨在になるであらう。

索 引

一	詩篇一〇七ノ四三	一一	イザヤ書四〇ノ二六―二九	四一ノ一〇、一三
二	ルカによる福音書四ノ一八	一二	ヨハネによる福音書七ノ三七	
三	ガラテヤ人への手紙六ノ一	一三	ヨブ記一二ノ七、八	
四	箴言一五ノ一	一四	箴言六ノ六	
五	コリント人への第一の手紙一三ノ四・英語欽定訳	一五	マタイによる福音書六ノ二六	
六	ペテロの第一の手紙四ノ八	一六	ルカによる福音書一二ノ二四	
七	マタイによる福音書一八ノ三	一七	詩篇一〇四ノ一八	
八	創世記九ノ一六	一八	詩篇一〇四ノ一〇、一二	
九	ヨブ記三三ノ二四	一九	詩篇一四五ノ一六	
一〇	イザヤ書五四ノ九、一〇			

五 聖書の教育的価値

「これは、あなたが歩くとき、あなたを
導き、あなたが寝るとき、あなたを守り、
あなたが目ざめるとき、あなたと語る」

箴言六ノ二二三

知的及び靈的教養

「また、へやは知識によってさまざまの尊く、麗しい宝で満たされる。」

肉体はもちろん心も魂も、活動によって力を得られるのが神の法則である。発達させるのは運動である。

この法則と一致して、神は知性と靈性の発達の方法を聖書の中にお与えになっている。

聖書の中には、人が現世のためにあるいは来世のためにふさわしい者となるために理解しなければならぬあらゆる原則が含まれている。しかもそれらの原則は、どんな人にも理解できるのである。聖書の教えを理解しようとする心がけさえあれば、その一節を読むだけで必ず何か有益な思想を得ることができる。しかし時々思い出したように断片的に聖書を研究したのでは、その最もとうとい教えを得ることは不可能である。聖書を急いで不注意に読む人は、そこに提示されている大きな真理の体系を認めることができない。真理の宝の大部分は、表面下に深くうずもれていて、熱心な探求とたえない努力によってのみ、これを手に入れることができる。われわれは大きな全体を構成しているところの数々の真理を、「ここにも少し、そこにも少し」さ^二がし出して集めなければならない。

このようにさぐり出され、集められた真理は、互いに調和していることがわかる。四福音書はおのあの互

いに補足し合い、一つの預言は他の預言の説明であり、一つの真理は他の真理の発展である。ユダヤの制度の型は、福音によって明らかにされている。神のみ言葉の中にあるすべての原則はそれぞれに立場を持ち、すべての事実はそれぞれの意義をもっている。こうして全体の構成は、計画においても実行においても、その創始者である神について証言している。このような構成は、ただ限らない神の知恵だけが考え出すことも作りだすこともできるのである。

いろいろな部分をさがし出してその関係を研究するときに、人の頭脳の最高の能力は盛んに活動する。このような研究に従事するときには知力は必ず発達するのである。

聖書研究の知的な価値は、真理をさがし出してこれを集めることだけにあるのではない。それは提示されたテーマを把握するのに必要な努力の中にもある。日常の平凡事にばかり心を奪われていると、心はいじけ、衰弱する。崇高かつ遠大な真理を理解するために心を働かせなければ、それはついには発達の能力を失ってしまうであろう。心の退化を防ぎ、その発達を促すには、神のみ言葉の研究にまざるものはない。知的な訓練の方法として、聖書は他のどんな本よりも、また他のすべての本を合わせたよりも効果がある。偉大なテーマ、単純ではあるが威厳のある語調、美しいたとえ——それは他の何ものにもまして思想をめざめさせ、そして高める。天来の啓示によるすばらしい真理を把握するための努力は他のどんな研究よりも、知的な能力を与えるのである。このようにわれわれの心が限らない神のみことと接するときに、それは大きくそして強くならざるを得ないのである。

聖書能力は靈性を發達させることにおいてはさらに偉大である。人は神と交わるためにつくられたので、人間の眞の生活と發達は、神との交わりの中にのみ見いだされる。人間は、神の中に最高の歡喜を見いだすように造られているので、他のどんなものによつても、心の切なる願いを満たし、魂の飢えとかわきを満たすことはできない。心の底から教えをもとめる精神で聖書を学び、その眞理を理解しようと努力する者は、その著者である神と接觸するようになり、自分自身でやめてしまわないかぎり、その發達の可能性には限界がない。

聖書は広範な文体とテーマをもっているので、どんな人の心もひきつけ、どんな人の感情にも訴えるところがある。聖書のページには、最も古い時代の歴史や、最も眞實な人生を送った人の伝記や、國家を支配する上に、また家族を治める上に必要な統治の原則、しかも人間の知恵の及びもつかないようないろいろな原則が見いだされる。聖書の中にはまた最も深遠な哲学、最も美しく崇高な、また最も感動にあふれた熱情的な詩がある。このような考え方をしただけでも、聖書はどんな人間の著作よりも、はるかにすぐれた価値をもっているが、しかしさらにその崇高な中心思想に関連してこれを考えるとき、それは無限に広い範圍と、無限に大きな価値をもっている。この考え方によつて、聖書を照らしてみると、その話題の一つ一つが新しい意義をもっている。最も單純に語られている眞理の中に、天のように高くかつ永遠に限りない原則がふくまれている。

聖書全体のあらゆるテーマの中でその一大中心となるべきテーマは、救済の計画すなわち人の魂の中に神

のみかたちを回復することである。エデンで言いわたされた宣告の中にみられる最初の希望の暗示から、黙示録の中に、「御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている」とある最後の輝かしい約束にいたるまで、聖書の各巻各ページの主旨は人類を高めるという驚くべきテーマと、「わたしたちの主イエス・キリストによつて、わたしたちに勝利を賜わった」^四神の能力を示すことにある。

この思想を把握する者の目の前には、限らない研究の分野がひろがっている。彼は神のみ言葉という宝庫の全体を開くかぎをもっている。

救済の学問は、あらゆる学問の中の学問である。それは天使たちと他世界の聖者たちの研究している学問であり、救い主であるキリストの注意をひいている学問であり、限らない神の胸中にあつて「長き世々にわたつて、隠され」^五ていた御目的に関連した学問であり、神にあがなわれた者が永遠にわたつて無限に研究しなければならぬ学問である。それはまた人の従事し得るところの最高の研究である。それは他のどんな研究よりも、心をいきいきさせ、魂を高めるのである。

「知恵はこれを持つ者に生命を保たせる。これが知識のすぐれた所である」^六とある。イエスは「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」^七と仰せられた。「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがたかわされたイエス・キリストとを知ることです」^七。

すべての世界を出現させた創造のエネルギーは、神のみ言葉のうちにある。神のみ言葉は能力を与え、生命を生ぜしめる。神のご命令の一つ一つは約束であつて、意志がこれに同意し、魂がこれを受け入れるとき

に、そこには同時に限らない神の生命がもたらされる。それは人の性質を一変させ、魂を神のみかたちに再創造する。

このようにして与えられた生命は、また同じようにして維持される。人は、「神の口から出る一つ一つの言」^八によって生きなければならない。

心と魂はかてによって築かれる。どんなかてをとるかを決定するのは、われわれ自身の責任である。われわれの思いを占め、品性を形造る話題の選択は、各人の能力の中にある。聖書を手にする特権を与えられているひとりびとりについて、神は、「わたしは彼のために、あまたの律法を書きしるし」^九「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す」^{一〇}と仰せになっている。

神のみ言葉である聖書さえ手にあれば、人はどんな境遇に陥っても、自分の好きな友をえらび得るのである。聖書のページを開いて、人類の最も高貴な最もすぐれた人々と語り、人類に話しかけられる永遠なる神のみ声に聞き入ることができる。

「御使たちも、うかがい見たいと願っている」^{一一}ほどのテーマを研究し、考えるときに、天使たちを友とすることができ。天来の教師であるイエスの足跡に従い、イエスが山や野や海でお教えになったみ言葉に聞き入ることができる。この世にあって天のふんいきの中に住み、この世の悩みと誘惑の中にある人々に希望の思いと聖潔をあこがれる思いをあたえ、同時に自らは、目に見えない神とますます密接な交わりにはいり、

神と共に歩んだ古代の人と同じに、いよいよ永遠の世界の門口に近づき、そしてついには開かれた門を通じてそこにはいることができる。そこでは自分が見ず知らずの人間ではないことに気がつくであろう。自分にあいさつの言葉をかけてくれる声は、地上にあるとき、目には見えなかったけれども、友として交わった聖者たちの声であり、この世において聞きわけそして愛することをおぼえた声である。神のみ言葉を通して、天との交わりの中に暮らしていた者は、天における交際にも心やすさを感じるであろう。

索引

一	箴言二四ノ四	七	ヨハネによる福音書六ノ六三	一七ノ三
二	イザヤ書二八ノ一〇	八	マタイによる福音書四ノ四	
三	黙示録二二ノ四	九	ホセア書八ノ一二	
四	コリント人への第一の手紙一五ノ五七	一〇	エレミヤ書三三ノ三	
五	ローマ人への手紙一六ノ二五	一一	ペテロの第一の手紙一ノ一二	
六	伝道の書七ノ一二			

科学 と 聖 書

「これらすべてのもののうち、いずれか主の手がこれをなしたことを知らぬ者があるのか。」

自然という書と神の啓示である聖書には、同じ創造主の印が押されているので、両方の語るところは一致せざるを得ないのである。その方法は違い、言葉は違っても、両者は共に同じ大いなる真理を証明している。科学は絶えず新しい驚くべきことを発見しているが、しかし科学の探求によって発見されるものには、それが正しく理解されるかぎり聖書と矛盾するものは一つもない。自然の書と聖書は互いに光を照らしあっている。自然と聖書はどちらも神の働かれる法則を教えることによって、われわれに神を知らせるのである。

しかしながら、自然の中に観察されるいろいろな事から誤った推論が出されたために、科学と聖書の間に矛盾があるかのように想像されている。そうして両者の調和を図ろうとして、神のみ言葉の能力を傷つけ滅ぼすような聖書の解釈をしてきたのである。創造に関するモーセの記録の字義通りの解釈と地質学とは矛盾するように考えられている。地が混沌の状態から進化するには幾百万年の年月を要したと主張されている。そしてこの科学の想像的な啓示に聖書を適応させようとすれば、創造の期間は幾万年あるいは幾百万年という膨大なばくぜんとした年数であったと仮定されるのである。

このような結論は全く無用である。聖書の記録はそれ自体と一致し、また自然の教えと一致している。創造の働きに用いられた第一日について、「夕となり、また朝となった。第一日である」と記録されている。これと同じ内容のことが創造週の最初の六日間についてそれぞれ言われている。この期間の一日一日は、今日と同じように朝夕をもった一日であったことが、靈感の言葉に記録されているのである。創造そのものの働きについては、「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立った」と天来の証言が与えられている。このように無数の世界を造り出し得る神にとって、地を混沌たる状態から進化させるには、どれほどの期間が必要であつたろうか。神のみわざを説明するために、われわれはそのみ言葉を犯す必要があるだろうか。

地中から発見される遺物が、現在知られているよりもはるかに大きな人間や動物や植物が生存していたことを証拠だてていることは事実である。これらの植物や動物は、モーセの記録の時代よりも以前に生存していたことを証明するものと考えられているが、しかしこうしたものについて聖書の歴史は、十分な説明を与えている。ノアの洪水前には、植物や動物の生命の発達は、その後の時代よりも測り知れないほどまっすぐに進んでいた。洪水のときに地球の表面が破壊され、著しい変化が起こり、地殻が再び形成されるときに以前生存していた動植物の多くの証拠が保存されたのである。広大な森林は、洪水の時に地中に埋没し、その後石炭に変化して広大な石炭層をつくり、油田を生じて、今日われわれの生活を快適にし、便利にしているのである。これらのものは光に照らしてみると、神のみ言葉の真実性を無言のうちに立証する多くの証拠である。

地球の進化についての学説に類似しているのが、創造の最高の栄光である人類を、微生物や軟体動物や四足動物の系統が進化したものであるとする説である。

人間に与えられている研究の機会というものを考えてみると、——すなわち人の生命はどんなに短いものであるか、人間の活動の範囲はどんなに限られたものであるか、人間の視野はどんなに狭いものであるか、人間の結論にはいかにしばしば大きな誤りがくりかえされるか、聖書の記録以前のできごととして考えられていることについては特にそうであるということ、そして科学の仮定的な推論がいかにしばしば訂正されたり放棄されたりするか、地球の発達に関する仮定的な年数が、いかにしばしばいとも簡単に何百万年も加えられたり減らされたりするか、いろいろな科学者たちによって提唱された学説がいかに互いに矛盾しているか、——こうしたことを考えてみるときに、われわれは、人間が微生物や軟体動物や類人猿から進化したものであるということを追求するために、「神は自分のかたち^四に人を創造された」と、単純にしかも厳粛に言われている聖書の言葉を放棄することに同意できるであろうか。われわれは、王の宮廷に保管されているどんな系譜よりも光栄ある系譜——「その父はアダム、アダムはすなわち神の子なり」^五とある系譜をしりぞけようというのであろうか。

科学の啓示も人生の経験も、それが正しく理解されるかぎり、自然の中における神のたえない働きについての聖書の証言に一致する。

ネヘミヤの記録した賛歌の中に、レビ人はこう歌っている、「あなたは、ただあなたのみ、主でいらせら

れます。あなたは天と諸天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、海とその中のすべてのものを造り、これをことごとく保たれます。」^六

この地球について、聖書は、創造の働きが完成されたものであることを宣言している。「みわざは世の初めに、でき上がっていた」^七とある。しかし神の能力は、いまもなお、お造りになった物をささえるために働いている。脈搏がうち、呼吸がつづけられるのは、一度動きはじめた機械組織が、その固有のエネルギーによって活動をつづけるせいではない。呼吸の一つ一つ、心臓の鼓動の一つ一つは、われわれの生命と活動と存在の根源である神の守りの証拠である。小さな昆虫から人間にいたるまで、ありとあらゆる生物は、日々に、神の摂理によって生きているのである。

「彼らは皆あなたが時にしたがって

食物をお与えになるのを期待している。

あなたがお与えになると、彼らはそれを集める。

あなたが手を開かれると、彼らは良い物で満たされる。

あなたがみ顔を隠されると、彼らはあわてふためく。

あなたが彼らの息を取り去られると、

彼らは死んでちに帰る。

あなたが霊を送られると、彼らは造られる。
あなたは地のおもてを新たにされる。」^八

「彼は北の天を空間に張り、
地を何もない所に掛けられる。

彼は水を濃い雲の中に包まれるが、
その下の雲は裂けない。・・・

水のおもてに円を描いて、
光とやみとの境とされた。」^九

「彼が戒めると、天の柱は震い、かつ驚く。
彼はその力をもって海を静め、・・・

その息をもって天を晴れわたらせ、
その手をもって逃げるへびを突き通される。
見よ、これらはただ彼の道の端にすぎない。
われわれが彼について聞く所は

いかにかすかなささやきであろう。

しかし、その力のとどろきに至っては、

だれが悟ることができるか。^九」

「主の道はつむじ風と大風の中にあり、

雲はその足のちりである」。^{一〇}

自然のすべてのものの中にあって働き、万物をささえている偉大な力は、一部の科学者たちが主張するような、単なる普遍的な原則つまり活動エネルギーではない。神は霊であるが、しかし人間は神のみかたちにかたどってつくられたのであるから、神は個性をそなえたおかたである。神は、個性をそなえたおかたとしてご自身をみ子イエス・キリストの中に現わされた。父なる「神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿」^{一一}であるイエスは、この地上に人間の姿でおいでになったのである。イエスは救い主として、人の姿をとってこの世にお下りになった。彼は、救い主として、人の姿のまま、ご昇天になった。彼は、救い主として人の姿のまま、天の宮廷で執り成しをしておられるのである。神のみくらの前にあって、「人の子のような者」^{一二}がわれわれのために、奉仕なさっているのである。

使徒パウロは、聖霊の感動をうけて筆をとり、キリストについて、「いっさいのものは、御子によって造

られ、御子のために造られたのである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあつて成り立っている」と言明している。すべての世界を空間にささえ、宇宙の万物を整然たる秩序と倦むことのない活動の中に保つみ手は、われわれのために十字架に釘づけされたみ手である。

神の偉大さは、われわれにとっては測り知れないものである。

「主のみくらは天にあり」^{一四}とあるが、しかし神は、その霊によつて、至るところに遍在なさるのである。

神は、そのみ手のすべてのわざをくわしく知り、親しく関心をもつておられる。

「われらの神、主にくらぶべき者はだれか。

主は高き所に座し、

遠く天と地とを見おろされる」。^{一五}

「わたしはどこへ行つて、

あなたのみたまを離れましょうか。

わたしはどこへ行つて、

あなたのみ前をのがれましょうか。

わたしが天にのぼつても、あなたはそこにおられます。

わたしが陰府に床を設けても、

あなたはそこにおられます。

わたしがあけぼのの翼をかって海のはてに住んでも、

あなたのみ手はその所でわたしを導き、

あなたの右のみ手はわたしをささえられます。」^{一六}

「あなたはわがすわるをも、立つをも知り、

遠くからわが思いをわきまえられます。

あなたはわが歩むをも、伏すをも探り出し、

わがもろもろの道をことごとく知っておられます。…

あなたは後から、前からわたしを囲み、

わたしの上にみ手をおかれます。

このような知識はあまりに不思議で、

わたしには思いも及びません。

これは高くて達することはできません。」^{一七}

万物の創造者である神は、目的に対しては手段を、必要に対しては供給を、ふしぎなほどよく適應するうにお定めになった。物質の世界において、心に植えつけられた希望の一つ一つが、かなえられるように定めたのは神であつた。人の魂をつくり、これに知る能力と愛する能力を与えたのは神であつた。神は、魂のもつちを満足させずに置くようなおかたではない。罪や悲しみや苦しみの人生の戦いにおいて、抽象的な原理や非人格的な存在や、単なる概念だけでは、人間の必要や魂の欲求を満足させることは不可能である。法則や力を信じたり、同情心があるわけでもなく、助けを求める叫びを聞いてくれないものを信じるだけでは人は満たされない。われわれをささえてくださる全能のみ手、われわれをあわれまれる永遠の友である神を知らなければならぬ。暖かいみ手をにぎり、愛に満ちたみ心に信頼しなければならぬ。しかも神はみ言葉の中に、ご自身をその通りにあらわしておられるのである。

自然の神秘を深くさぐればさぐるほど、人間の無知と弱さを認めないではいられない。達し得ない深さと高さがあつて、見通すことのできない秘密があり、まだ踏み入ったことのない広大な真理の分野が目の前にひろがっているのが認められる。「私は未知の真理の大海を前にして波打ちぎわで小石や貝がらをさがしている子供のようであつたと自分自身が思える」と言ったニュートンの言葉は、そのままわれわれの言葉である。

科学を深く研究した者ならば、自然の中に無限の力をみとめないではいられない。しかし、人間の独断的な理性には、自然の教えは、矛盾と失望を与えるだけである。それは聖書の光に照らしてはじめて、正しく

解釈される。「信仰によって、わたしたちは、…悟る」^{一八}のである。

「はじめに神」^{一九}とある。まじめな探求心をもった人は、箱船に飛び帰った**はと**のように、ここにはじめて落ち着きを見いだすことができる。限りない愛の神は、上にも下にもかなたにも住まわれて、善に対するあらゆる願い^{二〇}を成就するために、すべてのことをなされるのである。

「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められる」^{二二}とある。しかし、それらの証言は、天来の教師キリストの助けによってのみ理解されるのである。

「いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。」^{二三}

「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。」^{二四}世の初めに「水のおもてをおお」^{二四}っていた霊、「すべてのものは、これによってできた」^{二五}と言われている言葉であるキリスト、「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」^{二五}と言われているその真の光であるキリスト、——その助けによってのみ、科学の証言は正しく解釈される。これらの導きがあつてはじめて、どんなに深い科学の真理でも悟ることが可能である。

全知全能である神の指導の下にあるときにのみ、われわれは神のみわざを学んで、神のご意志に一致した考え方をすることができるのである。

索 引

一	ヨブ記一ノ九	一四	詩篇一ノ四
二	創世記一ノ五	一五	詩篇一三ノ五、六
三	詩篇三三ノ九	一六	詩篇一三九ノ七一〇 ヨブ記二六ノ六参照
四	創世記一ノ二七	一七	詩篇一三九ノ二一六
五	ルカによる福音書三ノ三七・元訳	一八	ヘブル人への手紙一ノ三
六	ネヘミヤ記九ノ六	一九	創世記一ノ一
七	ヘブル人への手紙四ノ三	二〇	テサロニケ人への第二の手紙一ノ一
八	詩篇一〇四ノ二七―三〇	二一	ローマ人への手紙一ノ二〇
九	ヨブ記二六ノ七一〇 二六ノ一一―一四	二二	コリント人への第一の手紙二ノ一
一〇	ナホム書一ノ三	二三	ヨハネによる福音書一六ノ一三
一一	ヘブル人への手紙一ノ三	二四	創世記一ノ二
一二	ダニエル書七ノ一三	二五	ヨハネによる福音書一ノ三 一ノ九
一三	コロサイ人への手紙一ノ一六、一七		

実業の原則と方法

「まっすぐに歩む者の歩みは安全である」。

聖書には、正当な実業についてたいせつな準備の与えられていない部門はない。勤勉、正直、倹約、節制、潔白という原則は、真の成功の秘訣である。箴言の書に示されているこのような原則は、実際的な知恵の宝庫である。商人も職人も、どんな実業部門の指導者たちも、自分自身のためにまた雇い人のために、箴言の書にある賢人の言葉ほど適切な格言を他のどこにも見いだすことはできない。

「あなたはそのわざに巧みな人を見るか、そのような人は王の前に立つが、卑しい人々の前には立たない」。^二
「すべての勤労には利益がある、しかし口先だけの言葉は貧乏をきたらせるだけだ」。^三

「なまけ者の心は、願い求めても、何も得ない」。「酒にふける者と、肉をたしなむ者とは貧しくなり、眠りをむさぼる者は、ぼろを身にまとうようになる」。^四

「歩きまわって人のよしあしをいう者は秘密をもらす、くちびるを開いて歩く者と交わってはならない」。^五

「よこしまな者の道に、はいつてはならない」。「人は熱い火を踏んで、その足が、焼かれなければならないであろうか」。^六

「知恵ある者とともに歩む者は、知恵を得」「友を持つ者は、自ら友であることを示さなければならない」。^七

われわれが互いに尽くさなければならぬ義務の全体の範囲は、「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおり^八にせよ」とのキリストのみ言葉につくされている。

聖書の中に幾度もくりかえし強調されている警告に注意するならば、どれほど多くの人々が経済上の失敗や破滅をまめかれることであろう。

「急いで富を得ようとする者は罰を免れない。」^九

「急いで得た富は減る、少しずつたくわえる者はそれを増すことができる。」^{一〇}

「偽りの舌をもつて宝を得るのは、吹きはらわれる煙、死のわなである。」^{一一}

「借りる者は貸す人の奴隷となる。」^{一二}

「他人のために保証をする者は苦しみをうけ、保証をきらう者は安全である。」^{一三}

「古い地境を移してはならない、みなしごの畑を侵してはならない。彼らのあがない主は強くいらせられ、あなたに逆らつて彼らの訴えを弁護されるからだ。」^{一四}

「貧しい者をしえたげて自分の富を増そうとする者と、富める者に与える者とは、ついに必ず貧しくなる。」

「穴を掘る者は自らその中に陥る、石をまろばしあげる者の上に、その石はまろびかえる。」^{一五}

世間一般の団体においても宗教団体においても、その社会の幸福は、これらの原則に結びついている。生命と財産を保証してくれるのもこれらの原則である。神のみ言葉の中に与えられ、また人の心の中にほとん

ど消えかかりながらも、なおおぼろげに残っている神の律法のおかげで、世の人々は信頼と協力を保ち得ているのである。

「あなたのおきては、わたしのためには幾千の金銀貨幣にもまさるのです」^{一六}という詩篇記者の言葉は、宗教的な見地からでなくても真実なものを述べている。この言葉は、絶対の真理を述べており、実業界において認められている真理である。金もつけのためには手段をえらばずに血眼になって激しい競争が行なわれている今の時代にあつてさえも、社会に巣立つ青年たちにとっては、正直、勤勉、節制、潔白、節儉は、単なる金銭の量よりも価値のある資本であることが広く認められている。

しかしこれらの特質の価値をみとめ、その根源が聖書にあることを知っている人でも、それらがどういう原則に基づいているかをわかつている人は少ない。

実業における正直と真の成功の根本は、神の所有権を認めることにある。万物の創造者である神——彼こそ本来の所有者なのである。われわれは神の管理者である。われわれが持っているものはすべて神から委託されたものであり、神のさしずに従って用いなければならないのである。

このことは人類のひとりびとりに負わされた義務である。それは、人間の活動の全部の範囲にわたって関係がある。われわれが認めようと認めまいと、われわれは、神から才能と便宜を与えられて、神から割り当

てられた働きをなすべくこの世におかれている管理者である。

ひとりびとりの人間に「各自の務」^{一七}が与えられているのである。それは、その人その人の能力に適した働きであり、自分自身と同胞に、最大の幸福をもたらし、神に最高の榮譽をもたらす働きである。

このようにわれわれの事業や職業は、神の偉大なご計画の一部分である。われわれが神のみこころに従って働いている限り、その結果については、神ご自身が責任を持たれるのである。「神の同労者」^{一八}として、われわれのなすべき分は、神のさしずみ忠実に従うことである。したがってそこには心配したり、思い煩ったりする余地は全くない。勤勉、忠実、ほねおり、倏約、思慮が要求される。あらゆる才能をその最高の能力まで働かさなければならぬ。しかしわれわれは、自分の努力の成果である成功に依存することなく、神の御約束に信頼しなければならない。荒野のイスラエル人に食物を与え、飢きんの時にエリヤを養われた神のみ言葉は、今日もなお同じ能力を持っている。「何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言っていると思わずらうな。……まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであらう」^{一九}とある。

富を得る能力を人にお与えになる神は、その賜物に一つの義務を結びつけられた。われわれが取得するすべてのものについて、神は、その特定の部分を要求しておられる。十分の一は神のものである。「地の十分の一は地の産物であれ、木の実であれ」「牛または羊の十分の一については、……主に聖なる物である」^{二〇}と

ある。ヤコブがベテルでたてた誓いは、この義務の範囲を示している。「あなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます」と彼は言っている。^{二二}

「十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい」とは、神のご命令である。それは感謝の念や物惜しみしない心に訴えられているのではない。これは単純な正直さの問題である。十分の一は神のもので、神はご自身のもを神に返すようにと命じておられるのである。

「管理者に要求されているのは、忠実であることである」とある。^{二三}正直ということが実業生活のたいせつな原則であるとすれば、ましてわれわれは、神に対するわれわれの義務——すべての事の根底となっている義務を認めるべきではなかるうか。

管理者としての任務によって、われわれは、神に対してのみならず、人に対して義務を負わされている。ひとりびとりの人間に生命の賜物が授けられているのはキリストの限らない愛のおかげである。食物も衣服も住居も心も魂も肉体も、すべてはキリストの血によって買われたものである。キリストはこのように感謝と奉仕の義務を負わせて、われわれを人類同胞に結びつけておられる。キリストは、「愛をもって互に仕えなさい。」^{二四}「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」^{二五}と仰せになっている。

「わたしには、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任がある」とパウロ^{二六}

は宣言している。われわれもその通りである。われわれの生活が他人よりも恵まれているすべての点において、われわれは人類のひとりびとりに恩恵をほどこさなければならぬ義務を負わされている。

これらの真理は、私室と同様に事務室のためである。われわれの取り扱っている財貨は、自分自身のものではないという事実を見落としては危険である。われわれは管理者にすぎないのであって、現世と来世における人類同胞の幸福とわれわれ自身の運命は共に、われわれが神と人に対する義務を果たすか否かにかかっているのである。

「施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜しんで、かえって貧しくなる者がある。」^{二七}「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」^{二八}「物惜しみしない者は富み、人を潤す者は自分も潤される。」^{二九}

「富を得ようと苦労してはならない、……あなたの目をそれにとめると、それはない、富はたちまち自ら翼を生じて、わしのように天に飛び去るからだ。」^{三〇}

「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう。あなたがたの量るその量りで、自分にも量りかえされるであろうから。」^{三一}

「あなたの財産と、すべての産物の初なりをもって主をあがめよ。そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。」^{三三}

「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。わたしは食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を、滅ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、その熟する前に、その実を畑に落すことのないようにしよう……こうして万国の人は、あなたがたを祝福された者となえるであろう。あなたがたは楽しい地となるからである、万軍の主は言われる。」^{三四}

「もしあなたがたがわたしのために歩み、わたしの戒めを守って、これを行うならば、わたしはその季節に、雨をあなたがたに与えるであろう。地は産物を出し、畑の木々は実を結ぶであろう。あなたがたの麦打ちは、ぶどうの取入れの時まで続き、ぶどうの取入れは、種まきの時まで続くであろう。あなたがたは飽きるほどパンを食べ、またあなたがたの地に安らかに住むであろう。わたしが国に平和を与えるから、……あなたがたを恐れさすものはないであろう。」^{三五}

「公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ。」^{三六}「貧しい者をかえりみる人はさいわいである。主はそのような人を悩みの日に救い出される。主は彼を守って、生きながらえさせられる。彼はこの地にあつて、さいわいな者と呼ばれる。あなたは彼をその敵の欲望にわたされない。」^{三七}

「貧しい者をあわれむ者は主に貸すのだ、その施しは主が償われる。」^{三七}

こういう投資をする者は、二重の財産をたくわえることになる。どんなに賢明に利用しても結局はこの世に残さなければならぬ財産のほかに、永遠の富、すなわち天においても地においても最も価値のある所有物たる品性という財産をたくわえるのである。

「主は全き者のもろもろの日を知られる。彼らの嗣業はとこしえに続く。彼らは災の時にも恥をこうむらず、ききんの日にも飽き足りる。」^{三八}

「直く歩み、義を行い、心から真実を語る者、…誓った事は自分の損害になっても変えることなく。」^{三九}「しえたげて得た利をいやしめる者、手を振って、まいないを取らない者、…目を閉じて悪を見ない者、このような人は高い所に住み、…そのパンは与えられ、その水は絶えることがない。あなたの目は麗しく飾った王を見、遠く広い国を見る。」^{四〇}

神はみ言葉を通して、ひとりのりっぱな人間、すなわち真の意味において成功の人生をおくり、天地の尊敬をうけたひとりの人間をえがいておられる。ヨブは自らの経験について、こう言っている。

「わたしの盛んな時のもようであつたならよいのだが。

あの時には、神の親しみがわたしの天幕の上にあつた。

あの時には、全能者がなわたしと共にいまし、

わたしの子供たちもわたしの周囲にいた。…

あの時には、わたしは町の門に出て行き、

わたしの座を広場に設けた。

若い者はわたしを見てしりぞき、

老いた者は身をおこして立ち、

君たる者も物言うことをやめて、その口に手を当て、

尊い者も声をおさめて、…

耳に聞いた者はわたしを祝福された者となし、

目に見た者はこれをあかしした。

これは助けを求める貧しい者を救い、

また、みなしごおよび助ける人のない者を救ったからである。

今にも滅びようとした者の祝福がわたしに来た。

わたしはまたやめめの心をして喜び歌わせた。

わたしは正義を着、正義はわたしをおおった。

わたしの公義は上着のごとく、また冠のようであった。

わたしは見えない人の目となり、

足の不自由な人の足となり、

貧しい者の父となり、

知らない人の訴えの理由を調べてやった。

（他国人はちまたに宿らず、

わたしはわが門を旅びとに開いた）。

人々はわたしに聞いて待ち、黙してわたしの教えに従った。

彼らはわたしの顔の光を除くことができなかった。

わたしは彼らのために道を選び、

そのかしらとして座し、

軍中の王のようになり、

嘆く者を慰める人のようであった。^{四二}

「主の祝福は人を富ませる、主はこれになんの悲しみをも加えない。」^{四三}

「富と誉とはわたしにあり、すぐれた宝と繁栄もまたそうである。」^{四三}と知恵の神は仰せになっている。

聖書の中にはまた、神と人に対して正しい原則からはなれた態度をとるときに生ずる結果について示されている。神の賜物を委託されていながら、神のご要求に無関心な者に対して、神はこう仰せになっている。

「あなたがたは自分のなすべきことをよく考えるがよい。あなたがたは多くまいても、取入れは少なく、食べても、飽きることはない。飲んでも、満たされない。着ても、暖まらない。賃銀を得ても、これを破れた袋に入れているようなものである。……あなたがたは多くを望んだが、見よ、それは少なかった。あなたがたが家に持ってきたとき、わたしはそれを吹き払った。」^{四四}「あの時には、二十柵の麦の積まれる所に行ったが、わずかに十柵を得、また五十桶をくもうとして、酒ぶねに行ったが、二十桶を得たのみであつた。」^{四五}「これは何ゆえであるかと、万軍の主は言われる。これはわたしの家が荒れはてているのに」^{四六}「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物をもつてである。」^{四七}「それゆえ、あなたがたの上の天は露をさし止め、地はその産物をさし止めた。」^{四八}

「あなたがたは貧しい者を踏みつけ、……切り石の家を建てても、その中に住むことはできない。美しいぶどう畑を作っても、その酒を飲むことはできない。」^{四九}「主はあなたが手をくだすすべての働きにのろいと、混乱と、懲らしめとを送られ」^{五〇}「あなたのおすこや娘は他国民にわたされる。あなたの目はそれを見、終日、彼らを慕って衰えるが、あなたの手を施すすべもないであろう。」^{五一}

「不正な財産を得る者がある。その人は一生の半ばにそれから離れて、その終りには愚かな者となる。」^{四九}

すべての業務の会計、すなわちすべての取り引きの明細は、目に見えない検査官たちの監査をつける。彼らは神の代理者である。神は決して不正と妥協せず、不義をみのがさず、悪を軽視なさない。

「あなたは国のうちに貧しい者をしえたげ、公道と正義を曲げることのあるのを見ても、その事を怪しんではならない。それは位の高い人よりも、さらに高い者があつて、その人をうかがうからである。」^{五〇}「悪を行う者には身を隠すべき暗やみもなく、暗黒もない。」^{五一}

「その口を天にさからつて置き、…彼らは言う、『神はどうして知り得ようか、いと高き者に知識があるうか』と。」「あなたがこれらの事をしたのを、わたしが黙っていたので、あなたはわたしを全く自分とひとしい者と思った。しかしわたしはあなたを責め、あなたの目の前にその罪をならべる」^{五二}と神は仰せになっている。

「わたしがまた目をあげて見ていると、飛んでいる巻物を見た。…『これは全地のおもてに出て行く、のろいの言葉です。すべて盗む者はこれに照して除き去られ、すべて偽り誓う者は、これに照して除き去られるのです。万軍の主は仰せられます、わたしはこれを出て行かせる。これは盗む者の家に入り、またわたしの名をさして偽り誓う者の家に入り、その家の中に宿つて、これをその木と石と共に滅ぼす』と。」^{五三}

悪事をなすすべてのものに対して、神の律法は有罪の宣告をくだす。その声をきくまいとしても、その警告をつち消そうとしても無駄である。その声は彼を追いかけ、彼の耳に鳴りつづけ、彼の平和を滅ぼす。これに心を留めなければ、死ぬまで彼につきまとう。それは審判のときに、彼に不利な証言をたてる。それは

消すことのできない火で、ついには魂と肉体を焼きつくすのである。

「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。」^{五四}

これは、親も教師も生徒も、老人も青年も、すべての人が考えなければならない問題である。どんな商売の計画も人生の目的も、それが現世の短い年月だけに限られたものであって、永遠の未来のために準備するものでないならば、それは健全であることも完全であることも不可能である。青少年たちは永遠ということを考えの中に入れるように教えられなければならない。彼らは、原則をえらび、永遠に保つ財産を求めるように、すなわち、「盗人も近ならず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝をたくわえなさい」と言われている宝をたくわえ、「不正の富を用いても、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう」とある友をつくるように教えられなければならない。^{五五}

この戒めに従う者は、この世の生活のために最善の準備をしているのである。われわれは天に宝を蓄積するとき、この世の生活も必ずそれによって豊かになり高潔になることを見いだすであろう。

「信心は、今のいのちと後の世のいのちとが約束されてあるので、万事に益となる。」^{五六}

索引

一	歳言一〇ノ九	二一	創世記二八ノ二二
二	箴言二二ノ二九	二二	マラキ書三ノ一〇
三	歳言一四ノ二三	二三	コリント人への第一の手紙四ノ二
四	箴言一三ノ四 二三ノ二一	二四	ガラテヤ人への手紙五ノ一三
五	箴言二〇ノ一九	二五	マタイによる福音書二五ノ四〇
六	箴言四ノ一四 六ノ二八	二六	ローマ人への手紙一ノ一四
七	箴言一三ノ二〇 一八ノ二四・英語欽定訳による。	二七	箴言一ノ二四
八	マタイによる福音書七ノ一二	二八	伝道の書一ノ一
九	箴言二八ノ二〇	二九	箴言一二ノ二五
一〇	箴言一三ノ一	三〇	箴言二三ノ四、五
一一	箴言二一ノ六	三一	ルカによる福音書六ノ三八
一二	箴言二二ノ七	三二	箴言三ノ九、一〇
一三	箴言一一ノ一五	三三	マラキ書三ノ一〇―一二
一四	箴言二三ノ一〇、一一	三四	レビ記二六ノ三―六
一五	箴言二二ノ一六 二六ノ二七	三五	イザヤ書一ノ一七
一六	詩篇一一九ノ七二	三六	詩篇四一ノ一、二
一七	マルコによる福音書一三ノ三四・文語訳	三七	箴言一九ノ一七
一八	コリント人への第一の手紙三ノ九	三八	詩篇三七ノ一八、一九
一九	マタイによる福音書六ノ三一―三三	三九	詩篇一五ノ二―四
二〇	レビ記二七ノ三〇、三二	四〇	イザヤ書三三ノ一五―一七

四一 ヨブ記二九ノ四―一六 三一ノ三二
 二九ノ二―二五
 四二 箴言一〇ノ二二
 四三 箴言八ノ一八
 四四 ハガイ書一ノ五―九 二ノ一六 一ノ九
 四五 マラキ書三ノ八
 四六 ハガイ書一ノ一〇
 四七 アモス書五ノ一
 四八 申命記二八ノ二〇、三二

四九 エレミヤ書一七ノ一
 五〇 伝道の書五ノ八
 五一 ヨブ記三四ノ二二
 五二 詩篇七三ノ九―一四 五〇ノ二一
 五三 ゼカリヤ書五ノ一―四
 五四 マルコによる福音書八ノ三六、三七
 五五 ルカによる福音書一二ノ三三 一六ノ九
 五六 テモテへの第一の手紙四ノ八

聖書の伝記

「彼らは信仰によつて、国々を征服し、義を行い、…弱いものは強くされ。」^一

聖書の中で、教育上最も価値のある部分はその伝記である。これらの伝記は、絶対にありのままの生活を描いてある点において他の伝記と類を異にしている。有限な人間の頭脳では、他人の行為を、何から何まで、正しく解釈することはできない。人の心を読み、動機と行為のかくれた源を見分けられる神よりほかには、だれも絶対にまちがいに品性を描くことも、人生のありのままの姿を伝えることもできない。このような描写はただ神のみ言葉である聖書の中にだけみられる。

聖書に、行為は人格のあらわれであると教えられているが、これほどはっきりした真理はない。人生の経験の大部分は、われわれ自身の思想や行為が実を結んだものである。

「いわれのないのろいは…止まらない。」^二

「正しい人に言え、彼らはさいわいであると。…悪しき者はわざわざいだ、彼は災をうける。その手のなした事が彼に報いられるからである。」^三

「地よ、聞け。見よ、わたしはこの民に災をくだす。それは彼らのたくらみの実である。」^四

これは恐るべき真理で、深く心に刻みこまなければならない。どんな行為もかならずそれをなした本人自身の上に返って来る。自分の一生に災いを及ぼしている悪は、自らまいた種が実を結んだものであることを、人は認めないわけにはゆかない。しかしそうであっても、望みがないわけではない。

ヤコブは、神の約束によってすでに自分のものであつた家督権を手に入れようとして、詐欺行為をやつたために兄の憎しみという収穫を刈りとつた。かれ自身は、二十年の間異郷の地にあつて、虐待され、欺かれたあげく、ついには身の安全を図るために逃げ出さなければならなかつた。さらに彼は、自分自身の品性の悪が子供たちの中に芽を出すに及んで第二の収穫を刈りとつた。それはすべて人の世における因果応報の眞実な姿にすぎない。

しかし神は仰せになっている。「『わたしはかぎりなく争わない、また絶えず怒らない。霊はわたしから出、いのちの息はわたしがつくつたからだ。彼のおさぼりの罪のゆえに、わたしは怒って彼を打ち、わが顔をかくして怒つた。しかし彼はなおそむいて、おのが心の道へ行つた。わたしは彼の道を見た。わたしは彼をいやし、また彼を導き、慰めをもって彼に報い、…遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ、わたしは彼をいやそう』と主は言われる。」^五と。

ヤコブは、苦難の中にあつてくじけなかつた。彼は悔い改め、兄への罪を償うために努力した。そして、エサウの怒りのために殺される危険を感じたときに、神に助けをもとめた。「彼は天の使と争つて勝ち、泣いてこれにあわれみを求めた。」「その所で彼を祝福した」^六とある。罪を許されたヤコブは、神の力によって

もはやおしのける者としてではなく、神と共なる君として立ち上がった。彼は兄の怒りから救われたばかりでなくまた自分自身から救われたのである。彼自身の中にある悪の力はうち破られ、彼の品性は一変した。

晩年にも光があつた。ヤコブは、自分の一生の歴史をふりかえってみて、そこに神の力、すなわち「生れてからきょうまでわたしを養われた神、すべての災からわたしをあがなわれたみ使」^七のささえの力を認めた。ヤコブの子供たちの歴史の中には、同じ経験——罪の報いと、そしてまた義の実をむすんで生命にいたらせる悔い改めとがくりかえされている。

神は、ご自身の法律を取り消すようなことはなさらない。神は律法に反して行動するようなことはなさらない。神は罪の働きを白紙にかえすようなことはなさらないが、しかしそれを一変させたものである。神の恩恵によって、災いは福となるのである。

ヤコブのむすこたちの中で、レビは、最も残忍でふくしゅう心が強く、シケムの町の人たちを欺いて殺したふたりの犯人の中のひとりである。レビの特性はその子孫に反映し、彼らは、神から「わたしは彼らをヤコブのうちに分け、イスラエルのうちに散らそう」^八と宣告された。しかしレビの部族は、悔い改めて改革し、他の部族の背信のさなかにあっても、神への忠誠を保ったために、のろいは変わって最高の榮譽のしるしとなった。

「その時、主はレビの部族を選んで、主の契約の箱をかつぎ、主の前に立って仕え、また主の名をもって

祝福することをさせられた。」^九「彼と結んだわが契約は、生命と平安との契約であつて、わたしがこれを彼に与えたのは、彼にわたしを恐れさせるためである。彼はすでにわたしを恐れ、わが名の前にあなのいた。：彼は平安と公義とをもつて、わたしと共に歩み、また多くの人を不義から立ち返らせた。」^{一〇}

聖所の奉仕に任命されたレビ人には、土地の相続権は与えられなかった。彼らは自分たちのために定められた町々にいっしょに住み、神の奉仕のためにささげられた十分の一やその他のささげ物によつて生活を維持した。彼らは民の教師であり、祭礼には招かれて客となり、どこへ行つても神のしもべまた代表者として尊敬された。イスラエルのすべての民につきのような命令が与えられた。「慎んで、あなたが世に生きながらえている間、レビ人を捨てないようにしなければならない。」「レビは兄弟たちと一緒に分け前がなく、嗣業もない。あなたの神、主が彼に言われたとおり、主みずからが彼の嗣業であつた。」^{一一}

人は、「その心に思うごとくその人となりもまたしか」^{一二}りという真理について、もう一つの実例がイスラエル人の経験の中にみられる。カナンの国境で、斥候たちは、偵察から帰つてその報告をした。彼らはカナン^{一三}の占領に予想される困難さばかり心を奪われて、その美しさと豊かさを見落としていた。天にそびえる城壁にかこまれた町、巨人の戦士たち、鉄の戦車などをみて、彼らの信仰は揺らいだ。多くの人々は、この問題について神のことを考えに入れないで、「わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです」^{一四}という不信な斥候たちの断定に共鳴した。彼らの言葉はその通りに

なった。彼らは、攻め上ることができないままに、おなしく荒野に一生を終わつたのである。

しかしながら、カナンの土地をながめた十二人の中で、ふたりだけが異なつた意見をのべた。彼らは、神の約束が巨人や城壁の町や鉄の戦車にまさるものであることを信じて、「わたしたちはすぐにのぼつて、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます」と言い張つた。^{二三}このふたりにとってその言葉は事実となった。カレブとヨシユアは、イスラエルの民とともに、四十年間さすらいつづけたが、ついに約束の地にはいることができた。エホバの軍勢とともにエジプトを出発した時と同じ勇敢な心をもって、カレブは巨人たちの要塞をもとめ、これを分け前として与えられた。彼は、神の力によつてカナン人を追いはらつた。彼の足が踏んだぶどう畑とオリーブの森は彼の所有となった。臆病者や反逆者は荒野に滅びたが、信仰の人たちはエシコルのぶどうを食べたのであつた。

正しいことから一步でも離れることの危険について、——それは過失を犯す本人自身にも、その影響を受けるすべての人にも危険であるということについて、聖書の中にこれほどはっきりした光を与えられている真理はない。手本というものはふしぎな力をもっていて、これがわれわれの性格の悪い面に影響を及ぼすとき、それはほとんど抵抗し難いものとなる。

世の中で最も根強い悪徳のとりでは、すてばちな罪人や卑劣なごろつきたちの邪悪な生活ではなくて、表面善良な尊敬すべきりっぱな生活にみえながら、実は心の中に一つの罪を宿し、一つの悪徳におぼれている生活がそれである。ある大きな誘惑に対して人知れず戦い、破滅の淵に恐れおののいている魂にとって、こ

のような手本は罪への最も強力な誘惑となる。人生と真理と名誉について高い観念を持っていながら、しかもなお神の聖なる律法の一つを故意に犯している者は、そのとうとい賜物を悪用して罪への誘惑としているのである。天分や才能や同情や、寛大で親切な行為さえも、このようにして魂を破滅の淵へおびきよせるサタンのおとりとなり得るのである。

神が多くの例をあげて、ただ一つの悪の行為の結果を示されたのはこのためである。一つの罪のゆえにエデンが失われ、この世に死と悲しみがもたらされた不幸な物語から、銀三十枚で栄光の主を売った男の記録にいたるまで、聖書の伝記はこうした多くの実例に満ちて、生命の道から横道へそれる人々への警告の標識となっている。

人間の弱さや過失にたった一度でも負けたならば、どんな結果が生ずるか、信仰から離れた結果がどんなものであるかに注目することにもまた訓戒となるものがある。

エリヤは、たった一度信仰が足りなかったために、一生の働きを途中でやめなければならなかった。彼はイスラエル人のために重荷を背負い、国をあげての偶像礼拝に向かって、熱心に警告し、三年半にわたる飢さんのあいだ、深い心配の中に悔い改めのしるしが現われるのを見守り待ち続けた。彼はただひとりで神のためにカルメル山上に立った。信仰の力によって、偶像礼拝は放棄され、イスラエルの上にそそがれるのを待っている祝福を表わすかのように雨が降った。その後のエリヤは、疲れと弱さのために、イゼベルにおど

かされて逃げ出し、ひとり荒野にあつて死にたいと祈った。彼は信仰を失っていた。彼は、やり始めた働きを仕上げる事ができなくなった。そこで神は、他の人にあぶらを注いで彼の代わりに預言者とするようにお命じになった。

しかし神は、ご自分のしもべの真心からの奉仕に目を止められた。神はエリヤを失望と孤独の中に荒野に死なせたまわなかった。彼は墓にくだらず、神の天使たちとともに栄光のみ座の前に昇天させられた。

これらの一生の記録は、すべての人間がいつかは悟らなければならない事ながらを物語っている。すなわち、罪はただ恥と損失をまねくだけであるということ、不信は失敗のもとであるということ、しかし神のあわれみは、どんなに深いところでも、その一番底まで届くということ、悔い改めた魂は信仰によつて高められ、神の子として迎えられるということである。

この世において、神や人類のために真の奉仕をなす者はすべて苦難という学校にあつて準備の訓練を受ける。責任が重ければ重いほど、高い奉仕であればあるほど、その試練は激しく、鍛練はきびしい。ヨセフやモーセ、ダニエルやダビデの経験を学んでいただきたい。ダビデの少年時代の生活とソロモンの生活とを比べて、その結果を考えていただきたい。

ダビデは少年時代からサウルと親しく交わり、宮廷で、王家の人々と接していたために、王者のきらびやかさと、はなやかさの中にかくされている苦悩や悲しみや複雑さを見ぬいていた。彼は、人間の栄誉が魂に

平安を与えることには何の価値もないものであることを悟った。そして王の宮廷から牧場の羊の群れにもどったときに、彼は安心し、そして喜んだ。

サウル王のねたみのために、追われて荒野に逃げたダビデは、人間の助けから切り離されて、ますます深く神により頼むことを学んだ。荒野の生活は不安で落ちつきがなく、たえず危険に迫られ、幾度となく逃げ出さなければならず、しかもそのダビデのもとに集まって来るのは、「しえたげられている人々、負債のある人々、心に不満のある人々」などといったような性格の人々ばかりであった。こうしたすべてのことのために、彼にとってきびしい自己鍛練がますます必要であった。これらの経験によって人を取り扱う能力やしいたげられる者への同情心や、不正への憎しみがダビデの中にめざめて成長した。待望と危険の幾年間を通じて、ダビデは慰めと支持と生命を、神の中に見いだすことを学んだ。彼は、神の力によってのみ王位にふさわしい者となり、神の知恵によってのみ賢明に統治し得るということを知った。ダビデが「そのすべての民に正義と公平を行った」^{一五}という記録を残すことができたのは、——もっともそれは後になって、大きな罪のために傷つけられはしたが、——困難と苦悩という学校で受けた訓練の賜物であった。

ソロモンは、ダビデとちがって、若い時から鍛練されるという経験を持たなかった。彼は境遇においても品性においても生活においても、他のだれよりも恵まれていた。高貴な身分に生まれて成人し、神に愛されたソロモンは、繁栄と栄誉を約束された統治の位についた。諸国の民は、神が知恵をお与えになったソロモンの知識と洞察力に驚嘆した。しかし繁栄の誇りはやがて神からの離反をもたらした。神と交わる喜びから

離れて、ソロモンは官能の快樂に満足をもとめた。この経験について、彼はこう言っている。

「わたしは大きな事業をした。わたしは自分のために家を建て、ぶどう畑を設け、園と庭をつくり、……わたしは男女の奴隷を買った。……わたしはまた銀と金を集め、王たちと国々の財宝を集めた。またわたしは歌うたう男、歌うたう女を得た。また人の子の楽しみとするそばめを多く得た。こうして、わたしは大いなる者となり、わたしより先にエルサレムにいたすべての者よりも、大いなる者となった。……なんでもわたしの目の好むものは遠慮せず、わたしの心の喜ぶものは拒まなかった。わたしの心がわたしのすべての労苦によって、快樂を得たからである。……そこで、わたしはわが手のなしたすべての事、およびそれをなすに要した労苦を顧みたとき、見よ、皆、空であつて、風を捕えるようなものであつた。日の下には益となるものはないのである。わたしはまた、身をめぐらして、知恵と、狂気と、愚痴とを見た。そもそも、王の後に来る人は何をなし得ようか。すでに彼がなした事にすぎないのだ。……」

「わたしは生きることをつた。……わたしは日の下で労したすべての労苦を憎んだ。」^{一六}

ソロモンは自分のにがい経験を通して、物質に最高の幸福を求める人生がどんなに空虚なものであるかを知った。彼は異教の神々に祭壇を築いたが、それらの神々の約束する魂の平安がどんなにおなしものであるかを知っただけであつた。

晩年になって、疲れ果てたソロモンは、この世のこわれた水おけにかわきをいやすことができなくなって生命の泉に水をもとめて立ち帰った。彼は聖霊の感動によって後世の人々のために、自分のおなしく過ごし

た年月の歴史を警告の戒めとともに書きしるした。こうして、ソロモンのまいた種は、悪の収穫となってイスラエルの民に刈りとられたが、しかし彼の一生の働きは全く滅びてしまったわけではなかった。苦難の鍛練が彼のために、ついに効果をあらわしたのであった。

しかし苦難というものが人々の一生に教えている人生の教訓を、もしソロモンが若い時から学んでいたなら、あのような輝かしい人生の出発をした彼の人生の真盛りは、どんなに光輝に満ちたものとなったことであらう。

「神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たち」^{一七}のためには、聖書の伝記は、苦悩の奉仕についてさらにもっと深い教訓をもっている。「『あなたがたはわが証人である』と主は言われる。」^{一八}われわれは、神が恵み深いかたであることと、その恵みのとうとさについての証人である。「わたしたちは、：
：天使にも人々にも見せ物にされたのだ」^{一九}とある。

神の国の原則である無我の精神は、サタンの憎む原則で、サタンはそういう原則はあり得ないと否定する。大争闘が始まって以来、サタンは神の行為の原則が利己的であることを証拠だてようと努力してきた。彼はまた神に仕えるすべての人に同様な態度で接している。このサタンの主張をはんばくすることがキリストの働きであり、キリストの名を持つすべての者の働きである。

キリストが人の姿をとってこの世においでになったのは、ご自身の一生を通して、この無我の精神を實際

に示すためであった。この原則を受け入れるすべての者は、キリストと共なる働き人となって、これを日常生活に実践しなければならない。正しいことはあくまでも正しいとし、どんな苦難や犠牲を払っても真実をつらぬくことである。『これが主のしもべらの受ける嗣業であり、また彼らがわたしから受ける義である』と主は言われる^{二〇}とある。

世界歴史の古い時代に、サタンとこの争闘を交えたひとりの人間の一生の記録が残されている。

人の心をさぐられる神は、ウズの族長ヨブについてこう証言しておられる。「ヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にない^{二一}」と。

サタンは、ヨブをあざけてこう非難した。「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか。…あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃つてごらんなさい。」「彼の骨と肉とを撃つてごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう^{二二}」。

神はサタンに仰せになった。「見よ、彼はあなたの手にある。ただ彼の命を助けよ^{二三}」と。

こうして許しを得たサタンはヨブの所有物を、家畜、奴婢、おすこ娘にいたるまで一切を奪い、さらに「ヨブを撃ち、その足の裏から頭の頂まで、いやな腫物をもって彼を悩ました^{二四}」とある。

さらにまた、ヨブの杯にはもっと他のにが味が加えられた。逆境は罪の報いであるとしか考えることのできない人たちは、傷つき重荷を負っているヨブを、お前が悪いことをしたからだと非難して、その苦しみを

増し加えた。

天地から見放されたようにみえながらも、なお神への信仰と正しい良心を堅く持ちつづけていたヨブは、苦悩と当惑の中にこう叫んでいる。

「わたしは自分の命をいとう。」

「どうぞ、わたしを陰府にかくし、

あなたの怒りのやむまで、潜ませ、

わたしのために時を定めて、わたしを覚えてください。」^三

「見よ、わたしが『暴虐』と叫んでも答えられず、

助けを呼び求めても、さばきはない。…

彼はわたしの栄えをわたしからはぎ取り、

わたしのこうべから冠を奪い、…

わたしの親類および親しい友はわたしを見捨て、…

わたしの愛した人々はわたしにそむいた。…

わが友よ、わたしをあわれめ、わたしをあわれめ、

神のみ手がわたしを打ったからである。」^三

「どうか、彼を尋ねてどこで会えるかを知り、そのみ座に至ることができるよう。…」

見よ、わたしが進んでも、彼を見ない。

退いても、彼を認めることができない。

左の方に尋ねても、会うことができない。

右の方に向かつて、見ることもできない。

しかし彼はわたしの歩む道を知っておられる。

彼がわたしを試みられるとき、わたしは金のように出て来るであろう。」^{二四}

「彼がわたしを殺すともわたしは彼によりたのもう。」^{二五}

「わたしは知る。わたしをあがなう者は生きておられる、

後の日に彼は必ず地の上に立たれる。

わたしの皮がこのように滅ぼされたのち、

わたしは肉を離れて神を見るであろう。

しかもわたしの味方として見るであろう。

わたしの見る者はこれ以外のものではない。」^{二六}

すべては、ヨブの信仰通りになった。「彼がわたしを試みられるとき、わたしは金のように出て来るであろう」と彼は言った。^{二七}そしてその通りになった。彼は、根強い忍耐をもって自分の品性を擁護し、そしてまた自分の代表している神のご品性を擁護した。このようにして、「主はヨブの繁栄をもとにかえし、そして主はヨブのすべての財産を二倍に増された。…主はヨブの終りを初めよりも多く恵まれた」^{二八}のである。

自己をすててキリストの苦難にあずかった人々の記録に、旧約にヨナタン、新約にバプテスマのヨハネがそれぞれ名をつらねている。

生まれながらにして王位の継承者であったヨナタンは、神のご命令によって自分が退けられたことを知りながら、競争者に対して友としての愛情と忠誠を示し、自ら生命の危険を冒してまでダビデの生命をかばい、父の勢力が衰えてゆく暗い時代にも父のそばからはなれず、ついには父と運命を共にしたのであった。ヨナタンの名は天にとどめられるとともに、地にあっては、無我の愛の存在と力を実証している。

バプテスマのヨハネがメシヤの先駆者として現われた時、国民はわき立った。彼の行くさきざきには、あらゆる階級あらゆる地位の人々が群れをなして従った。しかし、彼があかしをたてていたキリストが現われると同時に事情は一変した。群衆はイエスに従い、ヨハネの働きは急速に終わりを告げていくようにみえた。しかし、ヨハネの信仰は動揺しなかった。「彼は必ず栄え、わたしは衰える」と^{二九}彼は言った。

年月は過ぎたが、しかしヨハネが確信をもって待望していた王国は建設されなかった。生気をあたえる空

氣と荒野の自由から断たれたヘロデの牢獄の中で、彼は待望しそして見守りつづけた。

武力の誇示もみられなければ、牢獄のとびらの破壊もなく、ただ病人をいやすことと、福音を述べ伝えることと、人の魂を高めることがキリストの使命を証拠だてていた。

牢獄の中でただひとり、救い主の道と同じように、自分の道の行きつくさきを見きわめたヨハネは、キリストと犠牲をともにするという信任を受け入れた。天の使者たちは、ヨハネが死ぬまでそばにつきそった。宇宙の知者たちは、この世の人々も、他世界の聖者たちも、みな一緒に彼が無我の奉仕を守り通したことを目撃したのであった。

その後、各時代を通じて、苦難の中にある魂は、ヨハネの一生の証言によって、ささえられたのであった。人々はキリストから「女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった」と宣言された彼のことを記憶することによって、牢獄の中でも絞首台の上でも炎の中でも、暗黒の幾世紀間を通して力づけられてきたのである。

「このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、…サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、父の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。

女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるた

めに、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。なおほかの者たちは、あざけられ、おち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ（この世は彼らの住む所ではなかった）、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっているのです、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。」^三

索引

一	ヘブル人への手紙一一ノ三三 三四	一二	箴言二三ノ七・文語訳
二	箴言二六ノ二	一三	民数記一三ノ三一、三〇
三	イザヤ書三ノ一〇、一一	一四	サムエル記上二二ノ二
四	エレミヤ書六ノ一九	一五	サムエル記下八ノ一五
五	イザヤ書五七ノ一六―一九	一六	伝道の書二ノ四―一二、一七、一八
六	ホセア書一二ノ四 創世記三二ノ二九	一七	ローマ人への手紙八ノ二八
七	創世記四八ノ一五、一六	一八	イザヤ書四三ノ一二
八	創世記四九ノ七	一九	コリント人への第一の手紙四ノ九
九	申命記一〇ノ八	二〇	イザヤ書五四ノ一七
一〇	マラキ書二ノ五、六	二一	ヨブ記一ノ八一―一二ノ五―七
一一	申命記一二ノ一九 一〇ノ九	二二	ヨブ記一〇ノ一 一四ノ一三

二三 ヨブ記一九ノ七一
 二四 ヨブ記二三ノ三一〇
 二五 ヨブ記一三ノ一五・英語欽定訳
 二六 ヨブ記一九ノ二五―二七
 二七 ヨブ記二三ノ一〇

二八 ヨブ記四二ノ一〇―二
 二九 ヨハネによる福音書三ノ三〇
 三〇 マタイによる福音書一ノ一
 三一 ヘブル人への手紙一ノ三二―四〇

詩と歌

「あなたの定めはわが旅の家で、わたしの歌となりました。」

聖書の中には、人類に知られるかぎり最も古くそして最も崇高な詩の調べが見いだされる。この世の一ばん古い詩人たちが歌う前に、ミデアンの牧者モーセは、ヨブに対する神のみ言葉をつぎのようにしるしているが、それは天才的な人間がつくり出したどんな最高の作品もこれに及ぶことも比べることもできない荘厳な調子を持っている。

「わたしが地の基をすえた時、どこにいたか。…

海の水が流れ…出たとき、だれが戸をもって、これを閉じこめたか。

あの時、わたしは雲をもって衣とし、黒雲をもってむつきとし、

これがために境を定め、関および戸を設けて、

言った、『ここまで来てもよい、越えてはならぬ、

おまえの高波はここにとどまるのだ』と。

あなたは生まれた日からこのかた朝に命じ、
夜明けにその所を知らせ……たことがあるか。

あなたは海之源に行ったことがあるか。……

淵の底を歩いたことがあるか。

死の門はあなたのために開かれたか。

あなたは暗黒の門を見たことがあるか。

あなたは地の広さを見きわめたか。

もしこれをことごとく知っているならば言え。

光のある所に至る道はいずれか。

暗やみのある所はどこか。……

あなたは雪の倉にはいったことがあるか。

ひよりの倉を見たことがあるか。……

光の広がる道はどこか。

東風の地に吹き渡る道はどこか。

だれが大雨のために水路を切り開き、

いかずちの光のために道を開き、

人なき地にも、人なき荒野にも雨を降らせ、

荒れすたれた地をあき足らせ、

これに若草をはえさせるか。…

あなたはプレアデスの鎖を結ぶことができるか。

オリオンの綱を解くことができるか。

あなたは十二宮をその時にしたがって引き出すことができるか。

北斗とその子星を導くことができるか。」^二

雅歌には、春の季節が美しく表現されている。

「見よ、冬は過ぎ、

雨もやんで、すでに去り

もろもろの花は地にあらわれ、

島のさえずる時がきた。

山ばとの声がわれわれの地に聞える。

いちじくの木はその実を結び、

ぶどうの木は花咲いて、

かんばしいにおいを放つ。

わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立って、出てきなさい。」^三

バラムが、イスラエルのために、不本意ながら祝福の預言をしたときの言葉も、これに劣らない美しさを
持っている。

「バラクはわたしをアラムから招き寄せ、

モアブの王はわたしを東の山から招き寄せて言う、

『きてわたしのためにヤコブをのろえ、

きてイスラエルをのろえ』と。

神ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。

主ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。

岩の頂からながめ、

丘の上から見だが、

これはひとり離れて住む民、

もろもろの国民のうちに並ぶものはない。」

「祝福せよとの命をわたしはうけた、

すでに神が祝福されたものを、わたしは変えることができない。

だれもヤコブのうちに災のあるのを見ない、

またイスラエルのうちに悩みのあるのを見ない。

彼らの神、主が共にいまし、

王をたたえる声がその中に聞える。…

ヤコブには魔術がなく、

イスラエルには占いがなく、

神がそのなすところを時に応じてヤコブに告げ、

イスラエルに示されるからだ。」

「神の言葉を聞く者、

全能者の幻を見る者…の言葉。

ヤコブよ、あなたの天幕は麗しい、

イスラエルよ、あなたのすまいは、麗しい。

それは遠くひろがる谷々のよう、

川べの園のよう、

主が植えられた沈香樹のよう、

流れのほとりの香柏のようだ。」

「神の言葉を聞く者、

いと高き者の知識をもつ者、…

わたしは彼を見る、しかし今ではない。

わたしは彼を望み見る、しかし近くではない。

ヤコブから一つの星が出、

イスラエルから一本のつえが起り、…

権を執る者がヤコブから出…るであらう。」^四

賛美の調べは、天のふんいきである。天が地に交わる時に、そこには音楽と歌——「感謝と歌の声」^五とがある。

神のほほえみのもとに、美しく汚れなくひろがっている新しい地に、「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」とある。このように、天と思いを一つにする人間の心は、神の恩恵に賛美の歌をもってこたえてきた。人間の歴史におけるいろいろな事件には、歌にうたわれているものが少なくない。

人々の口から出た歌で、聖書にしろされている最も古い歌は、紅海のほとりでイスラエルの万軍の中からわきあがった輝かしい感謝の叫びであった。

「主にむかってわたしは歌おう、

彼は輝かしくも勝ちを得られた、

彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた。

主はわたしの力また歌、

わたしの救となられた、

彼こそわたしの神、わたしは彼をたたえる、

彼はわたしの父の神、わたしは彼をあがめる。」

「主よ、あなたの右の手は力をもつて栄光にかがやく、

主よ、あなたの右の手は敵を打ち砕く。…

主よ、神々のうち、だれがあなたに比べられようか、
だれがあなたのように、聖にして栄えあるもの、
ほむべくして恐るべきもの、くすしきわざを行うものであろうか。」

「主は永遠に統べ治められる。…

主にむかつて歌え、

彼は輝かしくも勝ちを得られた。」^七

賛美の歌に応ずることによって、人々は大きな祝福をうけてきた。イスラエル人の荒野の旅の経験を述懐した短い言葉は、一考に価する教訓を持っている。

「彼らはそこからベエルへ進んで行った。これは主がモーセにむかつて、『民を集めよ。わたしはかれらに水を与えるであろう』と言われた井戸である。その時イスラエルはこの歌をうたった。

『井戸の水よ、わきあがれ、人々よ、この井戸のために歌え、

笏とつえとをもって

つかさたちがこの井戸を掘り、

民のおさたちがこれを掘った。』^八

このできごとは、われわれの霊的な経験にどんなにしばしばくり返されることであろう。聖歌の言葉によって、われらの魂の中に、悔い改めと信仰、希望と愛と喜びの泉が開かれることがどんなに多いことであろう。

ヨシャパテにひきいられたイスラエルの軍勢は、賛美の歌をうたいながら、大いなる救いに向かつて進んだ。ヨシャパテはすでに敵の来襲の知らせを受けていた。それは「モアブびと、アンモンびと……大軍があなたに攻めて来ます^九」という知らせであった。「そこでヨシャパテは恐れ、主に顔を向けて助けを求め、ユダ全国に断食をふれさせた。それでユダはこぞって集まり、主の助けを求めた。すなわちユダのすべての町から人々が来て主を求めた^九」とある。そこでヨシャパテは、神殿の庭で、人々の前に立って、魂をかたむけて祈り、イスラエルの無力を告白して、神の約束によりすぎた。「われわれはこのように攻めてくる大軍に当る力がなく、またいかになすべきかを知りません。ただ、あなたを仰ぎ望むのみです^九」と、彼は言った。

その時レビ人やハジエルに、エホバの霊が臨んだ。「ヤハジエルは言った、『ユダの人々、エルサレムの住民、およびヨシャパテ王よ、聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられる、「この大軍のために恐れてはならない。おのいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。……この戦いには、あなたがたは戦うに及ばない。……あなたがたは進み出て立ち、あなたがたと共におられる主の勝利を見なさい。恐れてはならない。おのいてはならない。あす、彼らの所に攻めて行きなさい。主はあなたがたと共におられるからである^{一〇}」。』」

「彼らは朝早く起きてテコアの野に出て行った^二」とある。軍勢の先頭には歌をうたう人たちが、声をあげ

て神を賛美し、約束された勝利をたたえながら進んで行った。

それから四日目に、イスラエルの軍勢は、敵の戦利品を山と積んで、勝利の歌声をひびかせながら、エルサレムに帰ってきたのであった。

浮き沈みの多いさだめない人生のさなかに、ダビデは歌を通して天との交わりをつづけた。彼の詩篇には、羊飼いの少年としての経験が美しい言葉となって反映している。

「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。

主はわたしを緑の牧場に伏させ、

いこいのみぎわに伴われる。…

たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、

わざわざを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。

あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。」^{二二}

成人して、追跡を受ける逃亡の身となり、荒野の岩の間やほら穴にかくれ家をもとめた時に、ダビデはこう書いている。

「神よ、あなたはわたしの神、わたしは切にあなたをたずね求め、わが魂はあなたをかわき望む。

水なき、かわき衰えたる地にあるように、

わが肉体はあなたを慕いこがれる。…

あなたはわたしの助けとなられたゆえ、

わたしはあなたの翼の陰で喜び歌う。」^{二三}

「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。

何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。

神を待ち望め。

わたしはなおわが助け、わが神なる主をほめたたえるであろう。」^四

「主はわたしの光、わたしの救だ、

わたしはだれを恐れよう。

主はわたしの命のとりでだ。

わたしはだれをおじ恐れよう。」^五

アブサロムのはん乱にあつて、王位を追われたダビデが、エルサレムから逃げ出したとき書きしるした言葉の中にも、同じ信頼感が脈打っている。逃亡と悲哀と疲れに消耗しきつた彼は、連れの一行とともにヨルダン川のほとりに足を止めてしばらく休息をとっていた。すると突然、逃げろという叫び声に目がさめた。暗黒の中を男女子供たちの一行をひきつれて、流れの早い深い川を渡って逃げなければならなかった。すぐ後には反逆者のむすこの軍勢が迫っていた。

この暗黒の試練のさなかにダビデはこう歌っている。――

「わたしが声をあげて主に呼ばわると、

主は聖なる山からわたしに答えられる。

わたしはふして眠り、また目をさます。

主がわたしをささえられるからだ。

わたしを囲んで立ち構える

ちよろずの民をもわたしは恐れない。」^{一六}

大きな罪を犯した後、悔恨と自己嫌悪の思いの中にもなお彼は神を最上の友として仰いでいる。――

「神よ、あなたのいつくしみによって、わたしをあわれみ、

あなたの豊かなあわれみによって、わたしのもろもろの**とが**をぬぐい去ってください。…

ヒソプをもって、わたしを清めてください、

わたしは清くなるでしょう。

わたしを洗ってください、

わたしは雪よりも白くなるでしょう。」^{一七}

ダビデは長い一生の間、地上にいいこの場所を見いだすことができなかった。「われわれはあなたの前ではすべての先祖たちのように、旅びとです、寄留者です。われわれの世にある日は影のようで、長くとどまることができません」^{一八}と、彼は言っている。

「神はわれらの避け所また力である。

悩める時のいと近き助けである。

このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。

一つの川がある。その流れは神の都を喜ばせ、

いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。

神がその中におられるので、都はゆるがない。

神は朝はやく、これを助けられる。…

万軍の主はわれらと共にあられる、

ヤコブの神はわれらの避け所である。^{一九}

「これこそ神であり、世々かぎりなくわれらの神であつて、

とこしえにわれらを導かれるであらう。^{二〇}

イエスは、地上生活において、歌をもって試練に應じられた。心を刺すような鋭い言葉を浴びせられたときにも、いんうつと不満と疑惑と圧迫的な恐怖のために、まわりの空気が重苦しかったときにも、イエスの信仰と聖なるはげましの歌がきかれた。

あの最後の悲しい過越節の夕食後、まさに死の手に売り渡されようとしていたとき、イエスは詩篇を高らかに口ずさまれた。――

「今より、とこしえに至るまで主のみ名はほむべきかな。

日のいずるところから日の入るところまで、

主のみ名はほめたたえられる。^二

「わたしは主を愛する。

主はわが声と、わが願いとを聞かれたからである。

主はわたしに耳を傾けられたので、

わたしは生きるかぎり主を呼びまつるであろう。

死の綱がわたしを取り巻き、

陰府の苦しみがわたしを捕えた。

わたしは悩みと悲しみにあつた。

その時わたしは主のみ名を呼んだ。

『主よ、どうぞわたしをお救いください』と。

主は恵みふかく、正しくいらせられ、

われらの神はあわれみに富まれる。

主は無学な者を守られる。

わたしが低くされたとき、主はわたしを救われた。

わが魂よ、おまえの平安に帰るがよい。

主は豊かにおまえをあしらわれたからである。

あなたはわたしの魂を死から、わたしの目を涙から、

わたしの足をつまずきから助け出されました。」^{三三}

地上の最後の大きいなる危機の影が深まっていくときに、神の光は最も明るく輝き、希望と信頼の歌は最もはつきりと、そして最も高らかな調べとなって聞かれるであろう。

「その日ユダの国で、この歌をうたう、

『われわれは堅固な町をもつ。

主は救をその石がきとし、またとりでとされる。

門を開いて、信仰を守る正しい国民を入れよ。

あなたは全き平安をもって

こころざしの堅固なものを守られる。

彼はあなたに信頼しているからである。

とこしえに主に信頼せよ、

主なる神はとこしえの岩だからである。』^{二三}

「主にあがなわれた者は帰ってきて、その頭に、とこしえの喜びをいただき、歌うたいつつ、シオンに来る。彼らは楽しみと喜びとを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る。」^{二四}

「彼らは来てシオンの山で声高く歌い、主から賜わった良い物のために、…喜びに輝く。その魂は潤う園のようになり、彼らは重ねて憂えることがない。」^{二五}

聖書に記録されている歌の歴史は、歌や音楽がどんなに有用であり、また有益であるかということを示している。音楽はしばしば悪用されて悪い目的に使用され、したがって人の心を誘惑する上に最も力のあるものとなる。しかし音楽が正しく用いられるならば、それはとうとい神の賜物となる。音楽が人の思いを高貴なテーマにたかめ、魂に靈感をあたえ、これを向上させるようにと神は意図されるのである。

イスラエルの国民が荒野の旅にあつて、聖歌の音楽によつて道中を励まされたように、今日も、神はご自分の民が人生の旅を楽しむように命じておられる。神のみ言葉を記憶するには、それを歌にしてくり返すことが何よりも効果的な方法である。このような歌はふしぎな力を持っている。それは、粗野で無教養な

性質を和らげる力をもち、また人の思いを活気づけ、同情心をめざめさせる力をもち、行動の一致を促し、勇気を失わせたり努力を弱めたりするような暗い思いや胸さわぎなどを払いのける力をもっている。

歌は霊的な真理を心に印象づけるのに、最も効果的な方法の一つである。押しつぶされて絶望しかかっている魂が、長い間忘れていた子供時代の歌の文句をきいて、ふと神のみ言葉を思い出し、そのために誘惑が力を失い、人生に新しい意義と新しい目的が生まれ、勇気と喜びを他人にも分け与えるようになった例がどんなに多いことであろう。

教育の一つの手段として歌の価値を見おとしてはならない。家庭で、美しい純潔な歌がうたわれるとき、人をとがめだてる言葉は少なくなり、快活さと希望と喜びの言葉が多くなる。学校で歌がうたわれるとき、生徒たちは神と教師にますます近づき、また互いに親しみを加える。

宗教的な行事の一部として、歌をつたうことは祈りをささげることと同様に礼拝の行為である。事実、たいていの歌は祈りである。このことを認めるように子供に教えるとき、その子供は、自分が歌う言葉の意味をもっと深く考え、その言葉のもつ力にもっと心を動かされるであろう。

救い主がわれわれを神の栄光の照り輝いている天国の入り口に導かれるとき、み座のまわりにある天の合唱隊のささげる賛美と感謝の調べが聞こえて来るであろう。この天使たちの歌声が地上の家庭に反響するとき、われわれの心は天の歌手たちにひきつけられるであろう。天の交わりは地上から始まる。われわれは、この世にあって、天の賛美の基調を学ぶのである。

索引

一	詩篇一一九ノ五四	一三	詩篇六三ノ一―七
二	ヨブ記三八ノ四―二七、三一、三二	一四	詩篇四二ノ一
三	雅歌二ノ一―一三	一五	詩篇二七ノ一
四	民数記二三ノ七―九、二〇―二三	一六	詩篇三ノ四―六
	二四ノ四―六、二四ノ一六―一九	一七	詩篇五ノ一―七
五	イザヤ書五ノ一―三	一八	歴代志上二九ノ一―五
六	ヨブ記三八ノ七	一九	詩篇四六ノ一、二、四―七
七	出エジプト記一五ノ一、二、六―一、一八―二二	二〇	詩篇四八ノ一―四
八	民数記二ノ一―六―一八	二一	詩篇一一三ノ二、三
九	歴代志下二〇ノ一―四、一二	二二	詩篇一一六ノ一―八
一〇	歴代志下二〇ノ一―五―一七	二三	イザヤ書二六ノ一―四
一一	歴代志下二〇ノ二〇	二四	イザヤ書三五ノ一―〇
一二	詩篇二三ノ一―四	二五	エレミヤ書三一ノ一―二

聖書の奥義

「あなたは神の深い事を窮めることができるか」

限りある人間の心は、無限である神のご品性やみわぎを完全に理解しつくすことはとてもできない。神をさがしても見いだすことはできないのである。どんなにすぐれた教養の高い人にとっても、愚かな人や無知な人にとっても同じように、聖なる神は神秘におおわれたままでなければならない。しかし、「雲と暗やみとはそのまわりにあり、義と正とはそのみくらの基である」^二とある。われわれは、神の無限な力に結びついていくかぎりない恵みを見分けることぐらいしか、われわれに対する神のご態度を理解することはできない。われわれは、理解できる程度にしか神の御目的を悟ることができないが、しかしそれ以上のところは全能のみ手と愛に満ちたみ心に信頼するのみである。

神のみ言葉である聖書には、その著者である神のご品性と同様に、有限な人間には完全に理解しつくすことのできない神秘がある。しかし神は、聖書が神の権威を持っていることについて十分な証拠を、聖書の中に与えておられるのである。神の存在、神のご品性、神のみ言葉の真実性というものは、われわれの理解に訴える証言によって確実なものとなるのであるが、この証言はたくさんある。なるほど神は、疑問の余地を

とり去られなかった。信仰は確信に置かれていたのであって、証明に置かれていたのではない。

疑おうと思えば疑う余地はある。しかし、真実を知りたいと望む者には、信仰をもつ十分な根拠が見いだされるのである。

神の神秘的摂理を悟ることができないということは、神のみ言葉を疑う理由にはならない。自然界をみると、われわれは、理解のできない不思議なことにいつもかこまれている。霊的な世界にわれわれの測り知ることのできない神秘があることは驚くにあたらない。問題は、人間の心の愚かさと狭さにある。

聖書の神秘は、聖書への反対論となるどころか、それは聖書が神の霊感によるものであることの最も強力な証拠である。聖書に、神についてわれわれが理解し得ることしか書かれてなかったり、あるいは、神の偉大さと尊厳さが有限な人間の心によって把握できる程度のものであったなら、聖書は現在のようにはっきりした神性の証拠を持たなかったであろう。われわれは聖書の崇高なテーマによって、聖書を神のみ言葉として信ずる信仰を靈感によって持たなければならない。

聖書は、どんなに高い教養を受けた人の心をも驚かせまたひきつけるような真理を、単純に、そして心の必要と求めに適應するように示す一方、また教養のない卑しい人にも生命の道を明らかにする。

「これを歩む者は、おろかなりとも迷うことなし」とある。子供でも道をまちがえるはずがない。おののきながら道をもとめる人は、その清い聖なる光のうちに歩むことができないはずがない。それにしても、最も単純に述べられている真理の中には、人間の理解力をはるかにこえる高貴で遠大なテーマ、すなわち神の

栄光のかくされている奥義、——人間の探求心を圧倒するとともに、その半面には敬虔と信仰をもって真理を探求する者に靈感をあたえるような奥義が含まれている。聖書を調べればしらべるほど、それは生ける神のみ言葉であるとの確信が深められ、人間の理性は神の尊厳な啓示に服従しないではいられない。

神は、熱心にもとめる者にはいつでもみ言葉の真理を現わそうと望んでおられるのである。「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であるが、「表わされたことは長くわれわれとわれわれの子孫に属する」のである。聖書のある部分は理解できないという考えのために、最もたいせつな真理まで省みられなくなっている。聖書の神秘は、神が真理をかくそうとしているからではなくて、人間が愚かさや無知のために真理を理解してわがものとすることができないからだという事実を、くりかえし強調しなければならぬ。制限は神のみどころではなく、それはわれわれ自身の能力の問題である。理解できないものとして見過ごされがちである聖書のある部分でさえも、神は、われわれの心が受け入れられるだけのことを悟るように望まれる。聖書はわれわれが、「あらゆる良いわざに対して十分な準備ができ」るように、「神の靈感を受けて書かれた」のである。^五

人間の頭脳は、聖書の一つの真理、一つの約束すら、きわめつくすことができない。ある人はある見地から栄光を把握し、また他の人は他の見地から栄光を把握する。しかもわれわれの目に見えるのはそのかすかな光にすぎない。光の全体はとうていわれわれの見得るところではない。

神のみ言葉の大いなる事らについて熟考するとき、われわれの眼下に深くひろがっている泉がみえる。

それは測り知ることのできない深さと広さをもっている。みつめればみつめるほど、視界はひろがり、目の前には、岸のない海が果てしなく広がっているのがみえる。

このような研究は、人に活気をあたえる力をもっている。頭脳と精神は新しい力と新しい生命を獲得する。

この経験は、聖書の著者が神であるという最大の証拠である。われわれは、神のみ言葉を魂のかとして受ける。それは、肉体のかとして食物をとるのとおなじ事実である。パンによってわれわれの体力の必要が補われる。われわれは、それが血となり骨となり脳となることを経験によって知っている。これとおなじ証拠を聖書にあてはめることができる。聖書の原則が、実際に品性の要素となるとき、そこにはどんな結果がみられるであろうか。またどんな変化が生活に現われるであろうか。「古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」^六とある。その力によって、男も女も、悪い習慣の鎖を断ち切り、利己心を放棄した。神を汚す者は神を敬う者となり、酔っぱらいはまじめになり、道楽者は身を慎むようになった。サタンの面影を宿していた魂は神のみかたちに一変させられた。この変化は、それ自体が奇跡中の奇跡である。み言葉の働きによって行なわれた変化——それはみ言葉の最も深い神秘の一つである。われわれはそれを理解することができない。ただわれわれは、それが聖書に言明されているように、「あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである」^七ということを信ずることができるだけである。

聖書の神秘についてこのような考え方は、他のあらゆる問題を解くかぎを与える。それは、魂に宇宙の宝庫を開き、無限の成長という可能性を与える。

この成長は、神のご品性すなわち聖書の栄光と神秘がたえずわれわれに示されることによって達し得られる。もし神と神のみ言葉を完全に理解しつくすことができるとしたら、そこにはもはやそれ以上の真理の発見も、それ以上の知識も、それ以上の成長もないことになる。神は至高者ではなく、そして人の進歩は止まるであろう。しかしそうでないことを神に感謝しよう。神は限りないおかたであり、神のうちにすべての知恵の宝があるので、われわれが永遠にわたって、たえずさがし求め、たえず学びつつけても、神の知恵、恵み、能力という宝は尽きることがないのである。

索引

- | | | | |
|---|--------------|---|-------------------|
| 一 | ヨブ記一ノ七 | 五 | テモテへの第二の手紙三ノ一七、一六 |
| 二 | 詩篇九七ノ二 | 六 | コリント人への第二の手紙五ノ一七 |
| 三 | イザヤ書三五ノ八・文語訳 | 七 | コロサイ人への手紙一ノ二七 |
| 四 | 申命記二九ノ二九 | | |

歴史と預言

「この事をだれがいにしえから示したか。だれが昔から告げたか。わたし、すなわち主ではなかったか。わたしのほかに神はない。」

聖書は、人類のもっている最も古いそして最も広範な歴史である。それは永遠の真理の泉から出た新鮮な流れで、各時代を通じて神のみ手によってその清純さが保たれたのである。それは、人間がどんなに研究しても見通すことのできない遠い過去を照らしている。地の基礎をすえ、天をのべた能力は、ただ神のみ言葉の中にしか見られない。諸国民の起源について信頼すべき記録は、ただ聖書の中にのみ見いだされる。人間の自負心や偏見に汚されない人類歴史の記録は聖書の中にだけある。

人類歴史の記録の中では、世界の諸国民の発展や諸帝国の興亡は、人間の意志や勇氣に左右されているかのようにみえる。いろいろな事件の形成は、その大部分が人間の能力や野心やあるいは気まぐれによってきまるかのようにみえる。しかし、神のみ言葉である聖書の中には幕が開かれていて、われわれはそこに、人間の利害や権力や欲望の一切の勝ち負けの上に、また背後に、あるいはそれを通して、あわれみに満ちた神の摂理が、黙々と忍耐よくご自身の目的を達成するために働いているのを見るのである。

聖書には、歴史の真の原理が明らかにされている。使徒パウロが、アテネの賢人たちに語った比類なく美

しくやさしい言葉の中に、人類の創造と諸国民の分布における神の御目的が示されている。神は「ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった」とある。神は、どんな人でも、「契約のつなぎに……入らしめ」^三ると言明されている。創造における神の御目的は、地上に人を住まわせて、その存在が本人にとっても他人にとっても祝福となり、創造主の栄えとなるようにということにあった。その意志さえあれば、だれでもこの目的に一致した者となることができるのである。このような人について「この民は、わが譽を述べさせるためにわたしが自分のために造ったものである」^四と言われている。

神は、国家と個人の真の繁栄のすべての基礎となる原則を律法の中に明らかにされている。モーセは、神の律法についてイスラエル人にこう言明している。「あなたがたは、これを守って行わなければならない。これは、……あなたがたの知恵、また知識を示す事である。」「この言葉はあなたがたにとって、おなしい言葉ではない。これはあなたがたのいのちである。」^五イスラエルにこのように約束された恵みは、広い天下のあらゆる国家、あらゆる個人に、同じ条件で同じ程度に約束されている。

地上の統治者が行使する権力は、天から授けられたもので、その成功はこの与えられた権力の用い方によって左右される。看視者である神は各人に、「あなたがたしを知らなくても、わたしはあなたを強くする」^六と仰せになっている。昔ネブカデネザルに「義を行って罪を離れ、しえたげられる者をあわれんで、不義を

離れなさい。そうすれば、あるいはあなたの繁栄が、長く続くかもしれません」と言われた言葉は、各人にとって人生の教訓をふくんでいる。

これらのことを理解すること、——すなわち「正義は国を高く」^八するということや、「その位が正義によって……立」^九つとつとや、「いつくしみと、まことは王を守る」^八ということを悟り、「王を廃し、王を立て」^九られる神の能力のあらわれの中に、これらの原則が働いていることをみとめること——これが歴史の原理を理解することである。

このことをはっきり示しているのは、神のみ言葉である聖書だけである。そこには、国民の力というものは、個人の場合と同じように、不可抗力な機会や文明の利器にあるのではなく、また彼らが誇るその強大さにあるのでもないことが示されている。国民の力というものは、彼らが神の御目的を成就する誠実さによって測られるのである。

この真理は、古代バビロンの歴史に実証されている。巨木のたとえによって、国家統治の真の目的が、ネブカデネザル王に示された。「その木は成長して強くなり、天に達するほどの高さになって、地の果までも見えわたり、その葉は美しく、その実は豊かで、すべての者がその中から食物を獲、また野の獣はその陰にやどり、空の鳥はその枝にすみ」^{一〇}とある。この描写は神の御目的を成就する統治すなわち国民を保護し築きあげる統治の性格を表わしている。

神は、この目的を成就させようとしてバビロンを高められた。バビロンは繁栄し、ついにその富と権力は

後世これに匹敵するものがないほどの高さに達した。それは、天来の象徴によって「金の頭」^二として、聖書の中に適切に表現されている。

しかし、ネブカデネザル王は、その高い地位が神の権力によって与えられたものであることを認識しなかった。彼は心に誇りたかぶって「この大いなるバビロンは、わたしの大いなる力をもって建てた王城であって、わが威光を輝かすものではないか」^三と言った。

バビロンは、民の保護者となるどころか、かえってごうまんて残酷な圧制者となった。イスラエルの統治者たちの残酷とどんよくを描いている靈感の言葉は、バビロンの没落をはじめ、世界がはじまって以来多くの他の帝国が没落した真因をつぎのように明らかにしている。「あなたがたは脂肪を食べ、毛織物をまとい、肥えたものをほふるが、群れを養わない。あなたがたは弱った者を強くせず、病んでいる者をいやさず、傷ついた者をつつまず、迷い出た者を引き返らせず、うせた者を尋ねず、彼らを手荒く、きびしく治めている。」^三

看視者である神は、バビロンの統治者に宣告をお下しになった。「ネブカデネザル王よ、あなたに告げる。国はあなたを離れ去った」^四と。

「処女なるバビロンの娘よ、下ってちりの中にすわれ。……
王座のない地にすわれ。……

カルデヤびとの娘よ、

黙してすわれ、また暗い所にはいれ。

あなたはもはや、もろもろの国の女王となえられることはない。」^{一五}

「多くの水のほとりに住み、多くの財宝を持つ者よ、

あなたの終りが来て、その命の糸は断たれる。」^{一六}

「国々の誉であり、カルデヤびとの誇である麗しいバビロンは、

神に滅ぼされたソドム、ゴモラのようになる。」^{一七}

「わたしはこれをはりねずみのすみかとし、水の池とし、滅びのほうきをもって、これを払い除く、と万軍の主は言う。」^{一八}

活動の舞台に現われたすべての国々は、「警護者」^{一九}にして「聖者」^{一九}なる神の御目的を成就するかどうかを試みられるために、地上にその地位を占めることを許されたのである。預言は世界の大帝国バビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマの興亡を描いている。これらのどの国も、弱小な諸国家と同じように、歴史をくりかえしている。どの国家も試験の期間を与えられていずれも失敗し、栄光は消え、権力は失われ、その地位は他の国家によって占められた。

それらの国々は、神の原則を退け、そのことによって自らの破滅を招いたが、一方また天来の支配的な目的がそれらの国々の動きを通して働いていたことが明らかにされた。

この教訓は、預言者エゼキエルが、カルデヤの地に亡命していたときに与えられた不思議な象徴的な表現

の中に、教えられている。この幻は、エゼキエルが不幸な思い出と、苦難の予想にうちひしがれていたときに与えられた。彼の祖国の地は荒れ果てていた。エルサレムの住民はなくなっていた。エゼキエル自身は、野望と残酷に支配された国に旅人となっていた。どちらをむいても目につくものは暴虐と不正ばかりであった。彼の魂は苦悩し、夜も昼も嘆きつづけた。しかし、彼に与えられた象徴には、地上の統治者たちの権力をしのぐ権力があらわされた。

ケバル川のほとりでエゼキエルは北のほうからやってきたらしいたつまきを見た。「わたしが見ていると、見よ、激しい風と大なる雲が北から来て、その周囲に輝きがあり、たえず火を吹き出していた。その火の中に青銅のように輝くものがあつた」とある。互いに重なり合った幾つかの輪が四つの生き物によって動かされていた。それらの上の方に高く、「サファイヤのような位の形があつた。またその位の形の上に、人の姿のような形があつた。」「ケルビムはその翼の下に人の手のような形のものを持っているように見えた」とある。輪は複雑な組み合わせになっていたので、一目見たときには混乱してみえたが、しかしそれらは完全な調和の中に動いていた。ケルビムの翼の下にある手によって、ささえられ導かれている天の聖者たちが、これらの輪を進めていた。これらの上の方にサファイヤの宝座があつて、そこに永遠なる神があられ、宝座のまわりを神の恵みの象徴であるにじがとりまいていた。

複雑な輪の形をしたものが、ケルビムの翼の下にある手によって導かれていたように、人間の世界の複雑な活動も神の支配下にある。国々の争乱のさなかにも、ケルビムの上方に座したもう神はなお地上のできご

とを導かれるのである。

つぎつぎに現われては、割りあてられた時と場所を占めて、自分では意味のわからない真理を無意識のうちに証明した各国の歴史はわれわれに物語っている。神は、今日の国家にもどの個人にも、ご自分の大いなるご計画の中にそれぞれの立場を割り当てておいでになる。今日、国家も個人も誤ることのない神のみ手にある「はかりなわ」で測られているのである。われわれはみな自分自身の選択によつて、自らの運命を決定しているのであつて、神はご自身の目的の成就のためにすべてを支配されている。

「有つて有る者」^三にいます大いなる神が、永遠の過去から永遠の未来にいたる預言の鎖のわを一つ一つつらねて、聖書の中にはっきりとお示しになっている歴史は、現在、われわれが時代の進行のどの辺にいるか、そしてまた将来何が予想されるかを告げている。現在までに起こるべく預言されていたすべての事件は、歴史のページの中にその跡をたどることができる。これから後に起こるべき諸事件も必ずその順序通りに成就されるであらう。

この世のすべての統治権は最後に崩壊するということが真理の言葉の中にはっきり預言されている。イスラエルの最後の王に神から宣告された預言の言葉に、つぎのように述べられている。

「主なる神はこう言われる、かぶり物を脱ぎ、冠を取り離せ。…卑しい者は高くされ、高い者は卑しくされる。ああ破滅、破滅、破滅、わたしはこれをこさせる。わたしが与える権威をもつ者が来る時まで、その跡形さえも残らない」^三と。

イスラエルからとり去られた王冠は、バビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマの各王国につぎつぎに渡った。神は、「わたしが生かす権威をもつ者が来る時まで、その跡形さえも残らない」と仰せになつてゐる。^三

その時は近い。今日、時のしるしは、われわれが厳粛な大事件の門口に立っていることを宣言している。

世界の情勢はことごとく動揺している。キリストの再臨にさき立つ事件として、「戦争と戦争のうわさ」を聞くであろう。…民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう」と救い主が預言されたみ言葉は、われわれの目の前に成就している。^三

現代は、すべての人間にとって、圧倒的な関心をそえられる時代である。統治者や政治家たち、責任と權威の地位を占めている人々、あらゆる階級の心ある男女、——すべての者は、周囲に起こりつつある事件に注意を集めている。彼らは国と国との間に存在する緊張した不穏な関係を見守っている。彼らは地上のあらゆる要素に緊張が加わりつつあるのをみて、そこに何か決定的な大事件がいまにも起ころうとしており、世界が途方もない危機の淵に臨んでいることを認めている。

天使たちは、きたるべき運命について世界に警告し終わるまでは風を吹かせないように、いま戦争の風をひきとめている。しかし、あらしは迫り、いまにも地上に吹き荒れようとしている。神が、天使たちに風をひきとめている手をゆるめるようにお命じになるその時、そこには筆にも口にも表わし得ない戦乱の光景が展開するであろう。

聖書は、実に聖書だけが、これらのことを正しく観察している。聖書には、世界歴史の最後の大いなる光

景、すでに前方に影を投げて、その近づく足音に地をおののかせ、人々の心を恐怖に震えあがらせている事件が明らかにされている。

「見よ、主はこの地をおなしくし、これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、その民を散らされる。……これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ。それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住むものはその罪に苦しみ、（英訳・荒れはてて）……鼓の音は静まり、喜ぶ者の騒ぎはやみ、琴の音もまた静まった。」^{二四}

「ああ、その日はわざわざいだ。主の日は近く、全能者からの滅びのように来るからである。……種は土の下に朽ち、倉は荒れ、穀物がつきたので、穀倉はこわされる。いかに家畜はうめき鳴くか。牛の群れはさまざま。彼らには牧草がないからだ。羊の群れも滅びうせる。」^{二五}「ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、ざくろ、やし、りんご、野のすべての木はしぼんだ。それゆえ楽しみは人の子らからかれうせた。」

「わたしは苦しみにもだえる。……わたしは沈黙を守ることができない、ラッパの声と、戦いの叫びを聞くからである。破壊に次ぐに破壊があり、全地は荒され。」^{二六}

「わたしは地を見たが、それは形がなく、またおなしかった。天をあおいだが、そこには光がなかった。わたしは山を見たが、みな震え、もろもろの丘は動いていた。わたしは見たが、人はひとりもあらず、空の鳥はみな飛び去っていた。わたしは見たが、豊かな地は荒れ地となり、そのすべての町は、主の前に、その激しい怒りの前に、破壊されていた。」^{二六}

「悲しいかな、その日は大いなる日であって、それに比べるべき日はない。それはヤコブの悩みの時である。しかし彼はそれから救い出される。」^{二七}

「さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ。」^{二八}

「あなたは主を避け所とし、

いと高き者をすまいとしたので、

災はあなたに臨まず、

悩みはあなたの天幕に近づくことはない。」^{二九}

「全能者なる神、主は詔して、

日の出るところから日の入るところまで

あまねく地に住む者を召し集められる。

神は麗しさのきわみであるシオンから光を放たれる。

われらの神は来て、もだされない。」^{三〇}

「神はその民をさばくために、

上なる天および地に呼ばれる、…

天は神の義をあらわす、

神はみずから、さばきぬしだからである。」^{三三}

「シオンの娘よ、…主はその所であなを敵の手からあがなわれる。いま多くの国民はあなたに逆らい、集まって言う、『どうかシオンが汚されるように、われわれの目がシオンを見てあざ笑うように』と。しかし彼らは主の思いを知らず、またその計画を悟らない。」^{三四}「それは、人があなたを捨てられた者とよび、『だれも心に留めないシオン』というからである。」「主は言われる、わたしはあなたの健康を回復させ、あなたの傷をいやす。」「わたしはヤコブの天幕を再び栄えさせ、そのすまいにあわれみを施す。」^{三五}

「その日、人はいう、『見よ、これはわれわれの神である。』

わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。

これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。

わたしたちはその救を喜び樂しもう』と。」^{三六}

「主はとこしえに死を滅ぼし、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい、その民のはずかしめを全地の上から除かれる。これは主の語られたことである。」^{三七}

「定め祭の町シオンを見よ。あなたの目は平和なすまい、移されることのない幕屋エルサレムを見る。

…主はわれわれのさばき主、主はわれわれのつかさ、主はわれわれの王であつて、われわれを救われる。」^{三六}

「正義をもつて貧しい者をさばき、公平をもつて国のうちの柔和な者のために定めをなし。」^{三七}

そのとき神の御目的は成就され、神の国の原則は太陽の下すべての者によってあがめられるであらう。

「暴虐は、もはやあなたの地に聞かれず、

荒廃と滅亡は、もはやあなたの境のうちに聞かれず、

あなたはその城壁を『救』となえ、

その門を『誉』となえる。」^{三八}

「あなたは義をもつて堅く立ち、

しえたげから遠ざかつて恐れることはない。

また恐怖から遠ざかる、

それはあなたに近づくことがないからである。」^{三九}

このような厳粛な光景を示された預言者たちは、その意味を悟りたいと熱望した。彼らは、「つぶさに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、…いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べ

たのである。そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。……これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。」^{四〇}

やがて起こるべき事件についてのこれらの描写は、その成就のまぎわに臨んでいるわれわれにとって、何という深い意味と利害を持っていることであろう。それは、人類の父祖アダムとエバがエデンを去って以来神の子たちが見守り、待ちわび、熱望し、祈ってきた事件である。

今日、世の人々は、最後の重大な危機を前にして、ノアの洪水前の人々と同じように、享樂に心を奪われ、肉欲にふけている。彼らは目の前のはかないものに夢中になって、目に見えない永遠のものを見おとしている。使えばなくなるような物のために、彼らは、滅びることのない富を犠牲にしている。彼らの思いは高められ、彼らの人生觀は広くされなければならない。世俗の夢をひさぼっている彼らは、その情眼から目ざめなければならない。

聖書のページに明らかにされている諸国民の興亡を通して、われわれは、単なる外面的で世俗的な榮光がどんなにおなししいものであるかを学ばなければならない。後世にその例を見ないほどの権力と榮華を誇ったバビロン——当時の人々には、堅固で永遠に続くように思われていた権力と榮華をもったバビロンは、跡かたもなく消え失せた。それは、「草花のよう」^{四一} 滅びてしまった。根本に神を持っていないものはすべて滅びる。神の御目的と結合し、神のご品性を表わすものだけが永続することができる。神の原則だけが、世に知られるかぎりの唯一の不変なものである。

老いも若きも、これらのとうとい真理を学ぶべきである。われわれは、諸国の歴史と未来の事に関する啓示の中に、神の御目的の働きを学ばなければならない。そのときわれわれは、目に見えるものと目に見えないものとの真の価値を評価することができ、人生の真の目的が何であるかを知ることができる。そしてまたこの世の事物を永遠の光に照らしてみ、それらを最も真実に最も高潔に用いることができる。このように、この世において神の国の原則を学び、その臣民また市民となることによって、キリストがおいでになるときに共にみ国にはいる準備ができるのである。

その日は近い。われわれが教訓を学び、働きをなし遂げ、生まれ変わった品性を持つようになるためには、残されている時間はつかの間にすぎない。

「人の子よ、見よ、イスラエルの家は言う、『彼の見る幻は、なお多くの日の後の事である。彼が預言することは遠い後の時のことである』と。それゆえ、彼らに言え、主なる神はこう言われる、わたしの言葉はもはや延びない。わたしの語る言葉は成就すると、主なる神は言われる。」^{四二}

索引

一	イザヤ書四五ノ二一	六	イザヤ書四五ノ五
二	使生行伝一七ノ二六、二七	七	ダニエル書四ノ二七
三	エゼキエル書二〇ノ三七・文語訳	八	箴言一四ノ三四 一六ノ二二 二〇ノ二八
四	イザヤ書四三ノ二一	九	ダニエル書二ノ二一
五	申命記四ノ六、三二ノ四七	一〇	ダニエル書四ノ一、一二

一一	ダニエル書二ノ三八	二七	エレミヤ書三〇ノ七
一二	ダニエル書四ノ三〇	二八	イザヤ書二六ノ二〇
一三	エゼキエル書三四ノ三、四	二九	詩篇九一ノ九、一〇
一四	ダニエル書四ノ三一	三〇	詩篇五〇ノ一―三
一五	イザヤ書四七ノ一、五	三一	詩篇五〇ノ四―六
一六	エレミヤ書五一ノ一―三	三二	ミカ書四ノ一〇―一二
一七	イザヤ書一三ノ一九	三三	エレミヤ書三〇ノ一七、一八
一八	イザヤ書一四ノ二三	三四	イザヤ書二五ノ九
一九	ダニエル書四ノ一三	三五	イザヤ書二五ノ八
二〇	エゼキエル書一ノ四、二六	三六	イザヤ書三三ノ二〇、二二
二一	出エジプト記三ノ一四	三七	イザヤ書一ノ四
二二	エゼキエル書二一ノ二六、二七	三八	イザヤ書六〇ノ一八
二三	マタイによる福音書二四ノ六、七	三九	イザヤ書五四ノ一四
二四	イザヤ書二四ノ一―八	四〇	ペテロの第一の手紙一ノ一〇―一二
二五	ヨエル書一ノ一五―一八、一二	四一	ヤコブの手紙一ノ一〇
二六	エレミヤ書四ノ一九、二〇、二三―二六	四二	エゼキエル書一二ノ二七、二八

聖書の教えと研究

「あなたの耳を知恵に傾け、…かくれた宝を尋ねるように、これを探ね…。」

イエスは、幼い時にも、少年時代にも、成人して後も、聖書を学ばれた。幼い子供のとき、イエスは毎日母親のかたわらで預言者の書を教えられ聞かされた。年若いころには、朝早くやたそがれ時に、山の中や森の木の間でただひとり神に祈り、神のみ言葉を学んで静かなひとときをすごされているイエスのお姿がよく見受けられた。伝道の生活におはいりになってから、イエスが聖書に深く通じておられたことは、彼が熱心に聖書を学ばれた証拠である。イエスが知識を得られたことには、われわれの場合と異なったところはないのであるから、イエスの霊的また知的なふしぎな能力は、教育の手段として聖書がどんな価値をもっているかを立証している。

天の父なる神は、み言葉をお与えになる際に、子供たちを無視なさらなかった。人間の書いたあらゆるものの中で、聖書の物語ほど幼い者たちの心をとらえ、その興味を呼び起こすように書かれたものが他にあるだろうか。聖書のやさしい物語の中には、神の律法の大原則がはっきり示されている。親と教師は、このように子供の理解力に一番適した例話を用いて、神がご自分の戒めを「努めてこれをあなたの子らに教え、あ

あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない」^二と命令しておられることを、彼らの幼い時から実行し始めることができる。

子供たちにこれらの教訓を教え、彼らの記憶にきざみこむには、実物教訓や黒板や地図や絵などを用いることが役に立つであろう。親も教師も、進歩した方法をたえず研究しなければならない。聖書を教えるには、最も新しい思想と最も良い方法と最も真剣な努力がなければならない。

聖書研究に対する興味を起こし、これを高めることができるかどうかは礼拝の時間の用い方で大いに左右される。朝夕の礼拝は、一日の中で最も楽しくまた最も有益なひとときでなければならない。礼拝の時には心配ごとや不親切な思いに妨げられてはならないということや、イエスと会うためにまた聖天使たちを家の中に迎えるために親子が集まっているのだということを理解しなければならない。礼拝は、簡単に活気に満ち、折にかない、時々変化のあるものでなければならない。聖書研究にはみんなが加わり、神の律法を学んで幾度もこれをくりかえさなければならない。子供たちに聖書の読む箇所をえらばせると、彼らの興味が増すであろう。読んだところを子供たちに質問し、また子供たちに質問させるとよい。その意味をわからせるのに役立つような例を話して聞かせるがよい。礼拝がこのようにあまり長くならなければ、子供たちにも祈りをさせ、一節でもいいからいっしょに讃美歌をうたうとよい。

礼拝を正しく行なうためには、準備に心を用いなければならない。親は毎日子供たちといっしょに聖書进行研究する時間を持つべきである。これを実行するためには、努力と計画とある程度の犠牲がたしかに必要で

あるが、しかしその努力は十分に報いられるであらう。

神の戒めを教える準備として、神は、その戒めを心にたくわえておくように親たちにお命じになっている。「これらの言葉をあなたの心に留め、努めて……これについて語らなければならない。」^三と、神は仰せになっている。子供たちに聖書への興味を持たせるためには、われわれ自身が興味をもたなければならない。子供たちが聖書研究を好きになるようにさせるには、まずわれわれが好きにならなければならない。われわれが子供たちにあたえる訓戒は、われわれ自身の模範と精神による感化力だけしか重みがないのである。

神はアブラハムを召して神のみ言葉の教師とし、彼をえらんで偉大な国民の父とされた。神はアブラハムが子供たちや一族を、神の律法の原則の中に教え導くにちがいないとごらんになったからである。アブラハムの教えに力を与えたのは、彼自身の生活による感化であつた。彼の大家族は一千人以上の人々から成り、その大部分は家族の長であり、中には異教から新しく改宗した者も少なくなかった。このような家族の指導者として、堅固な人物が必要であつた。ぐらぐらした弱気なやり方では間に合わなかった。神はアブラハムのことをこう仰せになった。「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知つたのである」^四と。彼は人々の心をとらえるような知恵と愛情をもつて権威を行使した。看視者である神は、「(人々に)主の道を守らせ、正義と公道とを行わせる」とあかししておられるのである。こうして、アブラハムの感化は、彼の家族以外の者にまで及んだ。天幕の張られたところには、どこにでもそのかたわらに祭壇が築かれて、いけにえと礼拝がささげられた。天幕がとり払われても祭壇が残った。歩

きまわっているカナン人の中には、神のしもべアブラハムの生活を通してエホバ神を知った者が少なくなかった。彼らはその祭壇に足を止めて、エホバにいけにえをささげるのであった。

神のみ言葉の教えが、教師の生活の中に同じように忠実に反映されているならば、それは、今日もなお変わらない効果があるであろう。

他人が聖書について考えたり学んだりした事からを知るだけでは十分でない。審判のときには、だれもみな神の前に自分自身の報告をしなければならない。各人は真理であるところのものをいま自分で学ばなければならないのである。しかし、研究に効果があるようにするには、生徒の興味をよびおこさなければならぬ。特に、気質や訓練や物事の考え方の全く違った少年や青年たちを取り扱わなければならないときには、これは見おとしてはならない問題である。子供たちに聖書を教える時には、彼らがどういうものに心を向け、どういうものに興味をひきつけられているかを観察し、それらのことについて聖書には何とされているかを調べさせることに彼らの興味を持たせると非常に有益である。人間をそれぞれ異なった傾向をもった者につくられた神は、ひとりびとりのためにみ言葉の中に何かを与えておられる。聖書の教訓は自分自身の生活に適用されるものであることを生徒がみとめたなら、それを助言者として仰ぐように教えるべきである。

生徒たちが聖書のすばらしい美しさを評価できるようにしなければならぬ。文学的に価値があるものと思われるという理由から、真の価値のない本や刺激的で不健全な多くの本が、推奨されたり、あるいは少なくとも使用してもさしつかえないものとされている。神のみ言葉という清潔な泉に自由に近づくことができ

るのにどうして彼らをこのような汚れた水の流れから飲ませるようにみちびく必要がある。聖書には、充滿した、力のある、深い意味があつて、それは尽きることがない。聖書の宝を、思想の面からも、文体の面からもさがし出すように青少年たちを奨励しなければならない。

これらのとうとい事物の美しさに心をひかれるとき、彼らの心はその力にふれて和らげられおだやかになる。彼らは、ご自身をこのように現わしておられる神にひきつけられる。そうして神のみわざと道についてもっと知りたいと願わない者はないであらう。

聖書を研究するときには、学ぶ者としての精神をもつて聖書に接すべきであることを教えられなければならない。自分の意見を裏づけるために聖書のページをめくるのではなく、神が仰せになっていることを知るために聖書を学ぶのでなければならない。

聖書についての真の知識は、このみ言葉をあたえられた聖霊の助けによつてのみ得られる。そしてこの知識を身につけるには、これを生活に実践しなければならない。われわれは神のみ言葉の命ずるすべてのことに従わなければならない。神のみ言葉によつて約束されているすべてのものをわれわれは自分のものとして要求することができる。われわれは、神のみ言葉の命ずる生活を、神の力によつて、実行しなければならない。聖書をこのように支持するときにはじめて、その研究には効果がある。

聖書の研究には、最も勤勉な努力と忍耐強い思考が必要である。坑夫が地中の金鉱をもとめて掘るように、われわれは神のみ言葉という宝を熱心に根気よくさがさなければならない。

日ごと研究において、聖句を一節一節学ぶ方法はたいの場合非常に有益である。研究者は聖句の一節をとりあげて、その一節の中に神が自分のためにどういう思想をお与えになっているかを確かめるために考えを集中し、自分自身のものとなるまでその思想を深く心に考えるがよい。このように、意味がはっきりわかるまで、一節ずつ研究していくことは、きまった目的もたず、また積極的に何らかの教訓を得ようとの思いもなく、ただ何章も通読するより、はるかに価値がある。

知的に無能力であつたり、道徳的に欠点があつたりするのは、価値のある目的に向かつて、精神を集中することに欠けていることが主な原因の一つである。われわれは、印刷物が広く行きわたっていることを誇るが、しかし書籍そのものは有害ではなくても、書籍の増加ということは一種の積極的な悪であると言えるかも知れない。出版社からたえまなく送り出される印刷物の大洪水のために、老人も若い者も、大いそぎで上すべりな読書をする習慣がつき、一貫した健全な思考力が失われる。その上エジプトのかえるのように、全地にひろがりつつある書籍雑誌の大部分は、平凡で、人の心を怠惰に弱々しくするばかりでなく、また不潔で愚劣なものが多い。それは人の思考をまひさせて無力にするばかりでなく、魂を墮落させ滅ぼす力をもっている。怠惰で、目的もたない心と魂は、たやすく悪のとりことなる。菌は生命のない病的な組織に根をおろす。怠惰な心はサタンの職場である。高く清い理想に心を向け、生活に高貴な目標、すなわち心を集中する目的があるときに、悪は足がかりを見つげ出すことができないのである。

それゆえ、青少年たちに神のみ言葉を注意深く研究するように教えなければならない。神のみ言葉が魂に

受け入れられるとき、それは、誘惑に対する有力な防壁となる。詩篇記者はこう宣言している。「わたしはあなたにむかつて罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました。」「人のおこないの事をいえば、あなたのくちびるの言葉によって、わたしは不法な者の道を避けました」と。^五

聖書の解説者は聖書自体である。聖句と聖句を比較してみなければならない。研究者は、聖句の言葉を全体の立場からながめ、それから部分的な関係を考えてみることを学ばなければならない。聖書の重要な中心課題すなわち人類に対する神の初めの御目的、大争闘の始まりと救済の働きの起源について、知識を得なければならない。主権を争っている二つの勢力の性格を理解し、歴史と預言の記録を通して、この二大勢力の働きをその大いなる終局にいたるまでたどることを学ぶべきである。この争闘が、人間のあらゆる面に入りこんでいることや、われわれの日常の行為がこの相反する二つの精神のどちらかを表わしていることや、好むと好まないとにかかわらず、この大争闘のどちらかの側に自らの立場を現在決定づけていることなどを知らなければならない。

聖書のどの部分も、神の靈感によって与えられたもので、それはわれわれの益となるのである。われわれは旧約聖書に対しても新約聖書に劣らない注意をはらうべきである。旧約聖書を研究してみると、不注意に読む人にはさばくとしかみえないようなところに、生ける泉がわき出ているのが見いだされるのである。

ダニエル書と関連して黙示録は特に研究する必要がある。神をおそれる教師は、救い主が人の姿をとってしもベヨハネのところに来て知らせられた福音——「イエス・キリストの黙示。この黙示は、神が、すぐに

も起るべきことをその僕たちに示すためキリストに与え^六たもの——を、いかにはつきり理解し、示すかを考えるべきである。一見して神秘的な象徴が用いられているからといって、黙示録の研究を断念してはならない。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願ひ求めるがよい^七」とある。

「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである。」^八

聖書に対する心からの愛が目ざめ、その広い分野と、そのとうとい宝がわかりはじめると、神のみ言葉を知るためには、あらゆる機会をのがすまいと望むようになる。そして時間や場所に制限されないで聖書を研究するようになる。このようにたえず研究することが聖書に対する愛をつちかう最上の手段の一つである。

聖書はいつも手に持っていなければならない。機会があるたびに聖句を読み、それについて瞑想すべきである。道を歩いている時にも、駅で待っているときにも、約束の人を待ち合わせているときにも、その機会を利用して、真理の宝庫である聖書から何か貴重な思想を得なければならない。

魂の大きな原動力は信仰と希望と愛である。正しい聖書研究はこれらのものに訴える力を持っている。聖書の外面的な美しさ、すなわち比喩や表現の美しさは、言わば、その真の宝——神聖という美しい宝をはめこんだ台石にすぎない。神と共に歩んだ人々の記録から、われわれは、神の栄光の一端をうかがい知ることができる。「ことごとく麗しい^九」キリストのうちにこそ、神の栄光のみ姿が見えるのである。天と地の一切

の美しさは、そのかすかな反映にすぎない。「そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」とイエスは仰せになった。聖書を学んで救い主を仰ぎ見るとき、われわれの魂のうちには、信仰と賛美と愛の神秘的な能力が目ざめる。キリストのみ姿を見つめていると、敬慕するそのみかたちにだんだん似て来るのである。「わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは…キリストとその復活の力を知り、その苦難にあずかって、その死のさとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである」との使徒パウロの言葉は、そのままわれわれの魂の言葉となる。

靈感の言葉によつて魂のうちにわき出る天来の平安と喜びという泉は、感化という大きな川となつて、そのとどく限りの人々に祝福をもたらす。今日の青少年たち——聖書を手にして成長する青少年たちが、生命をあたえるみ言葉の能力を受け入れる器またこれを人にあたえる器となりさえすれば、大いなる祝福の川が世に向かって流れるのである。この祝福の流れがどんなに人をいやし、慰める力を世に及ぼすかは、測り知れないものがある。それは、「永遠の命に至る水が、わきあがる」生ける泉から流れ出る川である。

索引

一 箴言二ノ二、四
二 申命記六ノ七

三 申命記六ノ六、七
四 創世記一八ノ一九

五	詩篇	一	九	一	一	一	七	四
六	黙示録	一	ノ	一				
七	ヤコブの手紙	一	ノ	五				
八	黙示録	一	ノ	三				

九	雅歌	五	ノ	一	六			
一〇	ヨハネによる福音書	一	二	ノ	三	二		
一一	ピリピ人への手紙	三	ノ	八	一	一		

六 健 康 教 育

「愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるようにと、わたしは祈っている。」

ヨハネの第三の手紙二節

生理学の研究

「われはおそろしくすしくつくられたり」

心と魂は、肉体を通して表現されるのであるから、知的また霊的な力は肉体の力と活動によって大いに左右される。肉体の健康を増進するものはすべて強い精神と均斉のとれた品性の発達を助長する。人は健康でなければ、自分自身に対する義務を、また人類同胞に対する義務と創造主に対する義務を、はつきり理解することも完全に果たすこともできない。したがって健康は品性と同様に忠実に保護されなければならない。生理衛生の知識はすべての教育の働きの根本でなければならない。

今日一般に人々は生理学上の知識を持つているにもかかわらず、健康の原則については驚くばかりに無関心である。これらの原則を知っている人々の中でも、これを実行している人はまた非常に少ない。生命は一定の不変な法則に支配されているというよりは、むしろ単なる偶然に支配されているかのよう、人は、盲目的に性癖や衝動に従っている。

人生の、若々しさと力を持った青少年たちは、そのはちぎれるばかりのエネルギーの価値を認識していない。それは黄金よりもとうとく、進歩にとっては学問や地位や富よりもたいせつなものであるのに、何と軽くみ

られ、何と無謀に浪費されていることであろう。健康を犠牲にしてまで富や権力を求めて奮闘し、もう一步で目的を達するところまで倒れて力を失う人がどんなに多いことであろう。しかしすぐれた肉体の持久力を持っている人は目的の物を手に入れることができる。健康の法則を無視した結果、不健全な生活からさらに悪い習慣に陥り、現世と来世の一切の希望を犠牲にしなければならない人がどんなに多いことであろう。生理学の研究においては、生徒たちに体力の価値をまとめさせ、人生の大争闘における勝利に体力を最大限に寄与させるには、どのようにこれを維持し発達させなければならないかということを理解させるべきである。

子供たちに早くから、生理衛生の基礎知識を、簡単にわかりやすく教えなければならない。この勉強は、家庭の母親の手で始められ、学校で忠実に続けられなければならない。生徒の学年が進むにしたがって、この方面の教育が継続され、自分の身体を自分で管理する資格ができるようにならなくてはならない。あらゆる器官の活力を維持することによって病気を防ぐことがたいせつであることを理解させ、また普通の病気や、けがに対する処置を教えるべきである。どの学校でも、生理衛生の教育を授け、身体の構造や効用や看護などを解説するための設備をできるだけ用意しなければならない。

一般の生理学の研究には含まれていないが、ここに考察しなければならない問題がある。それは、普通に生理学という名目のもとに教えられる多くの専門的な知識よりも、はるかに大きな価値をもった問題である。こうした方面のすべての教育の根本原則として青少年に教えなければならないことは、自然の法則は神の律

法であるということ、すなわちそれは神の十戒と全く同じように神聖なものであるということである。神は、肉体の機能を支配する法則を、身体のすべての神経と筋肉と組織にしるされた。これらの法則の一つでも不注意にあるいは故意に犯すことは、創造主に対する罪悪である。

したがって、これらの法則について徹底的な知識を受けることが必要である。食事、運動、育児、病人の治療その他これに類した多くのことに応用されている衛生学の原則には、普通以上に多くの注意を払わなければならない。

肉体が精神に及ぼす影響はもちろん、精神が肉体に及ぼす影響も強調されなければならない。知的な活動によって促される頭脳の電力は、身体の全部に生気をあたえ、病気に対する抵抗を測り知れないほど助ける。このことを明らかにしなければならない。健康を保つにも回復するにも、意志力と克己がたいせつであること、すなわち、怒りや不満や利己心や不純な心は健康を低下させるばかりでなく、破滅的な影響さえあたえ、これに反して快活、無我、感謝の心には生命を与えるおどろくべき力があるということを明らかにしなければならない。

聖書の中には、「心の楽しみは良い薬である。」^二という生理学的な真理があるが、これはわれわれの考えなくしてはならない真理である。

「わたしの教を忘れず、わたしの戒めを心にとめよ。そうすれば、これはあなたの日を長くし、命の年を延べ、あなたに平安を増し加える。」それは、これを得る者の命であり、またその全身を健やかにするから

である」^三と神は仰せになっている。「ここちよい言葉は…魂に甘く、からだを健やかにする」^四と、聖書に
言明されている。

青少年たちは、「いのちの泉はあなたのもとにあり」^五と聖書に述べられているみ言葉の基礎となっている
深い真理をさとらなければならない。神は万物の創始者であるばかりでなく、生けるすべてのものの生命で
あられるのである。われわれは日光や清いさわやかな空気や、食物を通して、われわれの肉体を築き、われ
われの力をささえるものを受けるが、それはとりもなおさず神の生命である。われわれが、時々刻々に生存
するのは、神の生命によるのである。罪のために悪用されているものを除けば、すべての神の賜物は、生命
と健康と喜びに役立つのである。

「神のなされることは皆その時にかなって美しい」^六とある。真の美は、神のみわざを傷つけることによっ
て得られるのではなく、それは、万物を創造し、それらの美しい完全な姿に喜びを見いだされる神の法則に
調和することによって得られる。

身体の構造を研究するときには、目的に対する手段のふしぎな適応性や、各種の器官の調和的な活動と相
互依存に注意を向けなければならない。生徒の興味をこのように目ざめさせ、体育のたいせつなことを理解
させることができれば、教師は生徒の正しい発育と正しい習慣を確保する上に大いに役立つことになるので
ある。

まず第一に心がけなければならないことは、立ったときとすわったときの正しい姿勢である。神は人間を

まっすぐにおつくりになった。神はわれわれが肉体的な恵みばかりでなく、また知的靈的な恵みすなわち美德、気品、落ち着き、勇氣、獨立心を持つように望まれるが、そうした美德を養うには、まっすぐな姿勢が大いに役立つのである。教師は、この点について言葉と模範を通して教えを与えるべきである。正しい姿勢とはどういうものを示し、いつもその姿勢を保つように主張しなければならない。

正しい姿勢についてたいせつなのは呼吸と音声の訓練である。まっすぐに立ったりすわったりしている人は、そうでない人よりも正しい呼吸をする傾向がある。しかし教師は、深く呼吸することのたいせつさを生徒たちに印象づけなければならない。呼吸器官の健康な活動は血液の循環を助け、全体の組織を活気づけ、食欲を刺激し、消化を促進し、ふかいこころよい睡眠をあたえ、こうして身体をさわやかにするだけでなく、精神を和らげ落ちつかせるということを教えなければならない。深呼吸のたいせつさを示すと同時に、またその実行を督励しなければならない。深呼吸を促進する練習をさせ、その習慣が築かれたかどうかを確かめなければならない。

発声の訓練は、肺臓をひろげてこれを強くし、病気を防ぐのに役立つので、体育上重要な位置を占めている。読んだり話したりするとき、確実に正しく発声するには、呼吸にもなって腹部の筋肉が充分に運動するように、また呼吸器官が圧迫されないように気をつけなければならない。のどに力を入れないで、腹部の筋肉に力を入れなければならない。こうすることによって、のどや肺臓がひどく疲れたり、またひどい病気になったりするのを防ぐことができる。めいりような発音、抑揚のあるなめらかな声の調子、あまり早すぎ

ない話しぶりができるように細心の注意を払わなければならない。これは健康を増進するばかりでなく、生徒の課業にこころよい気持ちと能率とを増し加える。

これらのことを教える際に、コルセットで身体を締めつけることや、内臓活動を圧迫するその他のいろいろな習慣がどんなに愚かな悪い習慣であるかを示す絶好の機会があたえられる。不健康な服装の様式から、つぎつぎに尽きることなく病気が起こるので、この点について綿密に教えなければならない。腰部を圧迫したり、身体のだよかの器官を締めつけるような衣服の着方は危険であるという觀念を生徒に植えつけなければならない。衣服は、充分に呼吸ができて、らくに両手を頭から上へ持ち上げられるものを作るべきである。肺臓を締めつけると、その發達が妨げられるばかりでなく、血液の循環と消化が妨げられ、ついにはからだの全体が弱くなる。すべてこのような習慣は、体力と知力を低下させ、生徒の發達を害し、その成功を妨げる場合が多い。

衛生学の研究において、熱心な教師であるならば、あらゆる機会を利用して、個人の習慣にも周囲のすべての環境にも、完全な清潔が必要であることを示すであろう。毎日入浴することは健康を増進し、知的な活動を促進する上に価値があることを強調しなければならない。日光と通風、寢室と台所の衛生についてもまた注意を与えてはならない。健康的な寢室、すみずみまで清潔な台所、衛生的な食物がていさいよく整えられた食卓などは、家庭の幸福と心ある来客の尊敬を確保する上に、どんなに高価な家具類を客間にならべたてるよりもはるかに価値がある。千八百年前(注・本書の執筆当時からかぞえて)天来の教師イエスが、

「命は食物にまさり、からだは着物にまさっている」と仰せになったみ言葉は、当時に劣らず今日も必要な教訓である。

生理学を学ぶ者は、単に事実や原則について知識を得ることだけが、生理学研究の目的ではないということを知らなければならない。知識だけでは益するところが少ない。通風のたいせつなことを悟り、部屋に新鮮な空気を入れても、肺臓に十分な空気を満たさないかぎり、やがてその不完全な呼吸の結果、苦しめられることになるであろう。同じように、清潔の必要が理解され、必要な設備がとこのえられても、これを使用しなければすべておだである。これらの原則を教えるに当たってぜひ必要なことは、生徒たちがその重要性を肝に銘じて、これを良心的に実行するようになることである。

聖書には、われわれの身体に寄せられている神の関心と、これを最上の状態に維持しなければならないわれわれの責任について、非常に美しく印象的な言葉で、「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである」と言われている^八。

身体は神が住もうとお望みになっている宮で、それは、高貴な思想の住まいとして清潔に保たなければならないという思いを生徒たちに印象づけることがたいせつである。生徒たちが、生理学を学んで、まことに自分たちは「おそろるべくくすしくつくられ^九」たものであるということを悟るとき、彼らはおそのの念に満たされる。彼らは神のみ手のわざを傷つけることをしないで、創造主の輝かしいご計画を成就するために最

善の努力をつくしたいと願うようになる。こうして彼らは、健康の法則にしたがうことを、あたかも犠牲や自己否定であるかのように考えず、実際、測り知ることのできない特権、また祝福として、考えるようになるのである。

索引

- | | | | |
|---|--------------|---|------------------|
| 一 | 詩篇一三九ノ一四・文語訳 | 六 | 伝道の書三ノ一 |
| 二 | 箴言一七ノ二二 | 七 | ルカによる福音書一二ノ二三 |
| 三 | 箴言三ノ一、二 | 八 | コリント人への第一の手紙六ノ一九 |
| 四 | 箴言一六ノ二四 | 九 | 詩篇一三九ノ一四 |
| 五 | 詩篇三六ノ九 | | 三ノ一七参照 |

飲食と節制

「しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。」

生徒はみな、質素な生活と高い思考との関係を理解しなければならない。われわれの生活が意志によって支配されるか、それとも肉体によって支配されるかを決定するのはわれわれ個人個人の責任である。少年少女たちは、それぞれに自分で自分の一生をどのように形造るかを選ばなければならない。そして今後どういう勢力と交渉しなければならないか、またどんな感化によって品性と運命が形造られるかということを知るために労を惜しんではならない。

不節制は、すべての人の防がなければならない敵である。この恐るべき悪が非常な勢いでひろがっているのを見ると、人類を愛する者はだれでも立ち上がってこれと戦うにちがいない。学校で禁酒禁煙問題について教育を行なうことは、正しい方向への第一歩である。この方面の教育は、どの学校でもどの家庭でも実行されなくてはならない。青少年たちは、たばこや酒やその他の刺激物が、身体を破壊し、頭脳を曇らせ魂を官能的にする影響を与えることを悟らなければならない。こうしたものを用いる人は肉体的知的道徳的な能力をいつまでも充実した状態で持ち続けることができないということを、明らかにしなければならない。

しかし、不節制の根本原則は酒やたばこの使用よりもっと深いところにあることを知らなければならぬ。することがなかったり、定まった目的がなかったり、悪い友だちとつきあったりなどということがその間接的な原因となる場合がある。この原因は家庭の食卓、しかも自分たちは厳格に禁酒禁煙を守っていると考えているような家族の中にみいだされることがある。消化を妨げたり、神経を不当に興奮させたり、あるいは何らかの形で身体を弱めて、精神と肉体の能力のバランスをそこなうようなものはすべて、肉体に対する精神の支配力を弱め、ついには不節制にいたらせることになる。前途有望な青年の転落は、健康によくない飲食から生じた不自然な食欲にその原因がある場合が少なくない。

茶、コーヒー、香辛料、菓子類、まんじゅうなどはみな不消化のもとである。肉食も有害である。肉食は当然刺激的な効果を持っているということだけで充分な反対論となるが、さらに全般的に動物に病気が多いということが二重の反対理由となる。肉食は神経を刺激し、情欲を興奮させ、能力を下等な性癖に向ける。

濃厚で刺激的な食事に慣れた人は、質素な食物では、だんだん胃が満足しなくなる。もっと薬味のきいた、刺激と興奮の強いものを求めるようになる。神経が混乱し、身体が弱って来ると、意志は不自然な欲望に対して抵抗する力がなくなる。敏感な胃壁は刺激をうけて、焼けただれたようになり、ついにはどんなに刺激の強い食物にも満足しなくなる。強い酒よりほかにはいやすことのできない渴望が生ずる。

警戒しなければならぬのは、悪の芽である。正しいことから少ししかはずれていないように見えることがどんな結果をもたらすかということを、少年少女たちに、はっきり教えなければならぬ。質素で健康的

な食事が不自然な刺激物を求める心を防ぐのに、どんなに価値を持っているかということを生徒に教えなければならぬ。幼い時から自製の習慣を養わなければならない。われわれは自主的であるべきで、奴隷的であってはならないということを少年少女たちに印象づけてやらなければならない。神はわれわれを、内なる王国の支配者となさったのであって、われわれは、天から授けられた王権を行使すべきである。このような教えを忠実に与えるとき、結果は生徒自身だけにとどまらず、その影響は広く及んで、破滅のふちにたたずんでいる幾千の男女を救うであろう。

飲食と知能の発達との関係については、これまでよりもいっそう深い注意が払われなければならない。頭が混乱したり鈍くなったりするのは、誤った飲食の結果である場合が多い。

食物を選ぶには、食欲を規準にすればまちがいがなくよく言われる。これまで健康の法則が守られてきていたならあるいはそうかもしれない。しかし、幾世代にわたる長い間の悪い習慣によって食欲は墮落し、それはいつも何か有害なものに満足を求めている。今では食物をえらぶ規準として、食欲にたよることはできない。

衛生学の研究において、生徒たちは、各種の食物の栄養価について教えられなければならない。濃厚な刺激のつよい食事についても、また栄養素の足りない食物についても、その影響を明らかにしなければならない。茶、コーヒー、白パン、酢づけ、繊維の多い野菜類、キャンデー、薬味、まんじゅうなどからは適当な

栄養をとることができない。このような食物を用いた結果、健康を害した生徒が少なくない。精神的にも肉体的にも活発に努力することのできない弱々しい子供は、たいてい栄養不良な食事の犠牲者である。穀物、果実、堅果類、野菜を適当にとりあわせたものには、すべての栄養素が含まれ、これを適当に調理すれば、体力と知力を増進させるのに最上の食事となる。

食物の性質ばかりでなく、その食物が食べる本人に適しているかどうかを考えてみなければならない。肉体労働に従事している人なら自由に食べてもよい食物でも、主として知的な働きをしている人ならこれを避けなければならないことがある。食物の適当なとりあわせということにもまた注意を払わなければならない。頭脳的な働きに従事している人や座業をしている人は、一度の食事にあまり多くの種類の食事をとってはならない。

どんなに栄養のある食物でも、過食しないように気をつけなければならない。自然は、身体のいろいろな器官を作り上げるのに必要以上のものは用いることができないので、あり余ったものはかえって身体の邪魔になる。生徒たちが勉強をしすぎて身体をこわすように思われているが、実は過食に原因がある場合が多い。健康の法則に正当な注意が払われてさえいれば、知的な負担というものは心配するに当たらない。いわゆる知的な失敗には、胃にあまり詰めこみすぎて、身体を疲れさせ、頭脳を弱めることに原因がある場合が多い。たいていの場合、一日三回の食事よりも二回の方が望ましい。夕食の時間が早すぎると、前の食事の消化にさしつかえる。夕食の時間がおそすぎると就寝前に消化しきれない。そのために胃は適当な休息をとるこ

とができない。睡眠が妨げられ、頭脳と神経が疲れ、朝食の食欲が減退し、心身の元気が回復されないで、その日の仕事にさしつかえる。

食事と睡眠の時間を規則正しく守ることが重要であることを見落としてはならない。身体をつくる働きは休息している時間に行なわれるので、睡眠を規則正しく十分にとめることは、特に青少年少女たちにとってたいせつである。

あわてて食事をすることはできるだけ避けなければならない。食事の時間が短ければ、それだけ食事の量を減らすべきである。よくかまないで食べるよりは、むしろ食事をはぶいたほうがよい。

食事の時間は、親しみと元気回復のひとつでなければならない。心の重荷になることや、いらいらさせられるようなことは、いっさい払いのけなければならない。信頼と親切とすべての良いものを賜う神に対する感謝の念が心の中にあるときに、会話は楽しいものとなり、人の心を疲れさせることなくかえって高めるような思想が気持ちよく流れるのである。

すべてのことに、節制と規律を守ることに、ふしぎな力がある。優しい静かな性質は人生行路を平らかにするのに役立つが、これを助長するには、節制や規律を守ることが環境や生まれつきの才能よりも力がある。同時に、こうして身につけた自制の能力は、ひとりびとりの人間を待ちうけているきびしい義務や現実と取り組んで、これに成功する上に最も価値のある資格の一つであることがわかる。

知恵の「道は楽しい道であり、その道筋はみな平安である」^二とある。王冠をつけた帝王よりも高い運命になう機会を前にしているわが国の青少年たちは、賢人ソロモンのつぎの言葉に含まれている教訓を深く心に思わなくてはならない。「その君たちが酔うためではなく、力を得るために、適当な時にごちそつを食べる国よ、あなたはさいわいだ。」^三

索引

- 一 コリント人への第一の手紙九ノ二五
- 二 箴言三ノ一七
- 三 伝道の書一〇ノ一七

レクリエーション

「すべてのわざには時がある。」

レクリエーションと娯楽はちがったものである。レクリエーションは、re-creation（注・再び造るの意）というその名の示す通り、力を養い築くのに役立つ。レクリエーションによって、われわれは日常の心配や仕事から離れて、心身に生気を回復し、新しい力をもって人生のまじめな働きにもどることができる。

一方娯楽は歓楽のためであり、とかく度を過ぎやすく、有用な働きのために必要なエネルギーを奪われ、そのため人生の真の成功の妨げとなる。

身体は活動するようにつくられている。活動的な運動によって肉体の能力を健康に保たなければ、知的な能力をいつまでも最高度に用いることはできない。教室の中では、肉体的な不活動は避けられない。その他健康上よくない条件があるために、子供たち特に体の弱い子供たちにとって教室は苦しい場所である。通風が十分でないことも多い。形の悪い座席のために不自然な姿勢が助長され、肺臓や心臓の活動が圧迫される。小さい子供たちは、不潔でしかも病菌で汚れているような空気を吸いながら、一日のうち三時間から五時間をここで過ごさなければならない。一生の病弱の原因がこういう教室にある場合が多いのも当然である。頭

脳は身体中で最も微妙な器官であり、しかも身体中の神経エネルギーがここから出ているのであるが、この頭脳が最もひどくそこなわれる。年齢に不相応な活動や過度の活動が、しかも健康によくない条件のもとに行なわれるとき、頭脳は弱められ、その悪い結果は一生つきまとうことになる。

子供たちを長時間室内に閉じこめておいてはならない。また、身体の発育の基礎が十分にでき上がるまでは、子供たちをあまり勉強に没頭させてはならない。八才か十才ごろまでの子供の生活にとっては、野原や庭がいちばん良い教室であり、母親がいちばん良い先生であり、自然がいちばん良い教科書である。子供が学校へ通う年ごろになっても、本からの知識よりは、その子の健康をもっとたいせつに考えるべきである。子供は、肉体と知能の発育にもっとも適した環境に囲まれていなければならない。

空気と運動の不足の恐れがあるのは、子供の場合だけとは限らない。下級学校に劣らず上級学校においても、こうした健康上のたいせつな点が見おとされていることが多い。多くの学生は、毎日毎日、狭い教室の中で、本の上にかがみこんで、深い十分な呼吸もできないほど胸をせばめ、血液の循環は悪く、足は冷え、頭は熱くなつたままずっと続けている。十分に栄養のとれていない身体は、筋肉が弱くなり、全体の組織が衰え、病気に冒される。こういう学生は一生虚弱者で終わる場合が多い。もし彼らが正しい条件のもとに学業をつづけ、戸外の日光と空気の中で規則正しい運動をとっていたなら、知力も体力ともに増し加わって学校を卒業できたはずである。

教育を受けるために限られた時間と学資をもって努力している学生は、身体の運動のために時間を費やす

ことをむだに思ってはならない。始終本ばかり読みふけている者は、しまいには頭脳の新鮮さが失われてしまう。身体の發育に適當に注意する者は、全時間を勉学だけに費やすよりもはるかに學問的に大きな進歩をする。

一つのことだけを、もっぱら思索ばかりしている人は、頭脳のバランスが失われることがある。しかし、知力と体力に平等に負担を負わせ、思考の問題に變化をあたえれば、どの能力も無理なく働かされることになる。

身体の運動不足は、知力ばかりでなく、道德的な能力まで低下させる。身体の組織全体を連結している脳神経を仲介として天と人との交際が行なわれ、魂の感動が与えられるのである。神経組織の感應電流の循環が妨げられて、活力が弱くなり、知的感受性がにくくなるときに、靈性の目ざめはいっそう困難になる。

さらにまた、過度の勉強によつて、血が頭にばかり集まってしまうと、病的な興奮状態を生じて、自制力が低下し、一時的な感情や気まぐれに支配されることが非常に多くなる。こうして、不純に対してとびらが開かれる。肉体の能力を全然用いないかあるいは誤ったことに用いることが、世界中にひろがっている墮落の風潮の大きな原因である。「高ぶり、食物に飽き、安泰（原文・怠惰）に暮^ニしていたが」ということは、ソドムに滅亡をもたらした時と同様に、今日の時代においても人類の進歩にとって恐るべき敵である。

教師はこうしたことをわきまえて、生徒にこういう方面の教育をしなければならない。正しい生活は正しい物の考え方によつて決まるということ、そしてまた肉体の活動は純潔な考え方によつて必要欠くことので

きないものであるということを、生徒たちに教えるべきである。

生徒たちのための適当なレクリエーションということは、しばしば教師を苦しめる問題の一つである。たいていの学校では、体操が有用な位置を占めているが、しかし注意深い監督がないと、これは過度に流れるおそれがある。体育館で、離れわざを試みようとして、一生不具になった青年が少なくない。

体育館の運動は、どんなによく指導されても、外気の中で行なわれるレクリエーションの代わりとなることはできない。この点について、わが学校ではもっとよい機会を与えなくてはならない。生徒たちは活発な運動をしなければならない。目的もなく、ただぶらぶらしていることぐらい恐るべき悪はあまりない。しかし、たいていの運動競技の傾向は、真に青少年の幸福を心に願う者にとっては憂慮すべき問題である。教師たちは、これらのスポーツが、生徒の在学中の成績と社会に出てからの成功にあたえる影響を考えると、心配させられるのである。生徒は、大部分の時間を運動競技にとられてしまつて、心は勉強から離れてしまふ。それらの運動競技は、青年たちが、人生の実際的なまじめな働きのために準備する助けにはならない。その影響は、上品さや寛大な心や、真の男らしさというものには役立たない。

フット・ボールやボクシングのような最も人気のある種類の娯楽は、野蛮行為の学校となっている。それは、古代ローマの競技によってつちかわれたのと同じ特性を発達させている。権力への愛着、単なる蛮力の誇り、生命の軽視などは、青少年たちに驚くべき墮落の影響を与えている。

その他の運動競技は、それほど野蛮ではなくても、過度に流れるという点においてやはり好ましくない。

それは歓楽と興奮を好む心を刺激し、そのために有用な働きをきらう気持ちや、実際の義務や責任を避け
たがる傾向を助長する。それはまた、人生のまじめな現実と、その落ち着いた喜びを味わう気持ちを滅ぼす
傾向を持っている。こうして、道楽と放縦に向かつてとびらが開かれるとき、そこには恐るべき結果が伴う
のである。

世間で一般に行なわれているような歓楽のパーティーもまた心や品性の真の発達にとって妨げとなる。浮
わついた交際や、浪費、享楽、ひいては道楽といったような癖がつき、そのために一生がだいなしになる。
こういう娯楽の代わりに、健康的で活気に富む遊戯をあたえるように、親も教師も力を尽くさなければなら
ない。

われわれの幸福に関する他のすべてのことと同様に、レクリエーションという問題においても、神は道を
示しておられる。昔、民が神の直接の導きのもとにあつたころは、生活が単純であつた。彼らは自然のふと
ころに住んでいた。子供たちは親たちといっしょに働き、また、自然の宝庫の美しさと神秘を学んだ。静か
な野や森の中で、彼らは、聖なる委託物として代々伝えられてきた大いなる真理について深く思いをめぐら
せた。こうした訓練によって、強い人間ができたのであつた。

今日、生活は不自然になり、人間は退化している。われわれはそうした古代の単純な習慣にすっかりもど
るというわけにはいかないが、しかしそこから教訓を学び、レクリエーションを本来の意味通りに肉体と精
神と靈魂の真の建設の時間としなければならない。

家庭や学校の環境は、レクリエーションの問題と大いに関係がある。家庭や学校の所在地を選ぶときには、この点を考慮に入れなければならない。社会の要求や慣習やあるいは金銭よりも、精神と肉体の健康を重んずる人は、自然の教えから受ける恵みと、自然の環境に囲まれたレクリエーションを子供のために求めなければならない。どの学校も、生徒たちの耕作する土地を備え、また野や森に親しめるような場所にあるなら、教育の働きに非常な助けとなるであろう。

生徒のレクリエーションという方面において、最善の結果を得るには、やはり教師の個人的な協力がなければならぬ。教師が自ら生徒の仲間入りをするくらい、生徒にとって価値のある贈り物は他にない。われわれは人々と交わるとき、相手と同じ気持ちになってはじめて相手を理解することができる。相手が少女たちの場合には、ことさらにそうである。もっとも効果的に役立つためには、まず相手を理解しなければならぬ。教師と生徒の間の心のつながりを密接にするには、教室の外でいっしょに楽しく交わることが最も効果的な方法である。ある学校ではレクリエーションの時間には、先生はいつも生徒といっしょにいる。彼は、生徒と勉強を共にし、生徒の遠足について行き、いつも生徒と一体になるうとしている。わが学校でも、こういう習慣がもっと一般に行なわれるようになったなら、どんなにいいことであろう。教師に要求される犠牲は大きいかもしれないが、しかしそれは豊かに報いられるであろう。

青少年たちにとって、自分のためだけのレクリエーションよりは、他人のためになるレクリエーションのほうがはるかに大きな祝福となる。子供というものは生まれつき熱心で感じやすいので、人の言葉をすぐに

受け入れる。木や草花を植える計画をたてるに当たっては、教師は、校庭や教室の美化ということに生徒たちの関心と呼び起こすように努めなければならない。そのとき二重の利益が生ずる。生徒たちは自分たちが美しくしようと努力しているものを傷つけられたり、汚されたりしたくない。上品な趣味、整頓を好む心、ほねおりを惜しまない習慣などが助長され、こうしてつちかわれた協調的な精神は、生徒たちにとって、一生の祝福となる。

生徒たちが、庭園の仕事をしたり、野原や森に遠足をしたりしているときに、そういう気持ちのいい場所で、自分たちといっしょに自然の美しい事物を楽しむことができないで、家の中に閉じこもっている人々のことを思うように教えられると、彼らは新しい関心をおぼえるであろう。

注意深い教師は、いろいろな機会をとらえては、生徒たちが人の助けとなる行為をするように導くことができる。教師は特に小さい子供たちから、ほとんど無限の信頼と尊敬をもって見られている。家庭において手助けになることや、日々の勉強を忠実にすることや、病人や貧しい人々のために尽くすことなど、教師が子供に言いきかせることはどんなことでも必ず効果がある。こうしてまた二重の利益が得られるのである。その親切的助言は、それをあたえた教師自身の上に反応する。父母の側における感謝と協力は、教師の重荷を軽くし、その道を明るくするであろう。

レクリエーションや体育のために時間をさくことが、学校の正規の課業にさしかえる場合があることは確かである。しかし、そのさしつかえはほんとうの妨げとはならない。そのために費やされた時間と労力と

は、心身の力が強壮になり、無我の精神が養われ、教師と生徒たちが共通の関心と親しい交際というきずなによっておすばれることの中に百倍にもなって報いられるのである。若い人たちのとかく危険な源である不安定なエネルギーに安全なはけ口があたえられるのである。善に専念することは、悪への防壁としてたくさん法律や訓戒の壁よりも価値がある。

索引

- 一 伝道の書三ノ一
- 二 エゼキエル書一六ノ四九

労 作 教 育

「手ずから働きなさい」

天地が造られた時に、労働は、祝福として与えられた。それは、進歩と能力と幸福を意味した。罪ののろいによって、地上の状態が変化したために、労働の状態にも変化が生じた。今日、労働には心配と疲労と苦痛が伴うが、しかしやはりそれは幸福と進歩の源泉であり、誘惑への防壁である。労働による鍛練は放縦を防ぎ、勤勉と純潔と強固な心を助長させる。このようにして労働は、人類を墮落から救う神の大いなるご計画の一部分となるのである。

青少年たちに、労働の真の尊さを認めさせなければならない。神はたえず働いておられることを彼らに教えなければならぬ。自然界の万物は、それぞれ割り当てられた働きをなしている。神の創造に成るすべてのものは活動している。われわれもまた与えられた任務を果たすために活動的でなければならない。

われわれは、労働において神と共なる働き人とならなければならない。神は地とその宝をわれわれにお与えになっているが、これを用いてわれわれの生活が豊かになるように適応させるのは、われわれのなすべき分である。神は樹木を生長させてくださるが、これを材木にし、家を建てるのはわれわれである。神は、地

中に金、銀、鉄、石炭などを隠しておられるが、これを手に入れるためには、ほねあって働かなければならない。

神は、万物を創造し、たえずこれをご支配になっっているが、一方またそうしたご自分の能力に幾分似通った能力をわれわれにもお授けになっっていることを示さなければならない。われわれは自然の力のある程度支配することが出来る。神がこんとんの中から美しい地を出現させたように、われわれも混乱の中から秩序と美を生み出すことができる。今日あらゆるものは罪にそこなわれてはいるが、しかしわれわれは自分が完成した仕事をながめるときに、神が美しい地をながめて「はなはだよかった」と仰せになったときのお気持ちにも似たよろこびを感じるのである。

一般的に言って青少年たちにとっても益のある運動は有用な仕事の中に見いだされる。幼い子供にとっては、遊びが気分転換であり、進歩であるから、その遊戯は身体ばかりでなく知能と靈性の発達を促すものでなければならない。子供の体力と知能が進むと、何か有用な方面に努力することが最上のレクリエーションとなる。若い人たちが役に立つ人間になるように訓練され、人生の重荷を負うことを教えられるとき、心と品性の成長はもっとも効果的に促進される。

人生は、真剣に働き、責任を負い、ほねあることであるということを青少年たちに教えなければならない。彼らは、実際の人間——非常事態と戦うことのできる男女となる訓練をうけなければならない。組織立った、規律正しい労働は、人生の浮き沈みの防壁としてばかりでなく、円満な進歩に役立つものとして無くて

はならないものであることを、少年少女たちに教えなければならない。

労働の尊さについては、口にも言われ、本にも書かれているが、しかし一般にこれを卑しむ気持ちが強い。若い男たちは、教師や書記や商人や医者や弁護士などになりたがり、あるいはその他肉体労働を必要としないような地位を占めたいと望む。若い女性は家事を避けて、他の方面の教育を求める。どんな男でも女でも、まじめに働きさえすれば、決して品格が下がることはないということを学ぶ必要がある。怠惰や利己的な依頼心こそ、その人の品格をさげるものである。怠惰は放縦な心を養い、その結果はむなしい荒れた生活となり、あらゆる悪の成長を促す温床となる。「たとえば、土地が、その上にたびたび降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ作物を育てるなら、神の祝福にあずかる。しかし、いばらやあざみをはえさせるなら、それは無用になり、やがてのろわれ、ついには焼かれてしまう」とある^二。

生徒の時間を消費している学科の中には、有用さや幸福という点においてはあまり必要のないものが多い。ひとりびとりの青少年たちにとって、ぜひとも必要なのは、日々の義務について完全な知識を持つことである。やむを得なければ、若い女性が、フランス語や代数やあるいはピアノをひくことさえ、知らなければ知らないですますことはできるが、しかしおいしいパンを作ったり、からだにきちんとあった衣服を作ったり、その他家事に関するいろいろな務めをりっぱに果たすことを学ぶことだけは、どうしても必要である。

家族全体の健康と幸福にとって、料理をする者の技術と知恵ほどたいせつなものはない。調理のまちがった不衛生な食物によって、おとなの有用さも子供の発育も妨げられ、はなはだしいときはだいなしにな

ってしまうことすらある。一方また身体の必要に応じたしかも食欲をそられるようなおいしい食物を用意することは、人生の正しい方向に貢献することであり、これができなければそれだけまちがった方向に力を尽くすことになる。このように人生の幸福は、多くの点において、日常の務めを忠実に果たすことに関係がある。

家庭を作るには、男にも女にも責任があるので、女の子と同じように男の子も家事についての知識を持つべきである。寝具やへやの整理、さら洗い、炊事、衣服の洗濯や繕いなどを、男の子にさせることを男らしくない訓練と思ってはならない。それは男の子をもっと幸福にそしてもっと役に立つ者とする。一方、女の子たちが馬具をつけて、馬を御することを習い、くまでやくわを使うことはもちろん、のこぎりやハンマーを使うことをおぼえるなら、人生の非常事態に直面してもまごつかないであろう。

少年少女たちは、神が日々の勤労者の働きをどんなにとんとんでおいでになるかを、聖書から学ぶ必要がある。

「預言者のともがら」^三すなわち学校の生徒たちが、自分たちの手で家を建て、そのとき借りたおのを失うが、それをとりのためにも奇跡が行なわれた話を読んでいただきたい。大工としてのイエスや天幕製造業者としてのパウロが、職人としての勤労と最高の任務を、すなわち人間的なものと神的なものとを結合したことを読んでいただきたい。救い主のふしぎな奇跡によって、少年の持っていた五つのパンで群衆が養われたことや、裁縫師ドルカスが死よりよみがえらせられて、貧しい人々のために衣服をつくる働きを続けたこ

とや、箴言の中に描かれている賢い婦人すなわち「羊の毛や亜麻を求めて、手ずから望みのように、それを仕上げ」^四「家の者の食べ物を備え、その女たちに日用の分を与え」^四「ぶどう畑をつくり、…その腕を強く」^四し、「手を貧しい者に関き、乏しい人に手をさしのべ」^四「家の事をよくかえりみ、怠りのかてを食べることをしない」^四婦人について書かれていることを読んでいただきたい。

こういう人々について、神は、「その手の働きの実を彼女に与え、その行いのために彼女を町の門でほめたえよ」^五と仰せになっている。

どの子供にとっても、最初の実業学校は家庭でなければならない。そしてまた、できるだけ、どの学校にも労作教育の設備がなければならない。こうした教育は体育館に代わる役目を果たし、その上、価値のある訓練を与えるという特典がある。

労作教育には、これまでよりもいっそうの力を入れるだけの価値がある。最高の知的靈的教養を与えるとともに、身体の発達と実業教育のために、できるだけ最上の設備の整った学校が建てられなければならない。農業や製造業やできるだけ多くの有益な商売も含めて、——また家政、栄養料理、裁縫、保健的な婦人子供服の仕立て、病人の治療、その他こういういろいろな方面の教育を与えなければならない。庭園や作業場や治療室を備え、すべての方面の働きが、熟練した教師によって指導されなければならない。

働きはつきりした目標を定めて、用意周到になされなければならない。だれでもいろいろな方面の技術について一通りの知識を持たなければならないが、しかし少なくともある一つのことに熟練することが絶対

に必要である。生徒たちは、卒業するにあたって、一人残らず何らかの商売なり職業なりの知識を修得して、必要ならそれで生活をささえることができるようになっていなければならない。

学校の実業教育について、しばしば起こる反対の議論は、これに要される大きな経費の問題である。しかし、この目的を達成するためには、それだけの費用をかける価値があるのである。われわれにゆだねられている働きの中で、青少年の教育ほどたいせつなものはない。この働きを正しく達成するために必要とされた経費はすべて有効に用いられた資金というべきである。

経済的な面から結果を考えてみても、労作教育に要された経費は、最も真実な経済であることがわかる。多数の青少年たちは、こうして町角や酒場から遠ざかるようになり、そのために病院や感化院にかかる費用が節約された分は、庭園や作業場や水泳場をつくるのに必要な費用に当ててもなお余りがある。さらに、勤労の習慣をしつけられて、有用で生産的な方面の働きに熟練した青少年それ自体——こうした青少年たちの価値は、社会と国家にとって測り知れないものがある。

勉強から解放されて、外気の中で仕事をし、からだの全体を運動させることは、最も有益である。労作教育として、農業ほど価値のあるものはない。農業の働きに対する興味をよび起こし、これを助長するために、もっと大きな努力を払うべきである。教師は、農業について聖書に言われていることに注目するがよい。すなわち、地を耕すことは人類に対する神のご計画であることや、全世界の支配者であった最初の人アダムは、庭園の手入れを命じられたことや、この世でもっとも偉大な、そして真に高潔であった人々の多くは、地を

耕す人々であつたことなどがしるされている。このような生活にどんな機会があるかを示さなければならぬ。賢者ソロモンは言う、「国の利益は全くこれにあり、すなわち王者が農事に勤むるにあるなり」^六と。土を耕す者について、聖書にはこう言明されている。「これは彼の神が正しく、彼を導き教えられるからである」^七。また「いちじくの木を守る者はその実を食べる」^八と。農業によつて生活している者は多くの誘惑から免れ、大都会に働いている者には得られない多くの特権と祝福が与えられる。巨大な企業合同と商業競争時代の今日、土を耕す者ほど眞の独立とそのほねおりに対する公平確実な報いをあたえられる者はあまりない。農業の研究においては、生徒に理論を教えるばかりでなく実習をさせなければならない。土の性質および準備、また各種の作物の価値や、最上の生産方法などについて、生徒たちに科学的な知識を学ばせると同時に、これを実地に応用させるがよい。教師は生徒たちといつしよに働いて、熟練と知識の伴つた努力によつて、どんな結果が成就されるかを示すがよい。こうして心からの興味がわき、この働きを最上の方法によつてなそうとする抱負が喚起される。このような抱負は、運動、日光、清い空気などといったような心身を強壮にする効果とともに、農業の働きに対する愛着を感じさせ、これを職業として選択する決心を多くの青年たちに持たせる。こうしてその影響は、今日大都会をめざして移転する風潮を変えることに非常に役立つであらう。

こうしてわが学校はまた、失業者群の対策に効果的な援助を与えることができるであらう。路頭に迷つて飢えている幾万の人間が、犯罪者の群れを日々に激増させているが、もし彼らを指導して土地の耕作にじよ

うずに勤勉に働かせることができたなら、彼らは、幸福で健康な自給独立の生活を築き上げることができるであろう。

労作教育の恵みは知的職業に従事している人々にとっても必要である。すぐれた頭脳を持ち、思いつきが早く、自分の選んだ職業につくだけの知識と技術を持っていたとしても、その実務にふさわしい資格を備えていない場合があるかもしれない。主として書籍だけから得た教育は、とかく表面的な考え方に陥りやすい。実地の働きによって、綿密な観察力と独自の考え方が養われる。実地の働きが正しくなされるとき、それはいわゆる常識という実際の知恵の発達に役立つ。また物事を計画し実行する能力が発達し、勇氣と忍耐力が増し加わる。そこにはまた氣転と熟練の働きが要求される。

病室で実際に働いて専門の知識の基礎を築いた医者は、するどい洞察力と円満な知識と非常の場合に必要な処置をとる能力を備えている。こうしたことはすべて、実地の訓練によってはじめて十分に得ることのできる資格である。

牧師や宣教師や教師が、日常生活の実際的な仕事に必要な知識と技術を持っていることがわかると、人々に及ぼす彼らの感化はいっそう大きくなる。伝道者としての成功や、また恐らく生活そのものは、彼が実際的な事柄について知識を持っているかどうかによって左右される。食事を準備したり、事故や非常事態に対処したり、病気を治療したり、家や必要なら教会堂まで建てたりなど、こうした能力を持っているかいないかが一生の働きの成功と不成功の分かれ道となることがある。

教育を受けるにあたって、多くの生徒たちは、もし自給ができるなら非常に貴重な訓練を得るであろう。

若い男女は、借金をこしらえたり、親の犠牲にたよったりしないで、自立することを考えなければならない。こうして彼らは金銭の価値や時間と力と機会の価値を知り、怠惰にふけることや、金銭を浪費する習慣の誘惑を受けることがはるかに少なくなる。経済、勤勉、克己、实际的な事業経営、確固たる目的といったような教訓がこうして修得され、それは、人生の戦いに対する用意としてきわめて重要な一部分となる。借金の重荷に苦しめられ、そのため教育上に支障をきたしている学校が少なくないが、生徒たちの学んだ自立の教訓は、学校当局がこうした借金に陥らないようにする上に大いに力がある。

教育とは、人生のいやな仕事や重荷からのがれる道を教えることではなくて、よりよい方法とより高い目標を教えることによって、働きを軽くすることが目的であることを青少年たちに印象づけなければならない。人生の真の目標は、自分のためにできるだけ最大の金もつけをすることではなく、この世の働きに自分の立場を果たすことによって創造主の栄光をあらわし、また自分より弱い者や無知な人たちに手を貸して、かれらを助けることであることを生徒たちに教えなければならない。

肉体労働が卑しまれる最大の理由は、それが、いいかげんな、考えのないやり方でなされることが多いからである。自分から選んでするというのではなくて、必要に迫られてするのである。働く人は、それに気乗りがせず、自尊心もなければ、また他人からの尊敬もかち得られない。労作教育によって、こうした弊害が矯正されなければならない。物事を正確に徹底的にやる習慣を養うべきである。生徒たちは熟練と秩序を学

び、時間を節約することと動作にむだがないようにすることを学ばなければならない。彼らに最善の方法を教えるばかりでなく、たえず進歩しようとする向上心を吹きこまなければならない。その働きを人間の頭脳と手によって、できるかぎり完全に近いものにするように心がけなければならない。

このような訓練によって、青少年は労働の奴隷となることなく、かえって主人となる。それは勤労者の負担を軽くし、どんなに卑しい職業も高貴なものにする。働くことをただのほねおり仕事に思い、無知な自己満足をもってこれにとりかかり、進歩するために努力しない者には、ついにはそれがほんとうに重荷となってしまうのである。しかしどんなに卑しい働きにも知識をみとめる者は、そこにとうとさと美しさを見、その働きを忠実に能率的に遂行することに喜びを感じるのである。

このような訓練をうけた青少年は、一生の職業がどんなものであろうと、それがまじめなものであるかぎり、自分の地位を有用にして尊敬に価するものとするのである。

索引

- | | | | | |
|---|------------------------|---|-------------|-------|
| 一 | テサロニケ人への第一の手紙四ノ一 | 五 | 箴言三ノ三三 | 同三〇参照 |
| 二 | ヘブル人への手紙六ノ七、八 | 六 | 伝道の書五ノ九・文語訳 | |
| 三 | 列王紀下六ノ一 | 同 | 一七参照 | |
| 四 | 箴言三ノ一三、一五、一六、一七、二〇、二七、 | 七 | イザヤ書二八ノ二六 | |
| | | 八 | 箴言二七ノ一八 | |

七品性の形成

「山で示された型どおりに、注意して
そのいっさいを作らない。」

ヘブル人への手紙八ノ五

教育と品性

「主は救と知恵と知識を豊かにして、あなたの代を堅く立てられる。」

真の教育は、科学的な知識や学問的な素養の価値を軽んじない。しかしそれは、知識よりも能力を、能力よりも善を、知的な素養よりも品性を重んじる。世は、広い知識をもった人間よりも高貴な品性を備えた人物を必要としている。才能が堅固な原則によって支配された人物を世は求めている。

「知恵の初めはこれである、知恵を得よ。」「知恵ある者の舌は知識をわかち与え」^二とある。真の教育は、この知恵を授ける。それは、われわれの能力と素養の一つだけでなく、その全部を最もよく用いることを教える。このように真の教育は自分自身と、社会と、神に対する義務の全範囲にわたっているものである。

品性を築くことは、人類に任された最もたいせつな働きであって、今日ほどこれについて熱心に研究しなければならぬ時はかつてなかった。これほど重大な問題に直面した時代はこれまでになく、また青年男女が今日ほど大きな危機に直面したこともかつてないことであった。

今日のような時代に、どんな傾向の教育が授けられているであろうか。たいていの場合どんな動機が強調されているであろうか。利己主義である。今日あたえられている教育の大部分は、教育の邪道である。真の

教育においては、利己的な野心とか、権勢欲とか、人類の権利と必要を無視するといったような、世の災いとなるものはすべて否定される。神はひとりびとりのために人生の計画をお持ちになっている。各人はそのタレントを最大限に進歩させるべきで、あたえられた天分が多かろうと少なかろうと、忠実にタレントをみがくことによって、その人は尊敬に価する人物となることができる。神のご計画の中には利己的な競争の余地はない。「互にはかり合ったり、互に比べ合ったりしているが、知恵のないしわざである」とある^三。すべてのことは、「神から賜わる力」をも^四ってなされなければならない。「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から働きなさい。あなたがたが知っているのとおり、あなたがたは御国をつぐことを、報いとして主から受けるであろう。あなたがたは、主キリストに仕えているのである」と教えられている^五。こうした原則を実行することの中に、尊い奉仕があり、また尊い教育が得られるのである。しかし今日あたえられる教育の大部分は、全然これとは異なったものである。子供たちは幼い時分から負けじ魂と競争心を刺激されるような教育を受けて、利己心が養われ、あらゆる悪の原因が植えつけられる。

こうして優越争いが生じ、「詰め込み」式の教育が奨励されて、ついには健康をだいなしにし、役に立たない人間にしてしまう場合が多い。一方また負けじ魂は不正直に発展し、野心と不満はこうじて人生をにがにがしくし、騒動を好む不穏な精神をもった人間で世の中が満たされ、社会はたえまない脅威にさらされる。危険は方法の中にだけあるのではない。それは、学問の主題そのものの中にある。

人生の最も感受性の強い時期に、少年少女たちの心は、どんな書籍にそそがれているであろうか。語学や

文学の研究で、少年少女たちは、どんな泉から飲むように教えられているであろうか。それは、異教の井戸、腐敗した古代の異教国に源をもつ水の泉である。少年少女たちが勉強させられている本の著者たちは、道德上の原則に何らの関心を持っていないことを表明している人々であることはいうまでもない。

同じことがまた大部分の近代作家についてもいえる。美しい優雅な言葉は、読者に反ばつ心を感じさせるような醜悪な正体である原則をかくす仮面にすぎないことがどんなに多いことだろう。

その上さらに、多くの小説作家たちは、安逸という宮殿の甘い夢に人々をさそっている。これらの作家たちは、あからさまに不道德の非難は受けないかもしれない。しかしその著書が実際に悪を伴っていることは変わりがない。それは、幾万の人々から人生のきびしい問題に必要な時間と精力と自己鍛練とを奪っているのである。

一般に行なわれている科学の研究にもまた同じように大きな危険がある。進化論およびこれに類する誤りが、幼稚園から大学にいたる各段階の学校で教えられている。神の知識をさずけるべき科学の研究には、こうして人間の推測と理論が入りまじったために、それは不信仰に役立っている。

聖書研究でさえも、学校で行なわれている方法には、神のみ言葉という貴重な宝を世人から奪ってしまっている場合が非常に多い。いわゆる、「高等批評」なるものは、解剖し、推測し、組み直すことによって、聖書は神の啓示であるという信仰をぶちこわし、人の一生を支配し、高め、霊感づける能力を神のみ言葉から奪っている。

青少年たちが、世の中に出て行って、金もうけの欲望、享樂や放縱、みえ、ぜいたく、ほうとう、不当なもうけ、詐欺、盗み、破滅といったような罪への誘惑に出会うとき、彼らはそこでどんな教えに当面しなければならぬであろうか。

唯心論(Spiritualism)では、人間は神的性格をもった墮落しない存在で、「自分の心をさばくものは自分の心である。」「人は真の知識をもつとき一切の律法に超越する。」「罪を犯しても罪とはならない」と主張される。なぜなら「すべて有るものは正しい」からであり、また「神は罪を定めない」からであるというのである。どんな下等な人間も天国に行って高い地位を与えられると説かれている。こうして、その教えはすべての人に向かって「どんなことをしてもかまわない。あなたがたの好きなように暮らしなさい。天国はあなたがたの家郷だ」と宣言する。多くの人々は、こうして、欲望こそ最高の律法であり、放逸こそ自由であり、人は自分自身にだけ責任があると信じるようになる。

人生の最初から、感動の最もはげしい、そして自制と純潔の最も強く要求される年ごろに与えられるこうした教えに、魂を防御するような何ものがあるであろうか。そこには世を第二のソドムとしないようにする何ものがあるであろうか。

同時にまた無政府主義が、いっさいの律法を、——神の律法だけでなく、人間の法律までも廃しようとしている。富と権力の集中、多数の者を犠牲にして少数の者だけで富をにぎろうとする巨大な団結、自分たちの利益と権利を守ろうとする下層階級の団結、不安と暴動と流血の精神、フランス革命をひきおこしたのと

同じ教えの世界的なひろがり、——こうしたすべてのことが、フランスをゆり動かしたのと同様の争乱に全世界をまきこむのに役立っている。

今日の青少年たちは、こうした勢力に直面しなければならないのである。このような動乱のさなかに立つためには、彼らはいまその品性の基礎を置かなければならない。

品性を築くための真の基礎と型とは、どんな時代にあってもまたどんな国にあっても、同じである。「心をつくし、……自分を愛するようになり、あなたの隣り人を愛せよ」^六という神の律法——救い主のご品性と一生に現わされているこの大原則こそ、ただ一つの堅固な基礎であり、ただ一つの安全な道しるべである。

「主は救と知恵と知識を豊かにして、あなたの代を強く立てられる。」^七——この知恵と知識を与えることができるのは、神のみ言葉だけである。

神の戒めに従うことについて、「これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である」^八と、イスラエルに言われた言葉は、今もなお変わらず真実である。

ここに個人の誠実、家庭の純潔、社会の幸福と国家の安定のための唯一の防壁がある。人生の困苦と危険と要求の争いの真ただ中であって、安全で、しかも確実なただ一つの法則は神のみ言葉を行なうことである。「主のさとしは正しくて」「これらの事を行う者はとこしえに動かされることはない」^九とある。

索引

一	イザヤ書三三ノ六
二	箴言四ノ七、一五ノ二
三	コリント人への第二の手紙一〇ノ二
四	ペテロの第一の手紙四ノ一
五	コロサイ人への手紙三ノ二三、二四
六	ルカによる福音書一〇ノ二七
七	イザヤ書三三ノ六
八	申命記四ノ六
九	詩篇一九ノ八、一五ノ五

教 え 方

「思慮のない者に悟りを与え、若い者に知識と慎みを得させるためである。」

長年にわたって教育は、おもに暗記に力がそがれてきた。暗記の能力には極度の負担が負わされてきたが、他の知的な能力はそれほど発達させられなかった。生徒たちは頭に知識を詰めこむことに時間を費やして努力しても、その知識の中で実際に役に立つものは少なかった。このように、消化することも、わがものとすることもできない事गरを詰めこまれた頭脳は弱くなり、自分の力で活発に思考することができなくなり、他人の判断や理解に依存して甘んじている。

この方法の弊害をみとめた一部の人々は、こんどは他の極端な方法に走った。この人たちの見解によれば、人間は自己の内部のものを発達させることだけが必要であるというのである。このような教育によって生徒は自己満足に陥り、ついには真の知識と能力の源から離れてしまうのである。

暗記力を訓練するばかりで、自主的な思考を妨げる教育では、道徳的な意義というものが十分に認識されていない。生徒が自分の頭で推理し判断する能力を犠牲にすると、彼は真理と誤びゅうとの見分けがつかなくなり、すぐに欺惑のとりこになってしまう。彼は簡単に伝統と習慣に従うようになる。

誤びゅうはその正体をひきだしにして現われることはほとんどないという事実、一般の人々は気がつかない。これは危険なことである。誤びゅうは真理の中にまじるか、あるいは真理に付随して入り込むのである。人類の始祖アダムとエバは善悪の木の実を食べて墮落したが、善悪の入りまじったものを受け入れることに今日の男女の破滅があるのである。他人の判断に依存している者は、おそかれ早かれいつかは、道を誤ることは確実である。

正しいことと悪いことを見分ける能力は、各人がそれぞれ神により頼むことによってのみ得られる。各人は自分自分でみ言葉を通して神に学ばなければならない。推理する能力は、使うために与えられているのであって、神はこれを働かせるようにお望みになっているのである。「さあ、われわれは互に論じよう」^二と神は招いておいでになる。神にたよることによってわれわれは、「悪をすて、善を選ぶ」^三ところの知恵をもつことができる。

すべての真の教え方においては、個人的な要素がたいせつである。キリストは、人々に教えるときには、彼らを個人的に扱われた。キリストは個人的な接触と交際によって、十二弟子を教育なさった。キリストは最もとうとい教えを個人的にお与えになったが、聞く者がたったひとりしかない場合もよくあった。オリブ山における夜の会合で、世人から尊敬されているラビに向かつて、あるいはサマリヤの井戸のほとりで、世人から卑しめられている女に向かつて、キリストは最もとうとい宝を示された。キリストはこの人たちの心と思いと精神がご自分の教えに向かつて開かれ、感動し、受け入れることをお認めになった。幾度となく

キリストのもとに押しよせた群集さえも、キリストにとっては無分別な人間共の集まりではなかった。キリストはひとりびとりに直接に語り、ひとりびとりの心に訴えられた。主は聴衆の顔をみつめ、真理が魂にふれた証拠としてその顔色が明るくなり、感応の気配がちらつとかすめるのをごらんになった。するとキリストのみ心はその喜びの共鳴にうちふるえるのであった。

キリストはひとりびとりの人間の中に、可能性をお認めになった。表面がどんなに有望にみえなくても、あるいは環境がどんなに好ましくなくても、キリストは顔をそむけたりはなさらなかった。マタイは、町の収税所から、ペテロとその兄弟たちは魚とりの舟から召されてキリストに学んだ。

今日、教育の働きにおいては、これと同じ個人的な関心、各個人の発展についての同じ注意が必要である。表面は有望に見えない青少年少女の中には、豊かな天分が与えられていながらそれを用いていない者が少なくない。教育者の側の認識が足りないために、彼らの才能は隠されたままになっているのである。表面はあらくぜりの石のように見えない少年や少女の中に、熱やあらしや圧力のどんな試練にも耐える貴重な素質が見いだされることがある。真の教育者は、自分の生徒がどんな者になるかということを念頭において、自分が働きかけている素材である生徒の価値を認めなければならない。彼はひとりびとりの生徒に個人的な関心を持ち、そのすべての能力を発達させることにつとめなければならない。正しい原則に一致するためにはどんなに不完全でもあらゆる努力を払うように奨励しなければならない。

青少年少女たちはだれでも勤勉の能力とその必要を教えられなければならない。成功するとしなひとは、天

分や才能よりもはるかにこの勤勉さによって決まるのである。勤勉なくしては、どんなにすばらしい才能も役に立たないが、一方また正しい方向に努力するとき、生まれつきどんなに平凡な才能しかない人でも驚くべきことをなしとげることができる。驚嘆するような業績をなしとげた天才でさえ、ほとんど例外なしにたゆまぬ努力を結集しているのである。

青少年たちは、すぐれた点はもちろん不得手なことでも、すべての才能を発達させることを心がけるように教えられなければならない。たいていの者は、生まれつき自分の性質に合ったある方面だけの勉強に限ろうとする傾向がある。この弊害に気をつけなければならない。生まれつきの素質は、一生の働きの方角を示しており、それが正しい場合には、注意深くこれを育てなければならない。しかし同時にまた均衡のとれた品性とあらゆる方面における有能な働きは、完全でかつ円満な教育の結果である均斉のとれた発達によるところが大きいということを念頭におかなければならない。

教師はいつでも単純と効果を心がけるべきである。主として例話を用いて教え、年長の生徒たちを扱う場合でも、説明はすべて簡単明りようであるように注意しなければならない。かなり年齢の進んだ生徒でも理解力においては子供にすぎない場合が多い。

教育の働きにおいてたいせつな一つの要素は熱心である。この点についてかつてある有名な俳優の言った言葉の中に有益な暗示がある。かつてカンタベリー大僧正が、舞台の俳優は架空のことをしゃべって観衆を深く感動させるのに、福音の牧師は真実のことを語ってしかも聴衆を感動させることが足りないのはどうい

うわけであろうかと、彼に問うたことがあった。その俳優は、答えてこう言った。「おそれ多いことを申し上げますが、理由は簡単でございます。その理由は熱心という能力にあると存じます。舞台の上の私も架空のことをあたかも真実であるかのように語りますが、講壇の皆さまがたは真実のことを架空のことであるかのようにお話しになるからでございます。」

教師はその働きにおいて真実のことを取り扱っているのである。彼はそれらが真実で重要であることを知って感動するとともに、全力をあげて熱心に語るべきである。

どの教師も自分の働きが一定の結果に到達したかどうかということを確かめなければならない。ある学科を教えるようにする前に、教師は、はっきりした計画を念頭において、自分が何を成就しようと望んでいるかということを知っていなければならない。教師はどんな学科を教えるにも、生徒が、その中に含まれている原則を理解し、その真理を感知し、自分の学んだところをはっきり述べることができるようになるまでは、満足してはならない。

教育という大目的を念頭におくとき、青少年たちがその能力の許すかぎり上級へ進むように奨励しなければならぬ。しかし上級の勉学をとりあげる前に、下級の勉学を修得しなければならない。このことは無視されている場合が多い。高等学校や大学の生徒の中にさえ、普通教育の部門の知識に欠けた者がみられる。簡単な帳簿も記入できないのに高等数学に時間を費やしている学生が少なくない。雄弁術を修得するために話術を勉強しながら、印象的なはっきりした調子で朗読することもできない生徒が多い。修辞学の課程を終

わりながら、日常の手紙の文章や字の綴りすら満足に書けない生徒も少なくない。

教育の基本的な知識を完全に習得しているかどうかということが上級進学の条件であるばかりでなく、またその学業の継続と進歩のためのふだんのテストでなければならぬ。

どの教育部門においても、単に技術的な知識を習得するということよりもっとたいせつな目的が達成されなければならない。たとえば言語を例にとりましょう。外国語なり古典語なりを習得することよりも、もっとたいせつなことは、自分の母国語を容易にそして正確に書いたり話したりする能力である。しかし、文法の知識を習得するためにどんなに勉強しようと、それよりもっと高い見地からなされる言語の学習とは重要さにおいて比べものにならない。この高い見地からなされる言葉の勉強こそ人生の幸福と不幸に密接な関係をもっているのである。

言葉について最大の必要は、それが純粹で親切で眞実でなければならないことである。言葉はすなわち、「心の美德が外部に表現されたもの」でなければならない。神はこう仰せになっている。「すべて眞実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純眞なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい。」^四もしこのような思いを持っているなら、表現もまたそのようなものとなるであろう。

言語学習の最上の学校は家庭である。しかし家庭ではこの働きがなおざりにされているために、生徒たちの正しい会話の習慣を養うことは教師にゆだねられている。

教師は、社会に近隣に家庭に災いを及ぼす悪い習慣、すなわち陰口をきいたり、うわさ話にふけったり、卑劣な批評をしたりする習慣を打破するために、大いに力を尽くすことができる。このためには、ほねおりを惜しんではならない。このような習慣は、教養や洗練さや心の真の善良さが欠けている証拠であるということを生徒たちに印象づけなければならない。このような人間は、この世の真に教養のある洗練された人々の社会にはいるにも、あるいは天の聖者たちとの交際にはいるにもふさわしくないのである。

昔の食人種が、まだ生暖かいものの肉を食べている光景は思っただけでもぞっとするが、しかしこういう行為よりもっと恐ろしい結果は、真意を誤り伝えられたり、評判を傷つけられたり、品性を批判されたりすることなどによって生ずる苦悩と破滅である。こうしたことについて神が、「死と生とは舌に支配される」^五と仰せになっているみ言葉を子供たちも青年たちも学ばなければならない。

聖書には陰口をいう人々を、「神を憎む者」「悪事をたくらむ者」「無情、無慈悲な者」「不義と悪と貪欲と悪意とにあふれ」^六た者と同類にしてある。「こうした事を行う者」は「死に価する」という神の定め^六である。神がシオンの民とみなされる者は、「その舌をもってそしらず」「隣り人に対するそしりを取りあげず」「心から真実を語る者」^七であると言われている。

聖書には、神をけがす言葉に近いような無意味な言葉やのろいの言葉を吐くことは罪であるとされている。世間や実業界の風潮である虚偽のお世辞や、言いのがれや、商売上の大風呂敷や、かけ引きなどは、聖書には罪であるとされている。「ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきだ。それ以上に出ることは、悪か

ら来るのである」^八とある。

「隣り人を欺いて、『わたしはただ戯れにした』という者は、燃え木または矢、または死を、投げつける気違いのようだ」^九ともある。

うわさ話と密接な関係を持っているのは暗黙のほめかし、つまりずるいあてこすりである。心の不純な人たちは公然と表に出せないような悪をこれによってこっそり暗示しようとする。ちょうど、らい病を避けるように、こうした行為に一步でも近づくことのないように青少年たちに教えなければならない。

言葉の使い方において、おとも子供も、とかく軽々しく見すごしがちな過失は、軽率で気短な言葉であろう。彼らは、「考えなしに言ってしまったことで、ほんとうはそう言うつもりではなかったのです」と申し開きをすれば十分言いわけになると考える。しかし聖書にはこう書かれている。「言葉の軽率な人を見るか、彼よりもかえって愚かな者のほうに望みがある」^{一〇}と。

「自分の心を制しない人は、城壁のない破れた城のようだ」^{一一}とある。

軽率で感情的で不注意な言葉によって、一瞬の間に一生後悔しても取り返しのつかない不幸が引き起こされることがある。助けといやしをあたえるべきところに軽率で冷酷な言葉を出したばかりに、どんなに人の心が傷つき、友だち同志が離反し、一生がだいなしになってしまうことであろう。

「つるぎをもって刺すように、みだりに言葉を出す者がある、しかし知恵ある人の舌は人をいやす」^{一二}とある。どの子供の心にも特につちかわれて宿らなければならない特性の一つは、おのれを忘れる精神である。そ

れは知らず知らずのうちに人生を美しくする。これはすべてのすべれた品性の中で最も美しいもののひとつであり、人生のあらゆる真実な働きをなすにあたって欠くことのできない資格の一つである。

子供たちに感謝し同情し、彼らを励ますことは必要であるが、ほめられることの好きな精神を育てることのないように注意しなければならない。自分の子供に人の注意をひいたり、目の前で子供のりこうな言葉をくりかえしたりすることは賢明ではない。親や教師が、子供について真に理想的な品性や将来の業績の可能性を念頭におくなら、子供にうめぼれの気持ちを抱かせたり助長したりしてはならない。自分の才能や優越を人の前に誇示したいという気持ちや努力を彼らの中に助長してはならない。自分自身よりいっそう高いところを見ている者はけんそんである。しかしまた彼は外面的な誇示や偉い人間の前にはずかしがったり度を失ったりするようなことのない威厳を持っている。

品性の美德というものは独断的なおきてや規則などによってつちかわれるものではない。それは純潔、高貴、真実といったようなふんい気の中に住むことによつて養われるのである。純潔な心と高貴な品性のあるところには、必ず純潔で高貴な言葉と行為が見られる。

「心の潔白を愛する者、その言葉の上品な者は、王がその友となる」^{二三}とある。

他のどんな学課もすべて言語の場合と同じである。それらもみな品性を築き育てる上に役立つように指導することができる。

このことは他のどんな学課よりも特に歴史について真実である。歴史は聖書的な立場から考察されなければ

ばならない。

歴史は、王侯の興亡や宮廷の陰謀や軍隊の勝利や敗北などの記録、すなわち野望と貪欲と詐欺と残酷と流血の物語として教えられる場合が多い。このように教えられるとき、その結果は有害にならざるを得ない。そこに描かれている痛ましい犯罪と凶行のくりかえしや無法と残虐は、多くの人々の一生に種をまき、それは悪の収穫となって実を結ぶのである。

諸帝国の興亡を支配している原因を、神のみ言葉である聖書に照らして学ぶことは、これよりもはるかに有益である。青少年たちはそれらの記録を学んで、国家の真の繁栄は天の原則を受け入れることに関係があることを認めなければならない。彼らは大いなる改革運動の歴史を学ぶときに、その主義が軽視され憎悪され、その擁護者たちは、ろう獄や断頭台に引かれながらも、なおそうした犠牲を通してそれらの主義が幾度も勝利している事実注目しなければならない。

こうした学問を通して、広い包括的な人生観が与えられるのである。それはまた青年たちに、人間社会の依存関係、すなわちわれわれは社会と国家という大きな隣人関係の中にどんなに密接に結ばれているか、またひとりの人間の圧制なり墮落なりが、どんなに広くすべての人の損害であるかということを理解させる助けとなる。

算数の勉強も实际的でなければならない。少年少女たちは、架空の問題を解くだけでなく、自分の収入支出を正確に記帳することを学ばなければならない。金銭を使うときにその正しい用途を学ぶべきである。少

年少女たちは、親からもらった金銭であろうと自分で働いて得た金銭であろうと、自分の衣服や本やその他の必要品をえらんで買うことを学ばなければならない。そしてそれらの費用を帳面につけることによって、彼らは金銭の価値と使い道を学ぶのである。こうしたことは他の方法では学ぶことのできないものである。このような教育によって、彼らは真の儉約とりんしよくの区別を知り、一方浪費を判別することができるようになる。この教育が正しくなされるとき、それは慈善の習慣を助長するであろう。それはまた、感情が動かされた瞬間の衝動的な気持ちからささげるのではなく、規則的に計画的にささげることを学ぶ助けとなる。このようにしてどの学課も、あらゆる問題の中で最も大きな問題、すなわち人生の責任を最善に果たすように男女を教育するという問題の解決に役立つものとなるのである。

索引

一	箴言一ノ四	八	マタイによる福音書五ノ三七
二	イザヤ書一ノ一八	九	箴言二六ノ一八、一九
三	イザヤ書七ノ一五		ヤコブの手紙一ノ五参照
四	ピリピ人への手紙四ノ八	一〇	箴言二九ノ二〇
五	箴言一八ノ二一	一一	箴言二五ノ二八
六	ローマ人への手紙一ノ三〇、三一、二九、三二	一二	箴言一二ノ一八
七	詩篇一五ノ三、二	一三	箴言二二ノ一一

礼儀

「愛は不作法をしない。」

礼節の価値についてはあまり認識されていない。本心は親切でありながら、態度に親切さの欠けている人が少なくない。誠実と正直さを人から尊敬されながら、悲しいことに温和の欠けている人が少なくない。この欠陥は本人自身の幸福を妨げ、また他人に対する奉仕を害している。人生の最も楽しいそして最も有益な生活が、ただ思慮がたりないばかりに、非礼の犠牲にされてしまうのである。

親と教師は特に明るい心と礼節を育成しなければならない。明るい顔とやさしい声と礼節のある態度は、だれにでもできることで、それはまた能力の要素でもある。子供たちは明るい快活な態度にひきつけられる。われわれが子供たちに親切と礼儀を示すとき、彼らもまたわれわれに対しまたお互いに対して、同じ精神を表わすのである。

真の礼儀は単に作法の規則を実行するだけでは修得できない。いつでも慎み深い態度がみられなければならない。主義を犠牲にする必要がない限り、郷に入っては郷に従うべきである。しかし主義を犠牲にしてまで世間の慣習に従うことが真の礼儀であるとはいえない。真の礼儀は社会的な身分や階級を問題にしない。

それは自尊心すなわち人としての真の威厳に対する尊敬また人類という大家族のひとりびとりに対する関心を教える。

単なる態度や形式だけに高い価値をおき、そうした方面の教育に時間をかけすぎる危険がある。世の中の人々の無知や不幸という重荷を軽くするためにはもちろん、日常の普通の義務を果たすためにさえ、困難なそして時には気の進まない働きをしなければならぬし、ことに青年たちは非常に努力した生活を送らなければならぬので、おなしい形式に従っている余裕はほとんどない。

作法にばかり重きをおく人の中には、いわゆる人為的な標準に達しないものはどんなにすぐれたものであろうと眼中におかない人が多い。これはまちがった教育である。そこにはごうまんな批評心と狭い排他心が養われる。

真の礼節の神髄は他人のことを思いやることの中にある。本質的で永続的な教育とは、同情心を広くし、博愛心を助長する教育である。少年少女たちが親を尊敬しなかったり、その美德を認めることができなかったり、その欠点を忍ぶことができなかったり、その必要に役立つことができなかったり、あるいはまた幼い者や老人や不幸な人々に対して思いやり深く、優しく、寛大で、助けになることができなかったり、すべての人に対して礼儀正しくなれないようなら、彼らのいわゆる教養は失敗である。

真に洗練された思想と態度は、ある決まった規則を守ることよりもむしろ天来の教師であるイエスの学校でよりよく学ぶことができる。心がイエスの愛によって満たされるとき、品性がみがかれ、それはキリスト

の品性に似て形造られる。この教育は天来の品位と礼節心をあたえる。そこには流行社会のうわべばかりの洗練さとはくらべものにならない美しい気風と優しい態度が生まれる。

聖書には礼節が命じられている。そこには真の礼節の特性である無我の精神と柔和な態度と人をひきつける性質について、多くの実例が与えられている。それらはしかしキリストのご品性の反映にすぎない。すべてこの世における真の柔和と礼節は、キリストのみ名をみとめない人々の間においてさえ、それはキリストから与えられるものである。キリストはそうした特性がご自分の子どもたちに完全に反映するようにお望みになっている。世の人々がわれわれを通してキリストの美しさを認めるようにというのがキリストのみこころである。

礼儀作法についてこれまでに書かれた論文の中で最も尊いものは、救い主から与えられたとうとい教え、すなわち使徒パウロを通して語られた聖霊の言葉である。それは老若を問わず人類のひとりびとりの記憶にきざみこまれ、消し去ることのできない言葉となるべきである。

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」^二

「愛は寛容であり、愛は情深い。

また、ねたむことをしない。

愛は高ぶらない、誇らない、

不作法をしない、

自分の利益を求めない、

いらだたない、

恨みをいだかない。

不義を喜ばないで真理を喜ぶ。

そして、すべてを忍び、

すべてを信じ、すべてを望み、

すべてを耐える。

愛はいつまでも絶えることがない。」^三

心の中に注意深く育てられなければならないもう一つの尊い美德は、敬神の念である。神に対する真の崇敬の念は、神の無限な偉大さを感じ、神の臨在を意識することによって喚起される。どの子供も目に見えない神についてのこの観念を心中に深く刻みつけられなければならない。祈りや礼拝の時間と場所は、神がそこに臨在になるゆえに、神聖なものとして考えるべきであることを子供に教えなければならない。敬神の念が態度や動作に現わされるとき、この念をよび起こす感情はますます深くなる。

神の特別な臨在の示されている場所をどうみなすべきかということについて、聖書に示されている言

葉を学び、熟考し、幾度も口にくりかえすことは、子供にもおとなにもたいせつである。

神は燃えるしばの中からモーセに、「足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」^四と仰せになった。

ヤコブは天使の幻をみて、「まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。…これは神の家である。これは天の門だ」^五と叫んだ。「しかし、主はその聖なる宮にいます、全地はそのみ前に沈黙せよ」^六とある。

「主は大いなる神、

すべての神にまさって大いなる王だからである。…

さあ、われらは拝み、ひれ伏し、

われらの造り主、主のみ前にひざまずこう」^七

「われらを造られたものは主であって、

われらは主のものである。

われらはその民、その牧の羊である。

感謝しつつ、その門に入り、

ほめたたえつつ、その大庭に入れ。

主に感謝し、そのみ名をほめまつれ。」^八

神のみ名に対してもまた崇敬の念を示さなければならぬ。神のみ名を軽々しく考えなしに口にしてはならない。祈りの中においてさえ、神のみ名を不必要に幾度もくりかえすことは避けるべきである。

「そのみ名は聖にして、おそれおおい」とある。^九 天使たちは、神のみ名を語るとき、顔をおおう。ましてや墮落した罪深いわれわれ人間は、どんなに崇敬の念をもって神のみ名を口にしなければならぬことであろう。

われわれは神のみ言葉を敬うべきである。聖書に対して崇敬の念を示し、これを凡俗のことに用いたり、不注意に取り扱ったりしてはならない。聖句を冗談に引用したり、気のきいた言い方を強調するために言い換えたりしてはならない。「神の言葉はみな真実である。」^{一〇} 「主のことは清き言葉である。地に設けた炉で練り、七たびきよめた銀のようである」とある。^{一一}

とりわけ子供たちに教えなければならぬことは、敬神の念は従順によって示されるということである。神は不要なことは何もお命じにはならない。敬神の念を表わし、神に喜ばれるには、神の仰せになることに従うよりほかに道はない。

神を代表する人々——神の代わりに語り行なうべく召されている牧師や教師や親に対して尊敬を示さなければならぬ。彼らに対する尊敬を通して、神のみ名はあがめられるのである。

神はまた特に年老いた人々に対してやさしい尊敬を示すようにお命じになる。「しらがは栄えの冠である、正しく生きることによってそれが得られる」と神は仰せになっている。それは戦いをたたかい、勝利を勝ち得、重荷に耐え、誘惑に抵抗したことを物語っている。それは休息に近づく疲れた足、まもなくあく座席を物語っている。このことを子供たちに考えさせるとき、彼らは礼儀と尊敬をもって年老いた人々の道を和らげるであろう。「あなたは白髪の人の前では、起立しなければならない。また老人を敬い、あなたの神を恐れなければならない」との命令を心に留めるとき、彼らの若い人生には恵みと美がもたらされるであろう。

父母と教師は、神が彼らに子供たちに対する神の代表者となさった責任と誉れをもっと深く認識しなければならぬ。日常生活にあらわされる親や教師たちの品性を通して、つぎの神の言葉は子供たちにとって幸福となるようにもまた不幸になるようにも解釈されるのである。「父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる。」^{一四}「母のその子を慰めるように、わたしもあなたがたを慰める。」^{一五}

このような言葉によって、子供たちの心に愛と感謝と信頼の念がよび起こされ、父母と教師の愛と正義と忍耐が、神の愛と正義と忍耐を代弁し、子供たちが、地上の保護者に対して持っている信頼と服従と尊敬の念を通して神への信頼と服従と尊敬を学ぶことができるなら、彼らはまことに幸福である。このような賜物を子供たちや生徒たちにさずける者は、全時代の富よりもっと貴重な宝——永遠に絶えることのない宝を彼らに与えているのである。

索

引

一 コリント人への第一の手紙一三ノ五
 二 ヨハネによる福音書一三ノ三四
 三 コリント人への第一の手紙一三ノ四―八
 四 出エジプト記三ノ五
 五 創世記二八ノ一六、一七
 六 ハバクク書二ノ二〇
 七 詩篇九五ノ三―六
 八 詩篇一〇〇ノ三、四

九 詩篇一一ノ九
 一〇 箴言三〇ノ五
 一一 詩篇一二ノ六
 一二 箴言一六ノ三一
 一三 レビ記一九ノ三二
 一四 詩篇一〇三ノ一三
 一五 イザヤ書六六ノ二三

衣服と教育

「つつましい身なりをし」「王の娘は殿のうちで栄えをきわめ。」

衣服について正しい原則を教えない教育は完全とはいえない。このような教えを欠くときに、教育の働きはかどらなかつたり、道を誤ったりすることが多い。衣服に執着し、流行に心を奪われることは、教師にとって最も油断のならない敵であり、また最も有力な妨害の一つである。

流行は鉄の腕をもって支配する女主人のようなものである。大多数の家庭においては、親と子供たちの力と時間と関心はもつぱらこの女主人の要求を迎えることに費やされている。金持ちはたえず移り変わる流行のスタイルに一致しようとして互いに懸命に競争し合い、中産階級の人々や貧しい人々は自分たちよりもまさっていると思われる人々のたてた標準に近づこうとして努力する。金と力には限りがあるのに、みえを飾りたいという欲望が強ければ、その重荷はほとんど耐えがたいものになる。

多くの人にとっては、その衣服がどんなによく似合っているかが美しかろうが、そんなことは問題ではなく、流行が変わればそれを作り直すか捨てるかしなければならぬのである。家族の者はきりのないほねおりに運命づけられる。子供たちを教育する時間もなければ、祈りや聖書研究に費やす時間もなく、幼い者た

ちが神のみわざを通して神を知るように彼らを導く時間もない。

慈善のために費やす金もなければ時間もない。家庭の食事をきりつめなければならぬこともある。食物の選択が悪い上に、あわただしく調理されるので、自然の要求は部分的にしか満たされない。その結果は食事の悪い習慣となってあらわれ、病気が生じたり、不節制に陥ったりする。

みえを飾りたいという欲望から、ぜいたくの気風が生じ、多くの若い人々の心からは高貴な生活への抱負が減びてしまう。教育を求めることをしないで、彼らは衣服への欲望を満たす金をかせぐために年少の時から何かの職業に従事する。そうしてこの欲望のために多くの若い女性が、道に迷って滅びるのである。

たいていの家庭では家計が過重な負担に陥っている。父親は、妻や子供たちの要求に応ずることができないので、不正な誘惑をうけ、果ては恥辱と破滅に陥ってしまう。

礼拝の日や行事でさえも流行の支配から免れることはできない。それどころかむしろ流行の威力をますます大いに誇示する機会を提供している。教会はまるで展覧会場となり、説教よりも流行の研究がはじまる。人並みの流行を追えない貧しい人々は全然教会によりつかなくなる。こうして彼らは安息日を無為にすごし、ことに若い人たちは墮落的な交際に時をすごすようになる。

学校では、少女たちは自分のからだに合わないきゅうくつな服装をして、勉強にもレクリエーションにも不便を感じている。彼女たちの頭の中は他のことで一杯になっているので、教師は彼女たちの興味をよび起こすのが大仕事である。

流行の魔力をうちやぶるには、自然に親しむことが最も効果的な方法であることを教師はよく発見することがある。生徒たちが川や海や湖のほとりですぐす楽しみを味わったり、山に登ったり、太陽の沈む美しい光景をながめたり、森や野の宝をさがしまわったり、野菜や草花を栽培する楽しみをおぼえたりするようになる、リボンや服のひだをつけ足すことに目の色をかえることが無意味に思われてくる。

食事と同様に衣服においても、単純な生活こそ高い思考にとって必要欠くことのできないものであることを青少年たちに認めさせなければならぬ。学ばなければならぬこと、しなければならぬことが、どんなにたくさんあるかということや、一生の働きの準備として青少年時代がどんなにとうといものであるかということ、彼らに認めさせなければならぬ。神のみ言葉である聖書の中に、また自然の書の中に、あるいはまた崇高な人生を送った人々の歴史の中に、大いなる宝があることを彼らに認めさせなければならぬ。彼らの思いはまた、救うことができるかもしれない悩める人々に向けられなければならない。みえを飾るために金銭が浪費されるたびに、それだけ飢えた者に食をあたえ、裸の者に衣をきせ、不幸な人々を慰める費用が失われて行くのだということを彼らに認めさせなければならぬ。

彼らは、道理においても気持ちのよさにおいても似つかわしさにあいても、全く根拠のない流行の命令に従うことによって、人生の輝かしい機会を失ったり、知性をいじけさせたり、健康をそこなったり、幸福をだいなしにしたりするようなことがあってはならない。

同時にまた「神のなされることは皆その時にかなって美しい」^二という自然の教訓を認めるように青少年た

ちに教えなければならない。他のすべてのことと同じく、衣服においても創造主の栄えをあらわすことはわれわれの特権である。神はわれわれの服装が清楚で健康的であるばかりでなく、また身体に合った似つかわしいものであることをお望みになる。

服装によってその人の品性が判断される。洗練された趣味や教養のある知性は、単純で似つかわしい服装の選択にあらわされる。質素で清楚な衣服は、けんそんな態度とあいまって、若い女性を気高い慎み深いふんいきで包み、それは多くの危険から彼女を守るのに非常に役立つのである。

服装の技術といえば、そこには当然自分で自分の衣服を作る能力が含まれていなければならないことを少女たちに教える必要がある。少女たちはみなこの能力を身につけるように心がけるべきである。それは少女たちにとって欠くことのできない有用と自立への一つの手段である。

美しいものを愛し、美しいものを望むことは正しい。しかし神はわれわれがまず第一に、最高の美すなわち滅びることのない美を愛しこれを求めるようにお望みになっている。人の手に成るどんなにすぐれた作品にも、神の御目に「大いなる価」をもつ美しい品性と比較し得るほどの美しさはない。

青少年や幼い子供たちに、天の織機で織られた高貴な衣すなわち地上のすべての聖者たちに着ることを許される「光り輝く、汚れない麻布の衣」^三を自分のためにえらぶことを教えるべきである。キリストの汚れないご品性をあらわすこの衣は、すべての人に無償で与えられる。しかしこの衣を与えられる人はみなこ

の世において、これを受けとって身につけるのである。

子供たちが心を開いて、純真な愛の思いを持ち、人の助けとなる愛の行為をするとき、彼らは自らキリストの品性という美しい衣を身につけるのであるということを、教えなければならない。この衣服は、この世において彼らを美しく愛せられる者とし、来世においては、彼らが王なるキリストの宮殿にはいるための資格となるのである。キリストの約束は、「彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩み続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である」とある。

索引

- | | | | | |
|---|---------------|---------|---|---------|
| 一 | テモテへの第一の手紙二ノ九 | 詩篇四五ノ一三 | 三 | 黙示録一九ノ八 |
| 二 | 伝道の書三ノ一 | | 四 | 黙示録三ノ四 |

安息日

「これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしであって、わたし^一があなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである」。

安息日は教育の一つの手段として測り知ることのできない価値をもっている。神がわれわれのどんなものを要求なさろうとも、神はそれをご自身の栄光で豊かにし、形をかえて、ふたたびわれわれの手にもどしてくださいである。神がイスラエル人に要求なさった十分の一は、天にある神の宮の型であり、かつ地上における神のご臨在の象徴である聖所の輝かしい美しさを、民の間に維持するためにもっぱら用いられた。これと同じように神のご要求になるわれわれの時間の一部も、神のみ名と印を押されてふたたびわれわれに与えられている。「これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしであって、わたしが…主であることを、知らせるためのものである。」「主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた^二」と神は仰せになった。安息日は創造と救済の力のしるしである。それは生命と知識の源として神をさし示している。それはまた世の初めに人に与えられていた栄光を思い出させ、このようにしてご自身のかたちにかたどってふたたびわれわれを創造される神のみこころをあかししている。

安息日と家庭は同じようにエデンにおいて定められ、神の目的の中にあって切っても切れない密接なつながりを持っている。この日には他の日より特にエデンの生活を送ることが出来る。家族の者たちが、父親を家庭の祭司とし、また、父と母とを子供たちの先生とし友だちとして、働きに勉強に礼拝にレクリエーションに、ともに交わることが神のご計画であつた。しかし罪の結果、生活状態は一変し、この交わりはおおかた妨げられてしまった。父親は一週の間子供たちの顔をほとんど見ないことが多い。父親が子供たちの相手をしたり子供たちに教えたりする機会は全然ないと言つてもよい。しかし神の愛によつて、労働の必要は制限されている。安息日の上に神は慈愛のみ手を置かれている。神は、ご自身の日に、家族の者が神と交わり、自然と交わり、またお互いに交わる機会を保存されている。

安息日は創造力の記念であるから、他のどんな日より、神のみわざを通して神を知る日でなければならぬ。子供たちの心のうちに、安息日についての思いが自然の美しい事物と必ずびついていなければならぬ。安息日にイエスと弟子たちが、野を横切り、湖のほとりを通り、森をぬけて教会堂へおいでになつたように、礼拝の場所に出かける家族は幸福である。自然という書物の開かれたページから実例を引いて神の言葉である聖書をお子たちに教え、新鮮な清い大気の中で緑の木陰に集まつて、天の父なる神のみ言葉を学び、賛美の歌をうたうことのできる父母は幸福である。

このような交わりによつて、親は決して切れることのないきずなによつて子供たちを自分の心におすびつけ、ひいては神におすびつけることができる。

知的な訓練の手段として安息日は無限の価値をもった機会である。安息日学校の教課は、安息日の朝大いそぎで、教課の聖句に目を通すというような学び方でなくて、安息日の午後に次週の分を念入りに研究し、その一週の間毎日これを復習し、また実例によって説明するといったような学び方をしたいものである。こうするとき、教課は記憶にきざみこまれ、残らず無くなってしまいうようなことのない宝となる。

説教を聞くときには、親も子供たちも引用される文章や聖句やまたできるだけ思想の筋などを書きとめて、家に帰ってからお互いにもう一度くりかえすようにしたい。こうすることによって、説教をきいている子供たちによく見受けられがちな退屈さが救われ、すべてのことに注意力と一貫した思想をもつ習慣が養われる。このようにして暗示を受けたテーマを深く心に思うことにより、これまで夢にも思わなかった宝が生徒の目の前に開かれる。彼は次の聖句に描かれている経験が事実である事を自らの生活の中に立証するであろう。「わたしはみ言葉を与えられて、それを食べました。み言葉は、わたしに喜びとなり、心の楽しみとなりました。」^三

「わたしは、…あなたの定めを深く思います。」「これらは金よりも、多くの純金よりも慕わしく、…あなたのしもべは、これらによって戒めをうける。これらを守れば、大いなる報いがある。」^四

索引

- | | | | |
|---|-------------|---|------------|
| 一 | 出エジプト記三二ノ一三 | 三 | エレミヤ書一五ノ一六 |
| 二 | 出エジプト記三二ノ一三 | 四 | 詩篇一一九ノ四八 |
| | 二〇ノ一 | | 一九ノ一〇、一一 |

信仰と祈り

「信仰とは、望んでいる事がらを確認し」「すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであらう。」

信仰とは神に信頼すること、すなわち神がわれわれを愛し、われわれの幸福にとって最善であるものをご存知であることを信じることである。そのときわれわれは自分自身の道を選ばず、神の道を選ぶようになる。信仰によってわれわれは、無知の代わりに神の知恵を受け入れ、弱さの代わりに神の力を、罪の代わりに神の義を受け入れる。われわれの生命、われわれ自身がすでに神のものである。信仰は神の所有権をみとめ、その祝福を受け入れる。真実と誠実と純潔は人生の成功の秘訣としてさし示されている。これらの原則をわれわれに所有させるのが信仰である。

善への衝動や抱負はすべて神の賜物である。信仰によって神から与えられる生命だけが真の成長と実力を生ずることができる。

どのように信仰を働かせるべきかということ明らかにしなければならない。神の御約束にはすべて条件がある。われわれが神のみこころをよるこんで行なうとき、神のすべての力はわれわれのものである。神が約束してくださった賜物はすべての約束自体の中に含まれている。「種は神の言である」^二とある。かしの木

がどんぐりの実の中に含まれているのと同じように神の賜物もその御約束の中に確実に含まれている。約束を受けるときに、賜物はわれわれの手中にある。

神の賜物を受け入れることのできる信仰は、それ自体が賜物であり、それはすべての人に幾分か与えられている。神のみ言葉をわがものとするために信仰を働かせるときに信仰は成長する。信仰を強めるためには、神のみ言葉にたびたび接触しなければならない。

聖書研究においては、生徒が神のみ言葉の力をみとめるように導くべきである。創造の時に「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」^三とある。神は「無から有を呼び出される」^四とある。神が呼ばれるとき、それは出現するのである。自分自身はどんなに無力でも、神のみ言葉に信頼するときには全世界の勢力に対抗し得た例は少なくない。純潔な心の持ち主で、聖なる一生を送ったエノクは、信仰を堅く保って、腐敗とあざけりに満ちた世代に対して義の勝利を納めた。ノアとその家族は当時の人々——最も偉大な知力と体力を持ちまた道徳的に最も墮落した人々に対抗した。紅海に臨んだイスラエルの民は、おびえた無力な奴隷の群れであつたが、地球上で最大の国家の軍勢に対抗した。神から王位を約束されていた羊飼いの少年ダビデは、国王としての権力をかたく握って離さないサウルに対抗した。燃える火の中のシャデラクとその仲間、王座のネブカデネザルに、ししの群れの中のダニエルは王国の高い地位にある敵どもに、十字架上のイエスは、ローマの総督にさえ自分たちの意志を強行させようとするユダヤの祭司や役人たちに、鎖につながれて罪人として処刑されたパウロは世界帝国の暴君ネロに、それぞれ対抗したので

あつた。

このような例は、聖書だけに見られるとはかぎらない。人類の進歩の歴史にはどこにでもこのような例がたくさんある。フルデンセスやユグノー教徒、ウィクリフやフス、ジェロームやルーター、チンダルやノックス、チンツェンドルフやウエスレーその他多くの人々が悪を支持する人間の権力や政治に対して神のみ言葉の力を立証したのである。こういう人々こそ世の真の貴族である。彼らこそ世の王統である。今日の青少年たちは、この王統の一族となるように召されているのである。

人生の小事においても大事における場合と同じく信仰が必要である。日常のすべての利害関係や職業において、神により頼んで変わらなるときに、神の力が実際にわれわれをささえるのである。

人間的な見地からすれば、人生はだれにとってもまだ通ったことのない道である。深い経験という点からいえば、人生はひとりびとりが自分で歩かなければならない道である。われわれの精神生活には他人はどこまで行っても入りこむことはできない。幼い子供がおそかれ早かれ自分自身の道を選び、人生の問題を自ら永遠に決定しなければならぬ旅に出発するにあたって、われわれは確かな案内者であり、かつ助け主である神に子供の信頼を向けさせるように熱心に努力しなければならない。

誘惑から保護し、純潔と真理への靈感をあたえるものとして、神の面前にあるという意識に匹敵するほどの力を持ったものは他にない。「すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされているのである」^五とある。神は、目が清く、悪を見られない者、また不義を見られない者^六である。この思いがエジプトの腐

敗の中にあるヨセフを守ったのである。誘惑のささやきに対して彼は「どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができましょう」^七ときっぱり答えた。心の中に信仰が宿っているなら、どの魂もこのように守られるのである。

おく病な子供は恐怖心のために人生を重荷に感じるが、それは神のみ前にあるという意識によってのみ払いのけることができる。「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」^八という御約束を彼の記憶にきざみこむがよい。山の都市で、エリシャと武装した敵の軍勢との間を天使の大軍勢がとりまいていたというふしぎな話を彼に読ませるがよい。死刑を宣告されて獄中にあつたペテロに神の天使があらわれ、武装した番兵と重い戸とかんぬきのかかった鉄の大門を通りすぎて、この神のしもべを安全に連れ出したことを読ませるがよい。あらしにほんろうされた兵士と船員たちが、働きと見張りと幾日もの断食に疲れ果てたときに、審問と処刑のために道中にあつた囚人パウロが、彼らに向かって、「元氣を出しなさい。舟が失われるだけで、あなたがたの中で生命を失うものは、ひとりもないであろう。昨夜、わたしが仕え、また拝んでいる神からの御使が、わたしのそばに立って言った、『パウロよ、恐れるな。あなたは必ずカイザルの前に立たなければならない。たしかに神は、あなたと同船の者を、ことごとくあなたに賜わっている』」^九と、勇氣と希望に満ちた堂々たる言葉を語ったときのあの海上の光景について読むがよい。この約束を信じてパウロは「たしかに髪の毛ひとつすじでも、あなたがたの頭から失われることはないであろう」^九と仲間に保証し、そして実際その通りになったのである。船の中に、神がその人を通して働くことのできる人がひとり

いたために、船全体の異教の兵士と船員たちの生命が救われたのである。「こうして、全部の者が上陸して救われたのであつた」^九と記録されている。

こうしたことは、ただわれわれが読んで、ふしぎに思うために書かれたのではなくて、昔の神のしもべたちのために働いた同じ信仰がわれわれの中にも働くように書かれたのである。今日も神は、神の能力の器となる信仰心のあるところには、昔働かれた時と同じようにめざましく働かれるのである。

自信のない者は、独立独行の精神に欠けているために苦労や責任を避けたがるが、このような人には神に信頼することを教えなければならない。そのままでは世の中の役に立たない人間、おそらくは無力なやつかい者にすぎない多くの人間が、このようにして使徒パウロと同じように「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができ」^{一〇}とすることができ

不正をすぐに憤慨する子供にとって、信仰は尊い教訓をもっている。悪に抵抗したり報復しようとする性質は、鋭い正義感や活発で盛んな精神力によって喚起される場合が多い。このような子供には、神が永遠に正義を守るお方であることを教えなければならない。神は人類の救いのために最愛のひとり子をお与えになるほどわれわれを愛し、心配しておられるのである。神は悪をなす者をひとり残らず処置なさるであろう。

「あなたがたにさわる者は、彼の目の玉にさわるのである」^{一一}

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主はそれをなしとげ、あなたの義を光のように明らかにし、あなたの正しいことを真昼のように明らかにされる」^{一二}

「主はしえたげられる者のとりで、なやみの時のとりです。み名を知る者はあなたに寄り頼みます。主よ、あなたを尋ね求める者をあなたは捨てられたことがないからです。」^三

神がわれわれに示されるあわれみを、われわれもまた他の人に向かって表わすように神は命じておられる。感情的でうめぼれが強く、復しゅう心の強い者に「ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように」仕返しをなさらなかった柔和な、そして、けんそんな救い主を仰ぎ見させるがよい。我らの罪によつて刺され、我らの悲しみの重荷を負われたイエスを仰ぎ見て、忍耐し、辛抱し、そして許すことを学ばなければならない。

キリストを信じる信仰によつて、品性のあらゆる欠陥が補われ、あらゆる汚れが清められ、あらゆる欠点が直され、そしてあらゆる美德が発達させられるのである。

「あなたがたは、キリストにあつて、それに満たされているのである。」^四

祈りと信仰は密接な関係をもっており、両方いっしょに研究する必要がある。信仰の祈りには天来の学問がある。人生の活動に成功したいと思えば、だれでもこの学問を理解しなければならない。キリストは「^{一五}なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」と仰せになっている。キリストはわれわれの祈りが神のみ心になつたものでなければならぬことを明らかにしておられる。われわれの神の約束なされたものを求め、そして与えられるものはすべて神のみこころをなすために用いなければならない。この条件が果たされるときに、約束ははつきりしている。

罪のゆるし、聖霊、キリストのような性質、神の働きをなす知恵と能力、その他神の約束されたどんな賜物でも求めることが可能である。つぎに、われわれは与えられることを信じ、そして与えられたことを神に感謝しなければならない。

祝福の外面的な証拠をもとめる必要はない。賜物は約束の中にある。神がお約束になったことは神がなしとげてくださることができるといふ確信と、すでに持っている賜物はそれが最も必要であるときに実現されるといふ確信をもって働きにたずさわることができる。

このように神のみ言葉によって生活することは、全生活を神に服従させることである。必要感と依頼心がたえず意識させられ、心は神を追いもとめるであろう。祈りは必要であり、欠くことのできないものである。なぜならそれは魂の生命であるからである。家庭の祈り、公の祈りにはそれぞれの立場がある。しかし霊的生命をささえるのは神とのひそかな交わりである。

神の栄光のとどまる場所となるべき素晴らしい建物のひな型をモーセが見せられたのは、神と共に山にいたときであった。われわれは神と共に山にあって、神とのひそかな交わりにおいて、人類に対する神の輝かしい理想を瞑想しなければならない。こうしてわれわれは、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」とのみ約束が成就されるような品性の建物を形造ることができるのである。

イエスがこの地上のご一生において知恵と力をお受けになったのは、ただひとり神に祈られた時であった。

われわれもイエスの模範にならって夜明けやたそがれに天父と交わる静かな一ときを持つべきである。そうして一日中、心を神に向けていなければならない。われわれの道の一步ごとに、神は「あなたの神、主なるわたしはあなたの右の手をとって……はならない、わたしはあなたを助ける」^{二七}と仰せになっている。子供たちが人生の朝にこうした教訓を学ぶことができたなら、彼らの人生には何という新鮮さと力、何という喜びと楽しさがもたらされることであろう。

こうした教訓は実際に自ら学んだ者だけが教えることができるのである。多くの親や教師たちが、神のみ言葉を信じると告白しながら一方にはその力を否定するような生活を送っているために、聖書の教えは青少年たちに大きな影響を与えることができないのである。若い人々は時々言葉の力を感じ、キリストのとうとい愛を知る。彼らはキリストの美しい品性を見、キリストへの奉仕にささげられる生活の可能性を知る。しかしこれと対照して、彼らは神の戒めをあがめると告白している人々の生活を見る。預言者エゼキエルに言われた言葉は多くの人々にとってもその通りである。すなわち、「あなたの民の人々は、……たがいに語りあって言う、『さあ、われわれは、どんな言葉が主から出るかを聞こう』と。彼らは民が来るようにあなたの所に来、わたしの民のようにあなたの前に座して、あなたの言葉を聞く。しかし彼らはそれを行わない。彼らは口先では多くの愛を現すが、その心は利におもひいている。見よ、あなたは彼らには、美しい声で愛の歌をうたう者のように、また楽器をよく奏する者のように思われる。彼らはあなたの言葉は聞くが、それを行おうとはしない」^{二八}と。

聖書をりっぱな道徳的な教訓の書として取り扱い、時代の精神や世における自分の立場と両立するかぎりこれにきき従うことと、聖書をその真の姿のままに、すなわち生ける神のみ言葉として、われわれの生命の言葉として、またわれわれの行為や言語や思想を形成する言葉としてみることは全然別である。神のみ言葉を神のみ言葉以外のものとして見ることは、これをしりぞけることである。神のみ言葉を信じると告白しながら、これをしりぞけていることが、青少年たちの懷疑と不信の第一の原因である。

世界はかつてみられなかったような緊張につつまれている。娯楽に、金もつけに、権力争いに、生存競争に、心も魂も肉体も恐るべき力にひきずられている。このたけり狂うあらしのさなかに神は静かにお語りになっている。神はわれわれにその中から出て神と交われと仰せになっている。「静まって、わたしこそ神であることを知れ」^{一九}と神は仰せになっている。

祈りの一ときにおいてさえ、真に神と交わる祝福を受けられない人が多い。彼らはあまりに性急である。彼らは急ぎ足でやってきて、キリストの愛の座に割り込み、聖なる囲いの中にしばらく休息するが、しかし勧告を待ち望む気持ちがない。彼らは天来の教師と共にとどまる時間を持つとしない。そうして重荷を負ったまま働きにかえって行くのである。

このような働き人は、力の秘訣を学ばないかぎり決して最高の成功に到達し得ないであろう。知・徳・体の能力が一新されるためには、考え、祈り、神のみそばに仕える時間をもたなければならない。みたまの力

によつて高められなければならない。この力を受けるときに、新鮮な生命がよみがえるであらう。疲れた身体と頭脳は生気をとりもどし、心の重荷は軽くなるであらう。

我々にとつて必要なことは、神のみにちよつとひと休みすることではなくてキリストと直接に交わること、座してキリストと交わることである。親や教師たちが雅歌の言葉に描かれているとうとい経験を自身の生活の中から学ぶとき、われわれの家族の子供たちや学校の生徒たちは幸福である。――

「わが愛する者の若人たちの中にあるのは、

林の木の中にりんごの木があるようです。

わたしは大きな喜びをもつて、彼の陰にすわつた。

彼の与える実はわたしの口に甘かつた。

彼はわたしを酒宴の家に連れて行つた。

わたしの上にひるがえる彼の旗は愛であつた。」^{二〇}

索引

- | | | | | |
|---|-------------|--------|---|--------------|
| 一 | ヘブル人への手紙一ノ一 | マルコによる | 三 | 詩篇三三ノ九 |
| | 福音書一ノ二四 | | 四 | ローマ人への手紙四ノ一七 |
| 二 | ルカによる福音書八ノ一 | | 五 | ヘブル人への手紙四ノ一三 |

六 ハバク書一ノ一三
 七 創世記三九ノ九
 八 詩篇三四ノ七
 九 使徒行伝二七ノ二二―二四、三四、四四
 一〇 ピリピ人への手紙四ノ二三
 一一 ゼカリヤ書二ノ八
 一二 詩篇三七ノ五、六
 一三 詩篇九ノ九、一〇

一四 コロサイ人への手紙二ノ一〇
 一五 マルコによる福音書一ノ二四
 一六 コリント人への第二の手紙六ノ一六
 一七 イザヤ書四一ノ二三
 一八 エゼキエル書三三ノ三〇―三二
 一九 詩篇四六ノ一〇
 二〇 雅歌二ノ三、四

一 生 の 仕 事

「ただこの一事を努めている。」

どんなことにも、成功するには一定の目標がなければならない。人生に真の成功を収めたいと思えば、努力に値するだけの目標をしっかりと念頭におかなければならない。今日の青少年たちの前には、このような目標が置かれている。現代の世界に福音を伝えるという天来の目的こそは、どんな人間の心にも訴える最も高貴な目的である。キリストが心にお触れになったひとりびとりの前には、このような努力の分野が開かれている。

神はわれわれの家庭に育つ子供たちに対して、われわれの限られた視野では見通すことのできないほど広く深くかつ高い目的を持っておられる。神は昔身分の卑しい者の中から神に忠実な者をえらんで、これを神の証人として世の最高の地位に召された。ユダヤの家庭のダニエルのように、神のみ言葉とみわざを学び、忠実な奉仕について教訓を学んで成長する今日の少年少女たちも、また立法会議や法廷や宮廷に諸王の王なる神の証人として立つてであろう。多くの人たちがもっと広い働きに召されるであろう。全世界は福音のために開かれつつある。エチオピアは神に手をさしのべている。日本、中国、印度から、アメリカ大陸のまだ暗

黒な土地から、世界の各地から、罪に悩み愛の神の知識をもとめる人々の叫びがよせられている。神について、キリストのうちにあらわされた神の愛について、まだきいたことのない人々が幾百幾千万といる。彼らはこの知識を与えられる権利を持っている。彼らはわれわれと同様に救い主の愛をうける資格がある。彼らの叫びに答えるのは、この知識を授けられているわれわれの責任であり、またわれわれからこの知識をわけあたえられる子供たちの責任である。

イスラエルの歴史の重大な危機に王妃エステルに向かって「あなたがこの国に迎えられたのは、このようなためでなかったとだれが知りましょう」と言われた言葉が、今日の重大な時にあたって、福音の光に照らされたすべての家庭、すべての学校、すべての親、すべての教師に向かって発せられているのである。

福音宣伝の働きがはかどったり妨げられたりするときに、われわれはその結果を自分自身や世人とおすびつけて考えるが、これを神とおすびつけて考える人は非常に少ない。罪のために創造主が受けられた苦しみを思う人は非常に少ない。全天はキリストと苦しみを共にしたが、しかしその苦悩はキリストが人性をとって現われたときに始まったでもなければ終わったでもない。十字架は、罪が初めてあらわれたときから神の心に生じた苦痛を、われわれの鈍い感覚に示すものである。人が正しいことから離れるたびに、残酷な行ないをするたびに、人性が神の理想に到達できないたびに、神は悲しまれるのである。イスラエルが、神から離れた当然の結果として、敵に征服され、残虐と死という災難がふりかかったとき、「主の心はイスラエルの悩みを見るに忍びなくなった。」「彼らのすべての悩みのとき、主も悩まれて、……いにしえの日、つ

ねに彼らをもたげ、彼らを携えられた」と言われている。

神のみたまは「みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さる」^四とある。「被造物全体が、…共にうめき共に産みの苦しみを続けている」^四とき、限らない天父の心は同情に痛むのである。この世界は広いラザロの家（注・貧しい病人の収容所）のようなもので、われわれはその悲惨な光景を心に思うことすら苦痛である。その現実の姿をみつめるとき、重荷はあまりに大きいであろう。しかし神はそのすべてを感じておられるのである。神は、罪とその結果を滅ぼすために、最愛のひとり子をあたえ、み子との協力によってこの悲惨な光景を終わらせる能力をわれわれにお与えになっている。「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう」^五。

「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」^六とは、キリストに従う者にあたえられる命令である。だれでもみな字義通りの伝道者や宣教師になるように要求されているというのではない。それはわれわれがみなキリストと共に働く者となって「よろこびのおとずれ」を同胞に伝えなくてはならないことを意味している。偉い人にも、凡庸な人にも、学問のある者にも無知な者にも、老人にも青年にも、すべての人にこの命令は与えられているのである。

このご命令を念頭におくとき、われわれは必ずこや娘たちを、世間並みのりっぱな生活、名目だけのクリスチャンでキリストの犠牲に欠けた生活、真実のキリストから「あなたがたを全く知らない」との宣告をくだされるような生活——そうした生活のために教育すべきであろうか。

幾千幾万の人々がこういう教育をしている。彼らは、一方では福音の精神を拒みながら、子供たちのために福音の恵みを確保しようとする。しかしそれは不可能である。奉仕においてキリストと交わる特権をしりぞける者はキリストと共に栄光にあずかる資格をあたえる唯一の教育をしりぞけているのである。彼らはこの世において品性に力ととうさをあたえる教育をしりぞけているのである。子供たちのためにキリストの十字架を拒んだために、彼らを神と人類との敵に引き渡し、気がついたときにはもう手遅れになっている場合が少なくない。彼らには来世のためばかりでなく現世のためにも破滅のらく印がおされる。彼らは誘惑に敗北する。彼らは成長して世の災いとなり、親の悲しみや恥となる。

神の働きのために準備をすることにおいてさえ、多くの者は誤った教育の方法のために道を踏み誤っている。人生は学問の期間と働きの期間、すなわち準備と実行がはっきり区別された期間によって成り立っていると一般に考えられている。青少年たちは、一生の働きの準備として、本の勉強から知識を得るために学校へ入れられる。彼らは、日常生活のいろいろな責任からきりはなされて勉強に心を奪われ、何のために勉強しているのかその目的さえ見失いがちである。初めの献身的な熱意は失われ、何か個人的な利己的な野心を持つようになることが多い。多くの人々は、卒業してみても自分がいかに社会とかけはなれた存在であったかに気がつく。彼らは長い間抽象的で理論的なことばかりを扱っていたので、実社会のきびしい試練に知・徳・体の全能力をもって立ち向かわなければならぬときに全くその準備ができていないのである。かれらのエネルギーは、初めに志していた尊い働きに向けられないで、単なる生存競争のために奪われる。失望を重

ねたあげく、ついにはまじめに生活費をかせぐことにすら絶望し、いかがわしい行為や犯罪行為にずるずると陥る人が多い。こうして世に与えられるはずの奉仕が失われ、神がご自身の代表者として高く、尊く、尊敬に値する者としてようと望まれた魂が失われる。

教育上子供に差別をつける親が少なくないが、これは誤っている。親は頭のよい有望な子供にはどんな犠牲を払ってでも最上の教育を受けさせようとする。しかしそれほど有望に思われない子供のためには、こうした機会をあたえる必要がないかのようを考える。人生の普通の義務を遂行するには教育は大して必要はないと考えられている。

しかし家族の中から最もたいせつな責任を負うようになる子供をだれがえらび出すことができる。この点、人間の判断がまちがっていたことが幾たびあったことであろう。サムエルがエッサイの子供の中からイスラエルの王となるべき者にあぶらをそそぐためにつかわされたときの経験を思い出してみたい。りっぱな容貌をした七人の青年がサムエルの前に現われた。サムエルは、顔が美しく、体格がりっぱで、貴公子然とした長男を見た時、「自分の前にいるこの人こそ、主が油をそそがれる人だ^七」と叫んだ。しかし神は、「顔かたちや身のだけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るころは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る^七」と仰せになった。同じようにこの七人の者全部についての証言は「主が選ばれたのはこの人たちではない^七」であつた。そしてダビデが羊の群れの中から呼ばれてきたときにはじめて預言者サムエルはその使命を果たすことができた。

サムエルがえらぼうとした兄たちは、神がイスラエルの王として必要と思われる資格をそなえていなかった。高慢で、自己中心で、自信に満ちた彼らは退けられ、彼らから軽くみなされていた者、青年らしい単純さと誠実心をもった者、自分で自分をとるに足りないものに思っていた者、王国の責任を負うために神から教育される可能性のある者が選ばれた。同じように今日も、非常に有望視されている子供にあらわれている才能よりも、はるかにすぐれた才能が親からみすごされている多くの子供たちの中にひそんでいるのを、神はご覧になるのである。

人生の機会については、だれがその大小を決定することができらう。社会の低い地位にありながら世人の祝福となる活動を始めて、王侯もوراやおような業績をなしとげた働き人がどんなに多いことであろう。だからすべての子供を最高の奉仕のために教育しなければならぬ。「朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない。実るのは、これであるか、あれであるか、あるいは二つともに良いのであるか、あなたは知らないからである」^八とある。

人生においてわれわれに割当てられる特定の地位というものは、われわれの能力によって決定される。すべての人が同じように進歩し、同等の実力をもって同じ働きをするというわけにはいかない。神はヒソプがヒマラヤ杉の大きさに、オリブの木が堂々たるしゅろの木の高さになるようにとは望まれない。しかしわれわれは、それぞれに、人間の力と神の力の結合によって到達し得るだけの高さを目ざさねばならない。

自分の中にある能力を発揮しないために、当然達すべきところに達しない人が多い。彼らは、神の力によ

りすぎるべきであるのにそうしうとしない。多くの者は当然真の成功に到達できる道からはずれている。彼らはもっと大きな栄誉やもっと愉快的仕事をもとめて、彼らに適していないのに何か他のことをやろうとする。何か他の職業に適した才能を持っているのに知的な職業にっこうと野心を抱く人々が多い。百姓や職人や看護婦としてなら成功したかも知れない人々が、牧師や弁護士や医者のような不向きな地位を占めている。一方にはまた、責任のある地位を占めることのできるような人が、熱心や勤勉や忍耐が足りないばかりに安易な地位に自ら甘んじている場合もある。

われわれは人生に対する神のご計画にもっと注意深く従わなければならない。最も手近な働きに最善をつくすこと、われわれの道を神に任せること、神の摂理の指示を見守ること、——こうしたことが職業の選択にあたって、安全な手引きを保証する原則である。

われわれの模範となるために天よりくだられたキリストは、ほとんど三十年の生涯を平凡な大工仕事をし、て過ごされた。しかしイエスはこの間に神のみ言葉とみわざを学び、ご自分の感化の及ぶかぎりのすべての人を助け教えられたのである。キリストは、公生涯におはいりになったとき、病める者をいやし、悲しめる者を慰め、貧しい者に福音を述べ伝えながら歩かれた。これこそキリストに従うすべての者の働きでなければならない。

「あなたがたの中でいちばん偉い人はいちばん若い者のように、指導する人は仕える者のようになるべきである。……しかし、わたしはあなたがたの中で、給仕をする者のようにしている」^九とキリストは仰せにな

った。

キリストに対する愛と忠誠はすべての真の奉仕の源泉である。キリストの愛に触れた人の心の中には、キリストのために働きたいという希望が生まれる。この希望を力づけ正しく導かなければならない。家庭に近所に、学校に、貧しい人や苦しんでいる人や無力な人がいるなら、それは不運としてではなく、尊い奉仕の機会としてみなすべきである。

他のすべての場合と同じように、この働きにおいては、働きそのものの中から技量が得られる。人生の平凡な義務や、困っている人や悩んでいる人々への奉仕に訓練されることによって実力が養われる。これがないればどんなに最善の努力をつくしたつもりでも、無益であるばかりでなく、有害でさえある。人が泳ぎを習うのは陸の上においてではなく水の中においてである。

一般に軽く見られがちな義務であるが、しかしキリストの要求に目ざめた青年たちに、はっきりしておかなければならないもう一つの義務は教会に対する義務である。

キリストとキリストの教会との関係は非常に密接でありまた神聖である。キリストは花婿であり、教会は花嫁である。キリストはかしらであり教会は身体である。したがってキリストにつながることはキリストの教会につながることになる。

教会は奉仕のために組織されているのであって、キリストに奉仕する人生の第一歩はまず教会につながることでなければならない。キリストに忠誠をつくす者には教会の義務を忠実に果たすことが要求される。こ

れはわれわれの訓練の重要な一部分であつて、救い主の生命の息の通っている教会にあつては、このことは直接に外部の世界に対する働きに通じている。

青少年たちはいろいろな方面で有用な働きをする機会が与えられている。クリスチャンの奉仕隊が組織されるならば、その協力は助けとなり励ましとなるであろう。親や教師たちは自分たちの広い経験から彼らに利益をあたえ、彼らを助けて良い仕事のために有効に働かせることができるであろう。

知ることによつて同情心が生じ、同情心はまた効果的な奉仕の源泉となる。「あなたの国々」にある幾百万の悩める人々に対する同情心と犠牲の精神を青少年たちの中に喚起するためには、彼らにこれらの国々や民族について知らせるがよい。われわれの学校ではこうした方面の知識が大いに与えられなければならない。生徒たちは、歴史上のアレクサンダーやナポレオンのような人たちの遠征についてくわしく研究するよりも、使徒パウロやマルチン・ルターやモファットやリビングストンやケアリのような人物の一生や、現在日々明らかになっている伝道の働きの歴史について学ぶべきである。生徒たちの人生に何の關係もなく、一旦教室の外に出れば思い出しもしないような名前や理論を並べたてて、彼らの記憶につめこむよりは、あらゆる土地を伝道の働きに照らして研究させ、その土地の住民や彼らの必要を知るようにするほうがよい。

福音を伝え終わるこの働きは、広範囲にわたらなければならない。そしてこれまでより以上に一般の人々の中からこの働きの助け手を募らなければならない。畑からぶどう園から工場から、老いも若きも召されて救い主の使命を述べ伝えるためにつかわされなければならない。これらの大部分は教育をうける機会を持つ

たことのない人々であるが、キリストは彼らがキリストの目的を果たす資格をそなえているのをごらんになる。彼らがこの働きに心をそそぎ、学びつづけるときに、キリストは彼らをキリストのために働くのにふさわしい者としてくださるのである。

世の悲惨と絶望の深さをご存知であるキリストは、同時にその救済の方法もご存知である。彼は罪と不幸と苦痛のために暗黒の中におしつぶされている魂をいたるところにごらんになる。しかしまた彼はそれらの魂の可能性もご存知である。彼はそれらの魂が到達し得る高さをご存知である。人類は恵みを悪用し、才能を浪費し、神のごとき人間としての品位を失ってはいるが、しかし人類の救済を通して、創造主は栄光をうけなければならぬ。

キリストは、無知な者や道に踏み迷っている者に同情し得る人々の上に、地上のけわしい場所で困っている人々のために働く重荷を負わせられるのである。キリストは、手は不完全で未熟であっても、あわれみの心を感じることのできる人のそばにいてお助けになる。キリストは、不幸の中に恵みを見、損失の中に利益を見ることができる人を通して働かれるのである。世の光であるキリストが通りすぎるとき、苦難の中に特権が、混乱の中に秩序が、失敗と見えるところに成功がみとめられる。災難には祝福が、災いには恵みがかくされていることがわかる。一般の人々の中から召された働き人は、救い主が全人類の悲しみを共になさったように、彼らも同胞の悲しみを共に味わうとき、キリストが彼らと共に働いておいでになることを信仰によって見るであろう。

「主の大いなる日は近い、近づいて、すみやかに来る」^一とある。われわれは世に警告しなければならない。できる限りの準備をして幾千幾万の青少年や大人たちがこの働きに献身すべきである。すでに多くの人々が働き人のかしらでいます主の召しに応じている。その数はこれからもふえるであろう。すべてのクリスチャン教育家はこのような働き人に同情と協力をあたえなければならない。働き人の群れに加わるために自分の指導の下に準備をしている青少年たちを励まし助けなければならない。

青少年たちがこれよりも大きな恩恵をうけることのできる働きは他にない。伝道に従事する者はすべて神の助手である。彼らは天使といっしよに働く者であって、むしろ、人間は天使がその使命を達成するための器である。天使たちは彼らの声を通して語り、彼らの手によって働くのである。こうして働き人は、天使たちと協力することによって、その教育と経験にあずかることができるのである。教育の方法として、どんな大学課程もこれに匹敵することはできない。

正しく訓練されたわれらの青少年たちから成るこのような働き人の軍勢があたえられるとき、十字架につけられ、よみがえり、まもなくおいでになる救い主の使命は、いかにすみやかに全世界に述べ伝えられることであろう。いかにすみやかに終わりが——苦難と不幸と罪の終わりが、もたらされることであろう。罪の害と苦痛とを伴ったこの世の財産の代わりに、われわれの子供たちは「正しい者は国を継ぎ、とこしえにその中に住むことができる。」^二「そこに住む者のうちには、『わたしは病氣だ』と言う者はなく」^三「泣く声と叫ぶ声は再びその中に聞えることはない」^三といわれているところで、まもなく嗣業を受けるであろう。

索引

一	ピリピ人への手紙三ノ一三
二	エステル記四ノ一四
三	士師記一〇ノ一六 イザヤ書六三ノ九
四	ローマ人への手紙八ノ二六、二二
五	マタイによる福音書二四ノ一四
六	マルコによる福音書一六ノ一五
七	サムエル記上一六ノ六、七、一〇
八	伝道の書一ノ六
九	ルカによる福音書二二ノ二六、二七
一〇	ゼパニヤ書一ノ一四
一一	詩篇三七ノ二九
一二	イザヤ書三三ノ二四 六五ノ一九

八 教

師

「父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをおつかわす。」

ヨハネによる福音書二〇ノ二一

準 備

「あなたは……鍊達した働き人になって、神に自分をささげるように努めなさい。」

子供にとって最初の教師は母親である。最も感受性が強く、最も進歩の早いこの期間における子供の教育は大部分母親の手に任されている。善悪いずれかの品性を形造る機会はずまず母親に与えられている。母親はこの機会の価値を理解して、他のどんな教師よりもこの機会を最善に用いるだけの資格を備えていなければならない。ところがじっさいには母親の教育ほど軽視されているものは他にない。母親は子供の教育上もつとも有力なそして広範囲に感化を与える者であるにもかかわらず、その母親をたすけるための組織的な努力がほとんどなされていない。

幼い子供の世話を任されている人たちが子供の肉体上の必要について無知な場合があまりに多い。彼らは健康の法則や発育の原則についてほとんど知らない。彼らは子供の知的また霊的な成長を世話する上にもその準備がよくできていない。彼らは事務を処理することや社交界ではなやかにふるまうことには適しているかもしれない。あるいは文学や科学でりっぱな成績をあげたかもしれない。しかし子供の教育という点になると、ほとんど知識がないのである。人類の大部分が幼年時代に死亡したり、成人しても一生を重荷の中に

過ごす人が多いのは、主としてこうした方面の知識に欠け、ことに幼年時代の身体の發育がなおざりにされているためである。

子供の幼年時代はもちろん後年の教育についてもその責任は母親ばかりでなくまた父親の上にもある。そのために注意深く周到な準備をすることが父親にも母親にも緊急に必要である。父親となり母親となる可能性を持つ前に、男も女も身体の發育の法則すなわち生理衛生学や胎教や遺伝、衛生、衣服、運動、病氣の手当てなどについて知らなければならぬ。彼らはまた知的な發達と道德的な訓練について理解しなければならぬ。

永遠の神は、教育のこの働きを重視し、やがて母親となるべき者のもとにみ座から使者をつかわして「その子の育て方およびこれになすべき事はなんでしょうか」^二との質問に答え、約束の子の教育について父親に教えられた。

親の働きの重要さが十分に認識され、彼らがその聖なる責任について訓練を受けないかぎり、教育によって当然達成されなければならないすべてのことはいつまでも達成されない。

教師にとって予備訓練が必要なことは広く一般にみとめられているが、しかしその準備の性格が最もたいせつであることをみとめている人は少ない。青少年の教育に伴う責任を認識するときに、科学や文学の方面ばかりを教えるだけでは足りないことがわかる。教師は本の勉強から得られるよりもっと広い教育を身につけていなければならない。力ばかりでなく、心の広さをもち、全心全霊をうちこむばかりでなく、大きな

心をもたなければならぬ。

心を造り、その法則を定められた神は、心の必要を完全に理解されるばかりでなく、その発達を導くことがおできになる。神がお与えになった教育の原則は唯一の安全な指針である。それらの原則を知り、これを自分自身の一生の支配力として受け入れることがすべての教師にとって必要な資格である。

實際生活における経験は必要欠くことのできないものである。規律、用意周到、時間を守ること、自制心、明るい性質、気分にあつちのなないこと、犠牲心、廉潔な心、礼儀正しいことなどが必要な資格である。

青少年たちの周囲には低級な品性やにせものがあまりに多いので、教師は自らの言葉と態度と動作に高尚で真実な品性をあらわすことがいつそ必要である。気どりと弱点や欠点はすぐに子供たちに見破られる。教師が生徒たちに教えようとしている原則を自分自身の品性にあらわすことが、彼らの尊敬を得る唯一の道である。これのできたなら、教師は生徒たちとの日々の接触を通して彼らにいつまでも残る良い感化を与えることができる。

教師としての成功に役立つ他の資格の一つとして、教師は体力に依存するところが大きい。教師は健康であればあるほど、よい働きをすることができる。

教師はいろいろな責任のために非常に疲労するので、活力と清新な気持ちを保つためには特別な努力を払わなければならない。心も頭脳も疲れ果てたあげく、意気消沈したり、冷淡になったり、気短になったりする傾向はどうしても避けられないのである。このような気分のうち勝つばかりでなく、またその原因を避け

ることが教師としての義務である。教師は純潔で優しく信賴深くそして同情的な心を保たなければならない。教師がいつも堅実で冷静で快活であるためには、頭脳と神経の力を保たなければならない。

教師の働きというものは、量よりも質がたいせつである。過労に陥らないように、ことに自分自身の義務を果たす上にあまり多くのことをなそうと試みたり、自分の働きには不向きな他の責任まで引き受けたり、心身の力を回復するよりはむしろこれを消耗するような娯楽や社交的な歡樂にふけるようなことのないように氣をつけるべきである。

戸外の運動、ことに有用な労働は心身のレクリエーションとして最上の方法であり、教師の模範によつて生徒たちは労働に対する興味と尊敬の心を吹きこまれる。

あらゆる面において教師は健康の法則を注意深く守るべきである。それは自分自身の有用さに関係があるばかりでなく、生徒たちに影響を及ぼすからである。教師はすべてのことに節制を守り、食事に衣服に労働にレクリエーションに生徒たちの模範とならなければならない。

健康な肉体と正しい品性に、高い学問的な素養が結合されなければならない。教師が眞の知識を持てば持つほど、そこにはりっぱな働きがなされる。教室は上すべりな働き場所ではない。浅薄な知識に満足している教師は高い程度有能力に達することができない。

しかし教師の有用さは実際の知識の分量よりも、むしろその目ざす標準によつてきまる。眞の教師は鈍い思考や怠惰な心やいいかげんな記憶に甘んじない。教師はたえずいつそう高い学識と更にすぐれた方法を求

める。それはたえず成長する人生である。このような教師の働きには新鮮さといきいきとさせる力があつて、生徒たちを目ざめさせ、そして鼓舞する。

教師となる者はその働きに適した者でなければならない。教師は人の心を取り扱うのに必要な知恵と機知をそなえていなければならない。どんなに科学の知識を持っていようと、あるいはその他の方面にどんなにすぐれた資格を持っていようと、教師が生徒の尊敬と信頼を得られなければ、その努力はむだである。

善をなすあらゆる機会を見分けてこれを活用する人、真の誠実心と熱心さを兼ね備えた人、統御することができて「よく教え」ることのできる人、思想を吹き込み、精力をふるい起こさせ、勇気と生命とをあたえることのできる人——教師として必要なのはこういう人である。

ある教師は教育をうける機会が限られていたために、望ましいだけの高い学識を持っていないかもしれない。しかし人の性格を真に見抜く力もち、教師としての働きを心から愛し、その重要さを認識し、これを活用する決心を持ち、まじめに忍耐強く働く気持ちを持っているならば、その教師は生徒の必要を理解し、同情的かつ積極的な精神によって生徒たちを鼓舞し、自分の導こうとする前の方へまた上の方へとついでこさせるであろう。

教師の指導のもとにある少年少女たちは、それぞれに性質や習慣や訓育が全く異なっている。中にははっきりした目的やきまつた主義を持っていない生徒もいる。こういう生徒たちには自分の責任や可能性を自覚させなければならない。家庭で正しい訓育を受けてきた子供はまれである。ある子供は家じゅうの者から甘

やかされて育っている。彼らの訓育の全体は表面的なものにすぎなかったのである。自分の好きなようにふるまい、責任や重荷を負うことを避けても大目にみられてきたために、堅固な志や忍耐や克己に欠けている。こういう生徒たちはどんな規律もこれを不必要な束縛だと考える。中にはしかられてばかりいたために氣力を失っている者もある。親の一方的な束縛と厳格さのために、強情な心と反抗心の強くなっている子供もいる。こうしたゆがめられた品性が作り直されなければならないとしたら、その働きは、たいていの場合、教師によってなされなければならないのである。この働きをじょうずに成し遂げるためには生徒の中にあらわれている欠点と誤りの原因をつきとめるだけの同情と洞察力が教師になればならない。教師にはまた機知と熟練、忍耐と堅い志がなければならない。そのとき教師は志の定まらない者や安逸を愛する者には励ましと助けをあたえてその努力を刺激し、氣力の衰えている者には同情と理解を示して信頼心を持たせ、元気づけることができる。

教師は生徒と教室外の交際を通してお互いの親しみを深めるという点に欠けていることがよくある。教師は同情と愛に欠け、とかく威厳ときびしい判断に傾きやすい。教師には断固とした決然たるところがなければならないが、しかし決して強制的であったり命令的であったりしてはならない。冷酷で生徒をしかってばかりいたり、生徒とかけはなれた存在であったり、あるいは生徒を冷淡に取り扱ったりなど、こうしたことは生徒に良い感化を及ぼす道を閉ざすのである。

どんな事情があっても、教師は、えこひいきな態度をとってはならない。愛きょうのいい、人好きのする

生徒だけを可愛がり、励ましと助けを最も必要としている生徒に対して批判的であったり、忍耐が足りなかったり、同情的でなかったりすることは、教師の働きというものを全然考え違いしている証拠である。欠点の多いやっかいな生徒を取り扱うときに、教師の人格がためされ、その教師がほんとうにその地位に立つ資格を持っているかがわかるのである。

人の魂をみちびく責任は重大である。真実な父母は親としての責任からすっかり解放されるときは決しないものと考ええる。子供の生活には、ごく幼い時から最後まで、その子供を親の心に結びつけているきずなの力があらわされる。親の言葉、行為、顔つきまでが子供をたえず善に形造るか悪に形造るかのどちらかである。教師はこの責任をいっしょに負わされている。そこで教師はいつもこの責任の神聖さをもとめ、教師の働きの目的を念頭におかなければならない。教師は日々の仕事を仕上げ、校長をよろこばせ、学校の立場を維持するばかりでなく、生徒のひとりびとりの最高の幸福、彼らが負わなければならない人生の義務、彼らの人生に要求される奉仕、そのために必要な準備といったようなことを考慮しなければならない。教師の日々の働きは、生徒の上に、またその生徒を通して他の人々に影響を及ぼし、それは世の終わりまでたえず深まりひろがりつつけるのである。すべての言葉と行為がもれなく神の前にさばかれる大いなる日に、教師は自分の働きの結んだ実を見るのである。

教師がこのことを認めるなら、彼は、毎日の学業が終わって生徒たちが自分の直接の世話から離れたとき

に教師としての働きは終わったという気持ちにはならないであろう。彼の心はこれらの少年少女たちから離れない。どうしたら彼らを最も高貴な教養の標準に到達させることができるかということが、彼の不断の研究でありかつ努力である。

教師が自分の働きの機会と特権をみつめるときに、彼は自分を進歩させるためにまじめに努力し、その途上の何物によっても妨げられないであろう。彼は最高の優秀な標準に到達するためには骨身を惜しまない。彼は、生徒に希望するところはすべて自分自身がそうなるように努力する。

教師として責任感が強ければ強いほど、そして自分自身が進歩するためにまじめに努力すればするほど、自分の有用さを妨げている欠点というものがますますはつきり目につき、いよいよ鋭く後悔されるものである。教師としての働きの大きさ、その困難さと機会などをみつめるときに、彼の心は「いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか」^三と幾度か叫ぶのである。

愛する教師がたよ、あなたがたが力と導きの必要——人間の力では満たすことのできない必要をみつめるときに、大いなる助言者であるキリストのみ約束を心に思っていたきたい。

キリストは、「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」^四と仰せになっている。

「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。」^五「わたしはあなたを教え、あなたの行く

べき道を示し、わたしの目をあなたにとめて、さとすであろう。^六

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。^七

あなたがたの働きのために、最高の準備として私は大教師イエスの言葉と生活と方法をさし示したい。イエスを心に思っていたきたい。ここにあなたがたの真の理想がある。天来の教師イエスのみたまによってわれわれの心と生活が占領されるまで、この理想をみつめ、これを心に思いつづけなければならない。そのときわれわれは「主の栄光を鏡に映すように見つ、…主と同じ姿に変えられていく」^八のである。これが生徒に対するわれわれの力の秘訣である。イエスを反映しなさい。

索引

- | | | | |
|---|------------------|---|------------------|
| 一 | テモテへの第二の手紙二ノ一五 | 五 | エレミヤ書三三ノ三 |
| 二 | 士師記一三ノ一二 | 六 | 詩篇三二ノ八 |
| 三 | コリント人への第二の手紙二ノ一六 | 七 | マタイによる福音書二八ノ二〇 |
| 四 | 黙示録三ノ八 | 八 | コリント人への第二の手紙三ノ一八 |

協力

「わたしたちは、お互に肢体なのであるから。」

品性を形造る上に、家庭の影響ほど大きな影響を及ぼすものは他にない。教師の働きは親の働きを補うことはできるが、その代わりになることは不可能である。子供の教育に関するすべてのことにおいて、親と教師は協力して努力しなければならない。

働きの協力は、まず家庭生活における父母自身から始めなければならない。子供たちを教育するには父母は共同の責任をもち、いっしょに行動するように、たえず努力しなければならない。父母は神に献身し、お互いにささえ合うために神の助けを求めなければならない。父母は、子供たちが神に真実であり、また主義に真実であることによって、自分自身に対してもまた自分とつながりのあるすべての人に対しても真実であるように教えるがよい。このように教育された子供たちは、学校へ上がったときに、煩雑や心配の種になるようなことがない。彼らは教師の助けとなり、また他の生徒たちの模範となり励ましとなる。

子供をこのように教育する親は教師を軽々しく批判するようなことをしない。彼らは、共に責任を負っている教師をできるだけ支持し尊敬することが子供たちのためでもあり、また学校の要求に対する正当な応答

であるを考える。

こういう考え方でできていない親が少なくない。親が根拠のない軽はずみな批判をするために、忠実で犠牲的な教師の感化力がほとんど無益になってしまう場合が多い。たいていの親は子供たちを甘やかして増長させてしまうと、自分がなおざりにした点を矯正するというおもしろくない仕事を教師におしつけておいて、しかもその教師の努力を親自身の行為で絶望的なものにするのである。学校のやり方に批判や非難が加えられるとき、子供たちの不服従は増長し、悪い習慣はそのままになってしまう。

教師の働きについて批判なり助言なりが必要となったら、それはその教師に個人的にしなければならぬ。それで効果がなかったら、学校の運営に責任を持っている人に事情を訴えるべきである。子供たちの幸福について大きな責任を負っている教師に対する尊敬心を弱めるようなことを絶対に言ったりしてはならない。

子供についてその品性や特異な体質や虚弱な点などを親がよく知っていて、これを教師に話しておくことは助けとなる。残念ながら大多数の親はこのことを認識していない。たいていの親は教師の能力を知ったり教師の働きに協力したりすることにはほとんど興味を示さない。

このように、親が教師をよく知ろうとしないために、教師が親を知ろうとする努力はいっそうたいせつとなる。教師は生徒たちの家庭を訪問して、彼らがどんな環境の中に住んでどんな影響を受けているかをよく知っていなければならない。生徒たちの家庭や生活に親しく接触することによって、教師と生徒との間のきずなは強くなり、教師は生徒たちのそれぞれ異なった性格や気質をじょうずに取り扱う方法を学ぶことがで

きる。

教師が家庭の教育に関心を持つときに、そこには二重の利益が与えられる。大多数の親たちは働きと苦勞に心を奪われているので、子供たちの生活に良い感化をあたえる機会を見失っている。教師はこうした親たちを彼らの機会と特権に目ざめさせる上に大いに力を尽くすことができる。教師はまた責任感という重荷を負っている親たちに出会う。このような親たちは子供たちがりっぱな役に立つ男女となるように非常に心にかけている。教師はこうした親たちの重荷を共に負って彼らを助けることができる。そして教師も親もお互いに助言し合うことによって共に励まされ力づけられるのである。

少年少女たちの家庭教育における協力の原則には測り知れない価値がある。子供たちにごく幼い時から自分分は家庭という団体の一員であるという觀念を持たせなければならない。どんな小さな子供でも日常の働きを何か手伝うように訓練し、親が彼らの助けを必要とし感謝しているということを感じさせなければならない。年長の子供たちは親の相談にあずかり、責任と重荷を分担することによって親の助けとなるようにしなければならぬ。父母が時間をかけて子供たちを教え、彼らの信頼を希望し、彼らが片腕となってくれることを喜んでいることを示すなら、子供たちはまもなくこれに答えるようになるであろう。そのとき親の重荷は軽くなり、子供たちは測り知れない価値をもった實際的な教育をうけるばかりでなく、家族の間のきずなが強くなり、品性の基礎が固くなる。

協力は教室の精神であり、また学校生活の法則でなければならない。教師が生徒たちの協力を得ることが

できれば、それは秩序を維持する上に測り知れない価値をもった助けとなる。奉仕においても教室においても、落ち着きがないために、騒いだり言うことをきかないような多くの少年たちは、教師と協力することによって自尊心が助長され、役立つ者になりたいという願いが生じて来るのである。

聖書に教えられている協力について教訓を学ぶことは、子供たちにとっても親にとってもまた教師にとっても有益である。その多くの実例の中で注目し値するのは幕屋の建設で、これはまた品性を築く上にも実物教訓となっている。そのときすべての民すなわち「すべて心に感じた者、すべて心から喜んでする者」^二はみな力をあわせたのであった。エルサレムの石垣が帰還した捕虜たちによって貧窮と困難と危険の最中に再建され、あの大事業が「民が心をこめて働いた」^三ので、みごとに完成したことを読んでいただきたい。救い主が奇跡をもって群集に食をお与えになったとき弟子たちの果たした役割を考えていただきたい。食物はキリストのみ手の中にあってふえ、弟子たちがそのパンをもらって、待っている群集に与えたのであった。

「わたしたちは、お互に肢体なのであるから」^四各自は「神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互のために役立て」^五なければならない。

昔の偶像作りの人々について書かれたつぎの言葉を、今日、品性を築く上にもっと価値のある目的をもつ

た標語として用いよう。

「彼らはおのおのその隣を助け、その兄弟たちに言う、『勇気を出せよ』と。」^六

索引

- | | | | |
|---|--------------|---|---------------|
| 一 | エペソ人への手紙四ノ二五 | 四 | エペソ人への手紙四ノ二五 |
| 二 | 出エジプト記三五ノ二一 | 五 | ペテロの第一の手紙四ノ一〇 |
| 三 | ネヘミヤ記四ノ六 | 六 | イザヤ書四一ノ六 |

し
つ
け

「あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。」

子供が学ばなければならない第一の教訓は服従という教訓である。子供がまだ充分に道理をわきまえることのできない年ごろからでも、服従ということは教えられるものである。やさしく忍耐強い努力によって、この習慣を築かなければならない。この習慣さえ身につけているならば、子供が大きくなってから、意志と権威との衝突のために、親や教師にそむいて苦勞の種になったり、あるいは神と人間の一切の権威に反抗する人間になったりするようなことはない。

訓練の目的は自分で自分が治められるように子供をしつけることである。独立心と自制を子供に教えなければならぬ。したがって、子供に物事の理解ができるようになったなら、すぐに服従という道理をわきまえさせるべきである。子供を取り扱うときには、服従することが道理にかなった正当なことであるということを示すような取り扱いをいつもしなければならぬ。子供に、すべてのことには、規則があること、不服従は結局不幸と苦難の原因であることをみとめさせなければならない。神がこうしてはいけなさと仰せになったときには、われわれを災いや滅びから救うために、愛をもって不服従の結果を警告しておられるのであ

る。

親や教師は神の代表者であり、かつ彼らが神と一致して行動するときには、家庭や学校における規則はとりもなおさず神の規則であるということを、子供たちに理解させなければならない。子供が親や教師に従うように、親や教師も神に従わなければならない。

親も教師も、どうすれば子供の発達を不当な干渉によって妨げることなく導くことができるかということを研究しなければならない。干渉しすぎることは放任と同じく弊害がある。子供の意志を抑圧しようと努力することは、はなはだしいあやまちである。人の心は十人十色である。強制して表面は服従させることができたように見えても、たいていの子供はその結果もっと固い反抗心を持つようになる。親や教師が子供をうまく自分の思い通りにさせることができたとしても、結果は子供にとって有害であることに変わりはない。知恵のついた年ごろの人間を訓練するには、口のきけない動物をしつけるようなわけにはいかない。動物にはただ主人に従うことだけを教えればよい。その動物にとつては主人が心であり判断であり意志である。ともすると子供の教育にもこんな方法が用いられることがあるが、これでは子供は機械人形と少しも変わらない。思考、意志、良心といったものが他人によって左右されるのである。どんな人の心でもこのような支配を受けることは神のみ心ではない。個性を弱めたり殺したりする者は、その結果生ずる害について責任を負わなければならない。権威の下にあるときには、子供たちはよく訓練された兵隊のように見えるかもしれないが、その干渉がやむと、彼らの品性には力と堅固な志が欠けていることがわかる。自分で自分を治めるこ

とを学んだことのない少年少女は、親や教師の要求以外に何の束縛も知らない。したがって親や教師の要求がなくなると、自分の自由をどう用いていいかがわからず、放縦に身をまかせてついには身を滅ぼしてしまう場合が多い。

ある生徒にとっては他の生徒よりも意志の服従が困難な場合があるので、教師はなるべく要求に従いやすいようにしなければならない。われわれは、意志をみちびき養い育てるべきで、これを無視したり押えついたりしてはならない。意志の力をたくわえなければならない。それは人生の戦いに必要となるのである。

どの子供も真の意志力を理解しなければならない。この賜物にどれほど大きな責任が含まれているかを彼らに認めさせなければならない。意志は人間の性質における支配力であり、決定の能力すなわち選択の能力である。理性を備えた人間ならだれでも正しいことを選択する能力がある。人生のあらゆる経験において神は「あなたがたの仕える者を、きよう、選びなさい」と仰せになっている。だれでも自分の意志を神の意志と一致させ、神に従うことを選ぶのである。このように自分自身を神の力に結合させるとき、われわれは何物によっても悪を強制されることのない境地に立つことができる。どの青年もどの子供も、神の助けによつて誠実な品性を形成し、有益な人生を送り得る能力があたえられている。

このような教えによつて子供の自治心を訓練する親や教師は最も有用なそして永久的な成功を勝ち得る者となるであろう。表面だけしか見ない人にはその働きは最上の利益には見えないかもしれない。また子供の心や意志を絶対の権威の下に押えている人の働きほどには高く評価されないかもしれない。しかしそのすべ

れた教育法の結果は後になって現われるであろう。

賢明な教育者は生徒を取り扱うときに、信頼心を深め、名誉心を高めることに努力する。信頼されているということは子供たちにとって益となる。たいていの子供は、どんな小さな子供でさえも、高い名誉心をもっている。信頼と尊敬をもって扱ってほしいというのはみんなの望みであり、それはまた彼らの権利でもある。外へ出るにも内へはいるにも監視されているという気持ちをもたせてはならない。疑惑の目で見られることは氣力をくじき、かえって防ぼうと努めている悪を招くことになる。何か悪いことでもないかと疑っているかのようにたえず監視するようなことをしないで、教師は生徒たちと接して、彼らのじつとしていない心がさせる行動を洞察し、その悪を防ぐような影響を及ぼさなければならぬ。少年少女たちに、自分には信頼されているという気持ちをもたせるとき、彼らはたいてい、その信頼に価する者であることを示そうと努力する。

これと同じ原則で、命令するよりは頼むほうがよい。このように頼まれた当人は、正しい原則に忠実であることを示す機会があたえられる。彼の服従は強制的ではなく選択の結果である。

教室を取り締まる規則はできるだけ学校内の意見を代表したものでなければならぬ。そこに含まれているどの原則も学生たちの前でその正しいことを納得させたものでなければならぬ。そのとき学生は自分たちが手伝って作った規則が守られているかどうか責任をもって気をつけるであろう。

規則はよく考慮されたもので、その数も少ないほうがよい。そして一度きめた以上は励行しなければなら

ない。変更できないものであるということがわかれば、人の心はそのことを認めてこれに順応するものであるが、甘くみられる余地があると、注文や希望や半信半疑の気持ちが生じ、その結果は不穏や憤慨や不服従となる。

神の統治には悪との妥協はないということを明らかにすべきである。家庭でも学校でも不服従を大目に見てはならない。親や教師が自分の世話している子供たちの幸福を願うなら、彼らが権威を無視したり、あるいは不服従をのがれるためにごまかしや言いのがれをやって片意地に自分の意志を通そうとするのと妥協してはならない。悪い行為をいい加減にあしらったり、きげんを取ったり、品物でつってこちらの言うことをきかせようしたり、おしまいにはこちらの要求に対する交換条件を受け入れたりなどすることは、愛ではなく一種の感傷主義である。

「愚かなる者は罪を軽んず^三」とある。罪を小さなこととして扱うことのないように気をつけなければならない。罪は罪びとに恐るべき力を及ぼす。「悪しき者は自分のとがに捕えられ、自分の罪のなわにつなされる^四」とある。子供たちが悪い習慣のとりことなるのをそのままにしておくことは子供に対して最大の罪である。

少年少女たちは生来自由を愛する心をもっている。彼らは自由を欲する。しかし、この測りつくせぬという祝福は神の律法に服従するときのみ与えられるということを理解しなければならない。この律法こそは真の自由を保護するものである。律法は、人を墮落させ奴隷化させるものを指摘してこれを禁じ、律法に

従つ者を悪い力から保護するものである。

詩篇記者は言う、「わたしはあなたのさとしを求めたので、自由に歩むことができます。」「あなたのあかしは、わたしを喜ばせ、わたしを教えさとするものです。」^五

悪を正するとき気をつけなければならないことは、あら探しやとがめだての傾向である。始終とがめてばかりいると、正すよりもむしろ当惑させる。たいていの子供たちにとって、特に繊細な感受性を持っている子供にとっては、同情の欠けた批判的な空気は本人の努力を殺してしまう。冷たい風の中では花は開かない。ある特別な欠点をしかられてばかりいる子供は、その欠点をどんなに努力しても直すことのできない癖であるかのように思いこむものである。こうして失望から落胆の気持ちが生ずると、おとんちやくやからいばりを装ってそれをかくそうとするようになる。

しかるということの真の目的は、悪いことをした本人がその過失をみとめてこれを直そうという意志を持ったときにはじめて達せられるのである。この目的を達することができたなら、つぎに許しと力の源を示さなければならない。本人に自尊心を保たせ、勇氣と希望を鼓舞しなければならない。

この働きは人間にゆだねられたもつともりっぱなそしてまたもつとも困難な働きである。そのためにはもつとも巧みな機知と繊細な感受性と、人間性についての知識と天来の信仰と忍耐と、働き見守りそして待つ気持ちがなくはならない。これはどんなことよりも大事な働きである。

人を治めようと思えばまず自分自身を治めなければならない。子供たちを感情的に扱うことは彼らの怒り

をひき起こすだけである。親でも教師でも、がまんができなくなって、おもしろくない言葉が口から出そうになったときは口をおさえるがよい。沈黙にはふしぎな力がある。

教師は意地の悪い性質の子や、冷たい心をもった子にぶつかることを覚悟しなければならない。しかしこういう子供を扱うときに、教師は自分もかつては訓練を必要とした子供であったことを忘れてはならない。われわれは、年令や教育や経験という有利な立場を得た現在でさえも、まちがってばかりいて、助けと許しが必要なのである。少年少女たちを教育するときには、教師は自分自身と同じように悪への傾向をもっている者を扱っているのだということを念頭に置かなければならない。彼らはほとんど何もかも学ばなければならないのであって、中には学ぶのに人一倍困難な子供もいるのである。よくできない子供は忍耐強く扱って、知らないことをしかりつけたりせず、あらゆる機会を利用して励ましを与えなければならない。感情的で神経質な子供はいたわって扱うべきである。教師は自分が不完全な人間であることを意識して、同じように困難と戦っている子供たちにいつも同情と忍耐を示すべきである。

救い主の法則は「人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおり^六にせよ」である。青少年の教育にたずさわる者はだれでもこの言葉を法則としなければならない。彼らは神の家族の子供であり、われわれと共に生命の恩恵を継ぐ者である。どんなに頭の鈍い子供に対しても、どんなに幼い子に対しても、どんなにへまなことばかりする子に対しても、そしてまた過失を犯したり反抗したりする子に対しても、キリストのこの法則を神聖に守らなければならない。

この法則を守るとき、教師は生徒の欠点や過失を公表することをできるだけ避ける。他の生徒たちの前でしかなかったり罰したりすることを避け、また本人が改心するようにあらゆる努力をつくすまでは学生を退学させようと思わない。しかしこれ以上本人のためにもならないし、また一方權威に反抗したりこれを見做したりすることが学校の秩序を乱し、その影響が他の学生たちにもひろがるということが明らかになれば、退学処分が必要である。それにしても、不名誉な退学処分が公表されたことから全く自暴自棄となって破滅する学生が少なくない。除名がやむを得ない場合でも、そのことを公表する必要はない。親と相談し協力して、教師が個人的に学生の退学を取り計らうべきである。

青年たちにとってこの特別な危険な時代に、誘惑は四方から彼らをと리카こんでいる。この誘惑の流れにおし流されることは容易であるが、しかしこの流れにさからって進むには最大の努力が必要である。誘惑の中にある若い人たちにとって、どの学校も「のがれの町」とならなければならない。そしてそこでは彼らの愚かな行為が忍耐強く賢明に取り扱われなければならない。責任を自覚している教師は、わがままで不従順な生徒をじょうずに扱う上にじゃまとなるようなものが自分の感情や生活にあったなら、そうしたものをこごとくとり去るであろう。このような教師の語る言葉の法則はいつでも愛と親切であり、忍耐と自制である。正義に愛とあわれみがまじっていないなければならない。しからなければならないときには、言葉がおおげさでなく控え目であるほうがよい。悪いことをした本人に優しくあやまちを示し、改心するようにすすめるなければならない。真の教師はだれでも、もしまちがうことがあるとすれば、きびしすぎてまちがうよりも優

しすぎてまちがうほうかもしれませんが、思わなければならない。

とても改心の見込みがないように思われている少年少女たちの中には、本人はみかけほど強情ではない者が多い。絶望視されている者も賢明な取り扱いによって改心させられる場合が多い。彼らは親切にされるとたいていの場合すぐに心を和らげる。教師は誘惑の中にある生徒の信頼を得るようにするがよい。そしてその生徒の品性の中にある美点をみとめ、これを育てることによって、たいていの場合、生徒に意識させないでその悪を正すことができる。

天来の教師イエスは、過失を犯している者のどんな意地悪にも耐えられるおかたである。イエスの愛は冷えず、彼らを導こうとする努力を中止なさらない。イエスは過失を犯している者や反抗する者や背信の者までも受け入れるために幾度も手をひろげて待つておられる。イエスは荒い取り扱いを受けている無力な子供に心を動かされる。苦しんでいる人間の叫びはイエスの御耳に決しておなしくはひびかない。イエスの御目にはだれでもとうとうといことに変わりはないが、乱暴で、気おずかしくて、強情な性質の子は特にイエスの愛と同情をひくのである。イエスはそういう結果を生じた原因をお調べになる。最も誘惑に陥りやすい者、また最も過失を犯しやすい者ほどイエスの特別な心配の的となる。

親も教師も、苦しむ者悩む者誘惑をつける者の立場を理解されたイエスの心を心としなければならない。われわれは、「自分自身、弱さを身に負っているので、無知な迷っている人々を、思いやること^七」のできる人間とならなければならない。イエスはわれわれを実際の価値以上によく取り扱われる。われわれもまたイ

エスガわれわれを扱われるように、人を扱うべきである。親でも教師でも同様な境遇において救い主が採用なさらないような方法をとることは正当ではない。

人はみな家庭や学校における訓練のほか、人生のきびしい訓練に会わなければならない。これに賢明に対処するにはどうすればいいかということ、を青少年少女たちにはつきり教えなければならない。神がわれわれを愛し、われわれの幸福のために働いておられるということや、人類が常に神の律法に服従していたなら、苦難というものはこの世になかったということとは事実である。しかしこの世において罪の結果として、どんな人の一生にも苦難や悩みや重荷があるということもまた事実である。こうした悩みや重荷に勇敢に対処することを子供たちに教えてあげば、彼らのために一生の間、益となることをしてやったことになる。子供たちに同情はしなければならないが、その同情は彼らに自分をあわれむような情を起こさせるようなものであってはならない。子供たちにとって必要なのは、彼らを弱くするものではなくて、激励し強めるところのものでなければならない。

この世界は練兵場ではなくて戦場であるということ、子供たちに教えなければならない。だれでもりっぱな兵士のように苦難に耐えなければならない。われわれは心を強くし雄々しくふるまわなければならない。この世において認められたり報賞を受けたりしなくても、自ら進んで重荷を負い、困難な立場を引き受け、しなければならぬ働きをなすことに品性の真の価値が表わされるのだということ、子供たちに教えなければ

ばならない。

試練に対する真の道は、試練から逃避することではなくて、試練を変えることにある。このことは、子供のときにはもちろん後年になってからでもすべての訓練にあてはまる。子供の幼年時代の教育をなおざりにし、その結果、悪い傾向が強くなって来ると、後年の教育はいっそう困難なものになり、訓練に非常な苦痛を伴うことが多い。言わば生まれつきの欲望や傾向を殺すことは、劣等な性情にとっては苦痛にちがいない。しかしその苦痛は、はるかに高い喜びの中に忘れられるであろう。

過失や欠点や困難を征服するたびに、それは、もっとよい、もっと高いものへの踏み石となるのだということ少年少女たちに教えなければならない。生きがいのある一生を送ったすべての人がなしとげた成功は皆このような経験から生まれたのである。

偉人の到達した高さは

一足飛びに達し得たものではない

かれらは、仲間が眠っている間に

ほねおって夜道を登って行ったのだ

足の下にいろいろなことを踏まえ

良いものや益になるものを習得し

高慢をしりぞけ、欲望を殺し

刻々に立ち現われる悪を征服して

われわれは立ち上がるのだ

その場かぎりで現われては消える

日々のできごとやすべての平凡な事がらや

歓喜や不満など

それはすべて上へ登る階段なのだ

「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」とある。利己的な欲望や性情を否定するときに、われわれは価値のない一時的なものと、貴重な永久的なものとを交換しているのである。これは犠牲ではなくて無限の利益である。

「もっとよいものを」というのが、教育の合言葉であり、すべての真実な生き方の法則である。キリストがわれわれにいかなるものを捨てよとご要求になっても、それは主がその代わりに何かもっとよいものを提供してくださるためである。青少年たちは、一概に悪いとはいえなくても、しかし一番いいものとはいえないような目的や研究や楽しみを持つことがよくある。そのために彼らは人生の最もとうとい目標からそれる。

若い人たちに彼らの大事に思っているものを放棄させるには、強圧的な手段や直接の非難では効果がない。彼らを見えや野心や放縦よりももっと何かよいものに導くべきである。彼らをもっと真実な美、もっと高い原則、もっと高い人生に触れさせなければならない。「ことごとく麗わしい」キリストを彼らに仰がせなければならぬ。ひとたびキリストの上に注視が定まると、そこに生活の中心が見いだされる。青年の熱意と気高い献身と情熱はここに真の目的を見いだすのである。義務をつくすことが楽しみとなり、犠牲を払うことがよるこびとなる。キリストの栄えをあらわし、キリストのようになり、キリストのために働くことが、人生の最高の抱負となり、最大の歓喜となるのである。

「キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである。」^九

索 引

- | | | | |
|---|---------------|---|------------------|
| 一 | テモテへの第二の手紙四ノ二 | 六 | ルカによる福音書六ノ三一 |
| 二 | ヨシユア記二四ノ一五 | 七 | ヘブル人への手紙五ノ二 |
| 三 | 箴言一四ノ九・文語訳 | 八 | コリント人への第二の手紙四ノ一八 |
| 四 | 箴言五ノ二二 | 九 | コリント人への第二の手紙五ノ一四 |
| 五 | 詩篇一一九ノ四五、二四 | | |

九 天 の 学 校

「いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない。」

イザヤ書六四ノ四

来世の学校

「御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。」^一

天は学校である。その研究の分野は宇宙であり、その教師は無限の神である。この学校の分校がエデンに設けられたのであった。救済の計画が成就されると、教育は再びエデンの学校にもどるのである。

「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったこと」^二とある。ただ神のみ言葉を通してのみわれわれはこうした事からについて知り得るのである。しかしそれにしても、それは部分的な啓示に過ぎない。

パトモスの預言者ヨハネは、来世の学校の所在についてこう言っている。――

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、……また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。」^三

「都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。」^三天地が造られたときにエデンに設けられた学校と、来世のエデンの学校との間には、人類の墮落と苦難、

神の犠牲、死と罪に対する勝利など、この世の歴史の全範囲が横たわっている。エデンの最初の学校の事情がそのまま来世の学校にみられるとはかぎらない。そこには誘惑の機会を与える善悪の木はなく、誘惑者もいなければ、悪の可能性もない。どの人もみな悪の試練にうち勝った人ばかりで、もはや悪の力に動かされる者はひとりもない。

「勝利を得る者には、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べることをゆるそう」^四とキリストは仰せになっている。エデンの生命の木は条件つきで与えられたが、結局とり去られてしまった。しかし来世の賜物は絶対的かつ永久的である。

預言者ヨハネは、「神と小羊との御座から出」^五る「水晶のように輝いているいのちの水の川」^五があつて、その「川の両側にはいのちの木」^五があるのを見た。「もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである」^五とある。

「あなたの民はことごとく正しい者となって、
とこしえに地を所有する。

彼らはわたしの植えた若枝、
わが手のわざ

わが栄光をあらわすものとなる。」^六

神のみ前に立ち帰った人類は、天地が造られた時と同じようにふたたび神から教えられる。「わが民はわが名を知るにいたる。その日には彼らはこの言葉を語る者がわたしであることを知る。」^七

「神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして」^八彼らの神となる。

「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前にあり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。…彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。」^九

「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。」^{一〇}

「御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。」^{一一}

新天新地においては、われわれの眼をくもらせていたヴェールが取り除かれる。顕微鏡でちらつとのぞいた美しい世界がまのあたりにながめられ、望遠鏡を通してはるか遠くに見えた天の栄光がまのあたりに仰がれる。全地は罪の傷あとを取り除かれて主なる神エホバの美しさにつつまれて現われる。そのとき、なんというすばらしい研究の分野がわれわれの眼前に開かれることであろう。そこでは科学の学徒が創造の記録を

読んでも悪の法則の名ごりはどこにもみあたらない。自然の声の音楽に耳をかたむけても、嘆きの音いろや悲しみの低音はきかれない。すべての被造物の中に一つの筆跡だけが目につき、広大な宇宙に神のみ名が大きく書かれているのが見えるだけで、地にも海にも空にも悪の面影は何一つ残っていない。

そこではエデンの生活すなわち田園生活が営まれる。「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作つて、その実を食べる。彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。わが民の命は、木の命のようになり、わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである。」^三

『彼らはわが聖なる山のどこでもそこなうことなく、やぶることはない』と主は言われる。^三そこでは、人類の失われた統治権が回復され、動物たちは、ふたたび人類の支配に服し、猛獣はおとなしくなり、おく病な動物は信頼するようになる。

そこでは無限の広さと言いあらわし得ない価値を持った歴史が生徒の前に開かれるであろう。この世においても生徒たちは神のみ言葉という有利な立場を通して広大な歴史の分野について見解があたえられ、人間社会の事件の経過を支配する原則についてかなりの知識を得ることができる。しかしやはり人間の目は曇っており、知識は不完全である。永遠の光の中に立つまでは、すべてのことをはっきり見ることは不可能である。

その時、大争闘の経過がわれわれの前に示されるであろう。時が始まる前に発生した大争闘は時が中止するとともに終わるのである。罪の起源、破滅的な虚偽と不正な働き、まっすぐな道からそれることなく誤り

を征服してきた真理——それらのすべての歴史が明らかにされるであろう。目に見える世界と目に見えない世界をさえぎっていたヴェールが取り除かれて、ふしぎに思われていた事がらが明らかにされるであろう。

永遠の光の中に神の摂理が明らかにされるまでは、われわれはどんなに天使たちに守られ助けられていたかを知ることができない。天使たちは人間世界のできごとに積極的な役割を果たしてきたのである。光り輝く衣をまとうて現われたり、旅びとの服装をした人間となって現われたのである。彼らは人の家庭でもてなしを受けたり、道に行き暮れた旅びとを案内したりしたのである。彼らは敵の意図をくじき、破壊者の手をとどめたのである。

この世の為政者たちはしらないが、天使たちが彼らの会議に発言したことは幾度もある。人間の目に彼らの姿が見え、人間の耳に彼らの訴えが聞こえたのである。会議室や法廷で、天の使者たちは迫害と圧制を受けている者たちのために弁護したのである。彼らは神の子らに災いと苦難をもたらすような目的をくじき、悪をとどめたのである。天の学校では、こうしたすべてのことが、生徒たちに明らかにされるであろう。

あがなわれた者はだれでも、自分の一生における天使たちの奉仕を理解するであろう。生まれたときからわれわれを守ってくれた天使、われわれの歩みを見守り、危険の日になれわれの頭上をおおってくれた天使、死の陰の谷にあってわれわれとともにいた天使、われわれの最後のいこいの場所に目をとめていてくれた天使、よみがえりの朝まっさきに迎えてくれる天使——この天使と語らい、自分の一生における神の摂理と人類のためのあらゆる働きにおける天の協力について話を聞くことはどんなに素晴らしいことであろう。

人生の経験におけるあらゆる複雑な問題は、その時明らかにされるであろう。われわれの目には混乱と失望、目的の破壊や計画の妨害としかみえなかったことが、堂々たる圧倒的な勝利の目的、天との調和であつたとがわかるであろう。

無我の精神で働いてきた人々は、そこに自分たちのほねおりの結果を見るであろう。あらゆる正しい原則と尊い行為の成果が見られるであろう。その幾らかはこの世においても見られる。しかし世界の最もとうとい働きの結果は、この世においてはそれをなした本人にもほとんどわからないのである。おのれを忘れてたゆまずに働いた結果がどれほど彼らの手の届かない知らない人々に及んでいることであろう。親も教師も最後の眠りにつくときに、自分の一生の働きはおなしかつたように思われるかもしれない。彼らは、自分の忠実さによって開かれた祝福の泉から小やみなく水が流れ出ていることを知らない。ただ信仰を通してのみ、彼らは自分の教育した子供たちが人類同胞の祝福となり靈感となつて、その影響が幾千回となくくりかえされることを知るのである。多くの働き人は力と希望と励まし言葉、全地の人々の心に祝福を与える言葉を伝えるが、しかし世に名も知られないでひとりではねおつたその結果は自分にはわからないのである。このように彼らは賜物を与え、重荷を負い、働きをなすのである。人は種をまくが、それは彼らが墓にはいつてから祝福の収穫となつて他の人に刈り取られるのである。彼らは木を植えるが、その実は他の人が食べるのである。彼らはこの世では、自分が良い働きを始めたことを心に思うだけで満足する。来世ではこうしたすべての働きとその結果が明らかにされるであろう。

無私の奉仕をするように神から与えられたあらゆる賜物について、天に記録がしるされている。多方面にわたるその記録を調べたり、われわれの努力によって高められとうとくされた人々について調べたり、それらの人々の経歴に真の原則の成果を見たりなど、こうしたことが天の学校の勉学と報賞の一つとなるであろう。

そこではわれわれが知られているようにわれわれも知るであろう。そこでは神が人の魂に植えつけられた愛と同情心が最も真実に最も美しく発揮されるであろう。聖者たちとの清い交際、聖なる天使たちや各時代の忠誠な人々との円満な社交生活、天と地の全家族を一つに結びつける交際——こうしたことのすべてが来世の生活の中にあるのである。

そこには音楽と歌がある。それは神の幻の中以外には人間の耳に聞いたことも心に思ったこともないような音楽である。

「歌う者と踊る者はみな言う。」^{一四}「彼らは声をあげて喜び歌う。主の威光のゆえに、西から喜び呼ばわる。」^{一五}

「主はシオンを慰め、またそのすべて荒れた所を慰めて、その荒野をエデンのように、そのさばくを主の園のようにされる。こうして、その中に喜びと楽しみとがあり。感謝と歌の声とがある。」^{一六}

そこではあらゆる能力が発達し、あらゆる才能がまし加わるであろう。どんな大事業も遂行され、どんなに高遠な抱負も達成され、どんなに遠大な目的も実現されるであろう。それでもなおさらに越えるべき新しい高さ、感嘆すべき新しい驚異、理解しなければならぬ新しい真理、知・徳・体の能力を要する新しい目

的が現われるであろう。

宇宙のすべての宝は神の子らの研究のために開放される。言いしれない喜びをもってわれわれは他世界の聖者たちの歓喜と知恵にあずかるのである。われわれは、聖者たちが神のみ手のわざを熟視して長い年月の間に得た宝にあずかるのである。そして永遠の年月がたつにつれて、ますます輝かしい啓示が与えつつられるであろう。「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越え^{二七}」るものが、永遠から永遠にわたって神の賜物として与えられるであろう。

「その僕たちは彼を礼拝し^{一八}」とある。地上の生活は天上の生活の始まりである。地上の教育は天の原則の初歩である。この世の人生の働きは来世の人生の働きのための訓練である。品性においても、聖なる奉仕においても、現在のわれわれの姿は、来世におけるわれわれの姿をつつした確かな影である。

「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり^{一九}。」この世におけるキリストの働きは天におけるキリストの働きで、われわれがこの世においてキリストと共に働くときに、きたるべき世にキリストと共に働くいっそう大いなる能力といっそう広い特権が報賞として与えられる。

『あなたがたはわが証人である』と主は言われる。^{二〇}これもまた、永遠にわれわれのものである。

各時代にわたって大争闘がつづけられたのは何のためであつたらうか。サタンが反逆の最初に存在を消滅されなかったのはなぜであらうか。それは悪に対する神の処置を通して、宇宙が神の正義を知り、悪が永遠の宣告をうけるためであつた。救済の計画には、永遠にわたってきわめつくすことのできない高さや深さが

あり、天使たちも見たいと願っている驚異がある。すべての被造物の中で、あがなわれた者だけが自己の経験を通して罪との実際の戦いを知っているのである。彼らはキリストと共に働き、天使たちすらあずかり得なかったキリストの苦難を共にしたのである。彼らは救済の学問について何も証言をたてないであろうか。彼らは他世界の聖者たちにとって価値のある何物も持っていないであろうか。

今でも「天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至^{二二}」っている。神は「キリスト・イエスにあつて、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。それは、キリスト・イエスにあつて……神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであつた^{二三}」とある。

「その宮で、すべてのものは呼ばわつて言つ、『栄光』^{二四}と。あがなわれた者たちは経験の歌をうたい、神の栄光を高らかに告げるであらう。「全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります。主よ、あなたをおそれず、御名をほめたたえない者が、ありましようか。あなただけが聖なるかたであります^{二五}」。

罪のために制限されてはいるものの、この地上の人生における最大の歓喜と最高の教育は奉仕の中にある。罪のある人間としての制限に拘束されない来世においても、奉仕の中に最大の歓喜と最高の教育が見いだされる。それはあかしをたてることであり、あかしをたてるとともに「この奥義が、いかに栄光に富んだものであるか^{二六}」を新しく学ぶのである。「この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである^{二七}」と言われている。

「しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。」^{二五}

そのときキリストはご自分のみわざの成果の中に、その報いをごらんになるであろう。ご自分の血をもつてあがない、ご自身の一生を通じて教えられたキリストは、「その栄光のまえに傷なき者として、喜びのうち^{二六}に立たせ」られた数えきれないほどの大いなる群れの中に「自分の魂の苦しみ…を見て」満足されるであらう。^{二七}

索引

一	黙示録二二ノ四	一四	詩篇八七ノ七
二	コリント人への第一の手紙二ノ九	一五	イザヤ書二四ノ一四
三	黙示録二一ノ一、二、二三	一六	イザヤ書五一ノ三
四	黙示録二ノ七	一七	エペソ人への手紙三ノ二〇
五	黙示録二二ノ一、二、二一ノ四	一八	黙示録二二ノ三
六	イザヤ書六〇ノ二	一九	マタイによる福音書二〇ノ二八
七	イザヤ書五二ノ六	二〇	イザヤ書四三ノ一二
八	黙示録二一ノ三	二一	エペソ人への手紙三ノ一〇、二ノ六、七
九	黙示録七ノ一四―一七	二二	詩篇二九ノ九
一〇	コリント人への第一の手紙一三ノ一二	二三	黙示録一五ノ三、四
一一	黙示録二二ノ四	二四	コロサイ人への手紙一ノ二七
一二	イザヤ書六五ノ二一、二二	二五	ヨハネの第一の手紙三ノ二
一三	イザヤ書六五ノ二五	二六	ユダの手紙二四
		二七	イザヤ書五三ノ一

エレン・G・ホワイト略伝

世界的に権威のある「アメリカ人名辞典」(一九四三年版)に米国の有名人のひとりとして、ホワイト夫人の略伝が次のように掲載されている。

「エレン・G・ホワイト(旧姓エレン・G・ハーモン、一八二七年一月二六日生、一九一五年七月一六日没)、セブンスデー・アドベンチスト教会の指導者。父ロバート、母ユニニス・ハーモンの娘。一六六七年にメイン州キタリに住んでいたジョン・ハーモンの子孫。彼女が子供のころ、家族はポートランドに移住、九才のとき遊び友だちに石を投げられ、負傷、昏睡状態で三週間を過ごす。顔面の様相変わり、神経系統麻痺す。健康衰え、勉学不可能となり、わずかに家庭教師によって短期間学んだが、それも中止、その後普通の学校教育は受けなかった。

一八四〇年代におけるウィリアム・ミラーのリバイバル伝道るとき、ミラーの指導を受けて、再臨信仰を受け入れ、一八四四年一〇月二二日にキリストの再臨を待望した。しかしそれが実現しなかったとき、彼女は大きな失望を体験した。身体は衰弱し、死期が迫ってくるように思われた。同年一二月のある日、四人の婦人とともに

ひざまずいて祈っていたとき、幻が与えられた。幻の中で彼女は天に移され忠実な信徒が通過すべき経験を示された。この幻に引き続いて不思議な肉体现象を伴った多くの幻がつぎつぎと与えられた。医師や臨席者の報告によると、幻が与えられている間、目は開かれたままで呼吸は止まり、奇跡的なわざをおこなったという。そして個人や教会、家族等に対する託宣が与えられた。そのなかには時おり将来に対する預言もふくまれていたが、多くは譴責や勧告であつた。彼女は一生を通して、個人としてもっとも大きな感化をセブンスデー・アドベンチスト教会に与えた。大部分のアドベンチストは彼女の幻を単純に受け入れ、その託宣に従つて行動した。

一八四六年八月三日メイン州バルミラ出身のジェームズ・ホワイト牧師と結婚した。同牧師は一八二一年八月四日ジョン・ホワイトの子として上記の場所に生まれ、一八四三年クリスチャン・コネクションの牧師として按手され、再臨信仰を持った。この夫婦は貧しく、その上健康もすづれなかった。一八四九年、後の機関紙であるアドベント・レビュー・アンド・サバス・ヘラルドの前身である小冊子を出版しはじめた。初めはニュー・イングランド、ロチェスター、ニューヨーク、それからバトル・クリーク、ミシガン等発行地は転々と変わった。ホワイト夫妻は長年、アドベンチストの出版事業の責任を持っていた。また教会の一致のために懸命に努力し、一八六三年には世界総会が組織された。一八六四年ホワイト長老の健康が衰えたとき、夫人の看病で回復した。この経験から衛生改革に注目し、夫人に与えられた幻の指示に従い、バトル・クリークに、一八六六年西部衛生改革療養院が建てられた。また夫妻の励ましで、一八七四年アドベンチストの最初の学校がたてられた。同年、夫妻はカリフォルニアに旅行し、オークランドで、サイNZ・オブ・ザ・タイムズ誌を発行したが、その印刷所

が後にパシフィック・プレス・パブリッシング・アソシエーションに発展した。ホワイ特牧師は一八八一年八月六日バトル・クリークで永眠した。夫君の死後、夫人は諸教会を巡回し、各地の教会や集会に出席し、またキャンプ・ミーティングを指導した。一八八五年から一八八八年までヨーロッパで働き、一八九一年にはオーストラリアに渡り、そこに九年間滞在した。一九〇一年にはアメリカ南部諸州の働きに力をそそぎ、その結果、同年、テネシー州ナシビルに南部の出版所ができた。一九〇三年、彼女の指揮のもとに、教会本部がワシントンD・C.に移された。一九〇九年、彼女の指導によってカリフォルニアのロマ・リンダに医科大学が設立された。この大学の卒業生は世界の各地で活動している。セブンスデー・アドベンチスト教会における彼女の立場は独特のものである。

彼女は、自分は指導者であると主張したことはなく、単なる声であって、神よりの託宣をその民にとりつぐ使命者であると言っていた。彼女の生涯は深い人格的敬虔さと霊的な感化によって特徴づけられていた。アドベンチストの諸教会の一致に、彼女の使命は大きな役割を演じた。彼女の言葉は、いつも教会のいろいろな定期刊行物に印刷された。また彼女は二〇冊におよぶ著書を著わした」(Dictionary of American Biography, Vol. xx. New York, Charles Scribner Sons, 1943, pp. 98, 99)(伊藤繁美著「あかしの書物語」より抜粋)

エレン・G・ホワイ特は宗教的な指導者としてその名を知られているばかりでなく、著述家としても有名である。その多忙な生涯において一大叢書ともいふべき多くの本を著わしたが、おもなものだけでも、「アメリカ人名辞典」には二〇冊とあるが実際はもっと多く五五冊余にのぼり、これらのうちあるものは何百万部も売れてい

る。たとえば『キリストへの道』は一〇〇の言語に訳されて一四〇〇万部も売れてきた。そして、今なお手をつけられていない原稿が多数ホワイト夫人著書刊行委員会の手で保管されている。

ほとんど学校教育を受けていないにもかかわらず、彼女の著作は宗教、教育、家庭、健康と、広い分野にわたっているということは驚異である。しかも、彼女の著作は、書かれた当時に大きな光となったばかりでなく、百年後の現代にもますます光を放っている。たとえば砂糖、肉食、タバコの害などを当時からすでに警告しているが、今日の医学の証明に照らして見るときに、これらは驚くべき先見性と言わなければならない。また、最近の公害時代にはじめて問題にされている環境汚染や悪化の問題、薬禍の問題などが百年も前から警告され、また、その対策が示されているのには天の啓示に引き合わされている思いに迫られるものである。本書『教育』が執筆されたのは一九〇三年、彼女が七五才のときであるが、その高邁な教育理念は、現代においても精彩を放っている。

エレン・G・ホワイトは一九一五年、カリフォルニア州セント・ヘレナで八七年の生涯を終えて永眠した。彼女がなくなったとき、ニューヨーク・インディペンデント誌は、「婦人はインスピレーション（靈感）であり、ガイド（指導者）であつた」とその死を惜しんだ。

原著……………本書
 238…………… 280,281
 239…………… 282
 240…………… 283
 241…………… 284,285
 242…………… 285,286
 243…… 286,287,288
 244…………… 288,289
 245…………… 289
 246…………… 291
 247…………… 292,293
 248…………… 293,294
 249…………… 294,295
 250…………… 296,297
 251…………… 297,298
 252…………… 298
 253…………… 299,300
 254…………… 300,301
 255…………… 301,302
 256…………… 302,303
 257…………… 303,304
 258…………… 304,305
 259…………… 305,306

原著……………本書
 260…………… 306,307
 261…………… 308
 262…………… 310
 263…………… 311,312
 264…………… 312,313
 265…………… 313,314
 266…………… 314,315
 267…………… 315,316
 268…………… 316,317
 269…………… 318
 270…………… 319,320
 271…………… 320
 275…………… 324
 276…………… 325,326
 277…………… 326,327
 278…………… 327,328
 279…………… 328,329
 280…………… 329,330
 281…………… 330,331
 282…………… 331,332
 283…………… 333
 284…………… 334

原著……………本書
 285…………… 335,336
 286…………… 336,337
 287…………… 338,339
 288…………… 339,340
 289…………… 340,341
 290…………… 341,342
 291…………… 342,343
 292…………… 343,344
 293…………… 344,345
 294…………… 345,346
 295…………… 347,348
 296…………… 348,349
 297…………… 349,350
 301…………… 352
 302…………… 353,354
 303…………… 354,355
 304…………… 355,356
 305…………… 356,357
 306…………… 357,358
 307…………… 358,359
 308…………… 359,360
 309…………… 360,361

原著……………本書

115…………… 123,124

116…………… 124,125

117…………… 125,126

118…………… 126,127

119…………… 128

120…………… 129

123…………… 132,133

124…………… 133,134

125…………… 134,135

126…………… 135,136

127…………… 136,137

128…………… 138

129…………… 139

130…………… 140,141

131…………… 141,142,143

132…………… 143,144

133…………… 145,146

134…………… 146,147

135…………… 149

136…………… 149,150

137…………… 150,151

138…………… 152,153

139…………… 153,154

140…………… 154,155

141…………… 155,156

142…………… 156,157,158

143…………… 159,160

144…………… 160

145…………… 160,161

146…………… 164,165

147…………… 165,166

148…………… 166,167

149…………… 167,168

150…………… 168,169

151…………… 169,170

152…………… 170,171

153…………… 171,172

154…………… 172,173,174

155…………… 174,175

原著……………本書

156…………… 175,176,177

157…………… 177,178

158…………… 178,179

159…………… 181,182

160…………… 182,183,184

161…………… 185,186,187

162…………… 187,188,189

163…………… 189,190

164…………… 190,191,192

165…………… 192,193,194

166…………… 194,195,196

167…………… 196,197

168…………… 198

169…………… 200

170…………… 201,202

171…………… 202,203

172…………… 203,204

173…………… 205

174…………… 206

175…………… 207,208

176…………… 208,209

177…………… 209,210

178…………… 210,211

179…………… 211,212

180…………… 212,213

181…………… 213,214,215

182…………… 215,216

183…………… 217

184…………… 218

185…………… 220

186…………… 221

187…………… 222,223

188…………… 223,224

189…………… 224,225

190…………… 225,226

191…………… 226,227

192…………… 227,228

195…………… 232

196…………… 233

原著……………本書

197…………… 234,235

198…………… 235,236

199…………… 236,237

200…………… 237,238

201…………… 238,239

202…………… 240,241

203…………… 241

204…………… 242,243

205…………… 243,244

206…………… 244,245

207…………… 246

208…………… 247

209…………… 248

210…………… 249

211…………… 250,251

212…………… 251,252

213…………… 252,253

214…………… 254,255

215…………… 255,256

216…………… 256,257

217…………… 257,258

218…………… 258,259

219…………… 259,260

220…………… 260,261

221…………… 261,262

222…………… 262,263

225…………… 266

226…………… 267,268

227…………… 268,269

228…………… 269,270

229…………… 270

230…………… 272

231…………… 273,274

232…………… 274,275

233…………… 275,276

234…………… 276,277

235…………… 277,278

236…………… 278,279

237…………… 279,280

英和ページ対照表

E. G. ホワイトの全著書に対して、英文のインデックスが発行されていますので、そのインデックスを使用して本書から引用されたいかた、および、英文原著を対照、または引用なさりたいかたのために、原著のページと本書のページとの対照表を作成しました。

原著……………本書	原著……………本書	原著……………本書
13 …………… 2	47 …………… 41,42	81 …………… 81,82
14 …………… 3	48 …………… 43	82 …………… 82,83
15 …………… 4,5	49 …………… 44	83 …………… 83,84
16 …………… 5,6	50 …………… 45,46	84 …………… 86
17 …………… 6,7	51 …………… 47	85 …………… 87,88
18 …………… 7,8	52 …………… 48,49	86 …………… 88,89
19 …………… 8,9	53 …………… 49,50	87 …………… 89,90
20 …………… 10	54 …………… 50,51	88 …………… 90,91
21 …………… 11	55 …………… 52	89 …………… 91,92
22 …………… 12,13	56 …………… 52,53	90 …………… 93,94
23 …………… 14	57 …………… 53,54	91 …………… 94,95
24 …………… 15,16	58 …………… 55,56	92 …………… 95,96
25 …………… 16,17	59 …………… 56,57	93 …………… 96,97
26 …………… 17,18	60 …………… 57,58	94 …………… 97,98
27 …………… 18,19	61 …………… 58,59	95 …………… 98,99
28 …………… 20	62 …………… 59,60	96 …………… 99,100
29 …………… 21	63 …………… 60,61	99 …………… 104
30 …………… 22,23	64 …………… 61,62	100………… 105,106
33 …………… 26	65 …………… 62,63	101………… 106,107
34 …………… 27	66 …………… 63,64	102………… 108,109
35 …………… 28,29	67 …………… 64,65	103………… 109,110
36 …………… 29,30	68 …………… 66,67	104………… 110,111
37 …………… 30,31	69 …………… 67,68	105………… 111,112
38 …………… 31,32	70 …………… 68	106………… 112,113
39 …………… 32,33	73 …………… 72	107………… 113,114
40 …………… 33,34	74 …………… 73,74	108………… 114,115
41 …………… 34,35	75 …………… 74,75	109………… 115,116
42 …………… 35,36	76 …………… 75,76	110………… 116,117
43 …………… 36,37	77 …………… 76,77	111………… 117,118
44 …………… 37,38	78 …………… 77,78	112………… 119
45 …………… 40	79 …………… 78,79	113………… 121
46 …………… 41	80 …………… 80,81	114………… 122

ホーム・ライブラリー

1 生活を豊かに

2 教 育

3 豊かな人生の秘訣

4 心を育てる家庭教育

NDC / 370P / 22cm

1999年1月20日 初版第13刷発行

著 者 エレン・G・ホワイ
訳 者 左 近 充 公
発 行 者 山 本 哲 也
印 刷 所 平 河 工 業 社

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発 行 所 福 音 社
電話(045)921-1414 振替横浜7-599番

〒241 横浜市旭区上川井町846

発 売 所 三 育 協 会
電話(045)921-1121

転載複製を禁ず 製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN

☆ご愛読下さいましてありがとうございます。当社出版物は直販制
です。書店には出しておりません。お問合せ、ご用命、出版目
録のご請求等は、直接発売所へお申し越し頂きたく存じます。